

柁牟礼遺跡天神ノ下地区  
柁牟礼遺跡掃木地区  
曳地館跡  
元越遺跡

東九州自動車道(佐伯～県境間)建設事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

2014

大分県教育庁埋蔵文化財センター

柁牟礼遺跡天神ノ下地区  
柁牟礼遺跡掃木地区  
曳地館跡  
元越遺跡

東九州自動車道(佐伯～県境間)建設事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書(2)





樽牟礼城跡(奥の山)と樽牟礼遺跡天神ノ下地区(手前)

# 序 文

本書は、国土交通省九州地方建設局佐伯河川国道事務所が実施している東九州自動車道（佐伯～県境間）の建設工事に伴って行われた梅牟礼遺跡天神ノ下地区、同掃木地区、曳地館跡、元越遺跡の発掘調査報告書です。発掘調査は用地買収の進捗具合などから平成21年度と平成23年度に実施しました。その結果、本書に収録されているように、各遺跡で主に中世から近世に至る各時代の遺物・遺構が確認されました。

東九州自動車道（佐伯～県境間）は、佐伯インターチェンジから県境に向かって中世城郭がある梅牟礼山の裾を通ることから、当初より城主であった佐伯氏に係わる遺跡の存在が推測されていました。特に曳地館は、実態は不明ながらも佐伯氏の館跡ではないかと言われており、今回の発掘調査ではその解明の糸口が見いだされたと考えております。

今回の調査結果が地域の歴史を解明する資料となり、また文化財に対する意識を高める一助となることを願うとともに、調査全般にわたりまして御協力頂いた多くの方々に対しまして、心より御礼申し上げます。

平成26年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所長 宮内 克己

# 例 言

- 1 本書は、国土交通省九州地方建設局佐伯河川国道事務所より委託を受け大分県教育委員会が実施した、東九州自動車道（佐伯～県境間）建設工事に伴う発掘調査報告書である。
- 2 本書には、平成21年度に実施した梅牟礼遺跡掃木地区、曳地館跡と平成23年度に実施した梅牟礼遺跡天神ノ下地区、元越遺跡の調査成果を収載している。
- 3 梅牟礼遺跡掃木地区、曳地館跡、元越遺跡は（株）九州文化財総合研究所、梅牟礼遺跡天神ノ下地区は（株）アーキジオにそれぞれ一部業務を委託して調査を実施した。
- 4 出土遺物の整理作業については、平成23年度は（株）イビソク、平成24年度は（株）九州文化財総合研究所に委託して実施した。
- 5 出土遺物はすべて大分県教育庁埋蔵文化財センターで保管している。
- 6 本書の執筆は第1章、第2章、第6章、第7章を小柳和宏（大分県教育庁埋蔵文化財センター）、第3章を小柳と越智淳平（大分県教育庁文化課）、第4章を越智と五十川育子（大分県教育庁埋蔵文化財センター）、第5章を高橋信武（大分県教育庁埋蔵文化財センター）が行い、編集は小柳が行った。

# 目 次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査組織の構成	2
第2章 遺跡の立地と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 柁牟礼遺跡天神ノ下地区	8
第1節 調査の概要	8
第2節 基本層序	8
第3節 遺構と遺物	11
第4節 小結	43
第4章 柁牟礼遺跡掃木地区	44
第1節 調査の概要	44
第2節 基本層序	44
第3節 遺構と遺物	48
第4節 小結	66
第5章 曳地館跡	67
第1節 遺跡の概要	67
第2節 調査の概要	69
第3節 遺構と遺物	77
第4節 小結	104
第6章 元越遺跡	110
第1節 調査の概要	110
第2節 基本層序	110
第3節 遺構と遺物	112
第4節 小結	116
第7章 総括	117
遺物一覧表	129
写真図版	143
報告書抄録	

# 挿 図 目 次

## 遺跡の立地と環境

第1図	周辺の遺跡	5
第2図	調査箇所詳細図	7

## 梅牟礼遺跡天神ノ下地区

第3図	遺跡周辺の地形	8
第4図	遺構配置図	9
第5図	土層断面図	10
第6図	S002、S149	11
第7図	S002、S149出土遺物	12
第8図	S030	13
第9図	S030出土遺物	13
第10図	S151	14
第11図	S151土層断面図	15
第12図	S151出土遺物(1)	16
第13図	S151出土遺物(2)	17
第14図	S151出土遺物(3)	18
第15図	S151出土遺物(4)	19
第16図	S450出土遺物(1)	20
第17図	S450出土遺物(2)	21
第18図	S151、S450出土鉄器	22
第19図	S152	23
第20図	S152出土遺物	24
第21図	S248	25
第22図	S249	26
第23図	S249出土遺物	27
第24図	S289	27
第25図	S289出土遺物	28
第26図	S292	28
第27図	S292出土遺物	28
第28図	S294	29
第29図	S294出土遺物	30
第30図	S295、S400	31
第31図	S295、S400出土遺物	32
第32図	S301	33
第33図	S449	34
第34図	掘立柱建物1	35
第35図	掘立柱建物2	36
第36図	ピット出土遺物(1)	37
第37図	ピット出土遺物(2)	38
第38図	包含層出土遺物(1)	39
第39図	包含層出土遺物(2)	40
第40図	包含層出土遺物(3)	41
第41図	表採遺物	42

## 梅牟礼遺跡掃木地区

第42図	遺跡周辺の地形	44
第43図	遺構配置図	45
第44図	土層断面図(1)	46
第45図	土層断面図(2)	47

第46図	S002、S003	48
第47図	S003出土遺物	49
第48図	S004	49
第49図	S016	50
第50図	S015出土遺物	51
第51図	S018	51
第52図	S018出土遺物	52
第53図	S025	53
第54図	S025出土遺物	54
第55図	S050	55
第56図	S050出土遺物	55
第57図	S051	56
第58図	S056	57
第59図	S056出土遺物	58
第60図	S071	58
第61図	S071出土遺物	58
第62図	S100	59
第63図	S101	60
第64図	その他の遺構出土遺物	61
第65図	包含層出土遺物(1)	62
第66図	包含層出土遺物(2)	63
第67図	包含層出土遺物(3)	64
第68図	包含層出土遺物(4)	65

## 曳地館跡

第69図	調査区位置	67
第70図	1988年の試掘調査位置・遺物	68
第71図	遺構配置図	70
第72図	調査区中央層序断面図	71
第73図	試掘時出土銭貨(1)	73
第74図	試掘時出土銭貨(2)	74
第75図	試掘時出土銭貨(3)	75
第76図	包含層出土遺物	76
第77図	試掘調査・SP42・SP50出土遺物	77
第78図	SK6	78
第79図	第1号掘立柱建物跡	79
第80図	第1号掘立柱建物跡の柱穴断面(1)	80
第81図	第1号掘立柱建物跡の柱穴断面(2)	81
第82図	SP19	81
第83図	SP19出土遺物	82
第84図	SP60	82
第85図	SP60出土土師器	83
第86図	SP60出土銭貨	84
第87図	第2号掘立柱建物跡	85
第88図	第3号掘立柱建物跡	86
第89図	SP57出土遺物	87
第90図	SP43	87
第91図	SP43出土遺物	88
第92図	SK6・SP54～56土遺物	89
第93図	第4号掘立柱建物跡	90



第94図	S K 3 4	91
第95図	S K 3 4 出土遺物 (1)	91
第96図	S K 3 4 出土遺物 (2)	92
第97図	S K 3 4 出土遺物 (3)	93
第98図	S K 3 4 出土遺物 (4)	94
第99図	S K 3 4 出土遺物 (5)	95
第100図	S K 3 4 出土遺物 (6)	96
第101図	S K 3 4 出土遺物 (7)	97
第102図	S K 3 4 出土遺物 (8)	98
第103図	S K 3 4 出土銭貨 (1)	99
第104図	S K 3 4 出土銭貨 (2)	100
第105図	S K 3 4 出土銭貨 (3)	101
第106図	S K 3 4 出土銭貨 (4)	102
第107図	S D 6 2 出土遺物	103
第108図	S D 6 2 出土銭貨	103
第109図	佐伯市内の中世土師器 (小皿・坏) の 法量比較	104
第110図	曳地館跡遺構配置図 (1)	106
第111図	曳地館跡遺構配置図 (2)	107

第112図	大分県内の16世紀館跡・館城跡	109
-------	-----------------	-----

### 元越遺跡

第113図	基本層序	110
第114図	遺構配置図	111
第115図	S B 0 1	113
第116図	S B 0 2	114
第117図	包含層出土遺物	115

### 総 括

第118図	歴史的な環境	117
第119図	調査区周辺の状況	118
第120図	調査区周辺の小字図	119
第121図	調査区周辺の小字と筆境	120
第122図	榎牟礼城と小田山城の位置関係	122
第123図	榎牟礼城縄張図	123
第124図	小田山城縄張図	124
第125図	榎牟礼城・小田山城・古市出土遺物	125
第126図	土器の分類	126

## 表 目 次

第1表	遺跡一覧表	6
第2表	榎牟礼遺跡天神ノ下地区遺物一覧表 (1)	129
第3表	榎牟礼遺跡天神ノ下地区遺物一覧表 (2)	130
第4表	榎牟礼遺跡天神ノ下地区遺物一覧表 (3)	131
第5表	榎牟礼遺跡天神ノ下地区遺物一覧表 (4)	132
第6表	榎牟礼遺跡掃木地区遺物一覧表 (1)	133
第7表	榎牟礼遺跡掃木地区遺物一覧表 (2)	134
第8表	榎牟礼遺跡掃木地区遺物一覧表 (3)	134

第9表	曳地館跡遺物一覧表 (1)	135
第10表	曳地館跡遺物一覧表 (2)	136
第11表	曳地館跡遺物一覧表 (3)	137
第12表	曳地館跡遺物一覧表 (4)	138
第15表	曳地館跡遺物一覧表 (5)	139
第16表	曳地館跡遺物一覧表 (6)	140
第17表	曳地館跡遺物一覧表 (7)	141
第18表	元越遺跡遺物一覧表	142

## 図 版 目 次

### 巻頭図版

榎牟礼城跡(奥の山)と榎牟礼遺跡天神ノ下地区(手前)

### 榎牟礼遺跡天神ノ下地区

図版1 空中写真 (①区から③区完掘・上が北西)  
空中写真 (③区下層と④区完掘・上が北西)

図版2 S 1 5 1、S 4 5 0 完掘

③区遺構検出

④区完掘 (南半部)

④区完掘 (北半部)

S 0 0 2

S 0 0 2・S 1 4 9

S 0 2 8・S 0 3 0

S 1 5 1 焼土の状況

図版3 S 1 5 1 遺物出土状況

S 1 5 1 遺物出土状況

S 1 5 1 遺物出土状況

S 1 5 1 遺構断面

S 1 5 1 遺物出土状況

S 1 5 1 遺構断面

S 1 5 1 遺物出土状況

掘立柱建物

図版4 S 1 5 2 検出状況

S 1 5 2 検出状況

S 1 5 2 内部掘り下げ状況

S 1 5 2 半裁状況

S 1 5 2 半裁状況

S 2 4 8

S 2 4 9 検出

S 2 4 9 土層断面

図版5 S 2 4 9・S 3 0 1 出土状況

S 2 4 9・S 3 0 1 完掘

S 2 4 9・S 4 4 6 検出状況  
S 2 8 9 完掘  
S 2 9 2 完掘  
S 2 9 4 土層断面  
S 2 9 4 遺物出土状況  
S 2 9 4 遺物出土状況  
図版 6 S 2 9 4 完掘  
S 2 9 5 土層断面  
S 2 9 5・S 4 0 0 完掘  
S 4 4 9 検出  
S 4 4 9 土層  
S 4 4 9 土層  
S 4 4 9 完掘  
掘立柱建物

#### 柁牟礼遺跡掃木地区

図版 7 空中写真（北東から）  
空中写真（南東から）  
図版 8 空中写真（上が南西）  
完掘（北東から）  
図版 9 調査前の状況  
②-中区遺構検出  
④-南区遺構検出  
図版10 ④-南区遺構検出  
④-中区遺構検出  
完掘状況  
図版11 ①区完掘状況  
②区完掘状況  
③区完掘状況  
④区完掘状況  
S 0 0 2・S 0 0 3 土層  
S 0 0 2・S 0 0 5 完掘  
S 0 0 4 土層  
S 0 0 9 石列検出状況  
図版12 S 0 1 4 石列検出状況  
S 0 1 4・S 0 1 5 完掘  
S 0 1 5 石列検出状況  
S 0 1 6 土層  
S 0 1 8～S 0 2 4 柵列  
S 0 2 5 土層  
S 0 5 0 遺物出土状況  
S 0 5 1・S 0 5 2 土層  
図版13 S 0 5 3・S 0 5 4  
S 0 5 6 石列検出状況  
S 0 7 1 完掘  
S 0 7 7 石列検出状況  
S 0 7 8 石列検出状況  
掘立柱建物  
柱穴遺物出土状況  
遺跡東西断面土層

#### 曳地館跡

図版14 空中写真（北東方向を見る）  
空中写真（東方向を見る）  
図版15 全景  
第1号掘立柱建物跡  
図版16 完掘状態  
S P 3 4 / S P 4 3  
S P 6 0 / S P 6 0  
図版17 各柱穴  
図版18 各柱穴  
S P 3 4 出土銭貨

#### 元越遺跡

図版19 空中写真（上が東）  
空中写真（上が東）  
図版20 空中写真（北西から）  
空中写真（南西から）  
図版21 全景（北から）  
全景（北西から）  
全景（南から）  
全景（南東から）  
S B 2 6 完掘  
S B 2 5 完掘  
東壁土層1  
東壁土層2

#### 柁牟礼遺跡天神ノ下地区出土遺物

図版22～図版24

#### 柁牟礼遺跡掃木地区出土遺物

図版25

#### 曳地館跡出土遺物

図版26 包含層・各遺構出土  
図版27 各遺構出土  
図版28 S P 6 0 出土  
図版29 S P 4 3 出土  
図版30 S P 3 4 出土

#### 元越遺跡出土遺物

図版31

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道（佐伯～県境間）は、北九州市から宮崎市に至る東九州自動車道全線延長436kmの内、佐伯ICから蒲江ICを経て、宮崎県境までの総延長29kmの区間である。大分県教育委員会では、平成12年度にこの区間の埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果、周知遺跡である梅牟礼遺跡や森の木遺跡を含む23箇所の調査対象地がリストアップされることとなった。

試掘調査は平成19年度から始まり、同21年度の6月には梅牟礼遺跡掃木地区と曳地館跡で試掘調査を行い、その結果遺構が確認されたことから、同年度内に本調査を実施した。同22年9月には梅牟礼遺跡天神ノ下地区で、同23年8月には元越地区で試掘調査を行い、いずれも遺構が確認されたことから、同23年度中に本調査を実施した。

## 第2節 調査の経過

### 梅牟礼遺跡天神ノ下地区

平成23年 5月10日	現地地形測量
5月12日	道路より東側部分、重機による表土除去開始
5月16日	作業員による包含層掘り下げ開始
5月18日	遺構検出、包含層掘り下げ
6月2日	遺構掘り下げ開始
6月17日	道路より東側部分空中写真撮影
6月24日	道路より西側部分、重機による表土除去開始
7月5日	包含層掘り下げ
7月21日	遺構検出、遺構掘り下げ開始
8月9日	道路より西側部分空中写真撮影
8月16日	調査終了

### 梅牟礼遺跡掃木地区

平成22年 1月12日	重機による表土除去開始
1月18日	作業員による包含層掘り下げ開始
2月3日	遺構検出作業
2月9日	掘立柱建物跡確認、遺構掘り下げ
2月24日	空中写真撮影、調査終了

### 曳地館跡

平成22年 2月16日	測量開始
2月17日	作業員による遺構検出作業
2月19日	北半分の遺構を概ね把握
3月1日	南半分の遺構を概ね把握
3月3日	柱穴掘り下げ開始
3月11日	空中写真撮影
3月16日	掘削作業最終日
3月18日	実測作業終了



## 元越遺跡

平成23年10月12日	重機による表土除去開始
10月18日	作業員による遺構検出作業開始
10月19日	遺構・包含層掘り下げ
10月28日	空中写真撮影
11月4日	調査終了

## 第3節 調査組織の構成

### 梅牟礼遺跡掃木地区(平成21年度)

埋蔵文化財センター	所長	佐藤英一
〃	管理予算班主幹(総括)	宮永敬三
〃	管理予算班副主幹	徳脇仁志
〃	受託事業班主幹(総括)	小柳和宏
〃	受託事業班主事	越智淳平(調査担当)

### 梅牟礼遺跡天神ノ下地区(平成23年度)

埋蔵文化財センター	所長	山口博文
〃	管理予算班課長補佐(総括)	春山義光
〃	管理予算班副主幹	徳脇仁志
〃	受託事業班課長補佐(総括)	小柳和宏
〃	受託事業班主事	越智淳平(調査担当)

### 曳地館跡(平成21年度)

埋蔵文化財センター	所長	佐藤英一
〃	管理予算班主幹(総括)	宮永敬三
〃	管理予算班副主幹	徳脇仁志
〃	受託事業班主幹(総括)	小柳和宏
〃	資料管理班主幹	高橋信武(調査担当)

### 元越遺跡(平成23年度)

埋蔵文化財センター	所長	山口博文
〃	管理予算班課長補佐(総括)	春山義光
〃	管理予算班副主幹	徳脇仁志
〃	受託事業班課長補佐(総括)	小柳和宏
〃	受託事業班副主幹	染矢和徳(調査担当)

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

大分県の南部沿岸部はリアス式海岸が発達し、多数の良港がひしめき合うようにして海岸部に張り付いている。その中でも佐伯市は、北を四浦半島、南を鶴見半島に抱かれるように大きな内湾（佐伯湾）を形作った、その最奥部に位置している。湾には、大野郡との境をなす佩楯山、椿山などの麓から水を集める、県南一の大河番匠川が流れ込む。現在、河口部は江戸時代の城下町建設により埋め立てられた平地が広がるが、中世段階では河口部は現在より川上に位置していた。現在の河口から約4km上流の位置にある「古市」の場所が、中世では汀線に面していたと考えられる。すなわち、内陸奥深くまでリアス式海岸独特の細長い入り江が入り込んでいたのである。そこに、「トケヤ（土器屋）港」という地名が残されているのも偶然ではない。

東九州自動車道の佐伯インターチェンジがあるのは、番匠川の支流の門前川の流域に開けた谷底平野を望む丘陵上である。その西に聳える梅牟礼山は標高223.6mで、四方に急峻な尾根を延ばすほぼ独立した山塊をなす。東九州自動車道は、佐伯インターチェンジから南側に向けて、その梅牟礼山から伸びる尾根と、尾根と尾根に挟まれた小さな平野部を交互に通り返れる。遺跡は、梅牟礼山に向けて入り込む小さな谷に作られた小さな平野や、尾根先端部を階段状に成形した、人工的な造成地に立地している。このような遺跡が、梅牟礼山の裾野に多くあることが、従前からの試掘調査などで明らかとなっていた。

この地域を仔細に見ると（第1図）、梅牟礼山から開かれた小さな谷（ヤト）が門前川の作る平野に出たところに、川にはほぼ平行する形で南北に道が通っている。道は角木から南へ延び、十三重塔の立つ上岡を回り込んで、南面する谷の前を東西に通る。注目されるのは、各谷に向けて枝道が延びていることで、明治22年の字図でも確認でき、多くは宅地になっている。これらの谷に立地する集落の起源がいつまで遡るか、ということであるが、今回の調査結果を踏まえると、15世紀には確実に遡るといえる。また、上岡では、十三重塔の東の谷から北（門前川側）に伸びる道は、一旦クランクしたのち、直線的に川に向かう。ここに「古市」の名で呼ばれる街路が形成されており、ごく一部の発掘調査によると、中世の遺物が出土している。ここが、門前の谷を遮断する装置として機能していたであろうことも想定される。

また、谷を望む丘陵尾根の先端部には、愛宕や今熊野などの神社が勧請され、番匠川を挟んだ南側の丘陵の先端部には佐伯氏の菩提寺とされる龍護寺がある。

### 第2節 歴史的環境

佐伯インターチェンジの僅かに津久見寄り（北側）の門前川流域にある佐伯門前遺跡で、縄文時代早期の遺跡が確認され、有名な縄文～弥生時代の「下城貝塚」が、番匠川と河口部で合流する堅田川流域にあるように、佐伯市街周辺では平野は狭小ではあったが、縄文時代から人々の生活の跡が確認されている。同じようにリアス式海岸の最深部にできた、四浦半島を隔てて北側の津久見市街地とは大きな違いがある。そこには、やはり大河である番匠川の存在が大きいのであろう。古墳の存在も、佐伯市街地の方に偏っている。

古代になると、海部郡穂門郷に属していたと考えられるが、資料的制約からよくわからない。その中でも『豊後国風土記』には、「この郡の百姓は、みな海辺の白水郎（あま）なり、よりにて海部の郡という」と記され、地名譚ながら、実態を表していたものと考えられている。古代の掘立柱建物1棟が検出された汐月遺跡平野地区、墨書土器等古代の土器が発見されている汐月遺跡柚ノ木本地区など、僅かではあるが古代の遺跡が散見される。

汐月遺跡は、堅田川の現河口部から6kmほど遡った丘陵裾部の緩斜面に立地している。おそらく、古代の段階ではこのあたりまで海が入り込んでいたのであろう。そうすれば、汐月遺跡は海に面した場所ということになる。海部郡の人々が海に潜って魚などを捕っていた、と風土記にあることを考えると、そのような性格の遺跡かもしれない。

天慶4（941）年には、「海部郡佐伯院」と見え、佐伯院という単位が成立していることがわかる。ここには、藤原純友の乱の際、呼応した桑原生行らが攻め込んだ。対応した太宰少弐源経基らは生行らを生け捕ったうえで、馬や船、馬具などを没収した。藤原純友が挙兵した日振島は、佐伯とは豊後水道を挟んで40kmの距離にあり、佐伯の在地勢力が純友に呼応することはあり得ることであろう。しかし、結局乱全体も天慶4年に鎮圧された。

平安時代末期の文治年中に作成されたと考えられる「宇佐宮仮殿地判指図」中に「佐伯荘」が見える。開発領主は不明であるが、佐伯姓を称する大神一族の可能性が高い。大神系佐伯氏は、系図にある5代惟直が弘安岡田帳で本庄地頭「御家人佐伯弥四郎政直」とされる人物であるように、在地豪族の出ながら御家人として荘園の地頭として活躍した。その後も他の大神系有力一族が大友氏との戦いで潰れていく中で、下に述べるような反大友の立場を幾度かとするものの、戦国期までその命脈を保つ。

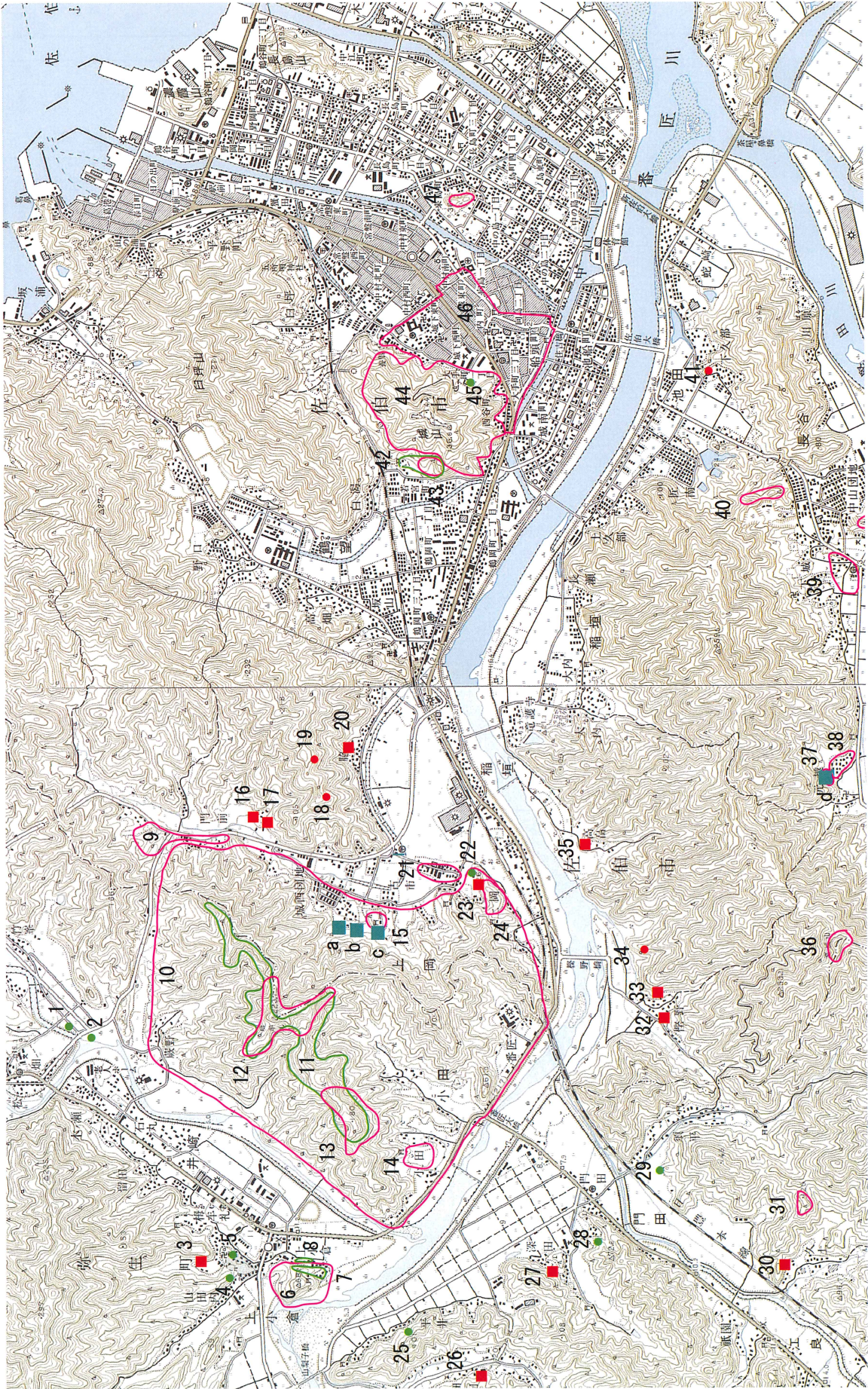
永正3（1506）年には佐伯惟治が反大友の兵を挙げたのに対し、大永7（1527）年には榑牟礼城に籠もる惟治を守護大友義鑑が攻め滅ぼした。しかし、その跡にも佐伯氏一族が安堵され、所領を没収されることはなかった。

その後、天文19（1550）年の「二階崩れの変」で大友義鎮（宗麟）が家督を継いだ後、豊後が政情不安定の中で弘治2（1556）年になると、佐伯惟教は肥後方面の方分であった小原鑑元等とともに謀反を起こそうとしたことが露見し、惟教は四国の伊予に退去させられることになった。しかし、大友義鎮は、永禄12（1569）年には惟教を赦し、惟教は佐賀関の烏帽子岳城に入る。そして、翌元亀元（1570）年には旧領である佐伯に復すことを赦され、再び榑牟礼城に入ったのである。

このように、佐伯地域は鎌倉時代以降は基本的に大神系佐伯氏の所領であった。その佐伯氏が本城としたのが「榑牟礼城」である。榑牟礼城は山裾の広い城ではあるが、頂部の平坦地は狭い。その頂部、すなわち主郭に向かっては幾筋もの尾根と谷が伸びるが、その起点となる山裾には中世の遺跡が点在することがわかっている。今回調査対象となった東側裾部が最も密度が濃い。

文禄2（1593）年、佐伯氏は大友氏の豊後除国に伴い、所領を失う。その跡は豊臣秀吉の太閤蔵入地となり、毛利高政が日田から入った。毛利氏はより海に近い「城山」に城郭を築き、古市から町を移し、海を埋め立てて城下町を建設した。これにより、榑牟礼城とその周辺に展開した、佐伯氏を頂点としたひとつの小世界は瓦解することとなった。





第1図 周辺の遺跡 (国土地理院 1/25,000「植松」・「佐伯」)



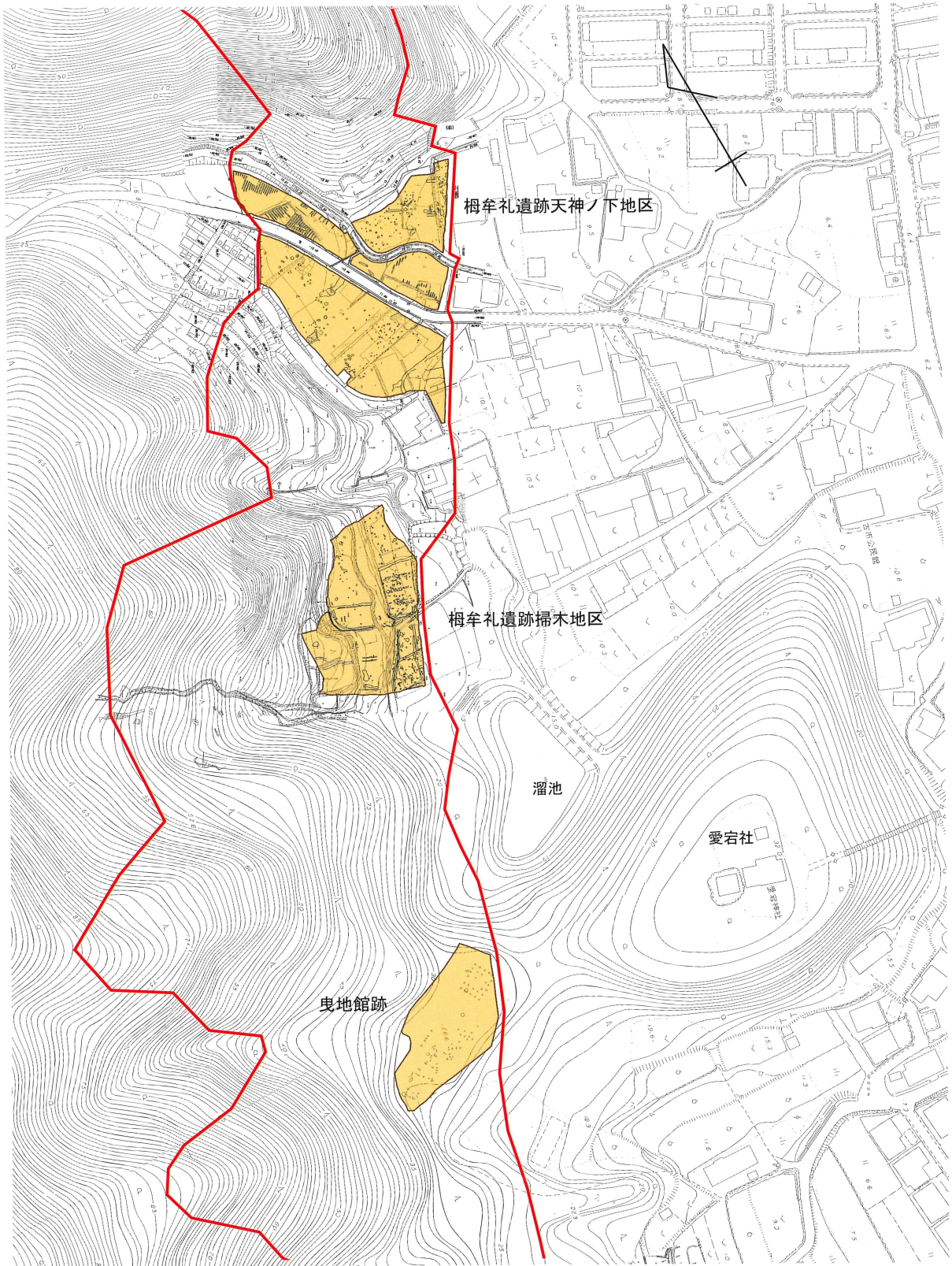
第1表 遺跡一覧表

番号	遺跡名ほか	所在地	内 容
1	螽蝗衆蟲供養塔	佐伯市弥生大坂本	市指定。
2	金馬橋碑	佐伯市弥生大坂本	市指定。明治初年、個人が私財を投じて築いた橋を記念して建てられた石碑。
3	井崎板碑群	佐伯市弥生井崎	4基の板碑が並んで立つ。
4	小林九左衛門の廟	佐伯市弥生井崎	市指定。享保7(1722)年没した九左衛門の井路開削の功績を讃えた廟。
5	西運寺山門	佐伯市弥生井崎	市指定。享和3(1803)年に建てられた三手先造りの山門。
6	上小倉横穴墓	佐伯市弥生上小倉	平成2年、5基の横穴墓が発掘調査された。
7	上小倉横穴墓群	佐伯市弥生上小倉	市指定。30基以上の横穴墓で構成される。多くは開口し、過去に遺物が出土。
8	上小倉磨崖宝塔	佐伯市弥生上小倉	県指定史跡。42基で構成される鎌倉末～南北朝初めの磨崖宝塔、五輪塔群。
9	佐伯門前遺跡	佐伯市門前字中村・脇	縄文時代早期の集落跡。焼けた集石遺構が33基発掘されている。
10	梅牟礼遺跡	佐伯市稲垣・上岡	梅牟礼城を中心とし、山裾の中世集落遺跡まで含めた遺跡。
11	梅牟礼城	佐伯市稲垣・上岡	市指定史跡。中世佐伯氏の本城。残りがよく大規模な山城。
12	梅牟礼城	佐伯市稲垣・上岡	切岸、堀切、堅堀によって固められた戦国期の山城。
13	小田山城跡	佐伯市弥生小田	畝状堅堀で囲まれた戦国末期の山城。
14	小田山館跡	佐伯市弥生小田	林道建設に伴い一部で発掘調査され、堀跡や柱穴を確認。
15	曳地館跡	佐伯市稲垣	中世佐伯氏の館跡と伝えられる。現在は愛宕神社の社殿が建つ。
16	天満社石塔群	佐伯市上岡字門前	天満社の横に五輪塔の石材が集積されている。
17	門前石塔群	佐伯市上岡字門前	大永6年の角柱塔婆、宝塔、五輪塔などが集められている。
18	二上寺跡	佐伯市鶴望・上岡	三上寺の近くに寺跡といわれる平場がある。詳細は不明。
19	三上寺跡	佐伯市鶴望・上岡	「三乗寺」とも。寺跡から古鏡7枚と渡来銭約800枚出土。13世紀前半。
20	脇集落墓地石塔群	佐伯市鶴望字脇	墓地に五輪塔石材が集められている。
21	古市遺跡	佐伯市稲垣字古市	クランクを持つ中世の町屋が展開すると考えられる街村跡。
22	十三重塔	佐伯市上岡字八戸	県指定層塔。地中より中国製褐釉壺など出土。13世紀。
23	八戸石塔群	佐伯市上岡字八戸	十三重塔背後の丘陵上の墓地に五輪塔部材が散在。
24	木戸城	佐伯市稲垣	堀切をもつ小規模な山城。
25	宮脇宝塔	佐伯市平井	市指定の角宝塔。「逆修 □玄待公□居□ 天文十七 七月吉日」と銘を刻む。
26	浄光庵五輪塔群	佐伯市弥生平井字細田	小堂裏の覆屋内に五輪塔が置かれている。
27	梅田家墓地五輪塔	佐伯市弥生門田字深田	墓地の中に五輪塔部材が点在している。
28	五十川家五輪塔	佐伯市弥生門田	市指定。「華月妙栄」と天正12(1584)年の銘がある。
29	須平瓦製庚申塔	佐伯市弥生門田字須平	市指定。「瓦師長右衛門七十五作/文化十四年十一月二十日」銘あり。
30	洞明寺墓地石塔群	佐伯市弥生江良字久土	墓地の一角に宝篋印塔と石幢が立っている。
31	平城跡	佐伯市弥生江良字宮ノ内	幅が狭く長い山頂部を階段状に削平する。
32	安養寺跡五輪塔群	佐伯市上岡字樫野	墓地の脇に大型の五輪塔が複数基立っている。
33	慈濟院石塔群	佐伯市上岡字樫野	寺の境内に大型層塔や宝塔部材などが並べられている。
34	樫野古墳	佐伯市上岡字樫野	凝灰岩製箱式石棺を持つ5世紀後半の円墳。鉄滓供献あり。
35	潮谷寺跡石塔群	佐伯市稲垣字高島	本来尾根の上にあった五輪塔が、バラバラになって下の民家の庭に下ろされている。
36	高城跡	佐伯市長谷字高畑越	現状では遺構が確認できないが、城跡と言われる。
37	元越遺跡	佐伯市上城元越	近世の集落跡。
38	長谷山際遺跡	佐伯市上城元越	集落背後の斜面に中世の石塔が建っている。
39	下城遺跡	佐伯市長谷字五反田・田淵	縄文時代から弥生時代の貝塚遺跡で、弥生時代前期の甕型土器の標式遺跡。
40	中山砦	佐伯市池田・長谷	現状では明確な城郭遺構が確認できないが、城跡と言われる。
41	岡ノ谷古墳	佐伯市池田字岡ノ谷	舟形石棺を持つとされる円墳。詳細不明。
42	白瀉遺跡	佐伯市鶴望字白瀉	弥生時代前期末の貝塚。昭和32年の調査で古代の骨蔵器も出土。
43	白瀉遺跡	佐伯市鶴望字白瀉	県指定史跡。若宮八幡宮境内にある。
44	鶴屋城跡	佐伯市城山	慶長6年、日田から毛利高政が入部し築いた近世の山城。別名「佐伯城」。
45	佐伯城三ノ丸櫓門	佐伯市大手前	県指定。御殿のあった三の丸の門。佐伯城で唯一残る江戸期の建物。寛永14年。
46	佐伯城下町	佐伯市城下東町ほか	江戸期に埋め立てて造られた城下町。
47	萩山遺跡群	佐伯市来島町	古墳時代、中世の墳墓遺跡。消滅。

白抜きのものは市指定または県指定の物件

- 本書収載の調査地点
- a 梅牟礼遺跡天神ノ下地区
  - b 梅牟礼遺跡掃木地区
  - c 曳地館跡
  - d 元越遺跡





朱色のラインに挟まれた範囲が工事対象地



第2図 調査箇所詳細図



## 第3章 梅牟礼遺跡天神ノ下地区

### 第1節 調査の概要

遺跡は、梅牟礼山山頂（梅牟礼城主郭）直下から流れ下る谷川が形成するヤト（谷）の出口付近で、幅約90mほどに急に広がった緩斜面に立地している。谷川が流れ込む門前川までは450mほど奥に入った場所にあたり、門前川が作る平野までは250mほどである。調査区は、ヤトの奥に続く道と、幅2mほどにコンクリートで固められた谷川を含み、幅60mほどで斜めに谷川を横断するように設定されている。

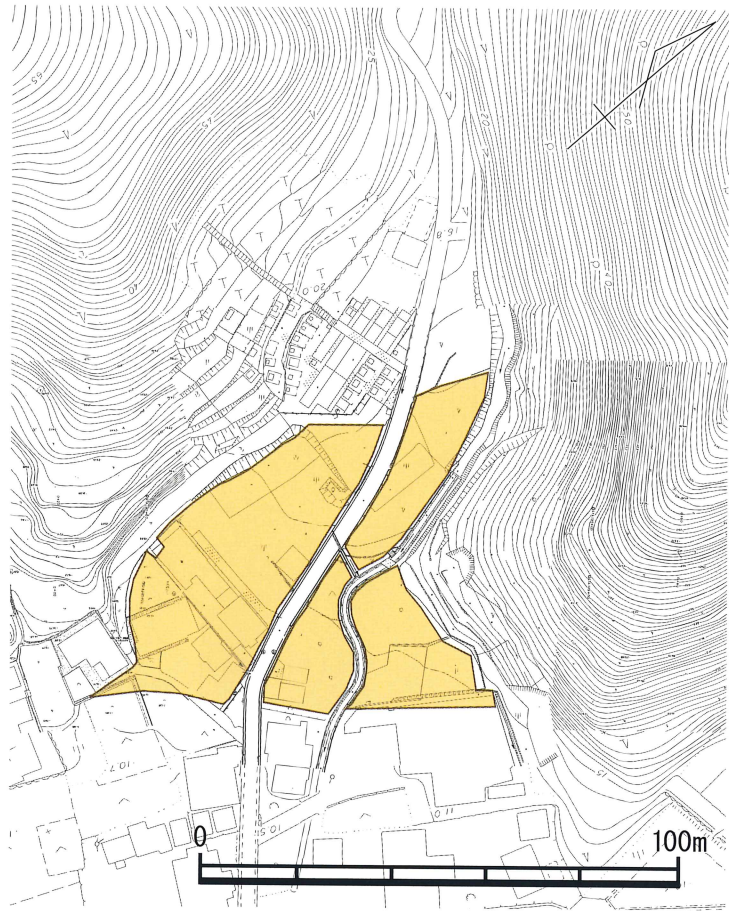
道を挟んで東側は、上流側では耕作に伴う痕跡が確認されたが、時期は押さえられなかった。下流側では掘立柱建物や井戸などが確認され、集落の存在が推測された。また、道路の西側では幾本かの溝とともに、土坑墓が1基確認された。これらは、いずれも概ね15世紀末から16世紀前葉に位置づけられる。

調査前まで住宅地であったことから大きな攪乱が至る所に見られたが、遺構面の上部が大きく削平を受けていることはなかったため、本来遺構密度はあまり高くなかったと考えられる。

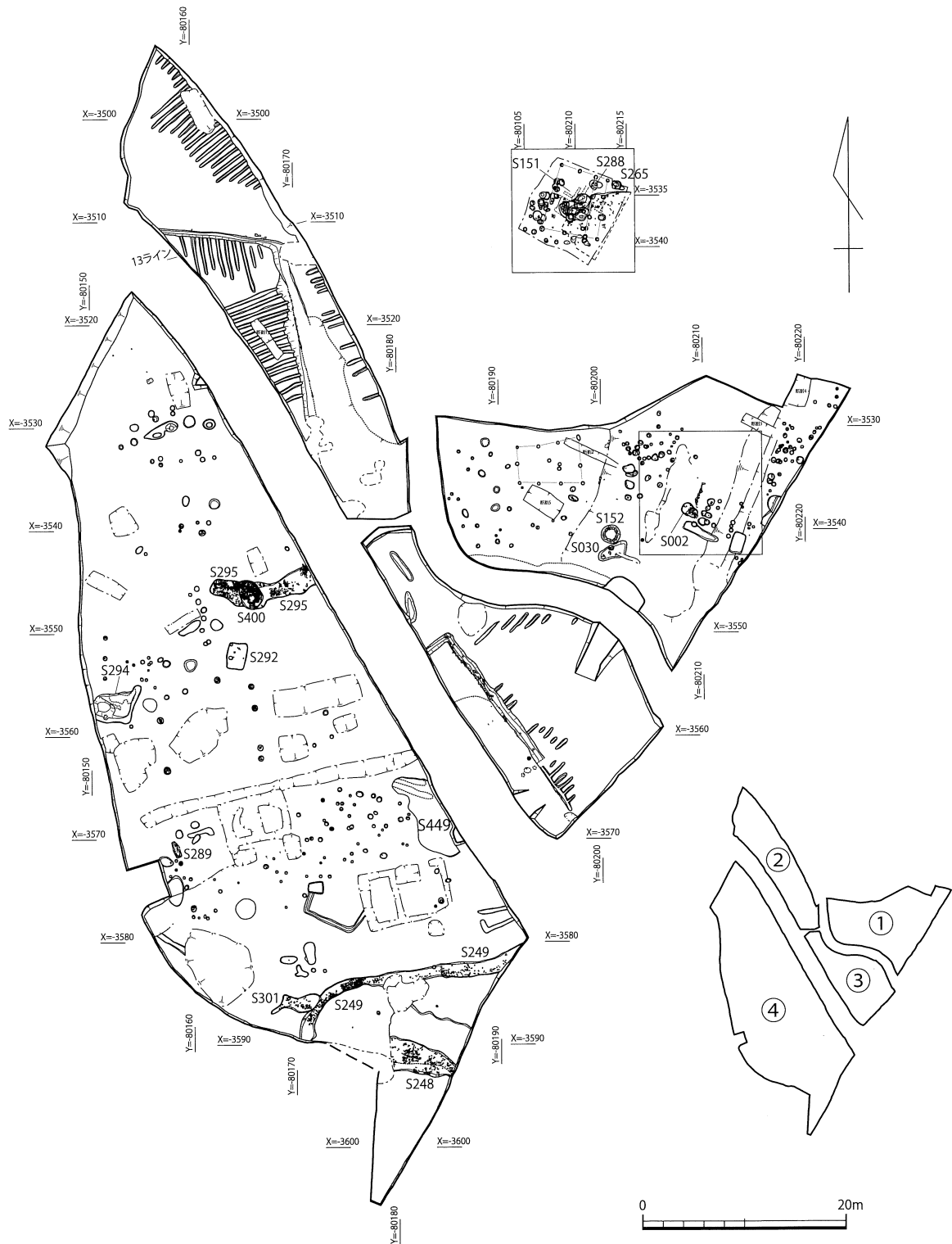
調査区は、谷川と道路によって4カ所に分かれるので、それぞれ第4図のように①区から④区と呼ぶこととする。

### 第2節 基本層序

調査区全体の層序を確認するため、②区の最も北側から調査区の長軸（②区と③区の間を通る市道とほぼ一致）を設定し、それに直交するラインを設けて、土層堆積確認を行った。基本層序は、第5図の13ライン北壁として示したとおりである。1層の表土の下に、2～6、8～10層の河川等に由来する砂や礫を中心とした層が確認された。これらは、①区と②区の間を走る小河川やその上流にある梅牟礼山に由来するものと考えられる。また、③区の北側は市道建設や墓地の造成等に伴い、旧表土の上を現代の厚い盛土による整地が行われていた。①区では、一部にうすい遺物包含層があり、その下に遺構検出面である整地層が認められた。上段の整地層は断割2北壁に示したとおりで、2層に分けられる。中段は断割3北壁の1層に該当する段階でS450のように下層の遺構が確認されたことから、一段下がった状況で使用が始まり、最終的に3層の上面に新しい遺構が築かれたものと考えられる。なお、中段と下段の間は、2～2層から犬走り状の平坦面があったものと考えられる。下段は非常に硬くしまった地山で遺構を検出しており、調査区外の東側も同様の状況と考えられる。



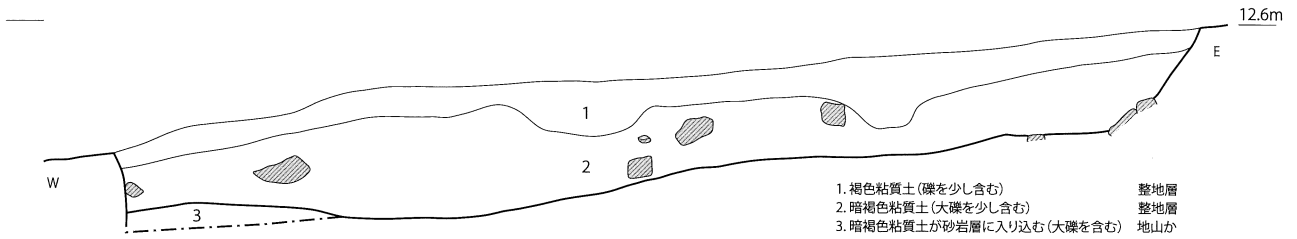
第3図 遺跡周辺の地形



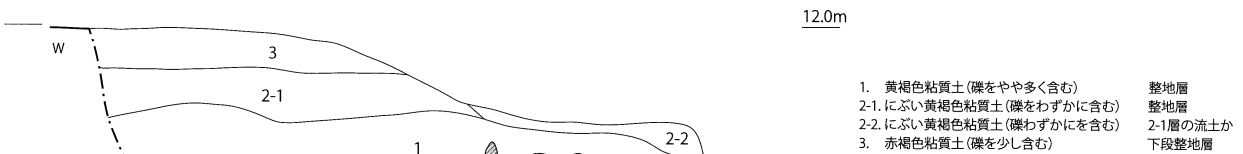
第4図 遺構配置図



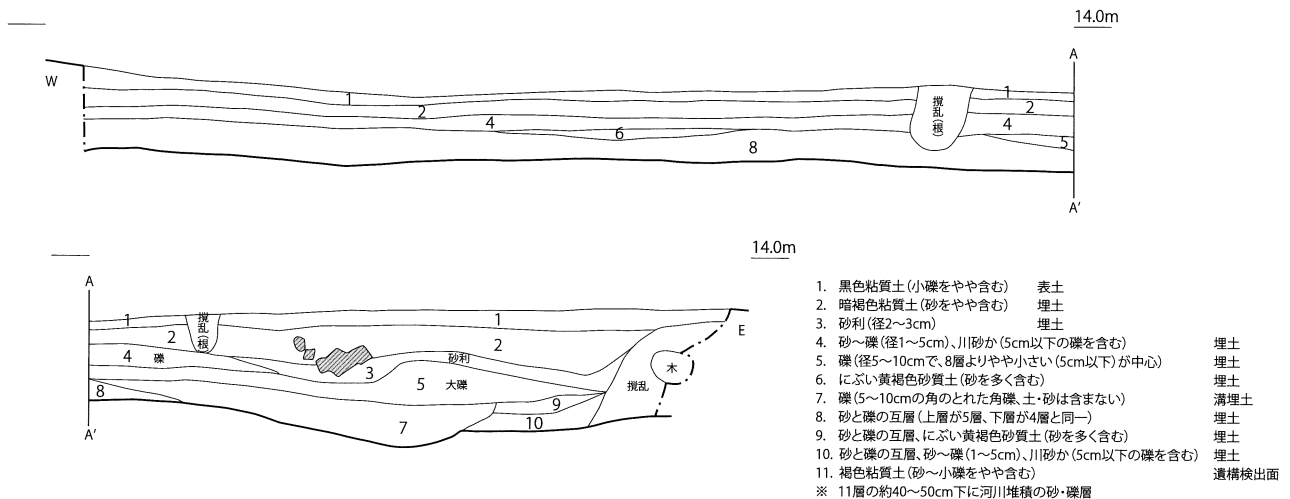
断割2北壁



断割3北壁



13ライン北壁



第5図 土層断面図

### 第3節 遺構と遺物

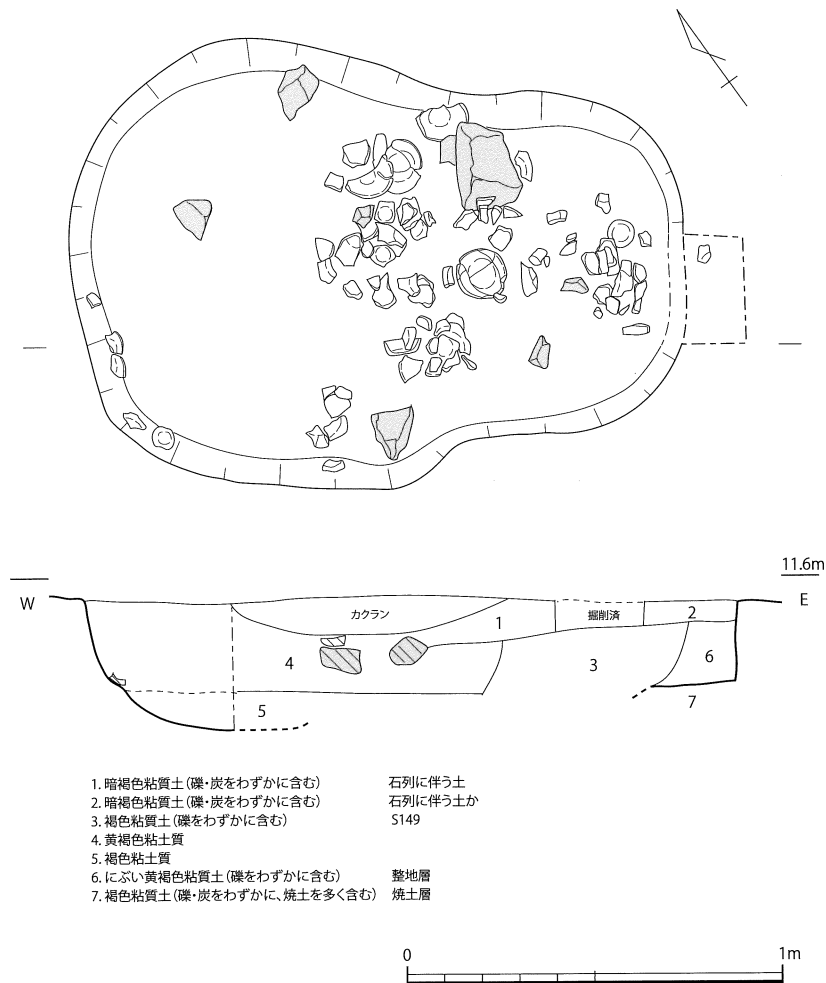
攪乱が多いが、ほぼ調査区の全体から遺構が検出されている。調査時に付した遺構番号に沿って説明する。

#### S002、S149 (第6図)

①区の中央付近で確認された土坑である。下部にはS151があり、S151の埋没後に掘られた遺構である。また、S149を切っている。S002は直径1.2mほどに復元でき、深さは0.24mである。

S002の出土遺物は第7図1から9、S149の出土遺物は第7図10から14である。1は青磁で灰色に近い発色のものである。2から4は土師器小皿で、口径は7cm前後、器高は1.8cm前後である。口縁端部がやや外側につまみ出されるものと、そのままやや内湾気味に立ち上がる二者がある。5から9は土師器坏である。口径は13cm代前半で器高は3.5cm前後である。口縁部の形状は小皿と同じく二者ある。

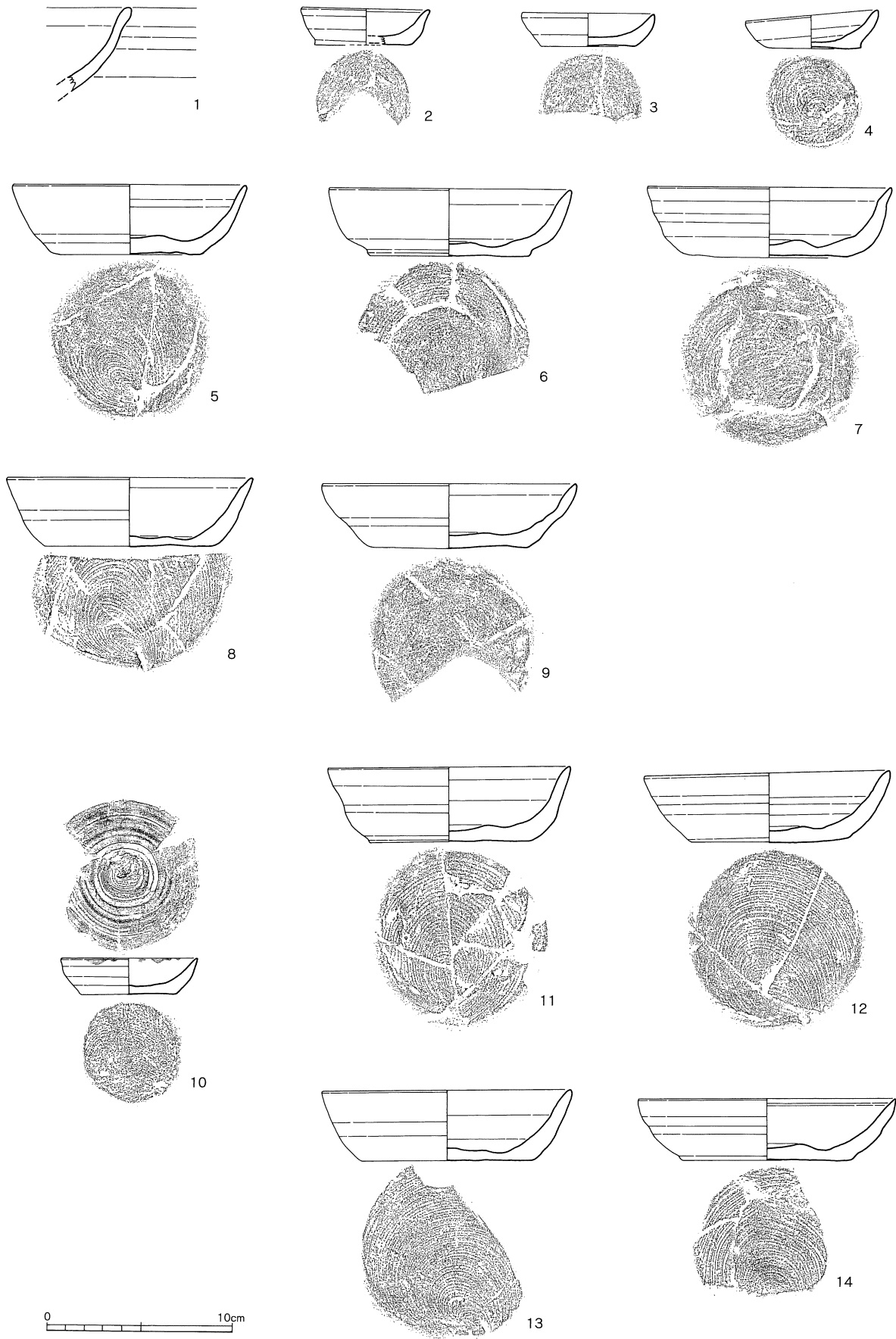
10は土師器小皿である。口縁端部がつままれて細り、内面にはロク口痕を残す。11から14は土師器坏で、前記したS002出土のものと同形・同大である。



第6図 S002、S149

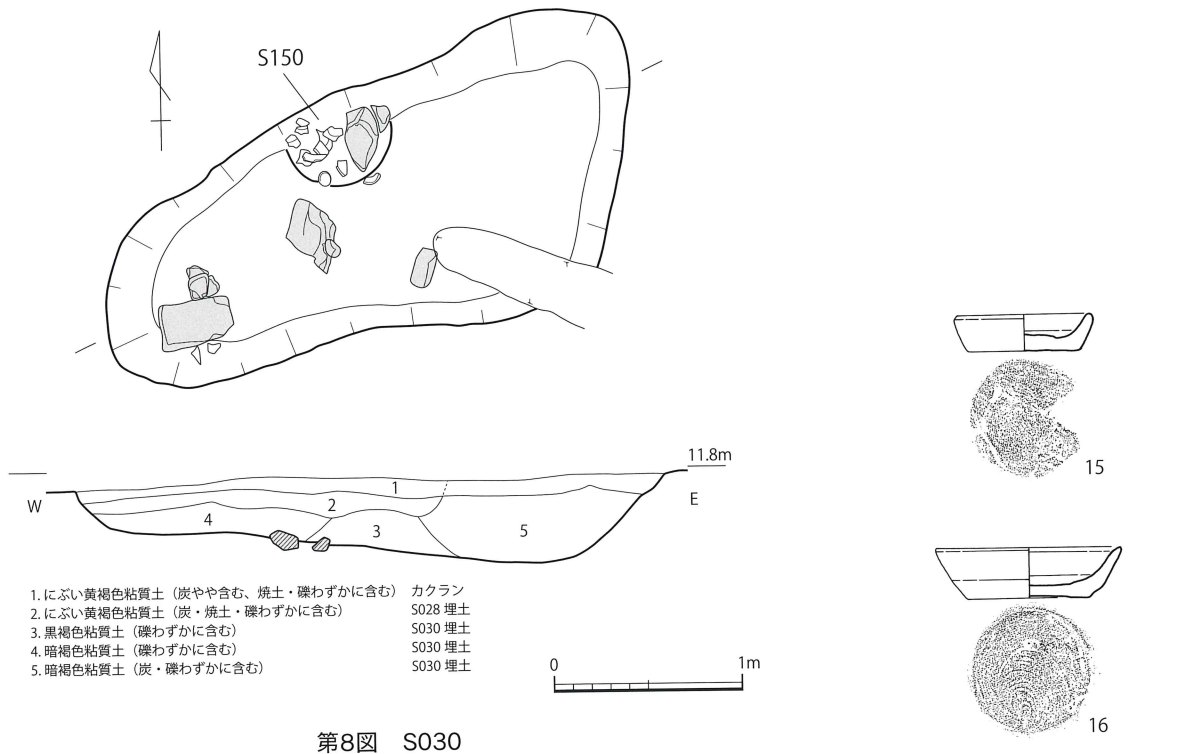
#### S030 (第8図)

①区の中央南寄りで検出された土坑である。全長3.12m、幅1.0mから1.4mで、深さ0.35mの大型の土坑である。東西方向に長軸をとり、東側ほど幅が広く、深さも深くなる。土層を見ると、1層は攪乱、2層は他遺構の埋土、3層から5層がS030の埋土となる。いずれも暗～黒褐色土である。



第7図 S002、S149出土遺物

出土遺物は第9図15から17である。15は口径5.5cmの小皿、16は7.5cmの小皿である。17も小皿である。18はS030に重なって検出されたS150出土の土師器小皿である。



第8図 S030

S151・S450 (第10・11図)

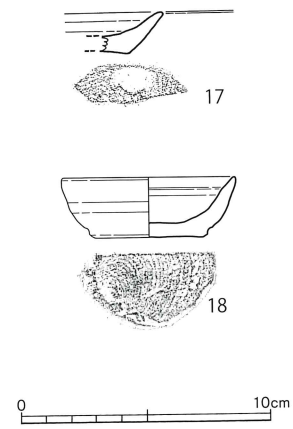
S002を掘り下げる際に、3・4層の下端で部分的に不明瞭な箇所があることや7層に焼土層が確認された。そこで、S002完掘後、東側に断割のトレンチを設定し、掘り下げたところ、整地層下から土師質土器と焼土塊が大量に出土したので、S002を検出した整地層を掘り下げたところ、S151が確認された。

上層では、大量の土師質土器や礫が確認されており、土師質土器坏の完形品が折り重なるように置かれていること等から、遺構廃棄に伴う行為によるものと考えられる。遺物等を取り上げた後で、サブトレンチを設定して中層の状況を確認したところ、中央に厚い焼土層や炭化物を含む皿状を呈する土坑を確認した。また、焼土層の上層には、鉄滓が認められ、S151中央やや西側 (X=3535.0~3537.5、Y=80107.5~80210) に集中していた。また、同じ高さで検出された柱穴は地山に掘りこまれたものである。

この地山の検出を西側から東側に進めると、中央の焼土から西側へは、ハの字状を描きながら下がっており、この落ち込みをS450として調査を行った。S450はS151の下層の遺構であり、出土遺物には土師質土器坏以外にも備前焼播鉢が認められ、特筆すべき点として、刀等の鉄製品以外にも青銅製切羽といった刀装具が出土したことがあげられる。

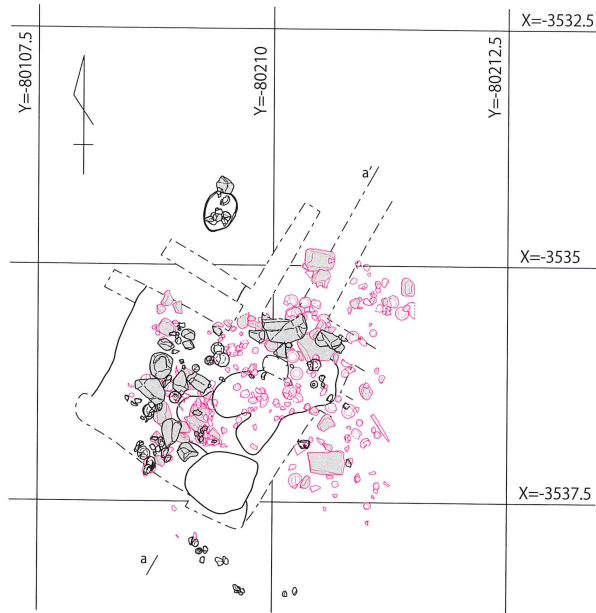
遺構の形状や焼土・炭化物、鉄滓等から、当遺構は鍛冶に関連する遺構であると考えられる。また、その製品として、刀等を作っていた可能性が指摘できる。

①区のやや東寄りで確認されたもので、S002に切られている。3層にわたっていくつかの遺構が複雑に絡み合いながら形成されたと考えられる遺構である。最終的には3.9m×4.2mのほぼ正方形の土坑となった。最上層

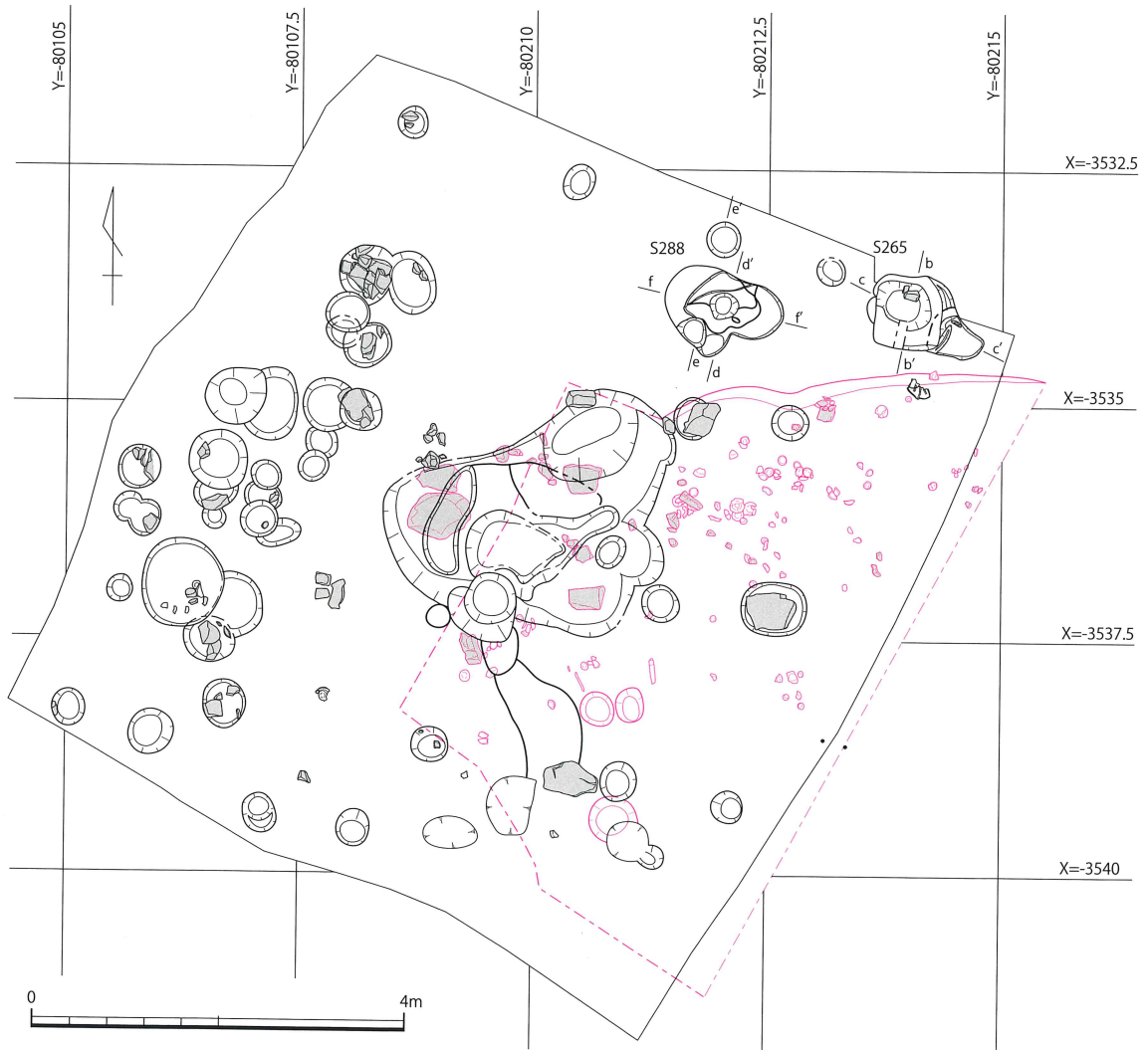


第9図 S030出土遺物

上層状況（遺物出土状況）  
 ※赤色は、下層遺物出土状況

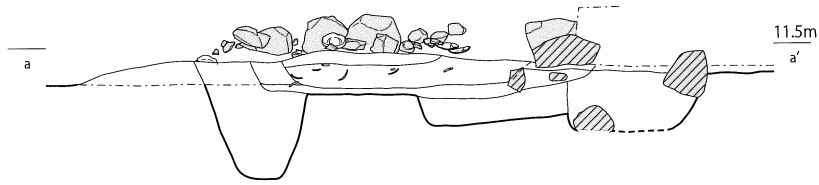


下層状況  
 ※赤色は、さらに下層状況

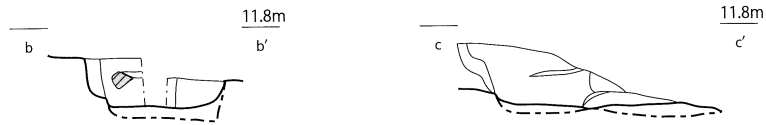


第10図 S151

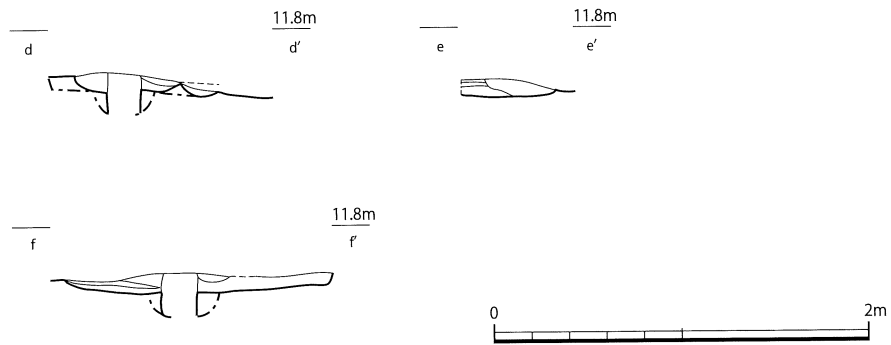
S151



S265



S288



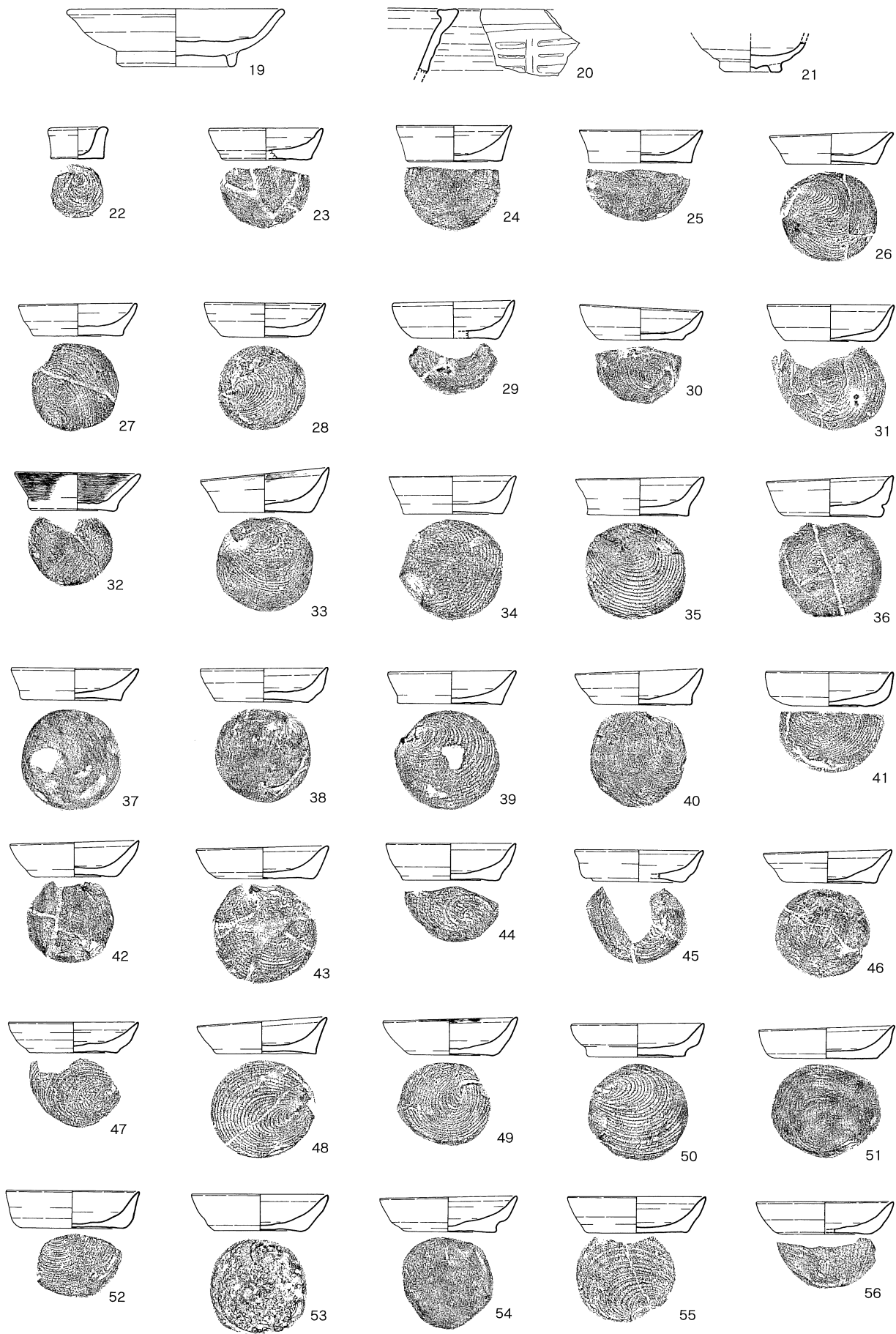
第11図 S151土層断面図

からは人頭大の礫が多量に出土した。最下層ではほぼ中央には長さ1.6m、幅0.8mほどの落ち込みがあり、焼土と炭化物が多量に含まれていた。

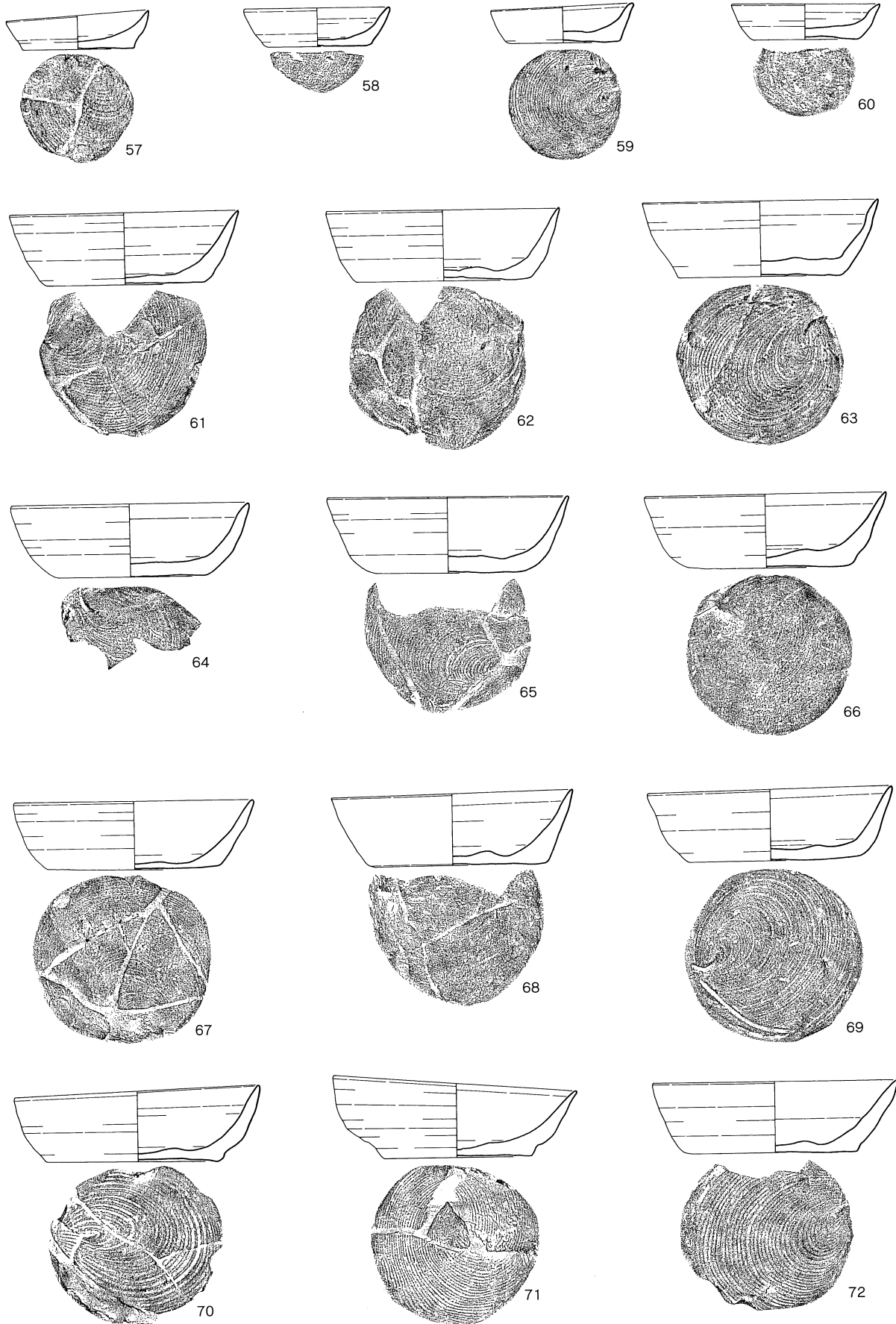
遺物は上層部から完形の土師器坏や小皿が大量に出土している。

出土遺物は第12図19から第15図100である。19は青磁の皿で22はミニチュアの土師器小皿である。口径は2.85cm。23から60は土師器小皿である。口径は6.4cmから7.5cmで、器高は1.75cmから2.1cmである。形態的にもほとんど同様で、口縁端部はつままれて細り、内面に段を有するものが多い。61から96は土師器坏である。口径は12.2cmから14.1cmで、器高は3.1cmから4.45cmである。器高に若干のばらつきはあるものの、基本的には一様式内に納まるものである。小皿同様、口縁端部はつままれて細り、内面に段を有するものが多いのが特徴となる。97は備前焼すり鉢で、乗岡編年中世6期a（16世紀前半）のものであろう。98は瀬戸焼のおろし皿。底部は糸切りである。99は瓦質の壺。100は焼成前に穿孔した素焼きの製品であるが、周囲も欠けており本来の形状は不明である。

第16図101から第17図142はS450出土である。101は龍泉窯青磁の碗で、内面に蓮弁と菊花を印花文で描く。



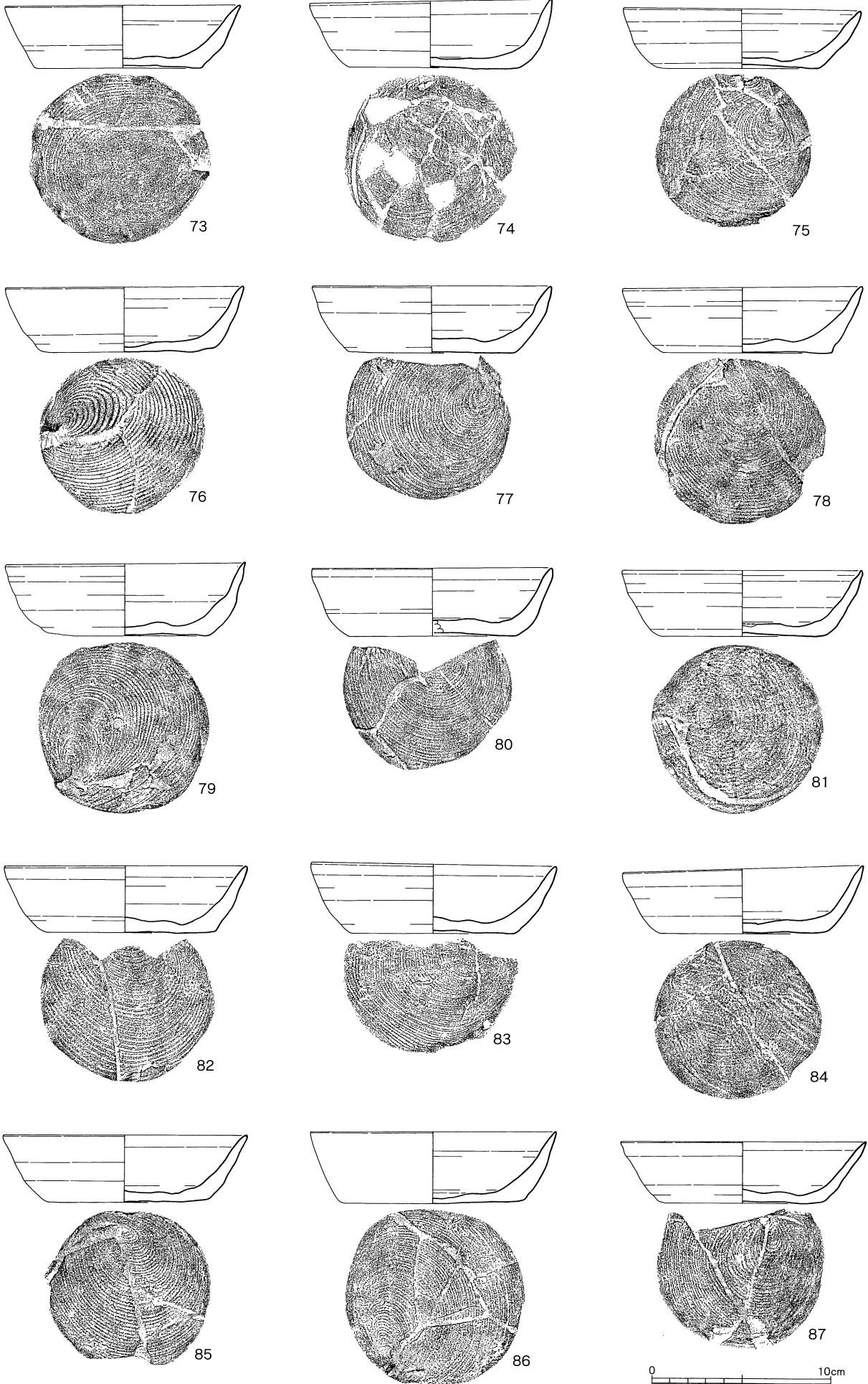
第12图 S151出土遺物(1)



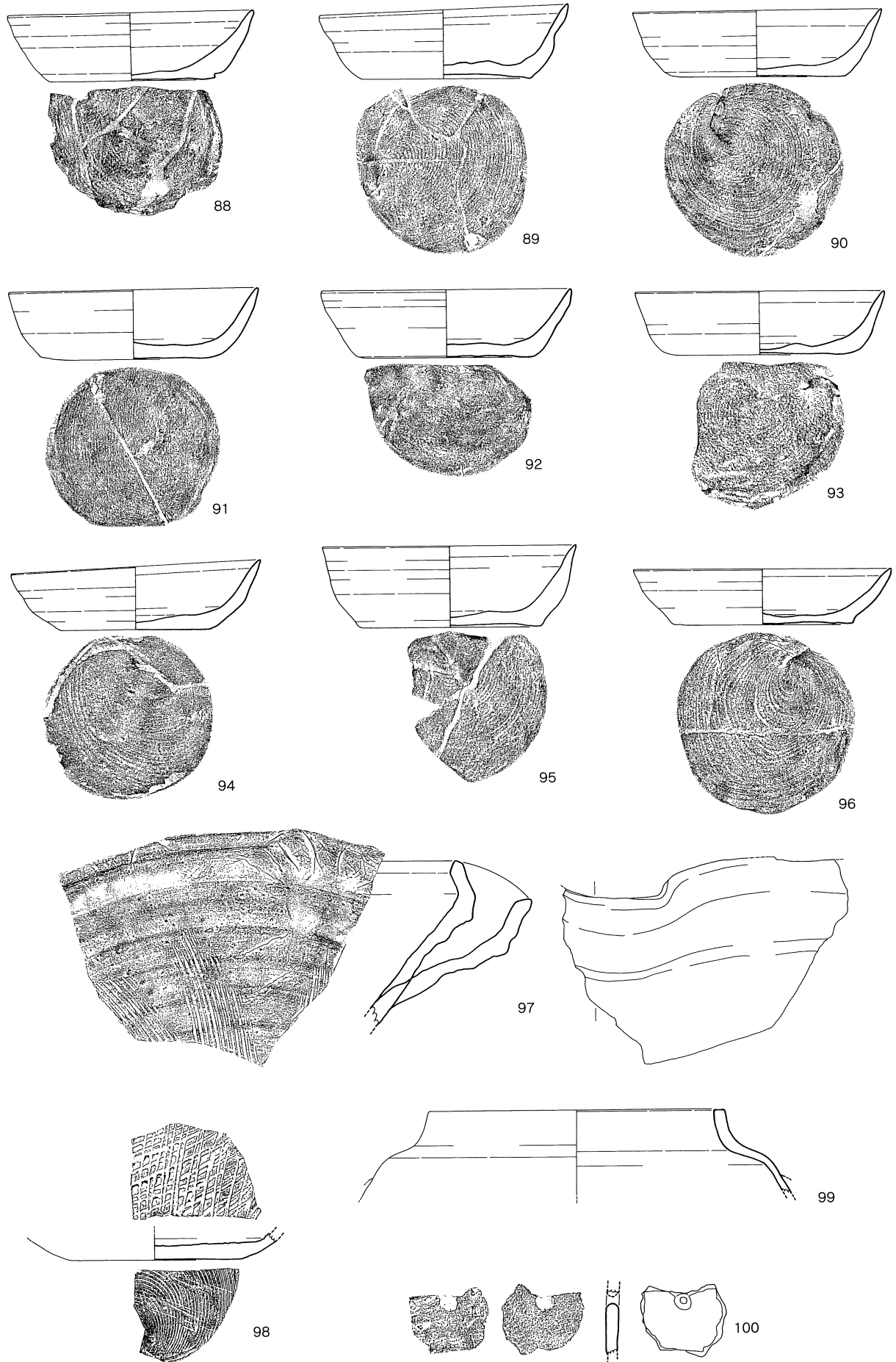
第13图 S151出土遺物(2)

0 10cm

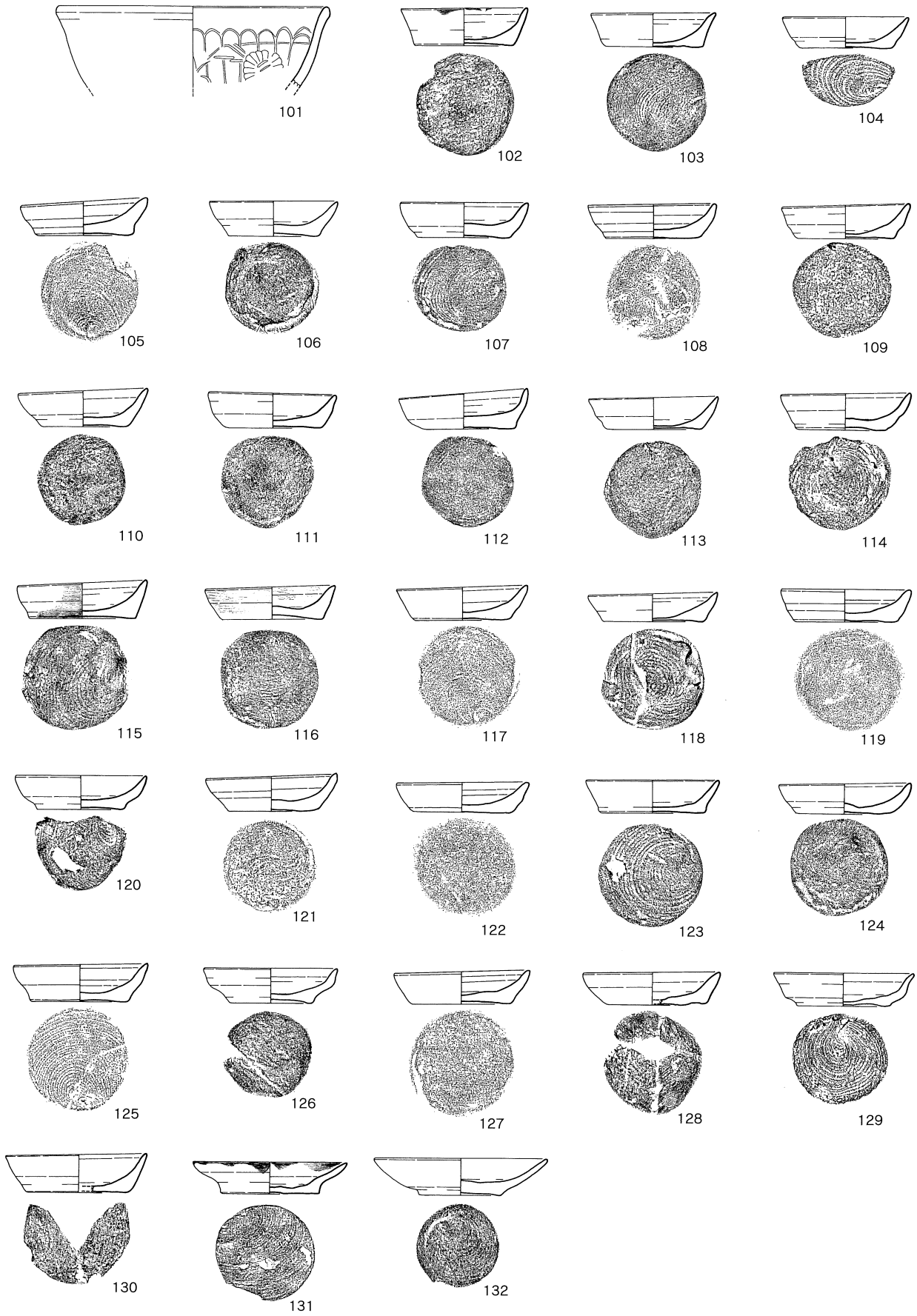




第14図 S151出土遺物(3)

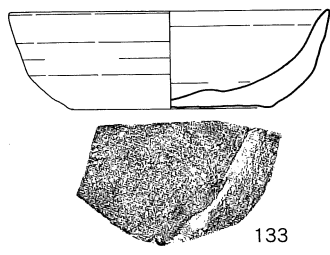


第15図 S151出土遺物(4)

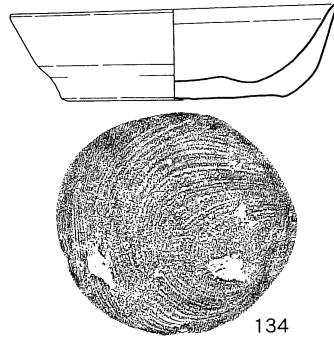


第16図 S450出土遺物(1)

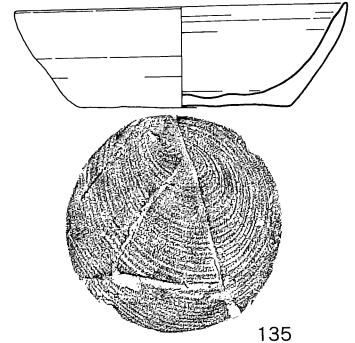
0 10cm



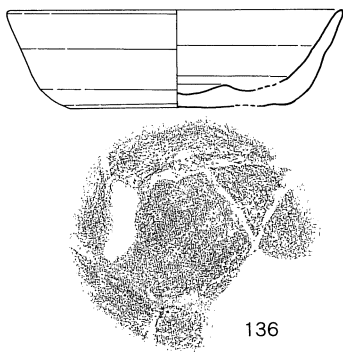
133



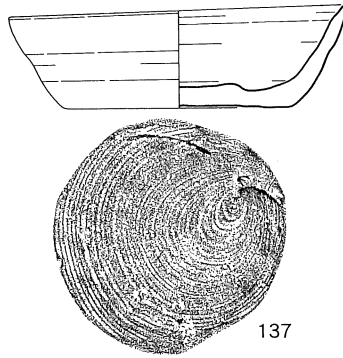
134



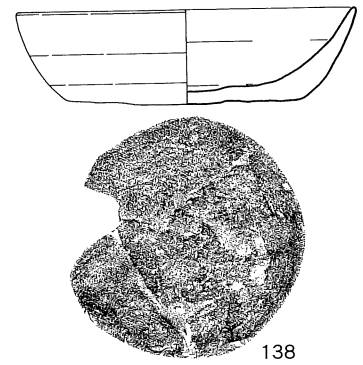
135



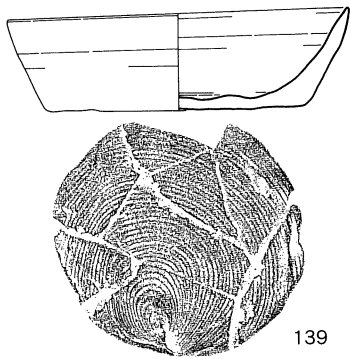
136



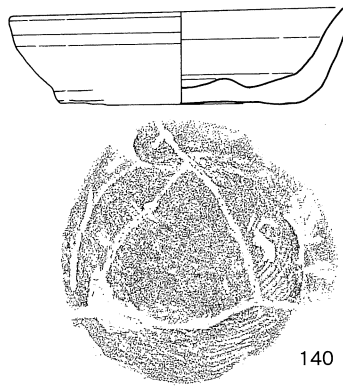
137



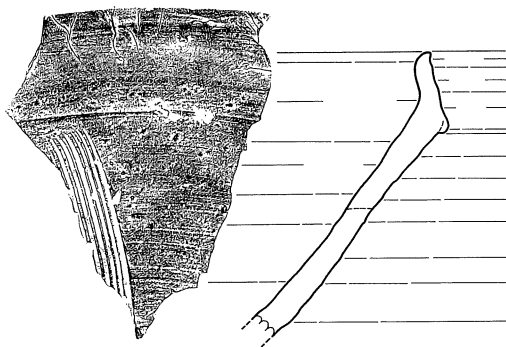
138



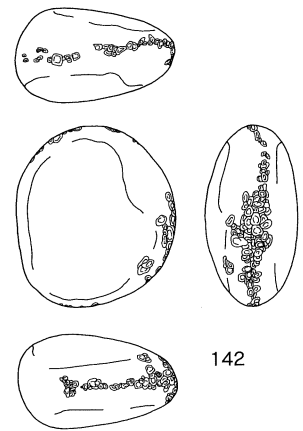
139



140

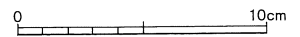


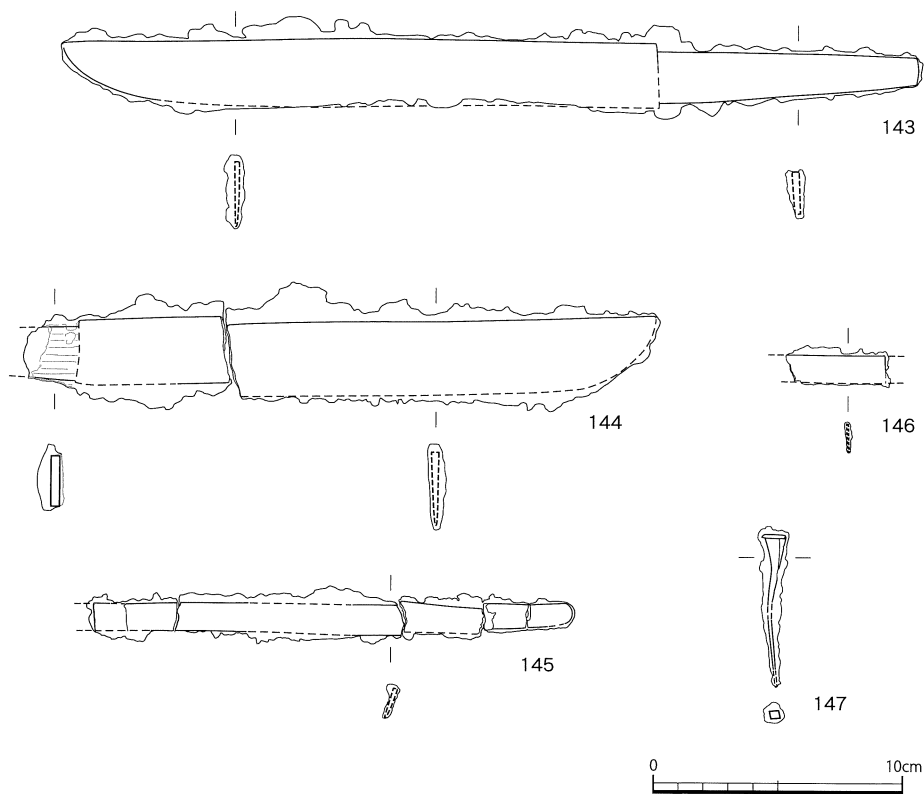
141



142

第17图 S450出土遺物(2)





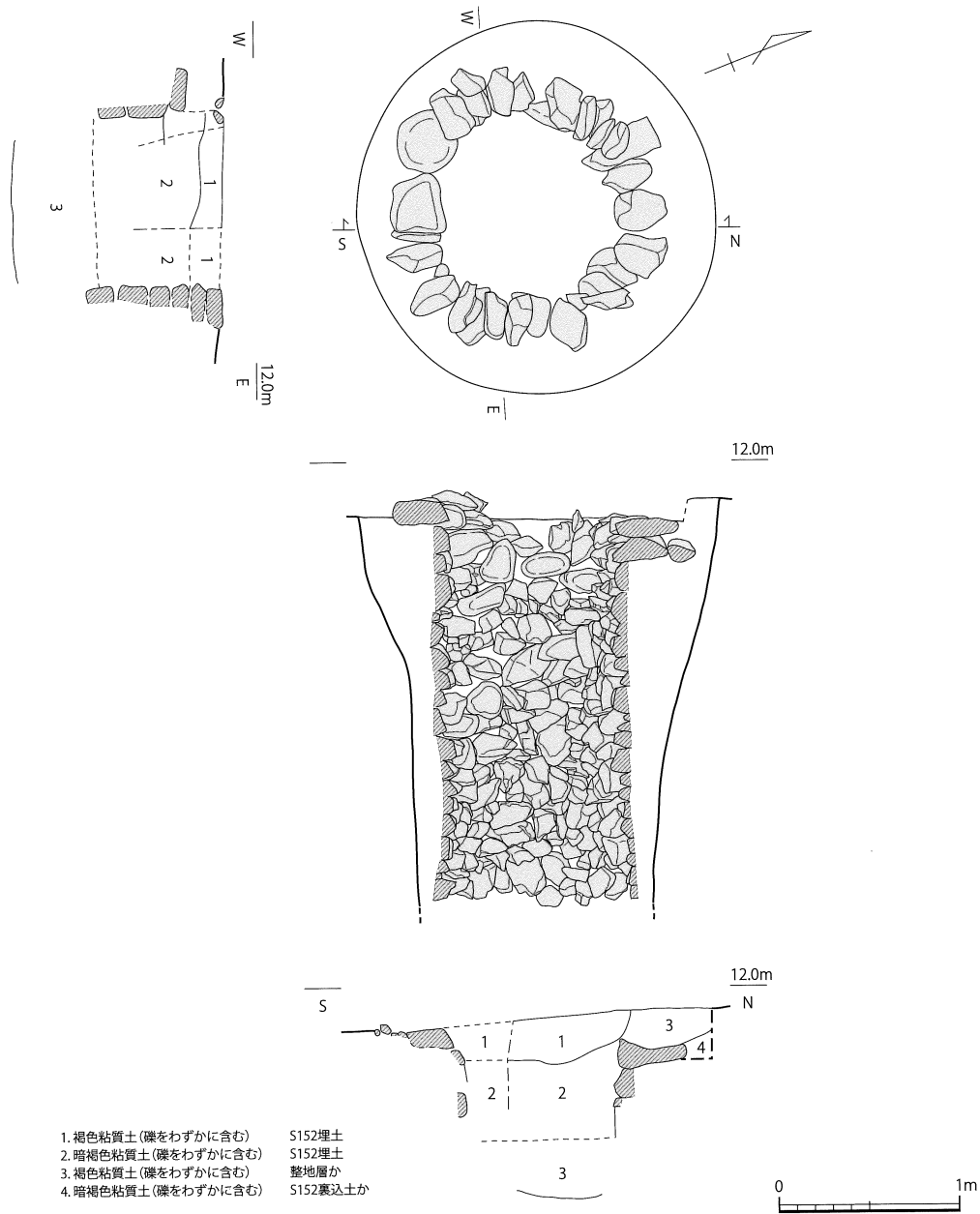
第18図 S151、S450出土鉄器

外面は無文。102から132は土師器小皿である。102から130までは口径6.7cmから7.5cm、高さは6.7cmから7.5cmのほぼ同形・同大のものであるが、131と132は形状が異なる。131は口径8.2cmで高さ1.6でやや内湾気味に大きく開く。132は口径9.5cm、器高1.9cmで、口縁部は直線的に大きく開く。133から140は土師器坏である。口径は12.5cmから13.4cm、器高は3.6cmから4.1cmのほぼ同形・同大のものである。141は備前焼すり鉢で、乗岡編年中世5期b（16世紀後葉）のものであろう。142は叩き石。縄文時代のものである。143から147は鉄器である。143と144は小刀、147は釘である。145と146は不明である。

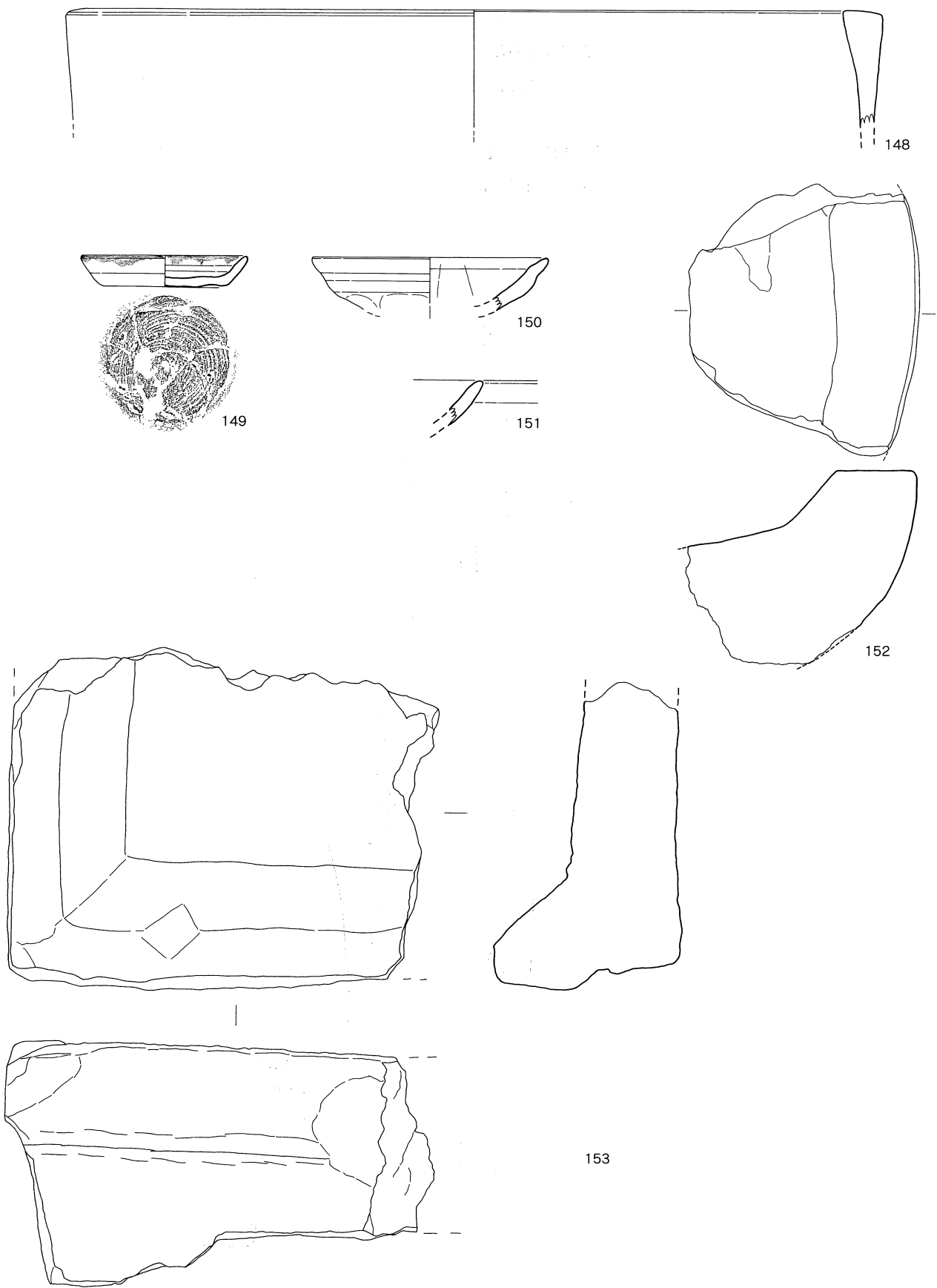
S152 (第19図)

①区の中央付近で検出された井戸である。自然礫や一部加工痕のある丁寧な石積みで作られ、石の表面で測って、上部で直径0.9m、深さ2mのところでは1.0mである。井戸の堀片の直径は検出面で2.0m、深さ2mのところでは0.65mである。上部まで完全に埋まっていた。また、2mより下部の調査は水が湧出したため危険と判断して行わなかった。

出土遺物は第20図148から153である。148は瓦質の深鉢。149は土師器小皿で、口径は9.2cmある。150と151は京都系土師器の皿である。器壁は厚く、口縁端部が強くとつまみ出される。152は石臼の下臼。153は凝灰製の用途不明石製品である。



第19図 S152



第20図 S152出土遺物

0 10cm

S248 (第21図)

④区最南端で検出された溝である。西側は攪乱で壊されているため、調査区内では長さ7.0m確認された。幅は1.2mから3.3mで、東に行くほど細くなっている。深さは数cmと浅く、痕跡程度であった。溝中からは礫が多く出土した。



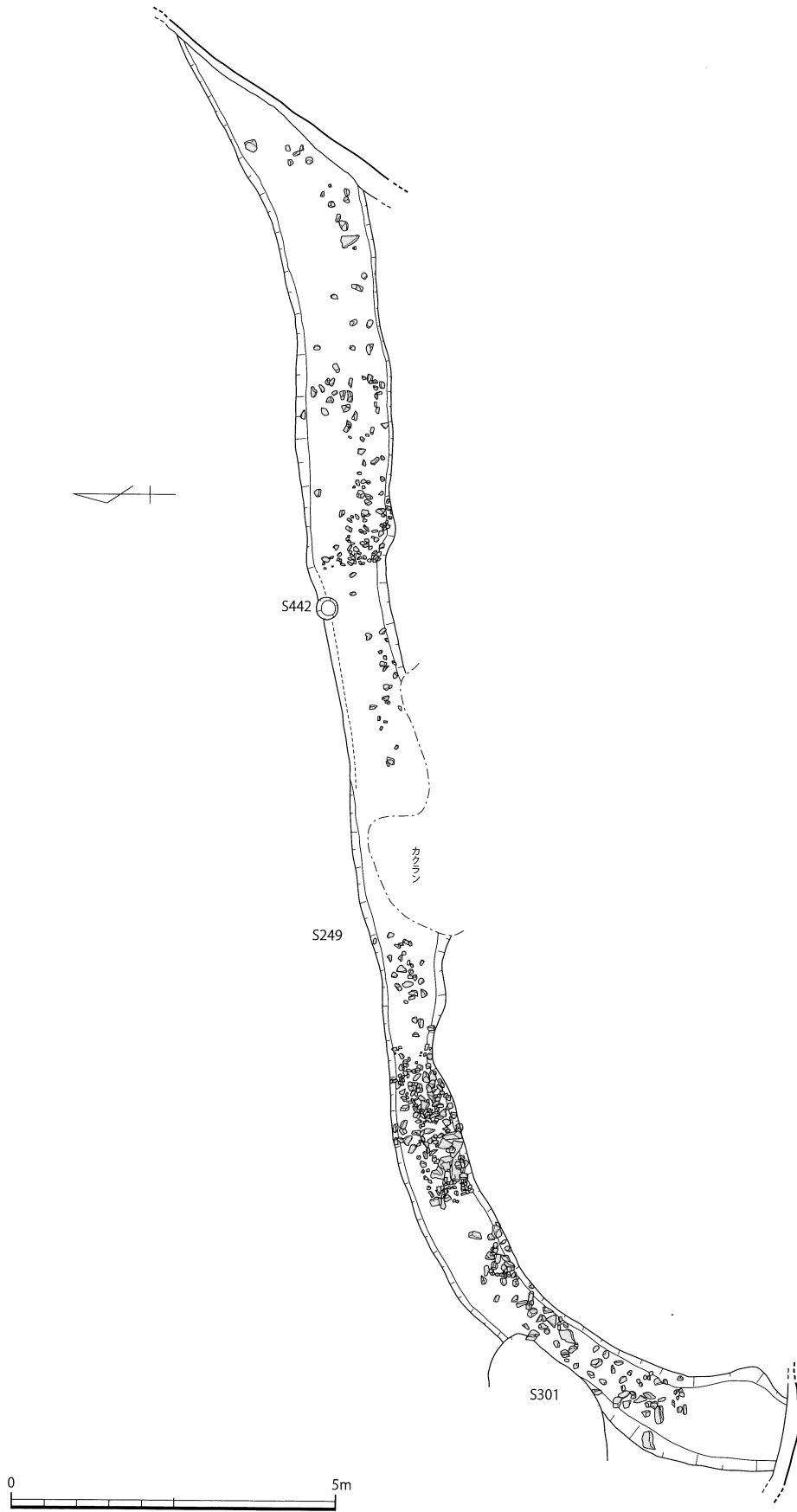
第21図 S248

S249 (第22図)

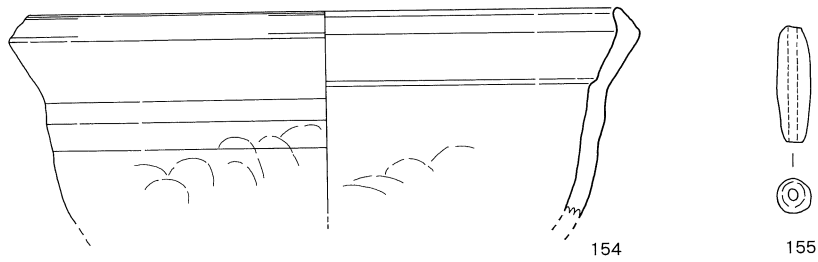
④区の南寄りで確認された溝である。調査区を東西に延びて、西の端で南に折れる。幅は1.0mから1.4m、深さは10cmで、約25m確認された。

出土遺物は第23図154と155である。154は瓦質の鍋で、口縁部が内側に「く」の字に折れる。155は素焼きの土錘である。

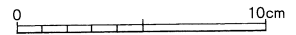




第22図 S249

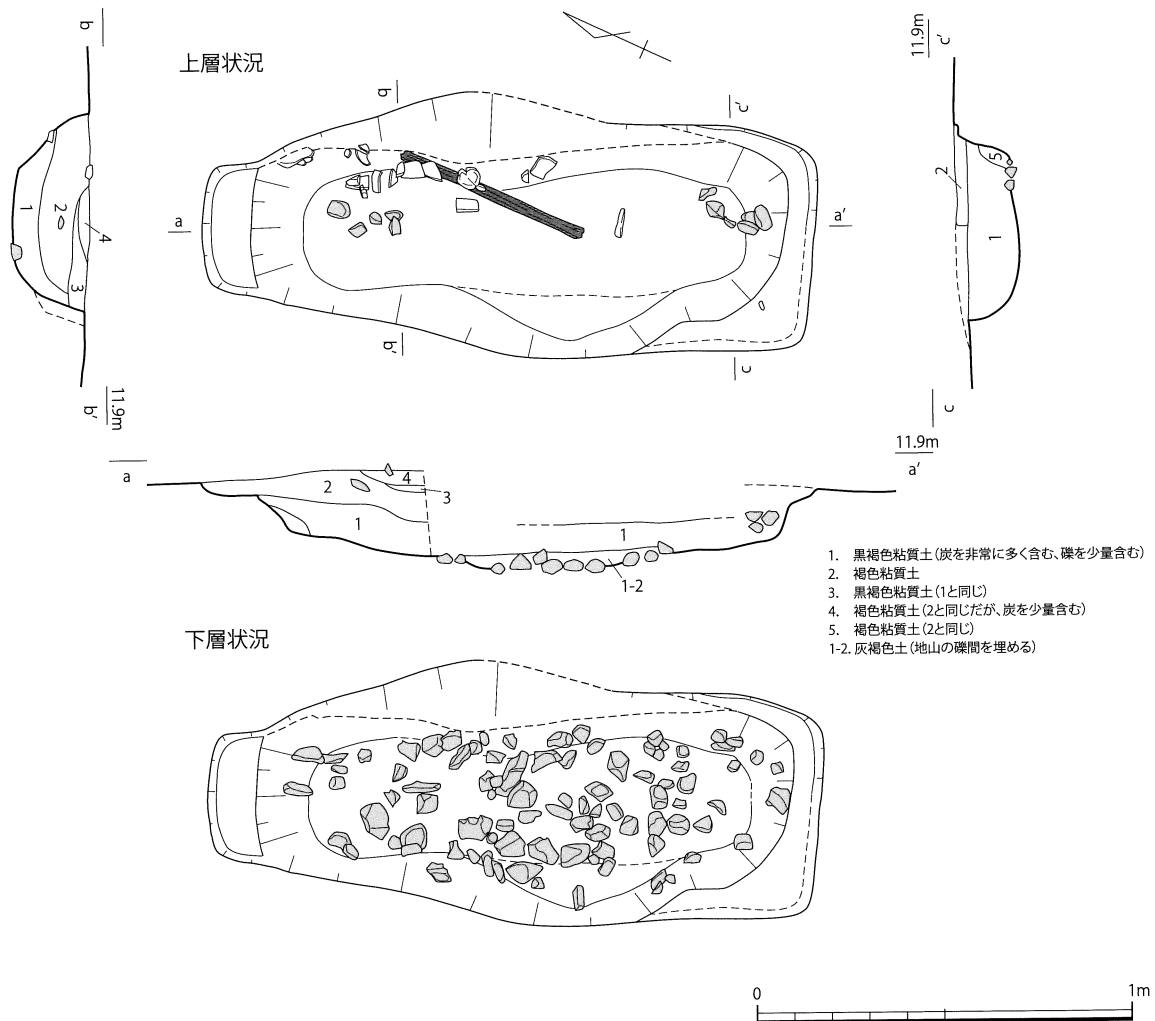


第23図 S249出土遺物



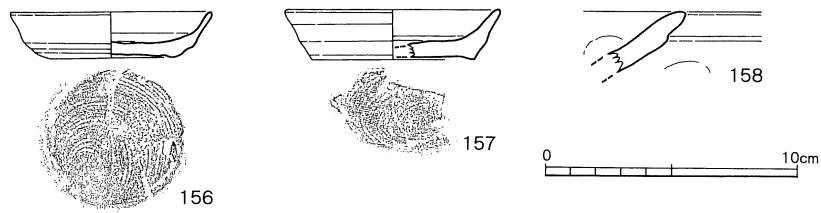
S289 (第24図)

調査区④の西端中央で確認された土坑である。南北1.65m、東西0.6mの長方形で、長軸は略南北方向となる。深さは0.21mである。床面には直径数cmから10cm程度の礫を敷き詰めており、その上部には炭化物を非常に多く含む黒褐色粘質土が10cmほど堆積していた。そして、その上部を褐色の粘質土で覆っているような状況であった。炭化物に混じって焼けた痕跡のある人骨細片が出土しており、墓もしくは火葬施設（荼毘跡）ではないかと考えられる。



第24図 S289

出土遺物は第25図156から158である。156と157は底部糸切りの土師器小皿である。158は京都系土師器皿で、器壁は厚く、口縁端部は強く摘ままれ、外面に段ができています。

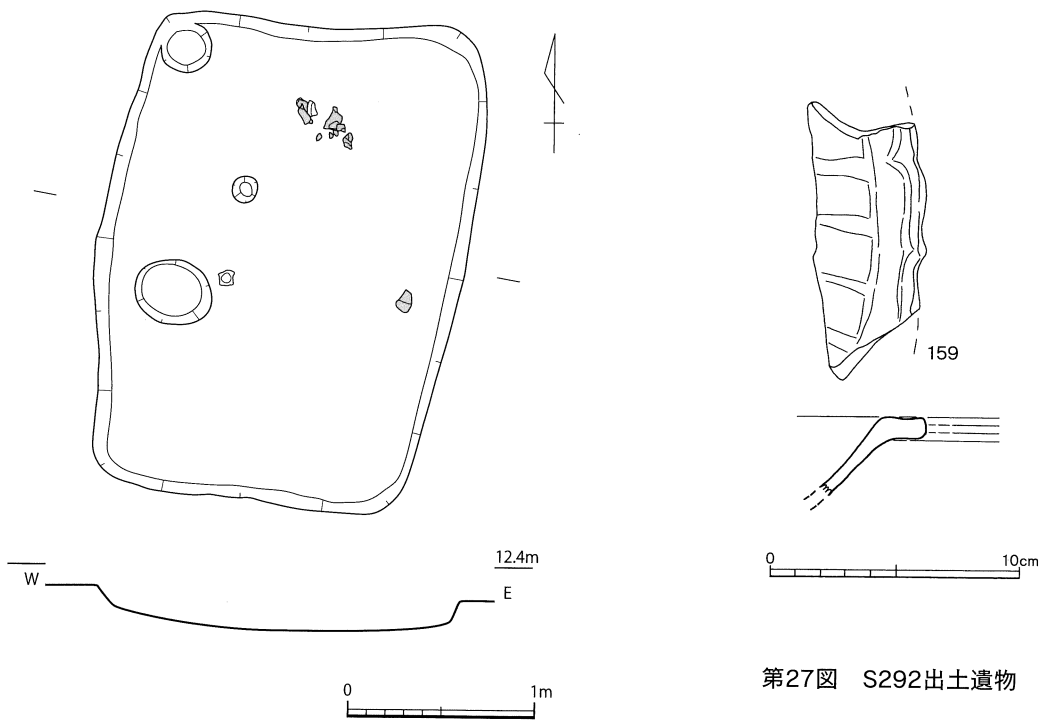


第25図 S289出土遺物

S292 (第26図)

④区のほぼ中央で確認された長方形の土坑である。南北2.52m、東西1.93m、深さ0.12mである。床面には北西角と中央西寄りにピットが確認されたが、本来土坑に伴うものかは判断できなかった。

出土遺物は第27図159の青磁皿である。



第27図 S292出土遺物

第26図 S292



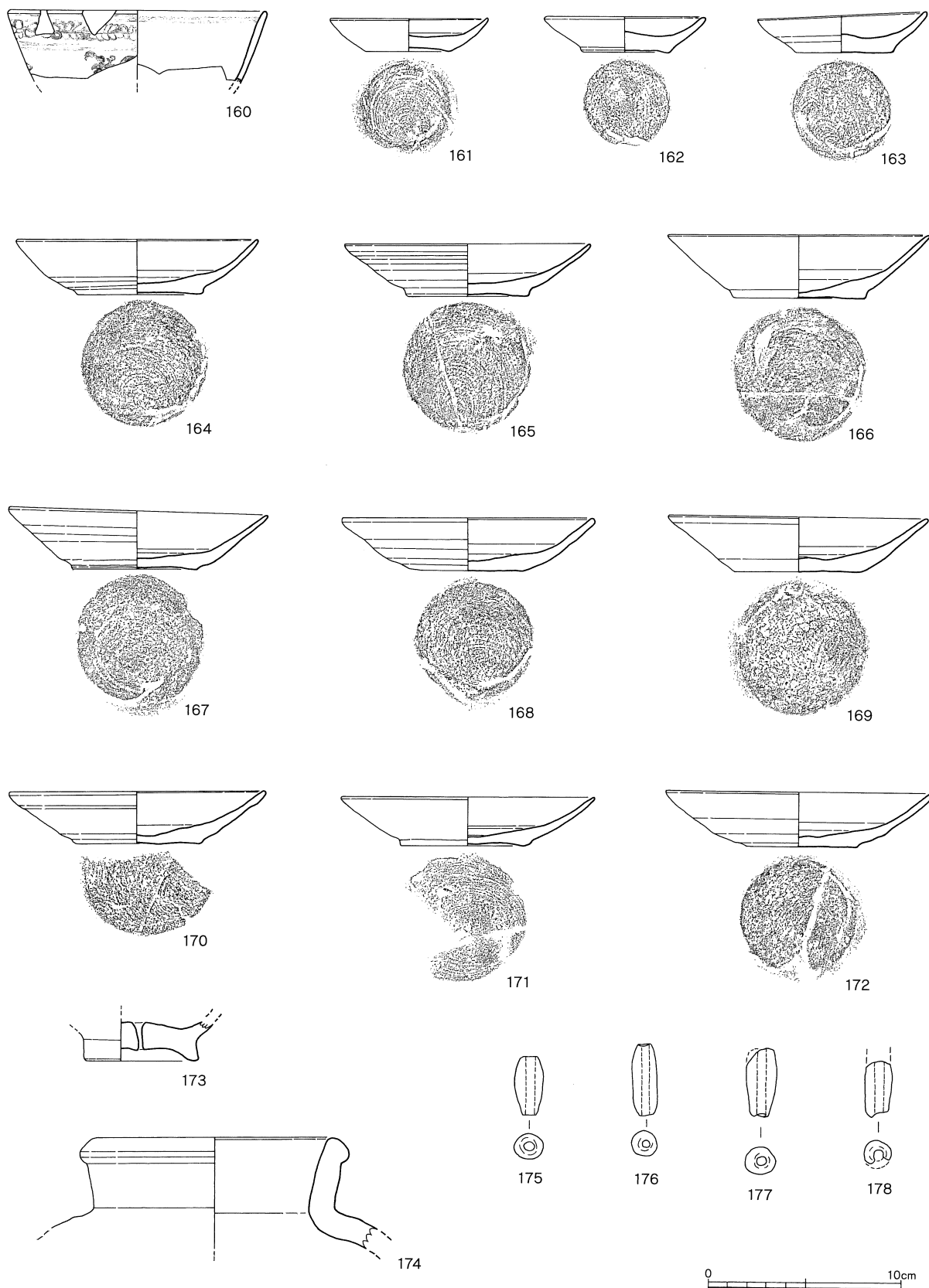
第28図 S294

S294 (第28図)

S294は北東隅が飛び出た不整形な楕円形を呈する土坑である。遺構検出時に東側で薄い焼土を西側で炭化物の混じった土を確認し、掘り下げていくと西側に向かって3段の段差を持ちながら深くなっていった。最も深い箇所は法面と中段の一部で土師質土器と大量の礫が認められる。土坑の西側は非常に炭化物が多く、粘性を示す埋土であった。

調査区のすぐ西側は急傾斜の斜面となっていることから、当遺構によって中世の土地造成の範囲を確認することができた。近接して、S289があることから何らかの関係性をもっている可能性がある。

出土遺物は第29図160から178である。160は漳州窯青花の碗である。161から163は土師器小皿、164から172は土師器坏である。小皿と坏は形態がよく似ている。底径に比べて口径が大きく、口縁部は直線的に大きく開く形状を呈している。173は底部に孔の開いた高台部で、いわゆる燭台である。174は備前焼の壺口縁部である。釉は鶯色に発色している。175から178は素焼きの土錘である。



第29图 S294出土遺物

S295 (第30図)

S295は、④区で検出された溝状の遺構である。S400に切られている。幅は1.5mから2.2mで、長さは約10m確認されている。東側は調査区外に伸びるが、③区では確認できていないので、現道の下で終息していると考えられる。深さは極浅く10cm程度である。

出土遺物は第31図179である。凝灰岩製で、加工した痕跡があるが、どのようなものになるのかは不明である。

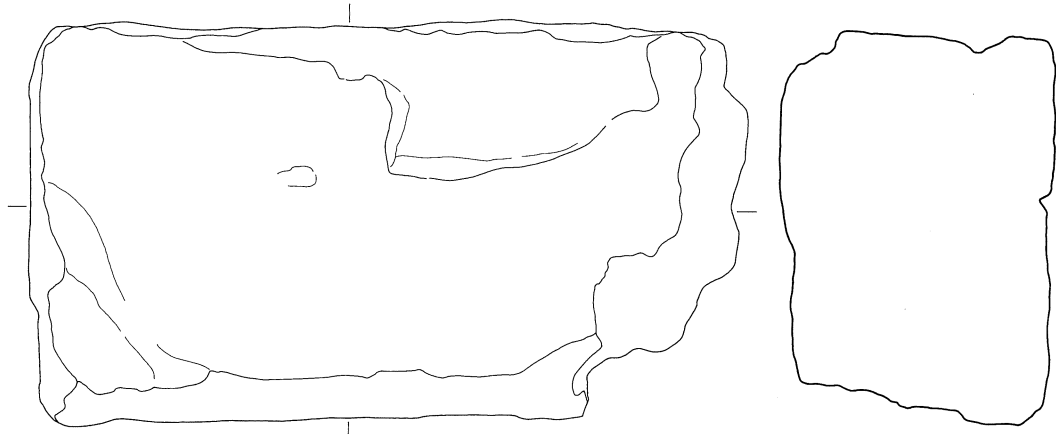
S400 (第30図)

④区で確認された土坑で、S295埋没後に掘られている。小さな礫が多量に出土している。

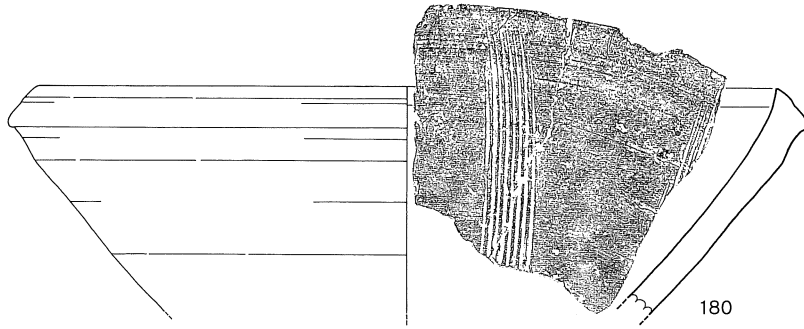
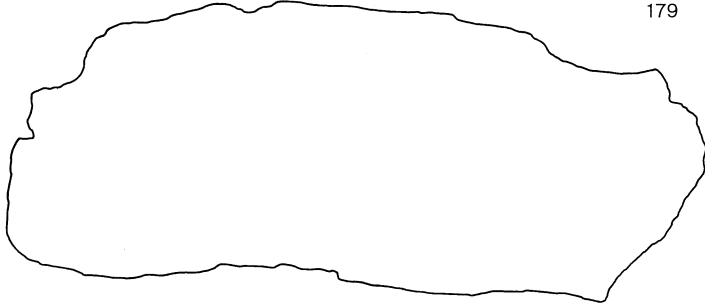
出土遺物は第31図180と181である。180は備前焼のすり鉢で、乗岡編年の中世3期（14世紀から15世紀初め）のものであろう。181は凝灰岩製のもの、加工痕があるがどのようなものになるかは不明である。



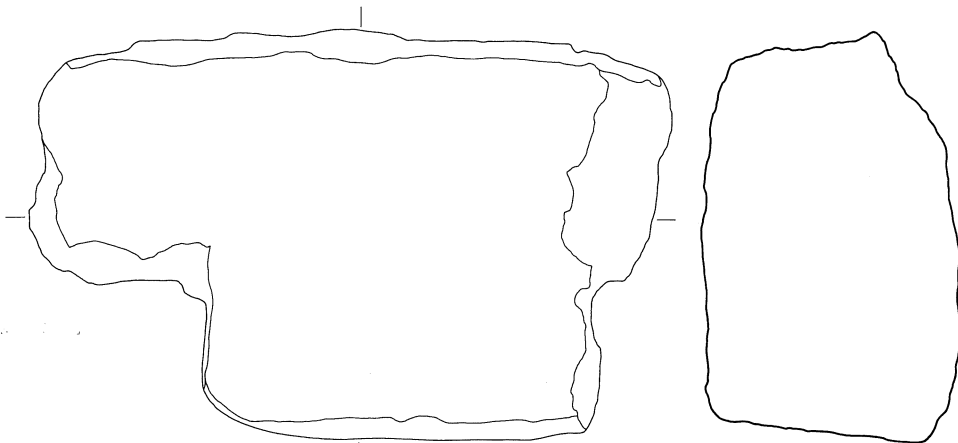
第30図 S295、S400



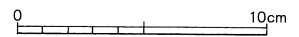
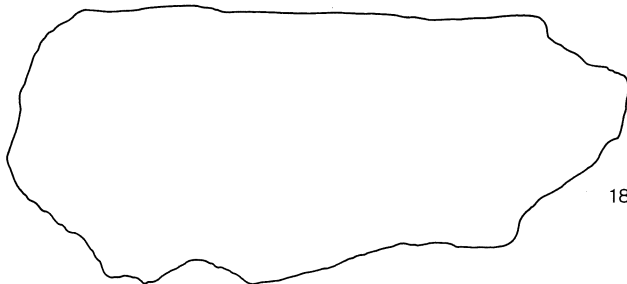
179



180



181

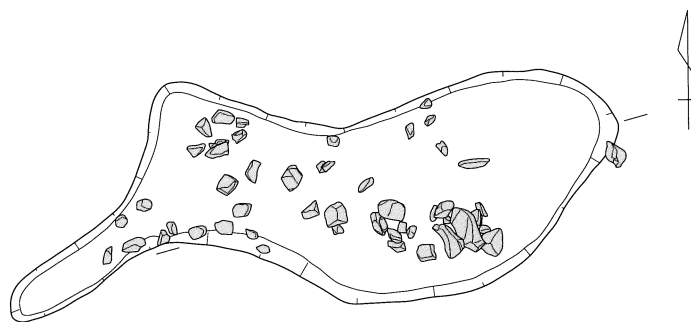


第31图 S295、S400出土遺物

### S301 (第32図)

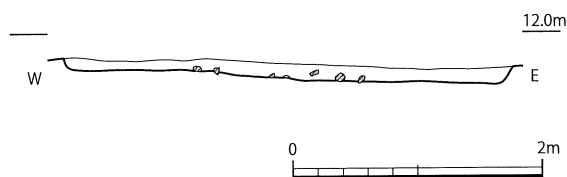
④区の南側で確認された土坑である。S249を切っている。いくつかの遺構が切り合っている可能性があるが、調査時には確認できなかった。深さは10cm程度と浅い。

埋土からは小さな礫が出土したが、図示できるような土器は出土しなかった。



### S449 (第33図)

④区の南側で確認された浅い土坑状の広がりである。東側は調査区外となり全形は不明である。全体的に薄く焼土が広がっていたが、用途は不明である。



第32図 S301

### 掘立柱建物1 (第34図)

①区で確認された掘立柱建物である。桁行3間、梁行2間の建物で、北側の柱穴列がやや不揃いとなる。大きさは6.1m×3.8mで、面積は23.2㎡となる。柱穴の直径は0.27mから0.62mで、深さは10cm程度しか残っていない。主軸は南北方向に取る。

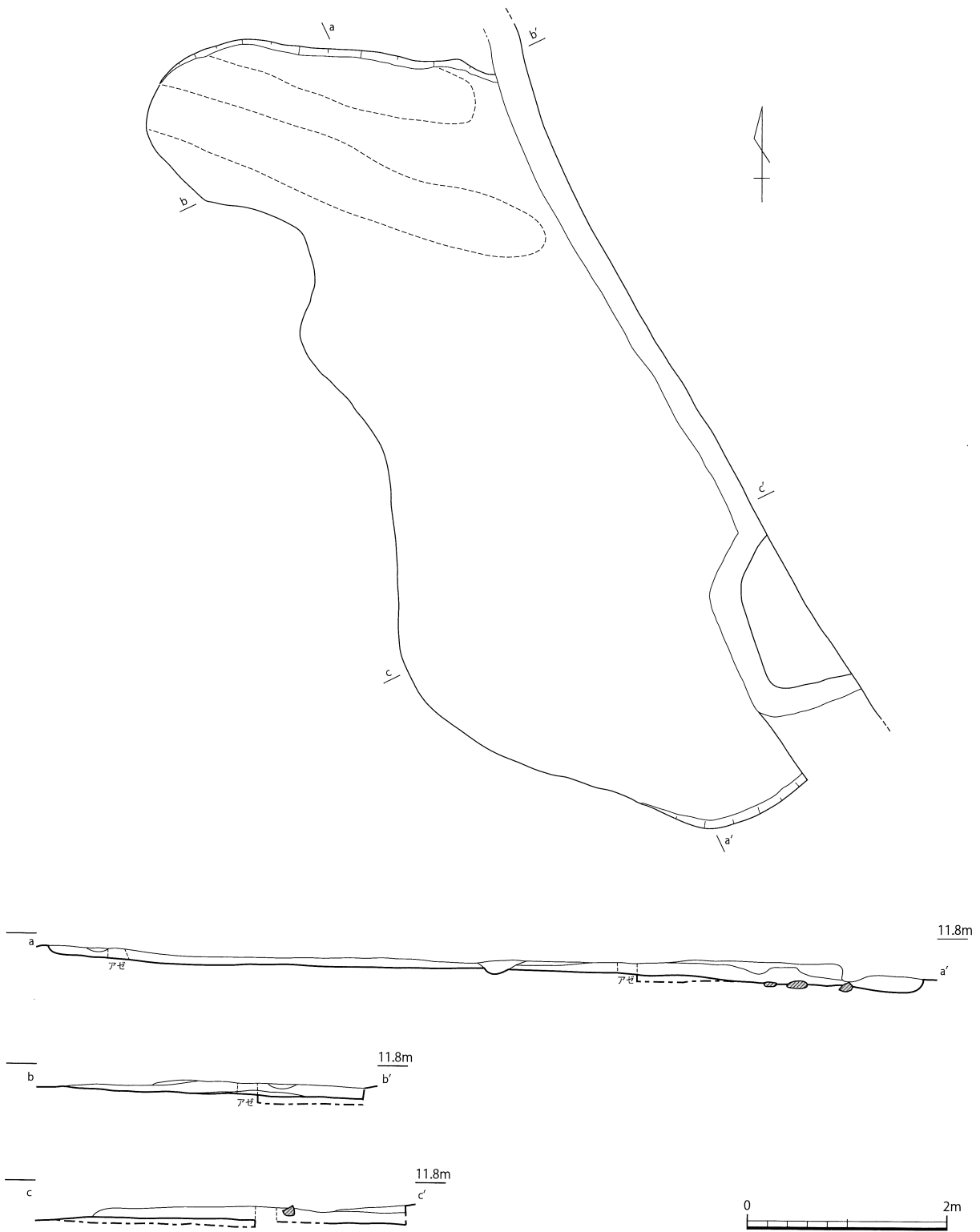
柱穴からの出土遺物はない。

### 掘立柱建物2 (第35図)

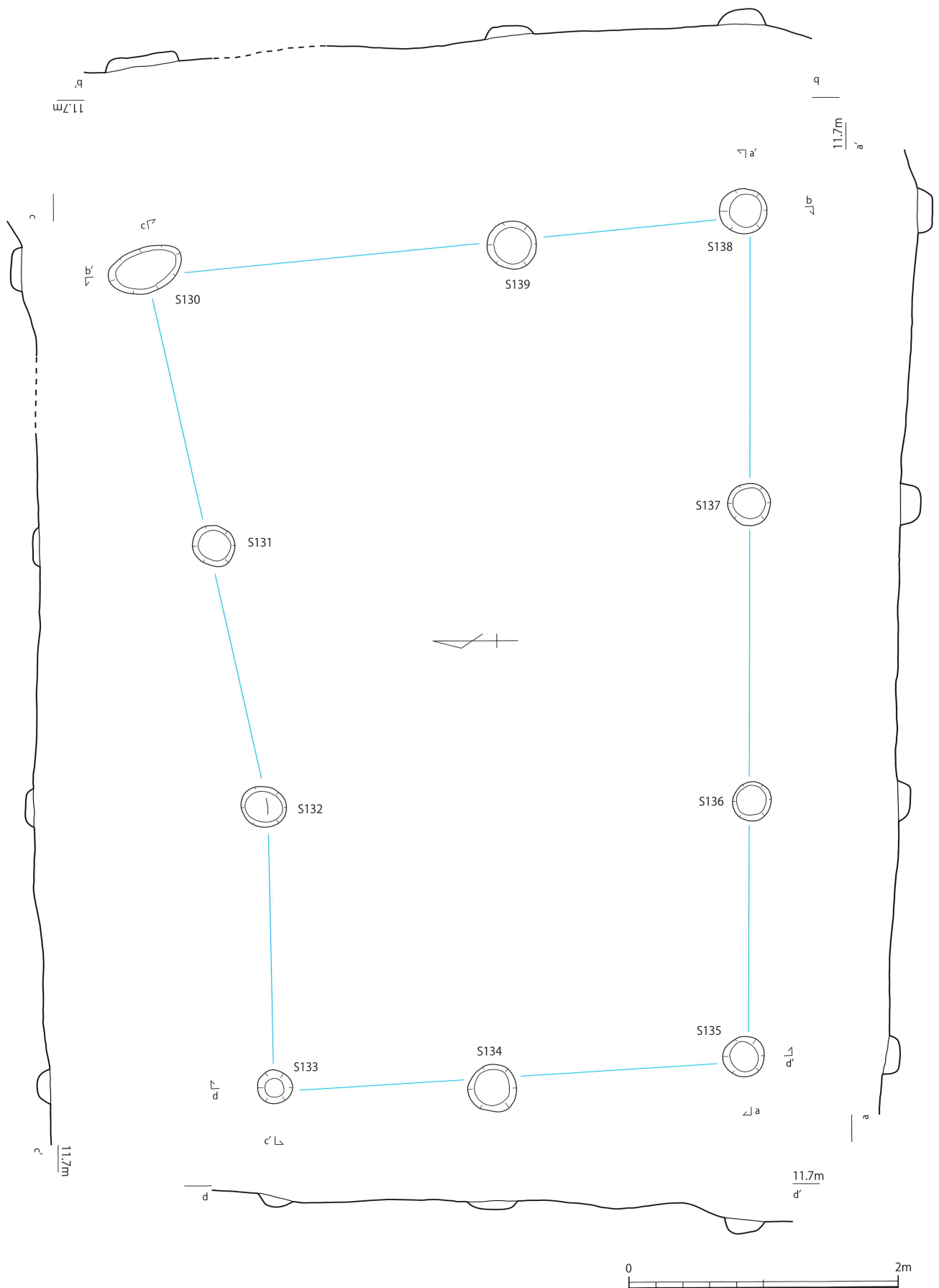
①区で確認された掘立柱建物である。桁行3間、梁行2間の建物で、東側に1間の庇を持つ。身舎部分の大きさは6.1m×4.0mの面積24.4㎡で、庇まで含めると30.9㎡となる。検出された場所は、S151とS450の真上であり、下部遺構との関係が想定される。S151とS450が鍛冶に関わる遺構であるとする、覆屋ということになる。

柱穴からの出土遺物はない。

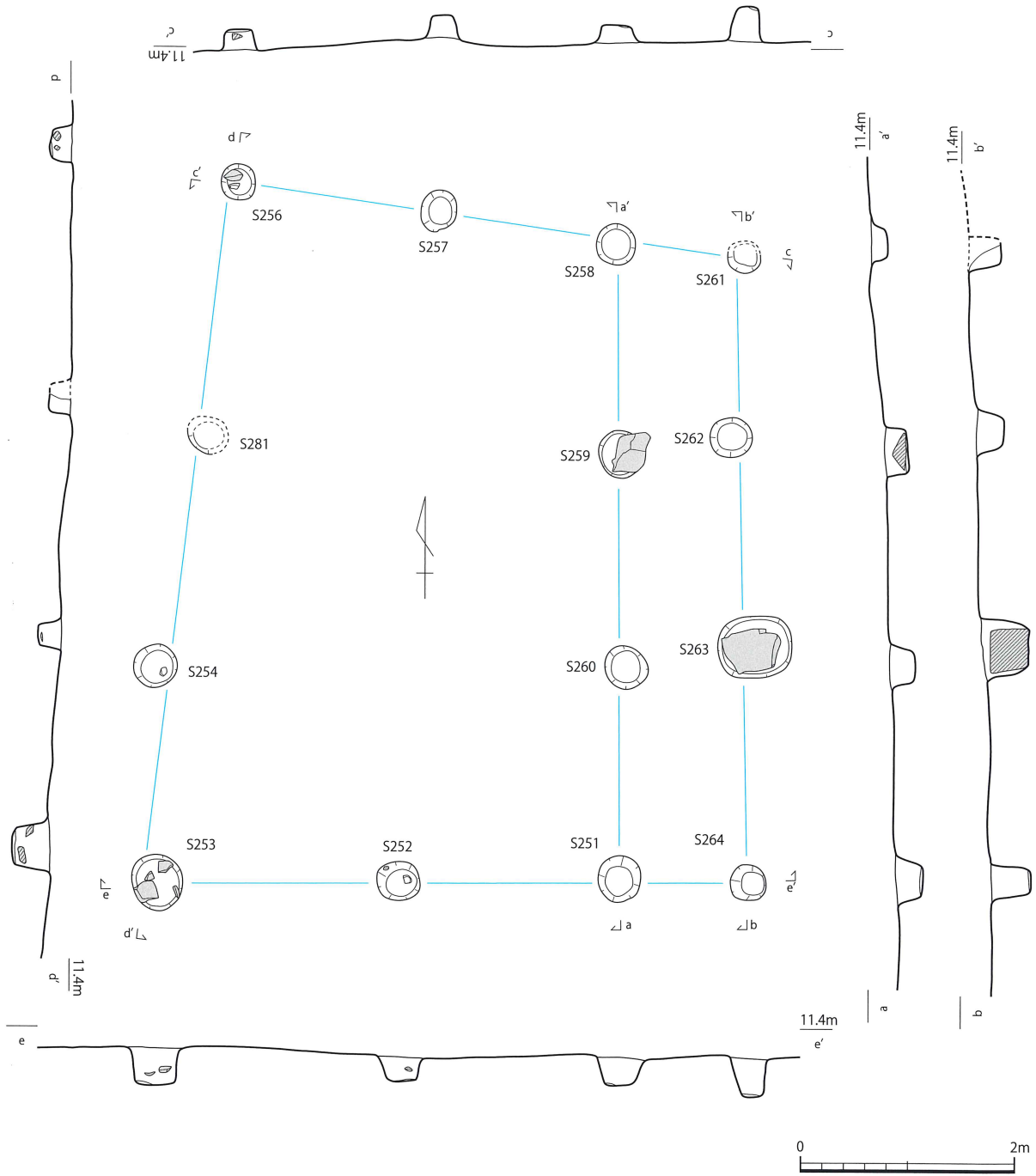




第33図 S449



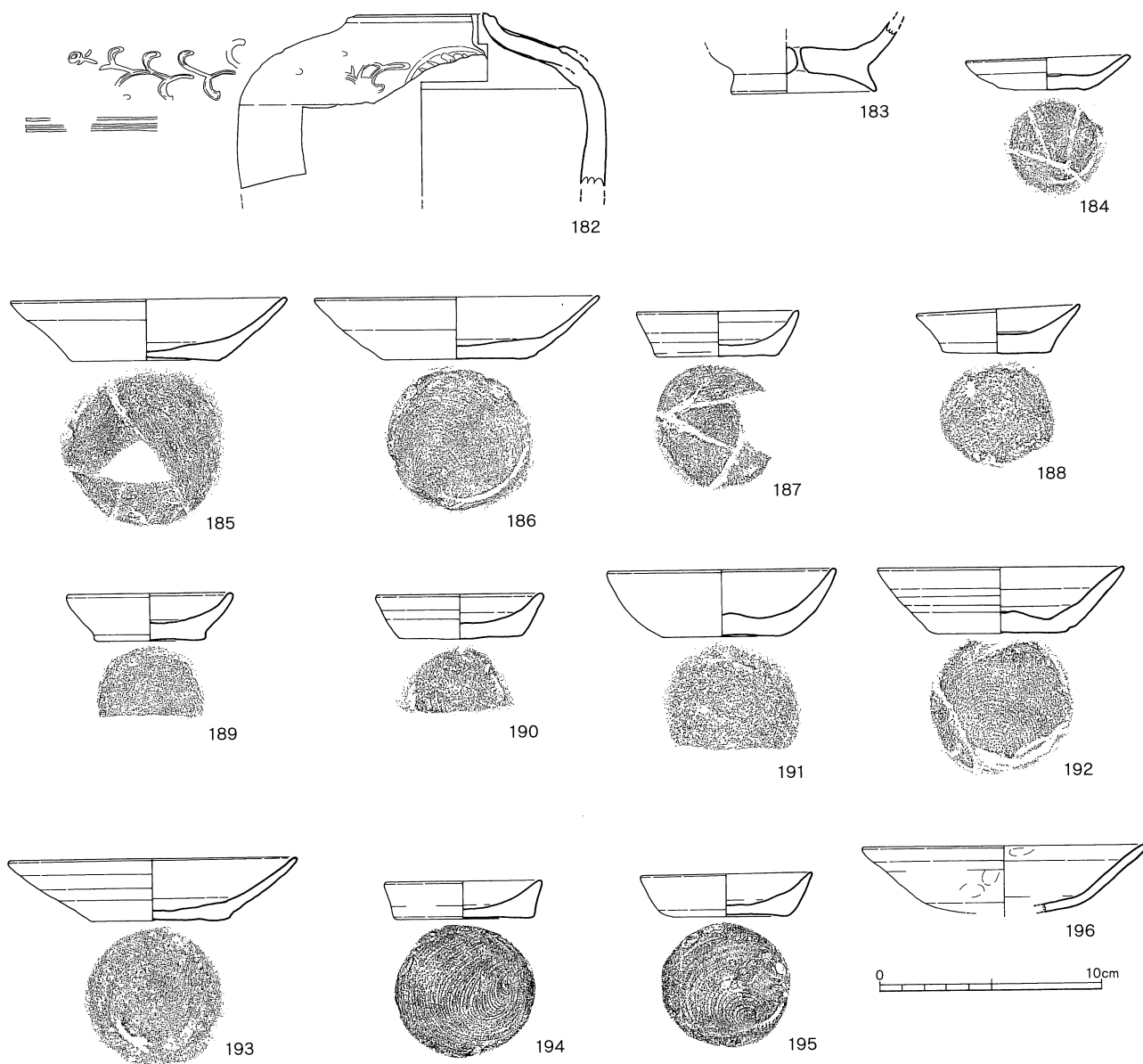
第34図 掘立柱建物1



第35図 掘立柱建物2

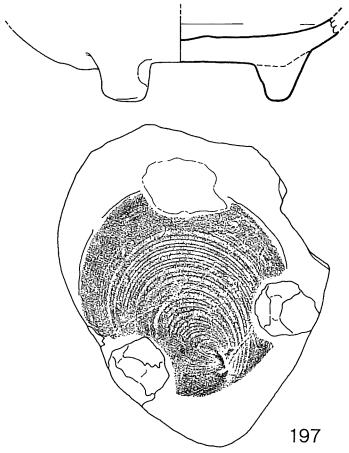
各ピット出土遺物

建物を構成しないピットから遺物が出土しているので、個別主要なものについて説明する。182は瀬戸美濃系の水注で、肩部に印花での草文様を描く。183は底部に穿孔を持つ土師質の燭台で、高台が外側に踏ん張り、上げ底状を呈する。S294出土の172とほぼ同形態であり16世紀前葉と考えられるが、県中部から北部地域の該期の燭台はやや厚手の充実した底部であるので、地域差がある。185と186は体部が直線的に開く浅めの坏で、S294のものと同類である。16世紀前葉か。196は京都系土師器で、薄手で口縁部は強く摘まれない。豊後における京都系土器の第1期のものに該当し、16世紀中頃の年代が与えられている<sup>1</sup>。197は瓦質の香炉で、底部には糸切り痕が残る。198は瓦質の深鉢である。199と203は小皿、200と201は坏である。

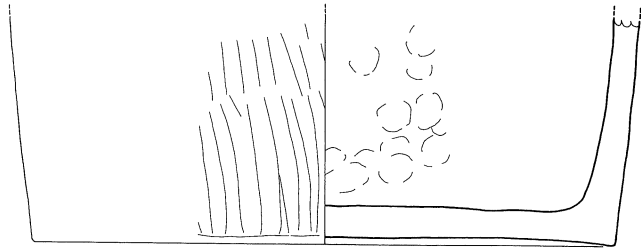


第36図 ピット出土遺物(1)

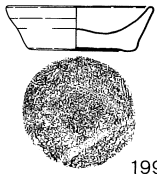
\*1 塩地潤一「大友領国内における京都系土師器の分布とその背景」『博多研究会誌』第6号 博多研究会1988年



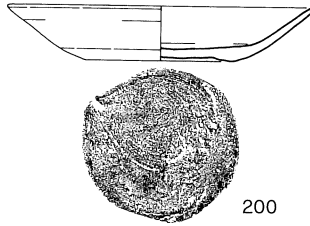
197



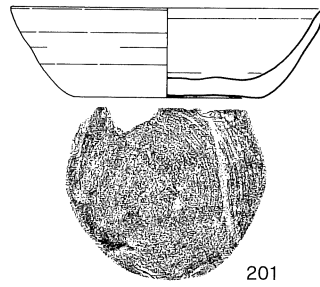
198



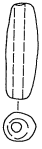
199



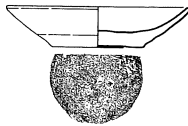
200



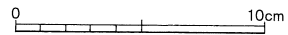
201



202



203

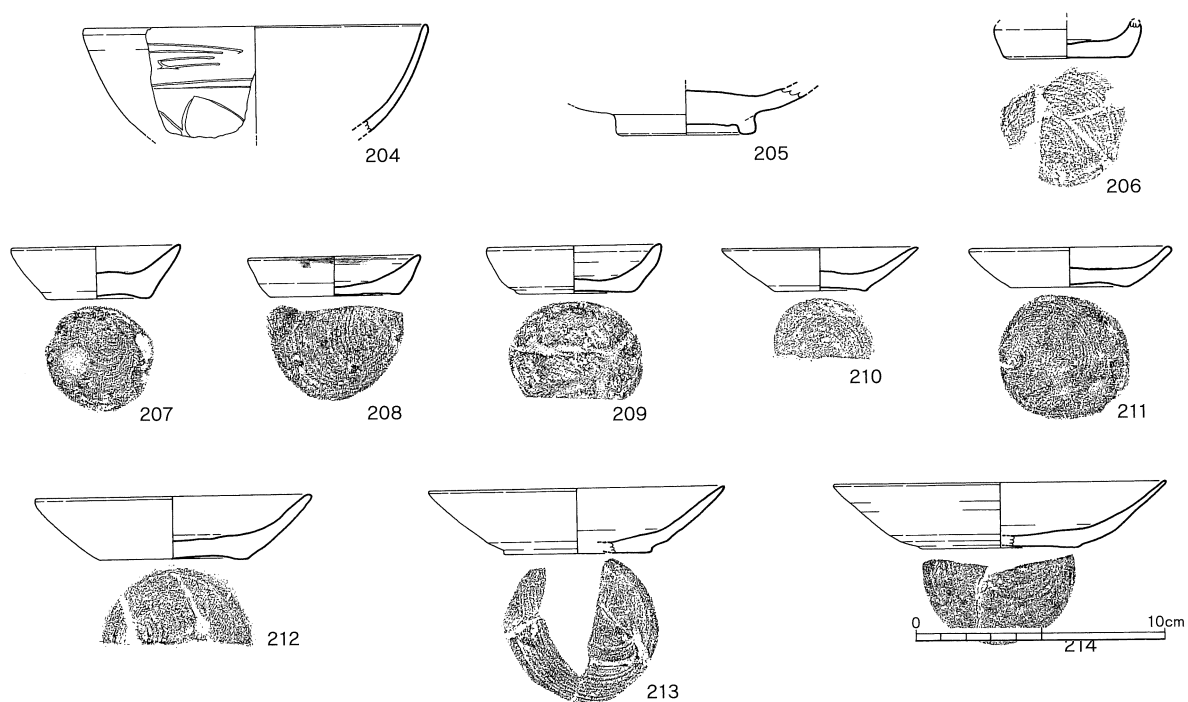


第37図 ピット出土遺物(2)

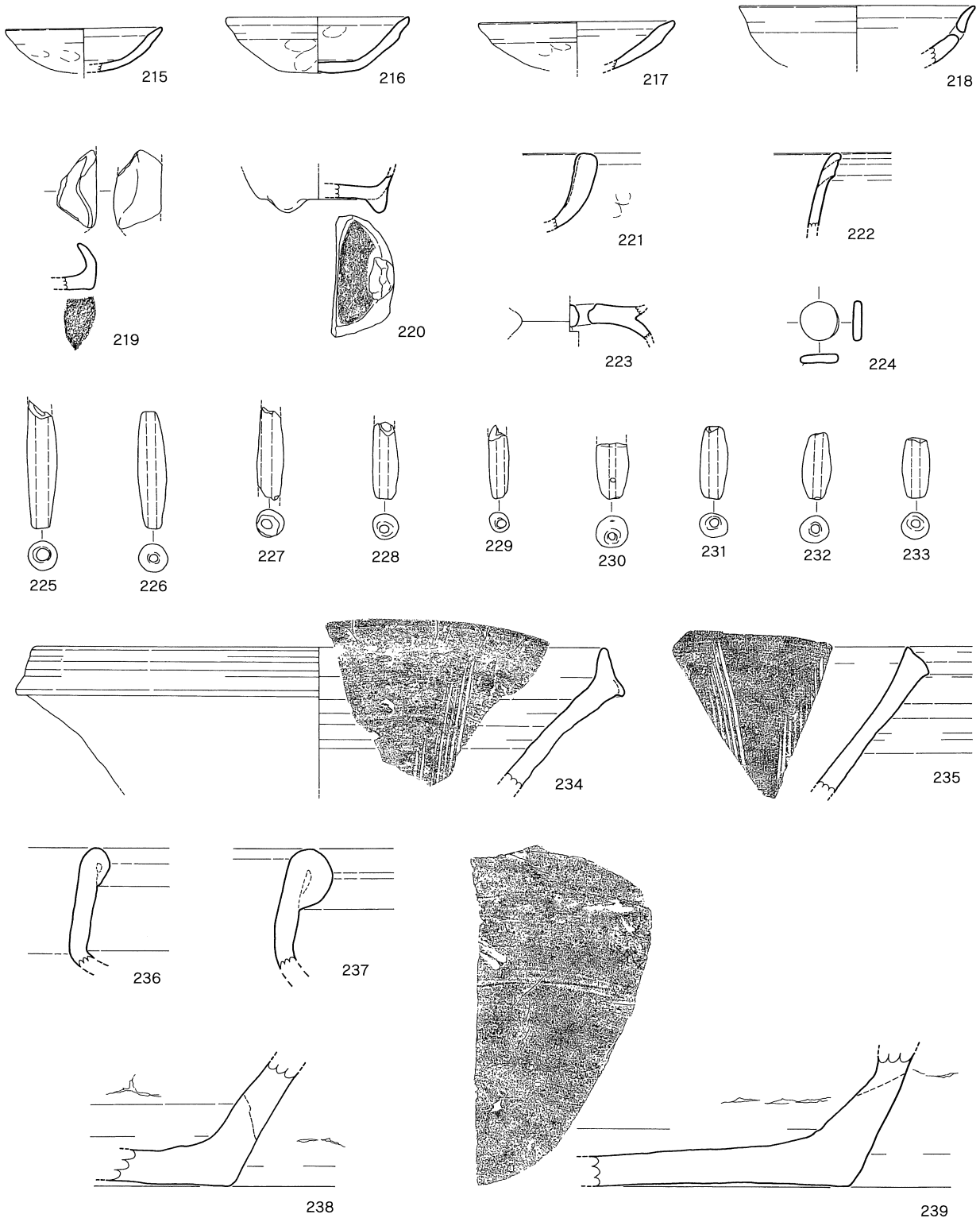
包含層その他出土遺物

204と205は龍泉窯青磁碗で、204の外面上には口縁部下に雷文帯、下半に蓮弁文を線刻する。上田編年のC-II類で、14世紀後半から15世紀初めにかけてのものである。205は無文である。206は瓦質の小皿である。215から218は京都系土器で、196に比べて器壁が厚く、口縁端部を強く摘まむという特徴がある。16世紀後葉の新しいタイプのもので、形状はもとより色調や胎土に至るまで、中世大友府内町跡から出土するものと区別できないので、持ち込まれたものと考えられる。219は耳土器、220は瓦質の香炉である。221は埴塼で、内面に鉾滓が付着する。222は縄文時代晩期の突帯文土器。223は底部に穿孔がある燭台。底部内面が大きく反り、高い高台状を呈すると考えられる。173や183より古く位置づけられる。234から239は備前焼。240から247のうち、245は銅銭（銭種不明）、他は石製品である。246と247は石塔状であるが、種別は不明。241と242は砥石、243と244は縄文時代の石器である。

248と249は表採の資料で、248は肥前系の染付、249は土師器小皿である。

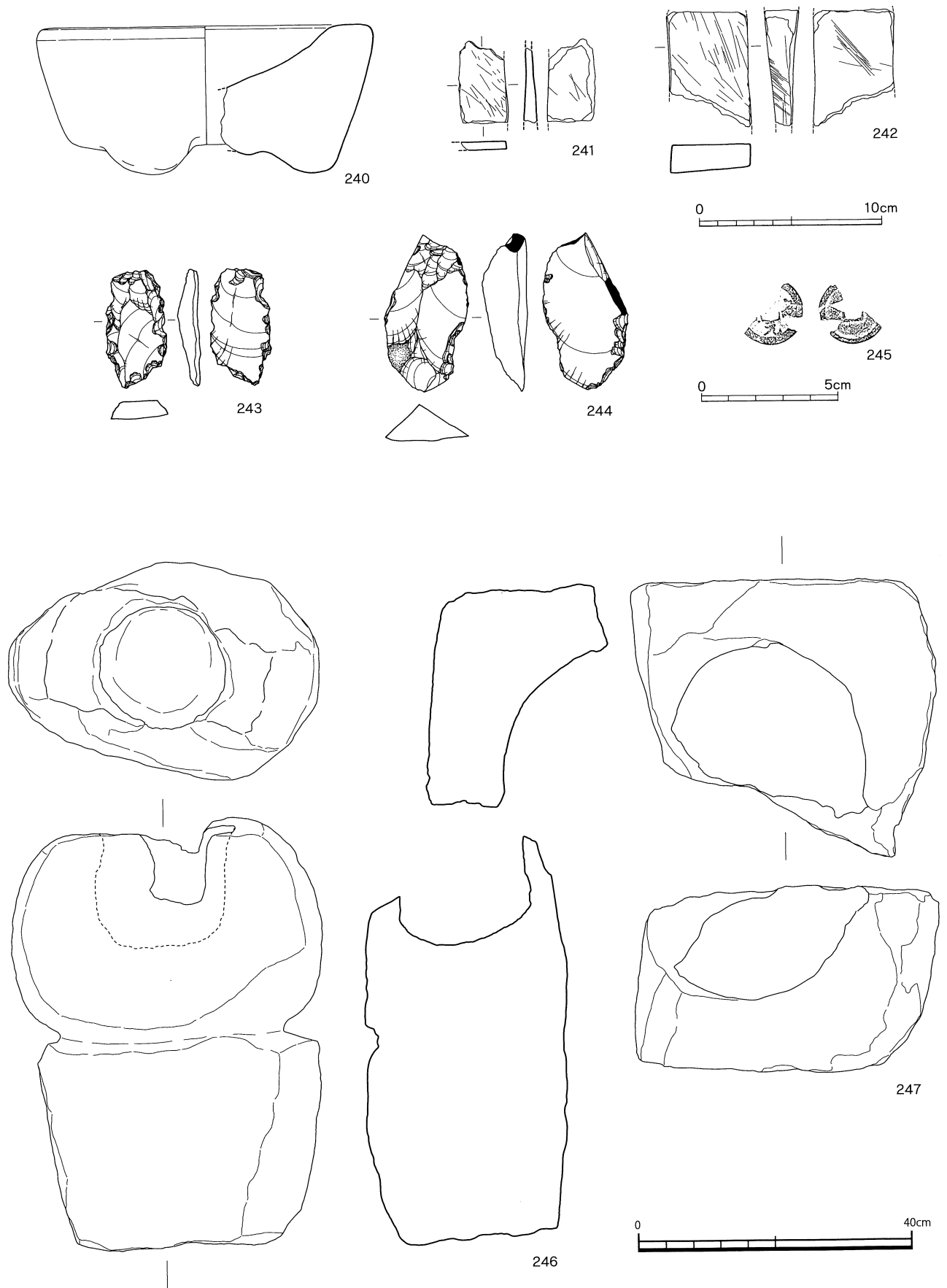


第38図 包含層出土遺物(1)



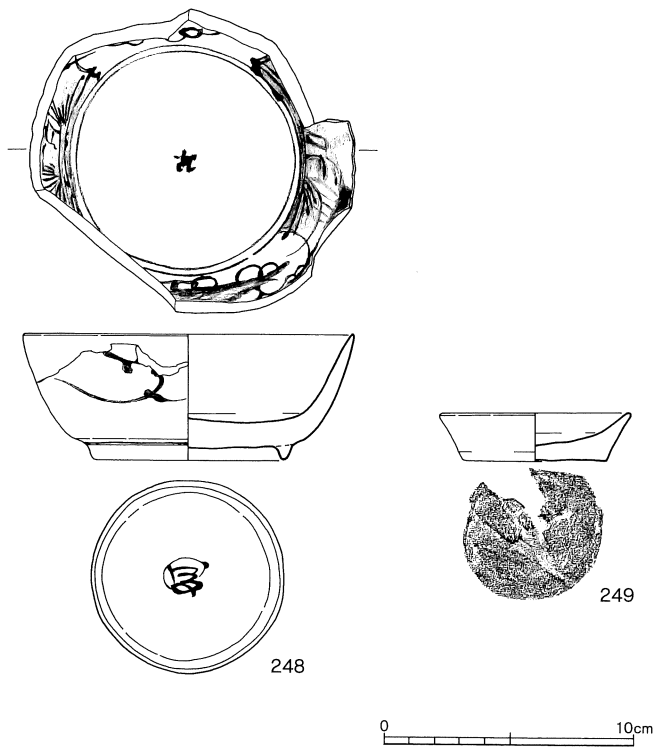
0 10cm

第39圖 包含層出土遺物(2)



第40図 包含層出土遺物(3)





第41図 表採遺物

## 第4節 小結

今回調査を行った掃木礼遺跡天神ノ下地区のある小さな谷間の平坦地は、調査前は家々が建ち並んでいたが、明治21年の旧字図では全く家がなく、畑地が広がっていた。今回の調査区内でも江戸時代の居住に関わる遺物・遺構は検出できていない。このことを積極的に評価するならば、江戸期から少なくとも明治の中期にかけてはこの場所は居住地ではなく、耕作地として維持されてきたと言えるだろう。しかしながら、今回の調査で明らかになったように、この地は中世段階では何らかの施設があり、墓も作られていたことが明らかになった。このことが、隣接する山上に城を構える佐伯氏の動向と深く関わるであろうことは想像に難くないが、ここでは調査対象となった天神ノ下地区の遺跡の動向を再確認するにとどめ、上記の点は第7章総括で改めて触れたい。

さて、今回の調査で確認された遺構は、相互の連関をうかがわせる状況は無く、各遺構とも単発的なあり方であるが、遺構の所在には偏りが見られる。すなわち、①区とした小河川（谷川）の東側に集中しており、逆に小河川の西側である②区や③区では遺構が検出できなかった。②区や③区では地山は砂であり、河川の氾濫原を思わせるが、本来遺構が形成されていなかった可能性が高い。また、④区は遺構は少ないながらも、山際まで確認できるので、④区の平坦面の形成が中世まで遡ることは確実である。

これらのことから、小河川と道路で画された①区から④区の4カ所の面は、それぞれ中世段階から性格の異なる「場」であったと理解される。この谷が掃木礼城への主要登城ルートの一つであった可能性を加味すると、②区と③区、あるいは現在の道の部分に城道が通り、道から西側には「墓地」空間があり、東側には居住に関わる空間があった、と解釈できる。

## 第4章 樽牟礼遺跡掃木地区

### 第1節 調査の概要

遺跡は、天神ノ下地区の南側約100mの地点にあたる。天神ノ下地区同様、小さな谷川が作る小さな平地が広がる谷戸の最奥部であるが、調査区はそのまま山に取り付いた4段の雛壇状に成形された部分にあたる（第43図のように、それぞれの平坦面を仮称する）。平成元年に佐伯市教育委員会により試掘調査され、遺構が確認されていた箇所である。佐伯市の調査報告書によると、この段々を河岸段丘（状）とするが、遺構の在り方からするとこれらは人工的な造成段とすることができよう。山城のように「切岸」によって曲輪を作り出しているように見える。特に遺構の確認できない幅の狭い平坦面（③面）などは、幅3~4m、長さ40mの平坦面の利用というより、上下方向の1.5mの段差に防御的な意味を持たせているように思われる。

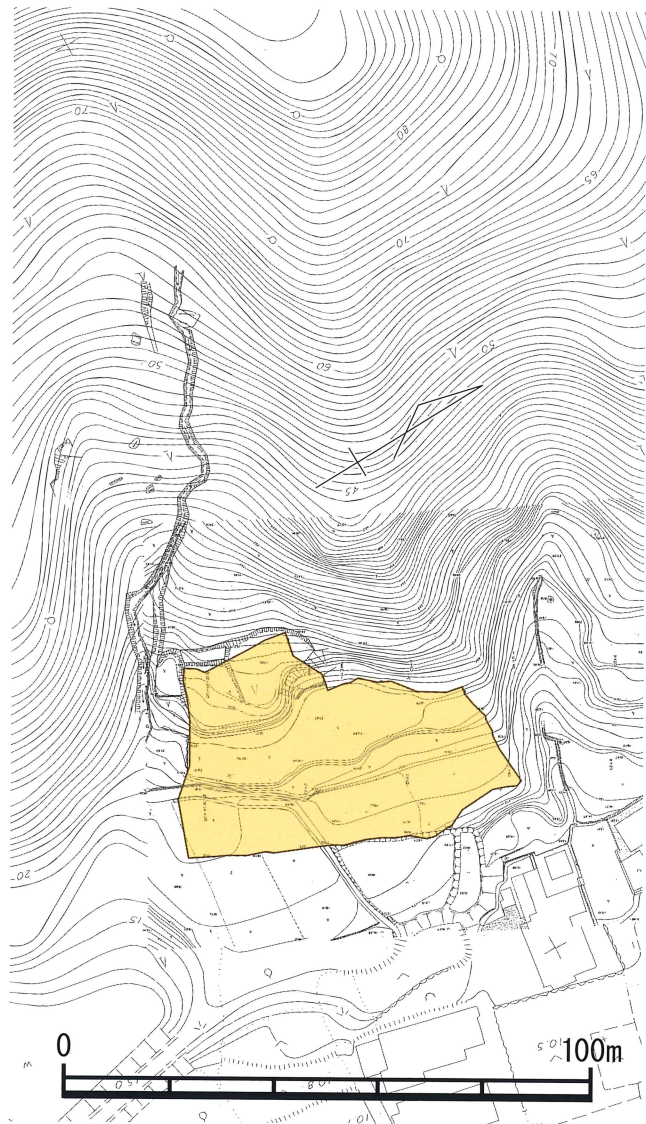
遺構は、最下段の④面の平坦地で溝や柱穴列、掘立柱建物などを確認し、②面で溝を確認した。

なお、小字「掃木（ほうき）」の由来を「伯耆守」とする向きもあるが、小字掃木は大部分山であり、おそらく「箒（ほうき）木（ぎ）（箒草）」に起源するのであろう。実が食用になり、茎と枝が箒になる有用な「箒木」が生えていたことによるものであろう。

### 第2節 基本層序

個別遺構の説明の前に、先に①から④面とした平坦面について述べておきたい。段差を持った①から④面の平坦面は、先にも記したように人工的な造成の結果作られたものであることがわかった。第44図が調査区を東西に切った断面図である。現表土層もすべて残った土層である。第15層が地山であるが、図からわかるように地山は東側に向かって落ちているが、その上を覆う第4層から第9層や第14層といった整地層は上面を水平に保っており、その結果、東側ほど整地層が厚くなっている。つまり、ある程度の緩斜面であった山の斜面を削った土を、そのまま東側の埋め土に利用し、人工的な平坦地を作り出しているのである。

その結果、中世城郭の切岸に似た人工的な崖面ができあがった。これが、背後の山上にある樽牟礼城との関係で出現したものなのかどうか問題となるだろう。この点については、平坦面の利用のされ方を通して考える必要があるので、第7章総括で改めて触れたい。



第42図 遺跡周辺の地形

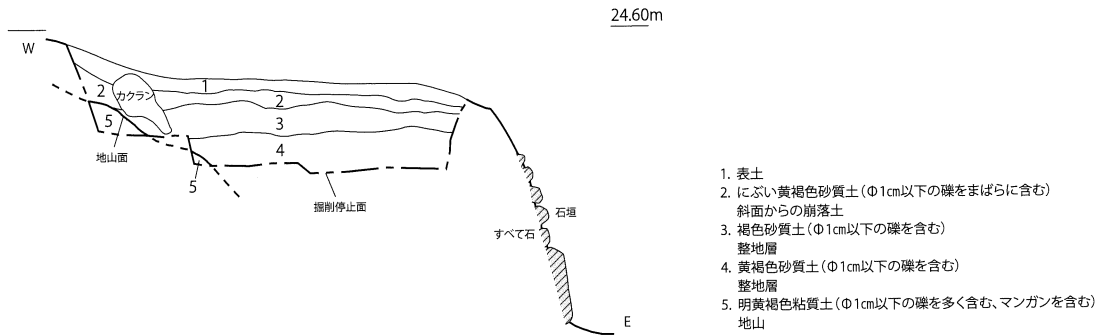


第43図 遺構配置図

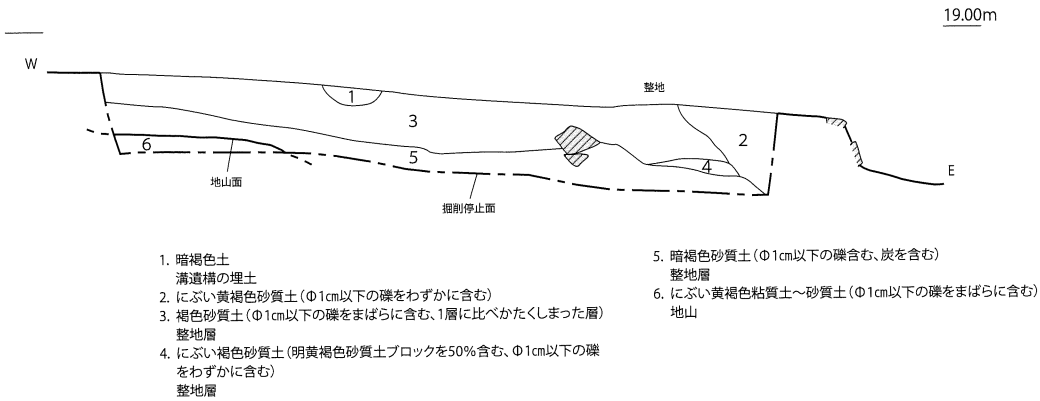




### 第2トレンチ



### 第3トレンチ



### 第4トレンチ



第45図 土層断面図(2)

### 第3節 遺構と遺物

#### S002・S003 (第46図)

②面-南と④面-南の崖面下に沿うようにして南北方向に伸びる溝である。溝は④面-南の北端で終息するが、④面-北のS056に接続する可能性もある。幅はS002が0.15~0.7m、S003が0.5~1.6m、深さは共に0.12mで、検出した総延長は22mである。S002とS003は切り合いがあり、S002が新しい。また、S076やS063を切っていることから、④面-南では最終段階の遺構と考えられる。排水溝であろう。

出土遺物は第47図1である。土師器坏で、底部は糸切離し。体部は直線的に外へ開く。底部は厚く、中央が盛り上がる。S002とS003ではまた、近世の染付片が散見される。



1. 灰黄褐 (10YR5/2) 色粘質土  
( $\Phi$ 3 cm以下のレキをわずかに含む、マンガン沈着あり)  
S063 埋土
2. にぶい黄褐 (10YR5/3) 色粘質土  
( $\Phi$ 1 cm以下のレキをわずかに含む、砂がまじる)  
S063 埋土
3. にぶい黄褐 (10YR5/3) 色砂質土  
( $\Phi$ 1 cm以下のレキを少し含む、1・2層よりさらさらしている)  
S003 埋土
4. 暗灰黄 (2.5Y5/2) 色粘質土  
( $\Phi$ 1 cm以下のレキをわずかに含む)  
S002 埋土
5. 褐灰 (10YR4/1)~灰黄褐 (10YR4/2) 色粘質土  
( $\Phi$ 1 cm以下のレキをわずかに含む、根により黒っぽい部分が多い)  
S002 埋土

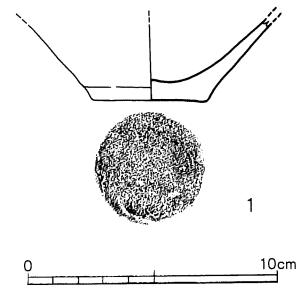
1. 褐灰 (10YR4/1) 色粘質土 (黄褐色ブロックを少量含む)  
S002 埋土
2. 褐 (10YR4/4) 色粘質土 (黄褐色ブロックとレキを少量含む)  
S003 埋土
3. にぶい黄橙 (10YR6/4) 色粘質土  
S076 埋土
4. にぶい黄褐 (10YR5/4) 色粘質土 (少量の角レキ含む)  
S075 上層
5. 黄褐 (10YR5/6) 色粘質土 (灰色の粘土が混合した土)  
S075 下層

第46図 S002、S003

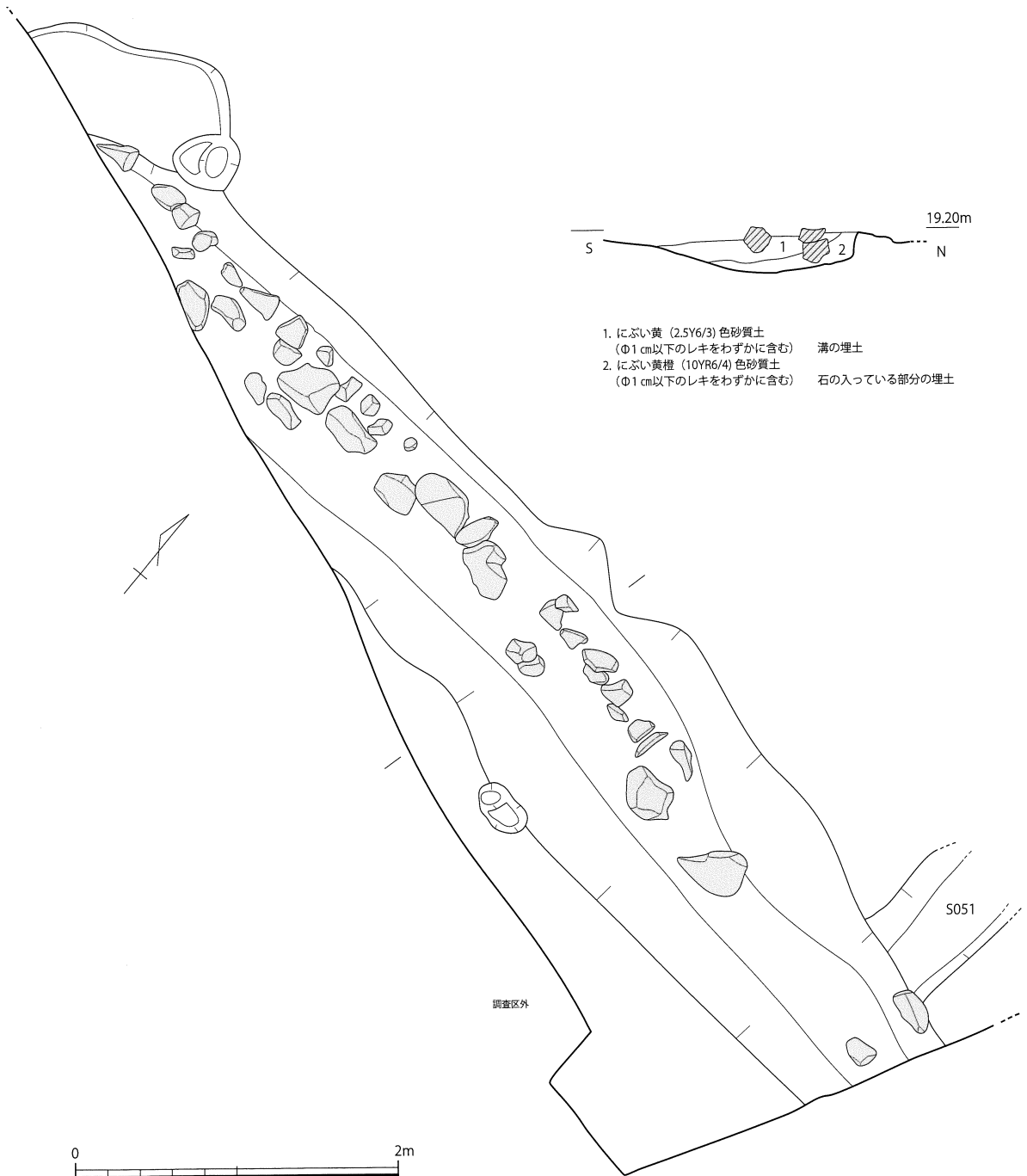
S004 (第48図)

④面-南の最も南側で確認された溝である。東西方向に伸びるが、両端は調査区外となり総延長は不明である。幅1~1.5m、深さは0.12mである。S009とほぼ同じ軸線のため、何らかの施設を囲む区画溝の可能性はある。

土層を見ると、第2層まで一度埋め戻され、北側に石列を持つ幅の狭い溝に作り替えられていることがわかる。



第47図 S003出土遺物

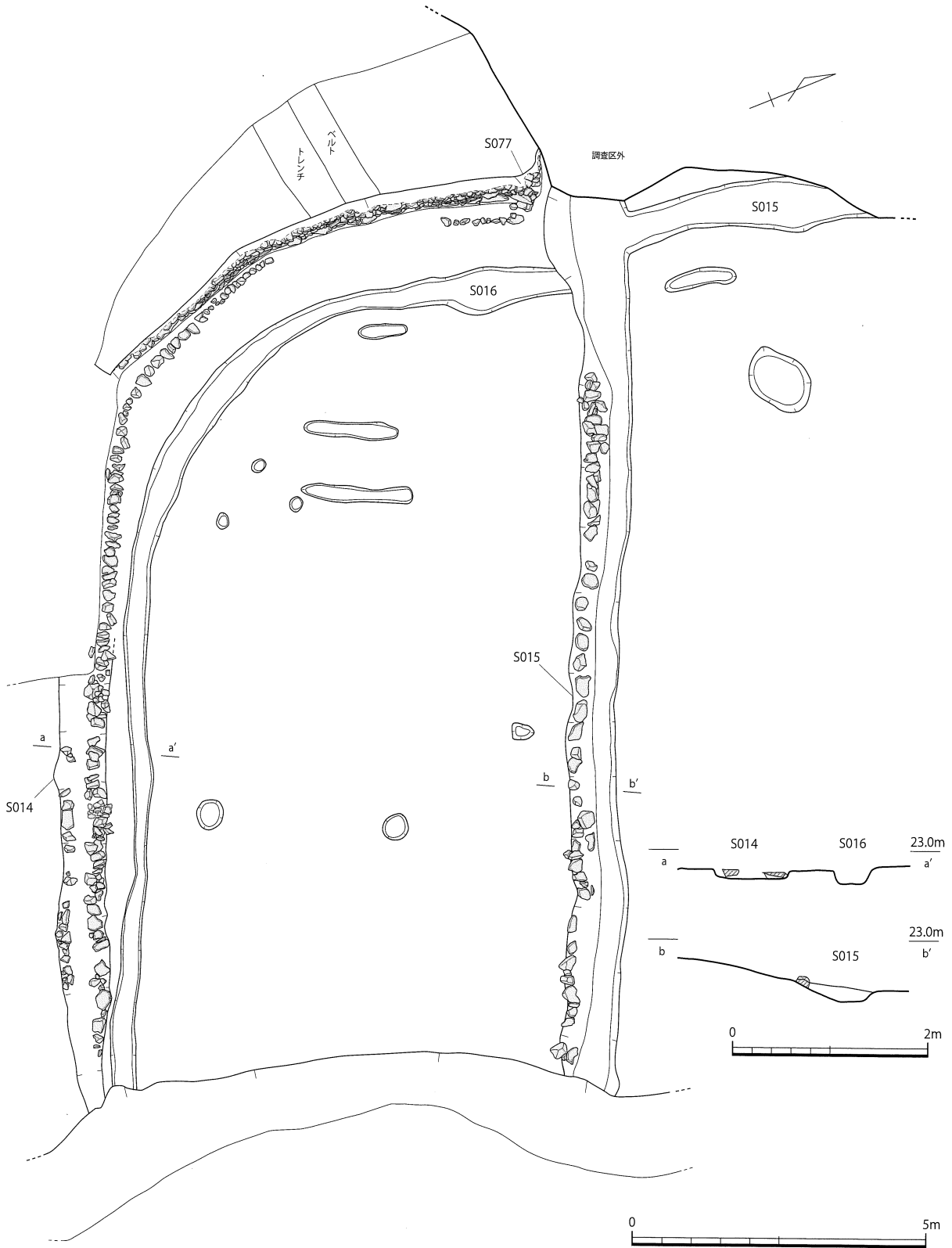


第48図 S004



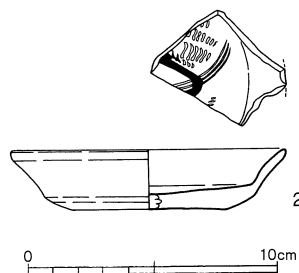
S016 (第49図)

②面-中の西側から南側にかけて、区画に沿うように湾曲してのびる溝である。外側には石積みを伴ったS014が伸びる。



第49図 S016

出土遺物は第50図2である。S015出土の同安窯系の青磁皿で、見込みに楡描文と片切彫が施されており横田・森田分類の皿Ⅰ-1-b類に相当する。13世紀代。



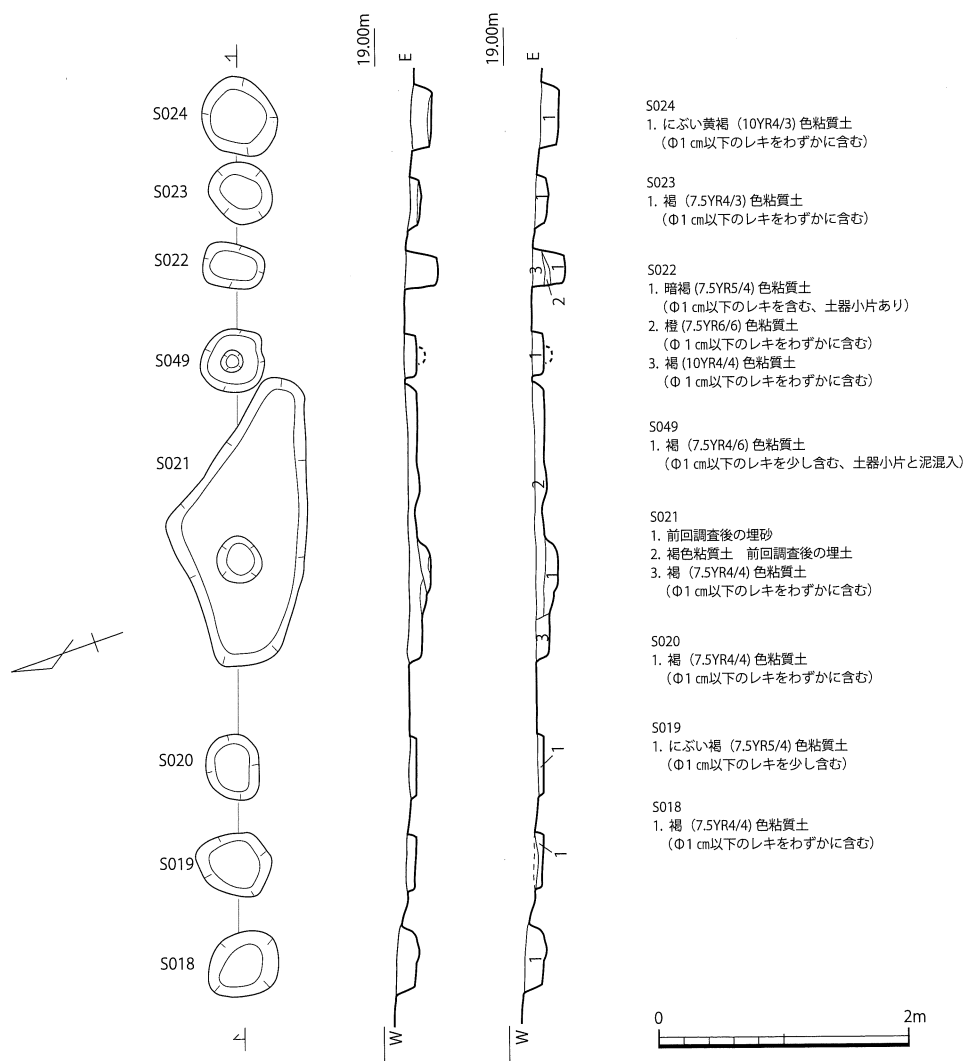
第50図 S015出土遺物

S018 (第51図)

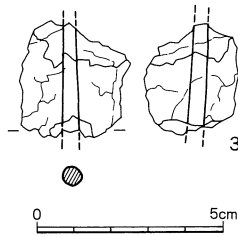
④面-中の③面崖際で確認された南北に並ぶ柱穴列である。柱穴は直径0.6mほどで、深さは0.5~0.25mと浅い。本来浅かったものか、後に削平を受けたものかは判断できなかった。埋土は、掘り込み面の整地層と比較して暗い褐色であったので、容易に判別できた。

掘立柱建物であるS025の区画である可能性が高い。

出土遺物は第52図3の鉄製釘で、錆出のため明確ではないが断面方形を呈す。



第51図 S018



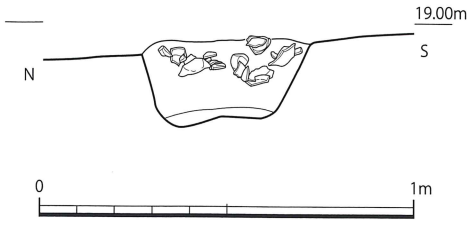
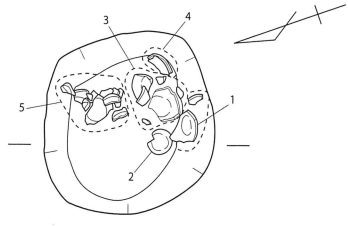
第52図 S018出土遺物

S025 (第53図)

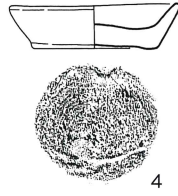
④面－中のほぼ中央で確認された掘立柱建物である。主軸は、④面－中の平坦面に相似するように略南北方向となる。柱穴は直径0.5～0.9mで、建物は2間×3間となる。規模は梁行2.5m、桁行5.8mで、身舎の面積は14.5㎡となる。側柱は柱の抜き取り痕が確認できた。また、南西角の柱穴（S028）からは、土器がまとまって出土している。

柱穴からの出土遺物はS028出土の第54図4～12と、S032出土の第54図13～19である。4は土師器小皿である。体部は垂直気味に立ち上がり、口縁端部はまるくなる。底部は糸切離し。5～7、9～12は土師器坏で、底部は糸切離し。体部はおおむね直線的に外へ開いており、口縁端部は外側へ舌状にのびる。S003出土の土師器坏と似る。8は土師器皿である。体部下半がやや内湾し、外へ開く。13は土師器小皿、16・19は土師器皿である。体部は直線的に外へ開き、口縁端部はまるくなる。底部は糸切離し。14は土師器坏。体部は直線的に外に開き、底部は糸切離し。15は土師器坏の口縁部片。体部はゆるく外湾する。17・18は土師器坏。体部は直線的に外へ開く。18の底部は糸切離し。

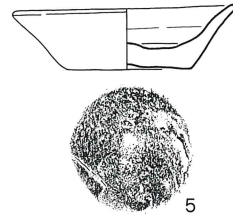




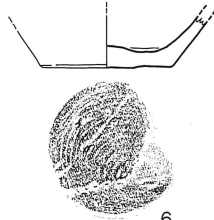
S028遺物出土状況



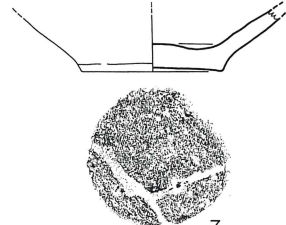
4



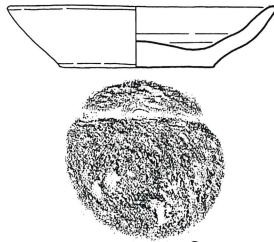
5



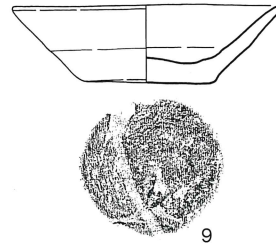
6



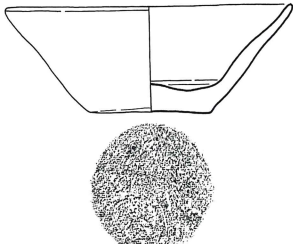
7



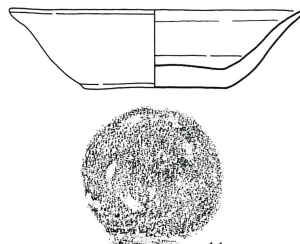
8



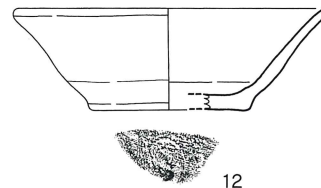
9



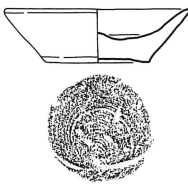
10



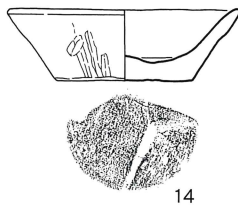
11



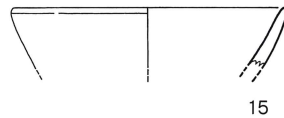
12



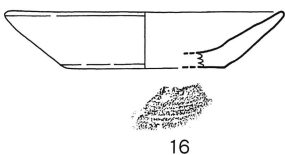
13



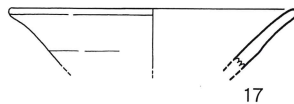
14



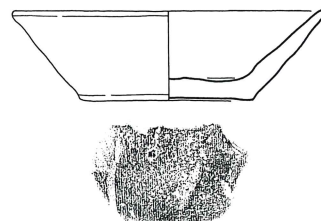
15



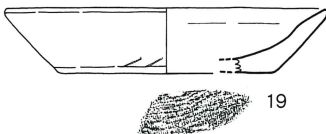
16



17



18



19



第54図 S025出土遺物



S050 (第55図)

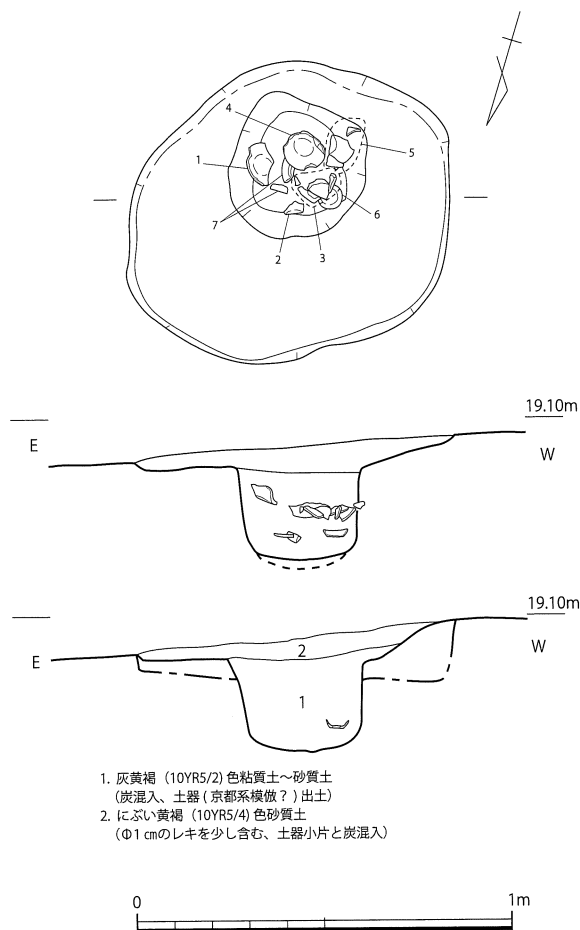
④面-中で検出されたピットである。掘立柱建物S028のすぐ南に当たる。内部には土師器がまとめて廃棄されていた。直径0.35mで、深さは0.34m。

出土遺物は第56図20～25である。20・21は土師器小皿。20の体部は垂直気味に立ち上がり、21は直線的に外へ開く。口縁端部は舌状にのび、底部は糸切離し。22～25は土師器坏で、底部は糸切離し。体部はそれぞれ直線的に外へ開くが、24・25については体部半ばから器壁が薄くなり口縁部へ続く。口縁端部はいずれも舌状にのびる。

S051、S052 (第57図)

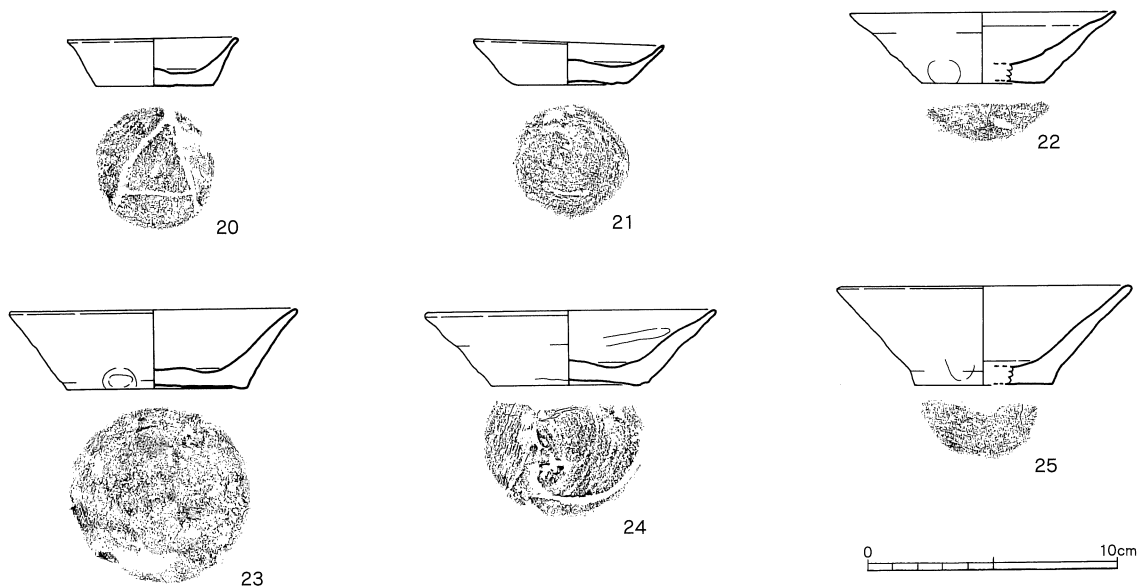
S051は④面-南で確認された南北方向に伸びる溝である。S052を切っている。幅は0.5～1.2mで深さは10cmと浅かった。

S052は④面-南で確認された南北方向に伸びる溝である。幅は0.4～0.8mで深さは10cmと浅かった。

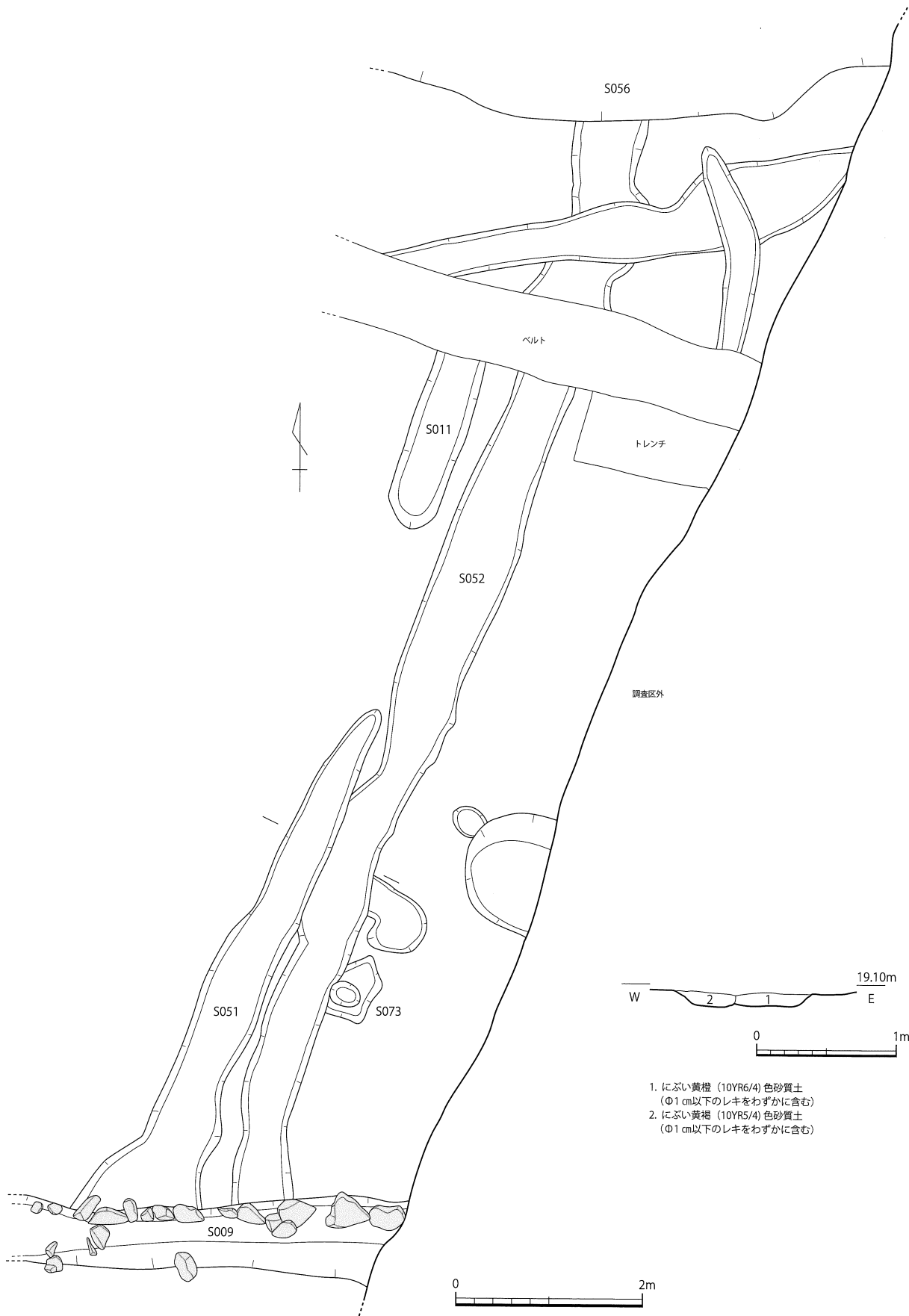


- 1. 灰黄褐 (10YR5/2) 色粘質土～砂質土  
(炭混入、土器(京都系模倣?)出土)
- 2. にぶい黄褐 (10YR5/4) 色砂質土  
(Φ1 cmのレキを少し含む、土器小片と炭混入)

第55図 S050



第56図 S050出土遺物



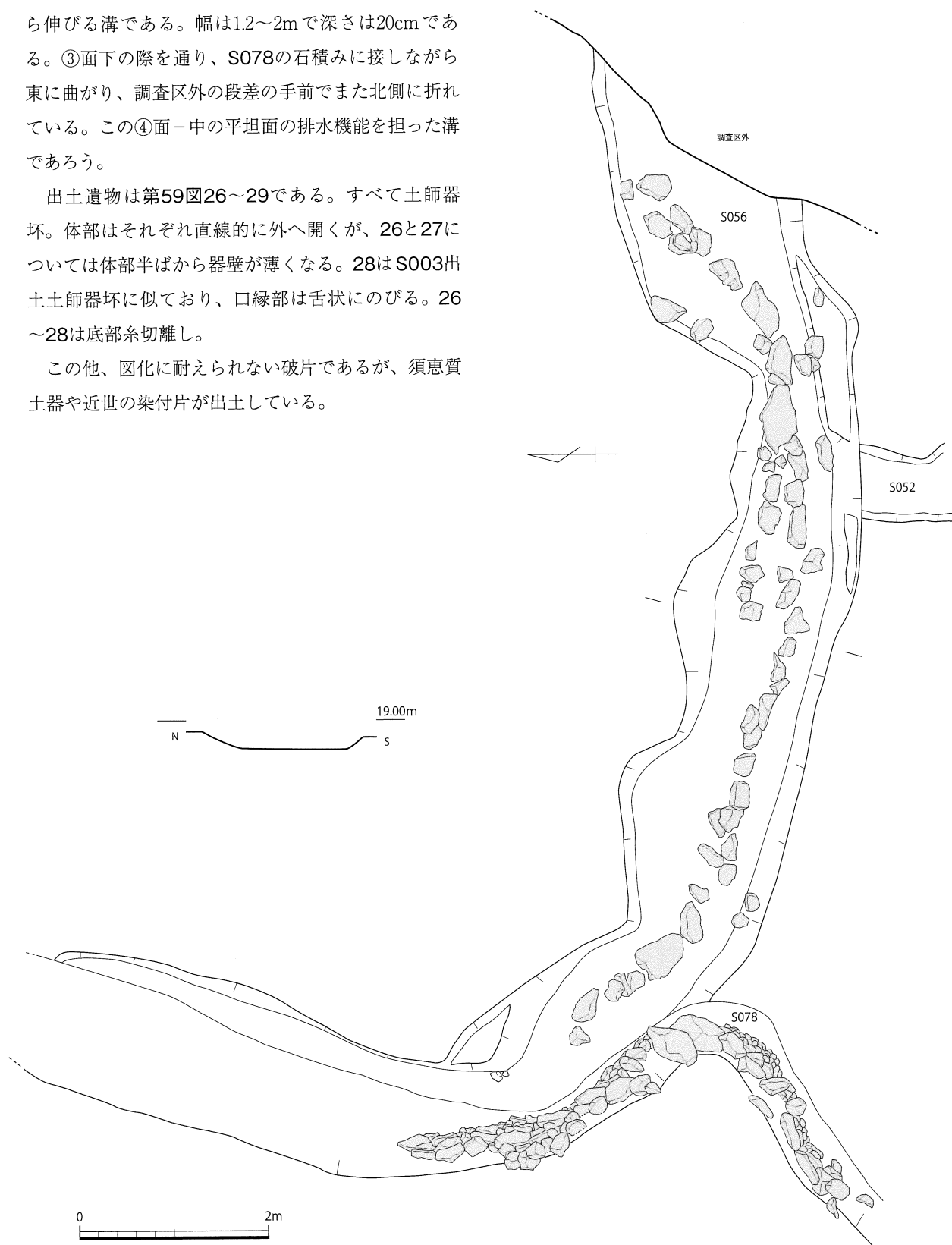
第57図 S051

S056 (第58図)

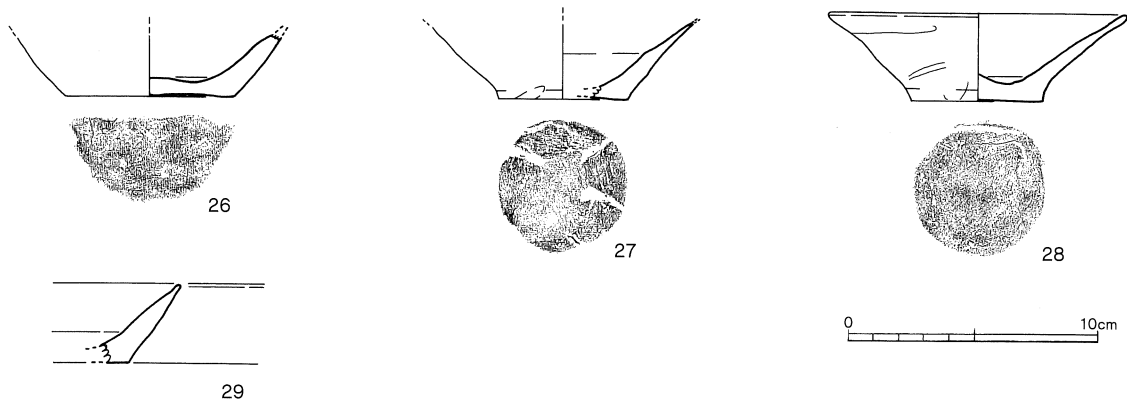
④面-中の南側で、区画に沿うように湾曲しながら伸びる溝である。幅は1.2~2mで深さは20cmである。③面下の際を通り、S078の石積みに接しながら東に曲がり、調査区外の段差の手前でまた北側に折れている。この④面-中の平坦面の排水機能を担った溝であろう。

出土遺物は第59図26~29である。すべて土師器坏。体部はそれぞれ直線的に外へ開くが、26と27については体部半ばから器壁が薄くなる。28はS003出土土師器坏に似ており、口縁部は舌状にのびる。26~28は底部糸切離し。

この他、図化に耐えられない破片であるが、須恵質土器や近世の染付片が出土している。



第58図 S056

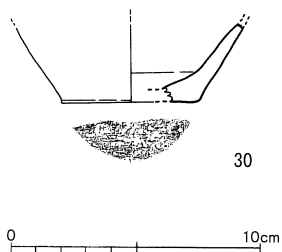


第59図 S056出土遺物

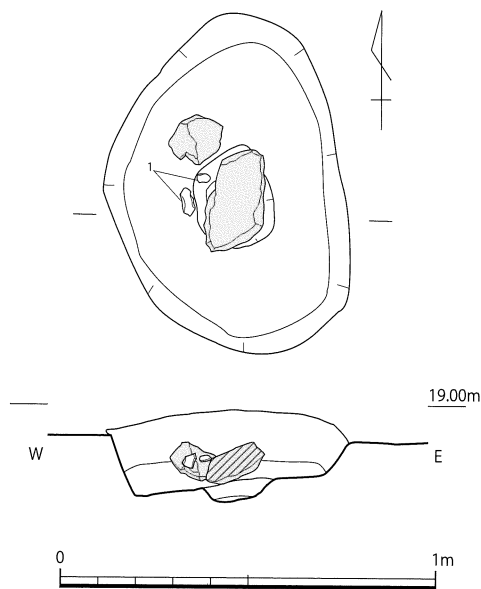
S071 (第60図)

④面-中の南端で確認された土坑である。南北0.87m、東西0.65mで、深さは0.2m。床面から礫とともに土師器が出土している。

出土遺物は第61図30である。土師器坏で、底部は糸切離し、体部は直線的に外へ開く。



第61図 S071出土遺物



第60図 S071

S100 (第62図)

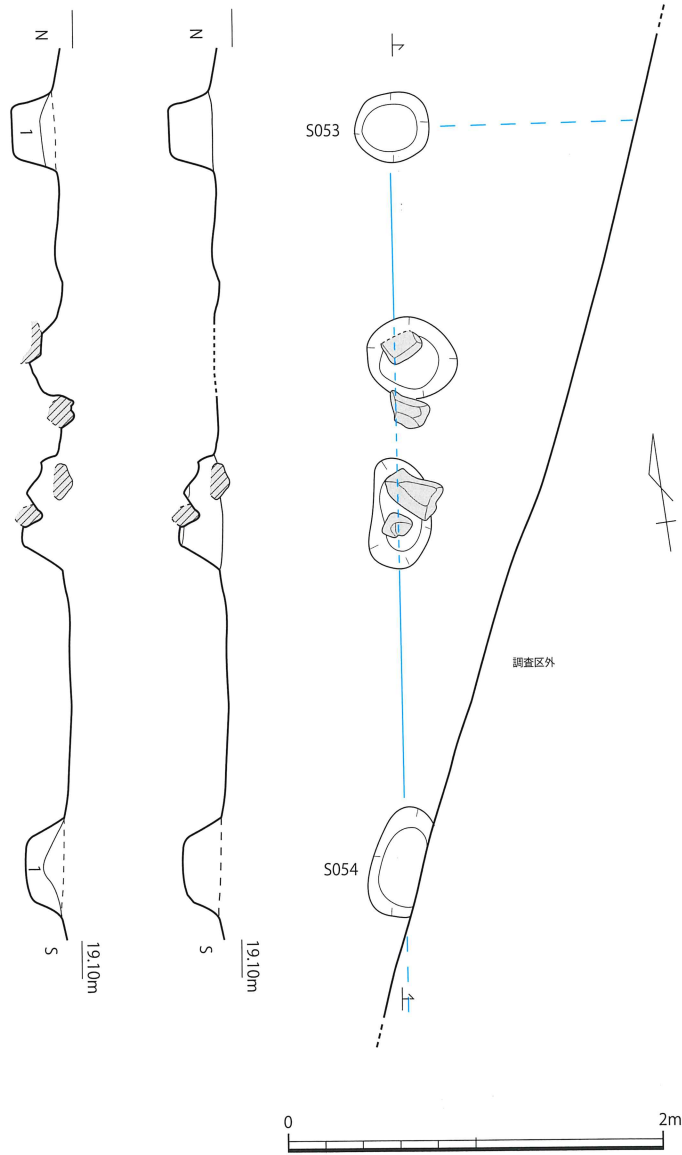
④面-南の南東角部で確認された掘立柱建物である。ただし、南側と東側は調査区外に伸びているため、正確な大きさは不明である。確認できたのは、梁行2間分である。しかし、柱穴はしっかりしており、建物となることは間違いのない。溝S004より古い。

S101 (第63図)

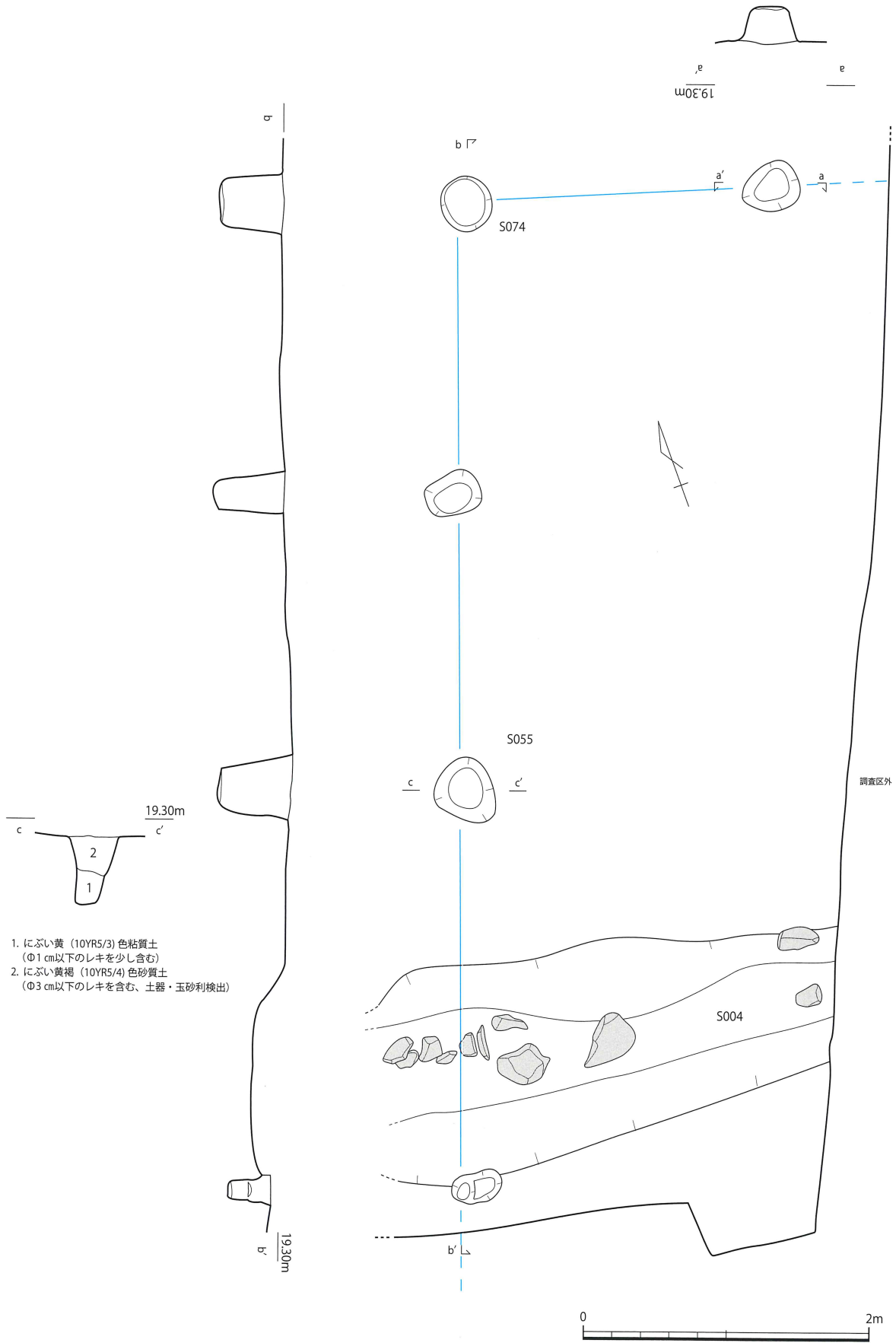
④面-南の南東角部で確認された掘立柱建物で、S100とやや軸を違えて重なるように出土している。ただし、南側と東側は調査区外に伸びているため、正確な大きさは不明である。確認できたのは、梁行1間分と桁行3間分である。しかし、柱穴はしっかりしており、建物となることは間違いのない。

1. 褐 (10YR4/4) 色砂質土  
 (Φ1 cm以下のレキを少し含む、砂が含まれる、  
 黄褐色ブロック混じる)

1. にぶい黄褐 (10YR5/4) 色粘質土  
 (Φ1 cm以下のレキを少し含む)



第62図 S100

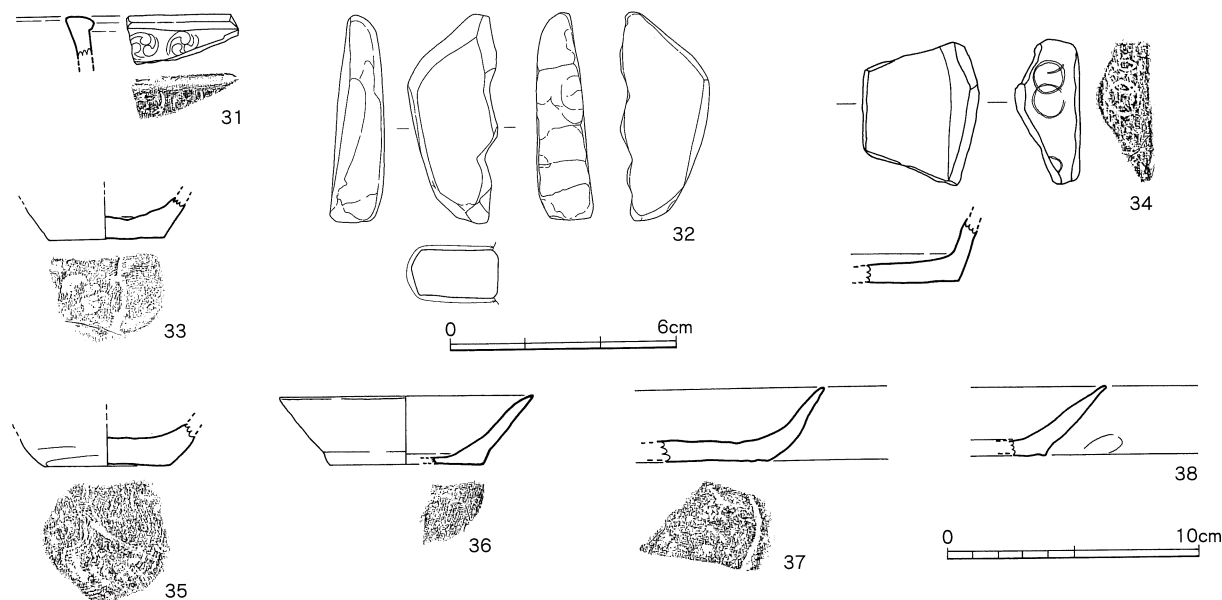


1. にぶい黄 (10YR5/3) 色粘質土  
(Φ1 cm以下のレキを少し含む)
2. にぶい黄褐 (10YR5/4) 色砂質土  
(Φ3 cm以下のレキを含む、土器・玉砂利検出)

第63図 S101

### その他の遺構出土遺物

出土遺物は第64図31～38である。31は、調査区④面最南西部の溝状遺構S005で出土した瓦質土器鉢の口縁部片である。やや内湾しており、突帯となる口縁端部外面の下位に三巴文が型押しによって施される。32は、④面南東部のピットS008で出土した砥石である。石材は不明。上・下・左側面に擦痕が観察される。33は、④面西中央部のピットS058から出土した土師器坏である。底部は糸切離し、体部は残存部が少ないため明確でないが、直線的で外方向を指向している。34は、④面南西部でS003に切られるピットS063で出土した瓦質土器火鉢の体部片である。磨滅が著しいため判然としないが、体部下半に同心円文が型押しによって施される。底部に脚の剥離痕跡が確認できる。35・36は、④面西中央部のピットS070から出土した土師器坏で、底部には糸切離し。35の体部は残存部が少ないため明確でないが、やや外湾する。36の体部は直線的に外へ開き、口縁端部は舌状にのびる。底部は薄い。37・38は、④面南東部のピットS073から出土した土師器坏で、底部は糸切離し。37は体部下半が外湾し、口縁端部は舌状にのびる。38の体部は直線的に外へ開き、下半には指圧痕が観察できる。口縁端部は舌状にのびる。



第64図 その他の遺構出土遺物

### 包含層出土遺物

出土遺物は第65図39～第68図89である。

39は龍泉窯系青磁皿である。体部片で、上部がややすぼまり外側を指向していることから、端反皿の可能性はある。内面には文様が、外面には幅の広い蓮弁文が施される。40～46は龍泉窯系青磁碗である。41・42の内面には文様が描かれる。43は見込みに界線が描かれる。45の外面には細描き蓮弁文が、46の外面には蓮弁文が施される。47は青花端反り皿である。小野分類B群に相当する。48は青花碗である。小野分類E群に相当する。49は肥前の白磁火容れである。

50は備前焼甕の口縁部である。直線的に外傾しており、口縁端部は細長い玉縁状を呈する。51・52は備前焼甕の底部である。53～70は土師器坏である。53～55、57～70は底部が糸切離しで、おおむね体部が直線的に開くなどS003出土土師器と似る。ただし、62・64・67・69・70は他の土師器と比較して底部が薄く作られている。56は体部がやや外湾する。71は土師器燭台である。72は土師器鍋か。73は無釉の陶器甕。

74・75は平瓦である。76は粘板岩製砥石である。剥離している部分が多く、擦痕が観察できるのは上・下・

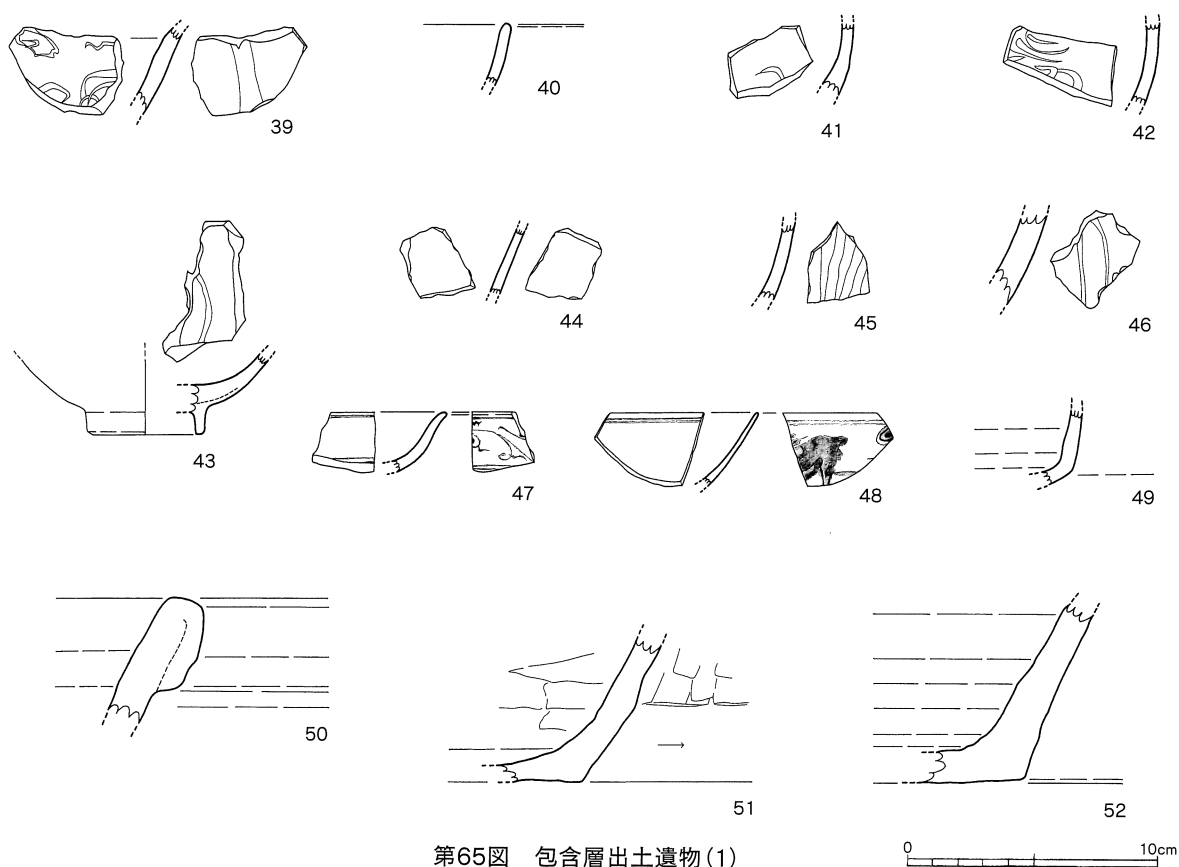


前側面の一部である。77は二次加工のある剥片である。石材は不明。78・79は火打ち石か。78はチャート、79は石材不明である。

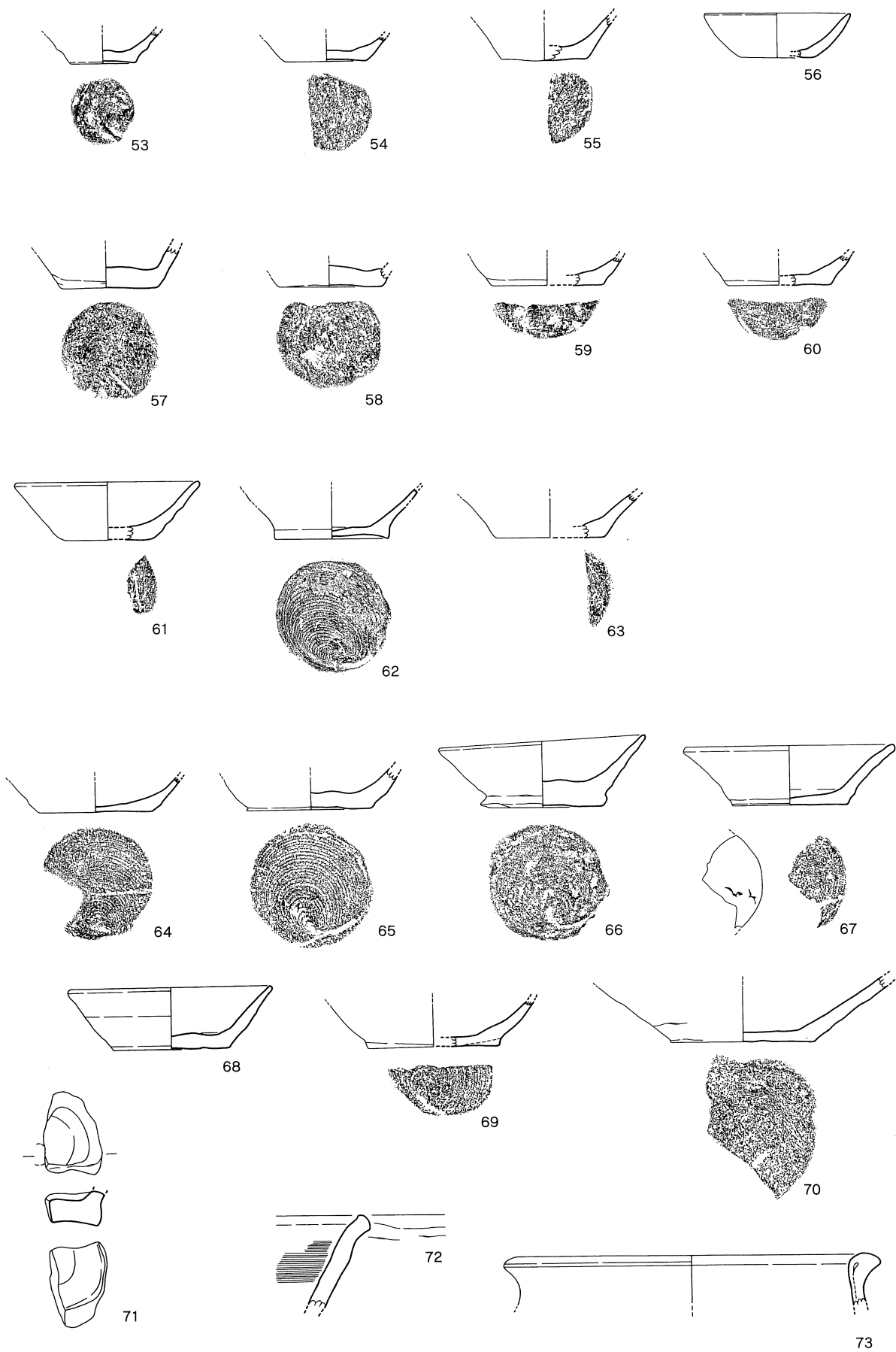
80～85は鉄製釘である。錆出のため明確でないものもあるが、おおむね断面方形を呈す。81・82は頭部も方形を呈す。86は鉄製釘もしくは鏝である。87は錆出のため明確でないが、おそらく4本の鉄製釘が錆塊となったものであろう。断面形は不明である。

88は鉄製蹄鉄であろう。日本では一般的に蹄鉄の導入は明治期と言われている。88は表採品であり、調査区が畑地であった時期に使用されたものであろうか。

89は陶製卸器で、卸面上部に「瀬251」と型押しされた、いわゆる「統制陶器」である。統制陶器は、昭和初期に行われた経済統制の一環で生産調整された陶磁器を指しており、89の場合は瀬戸地方の窯で焼かれた製品と考えられる。

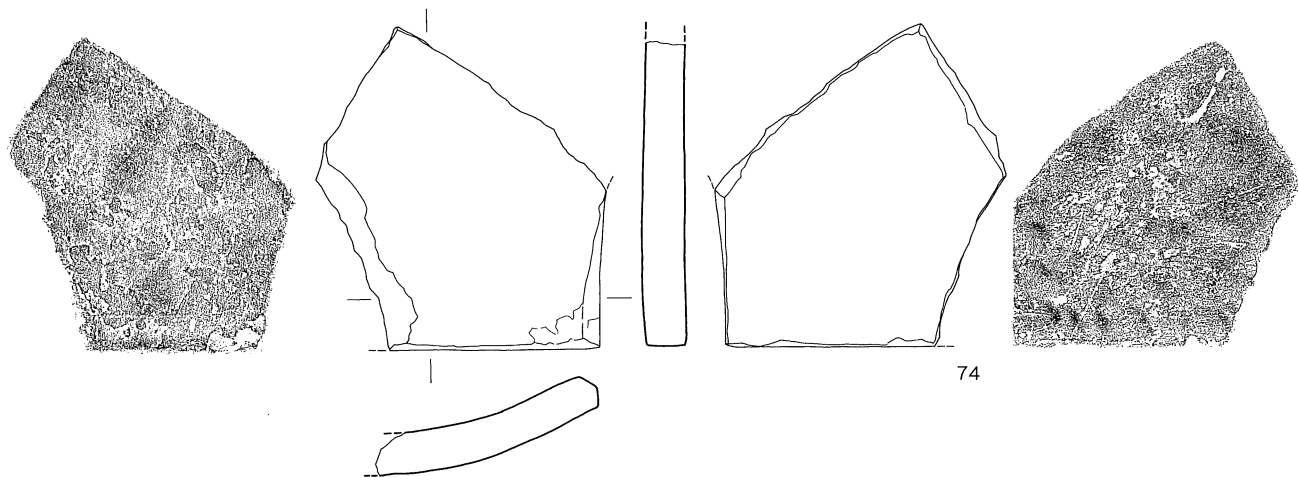


第65図 包含層出土遺物(1)

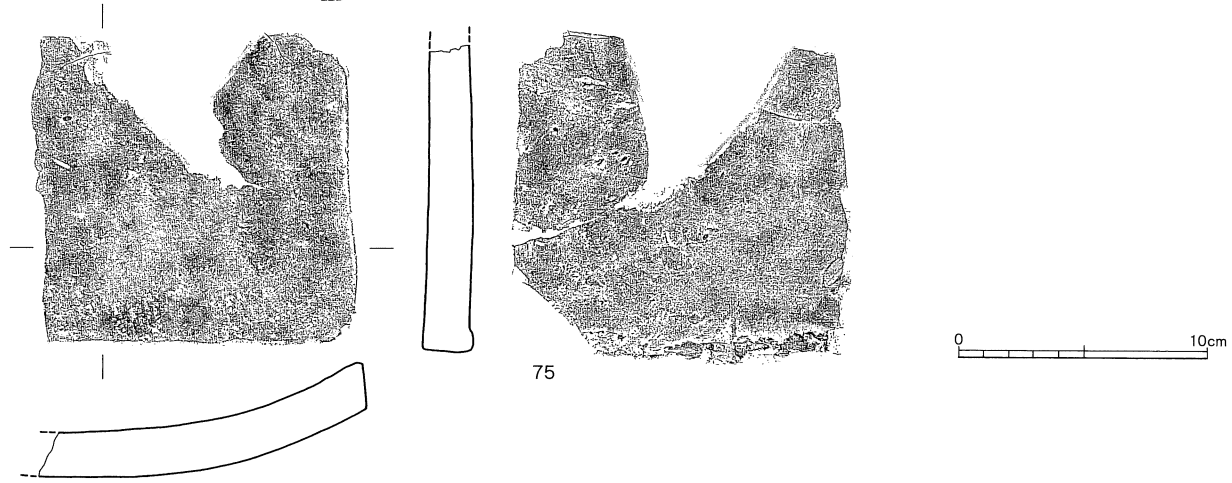


第66図 包含層出土遺物(2)

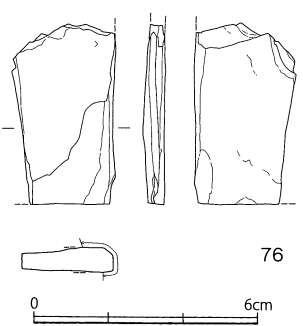
0 10cm



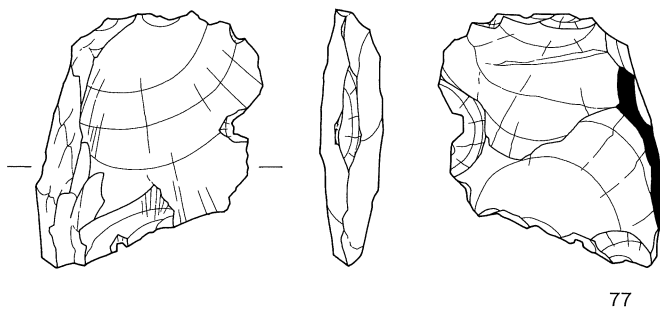
74



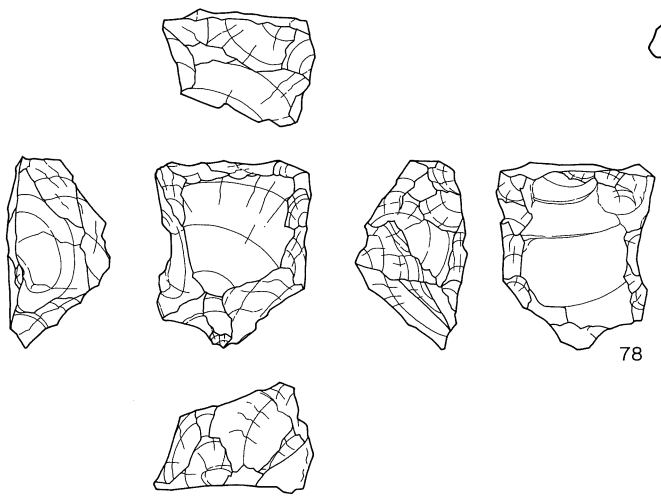
75



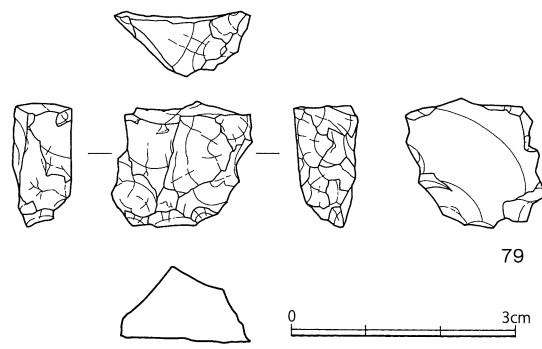
76



77

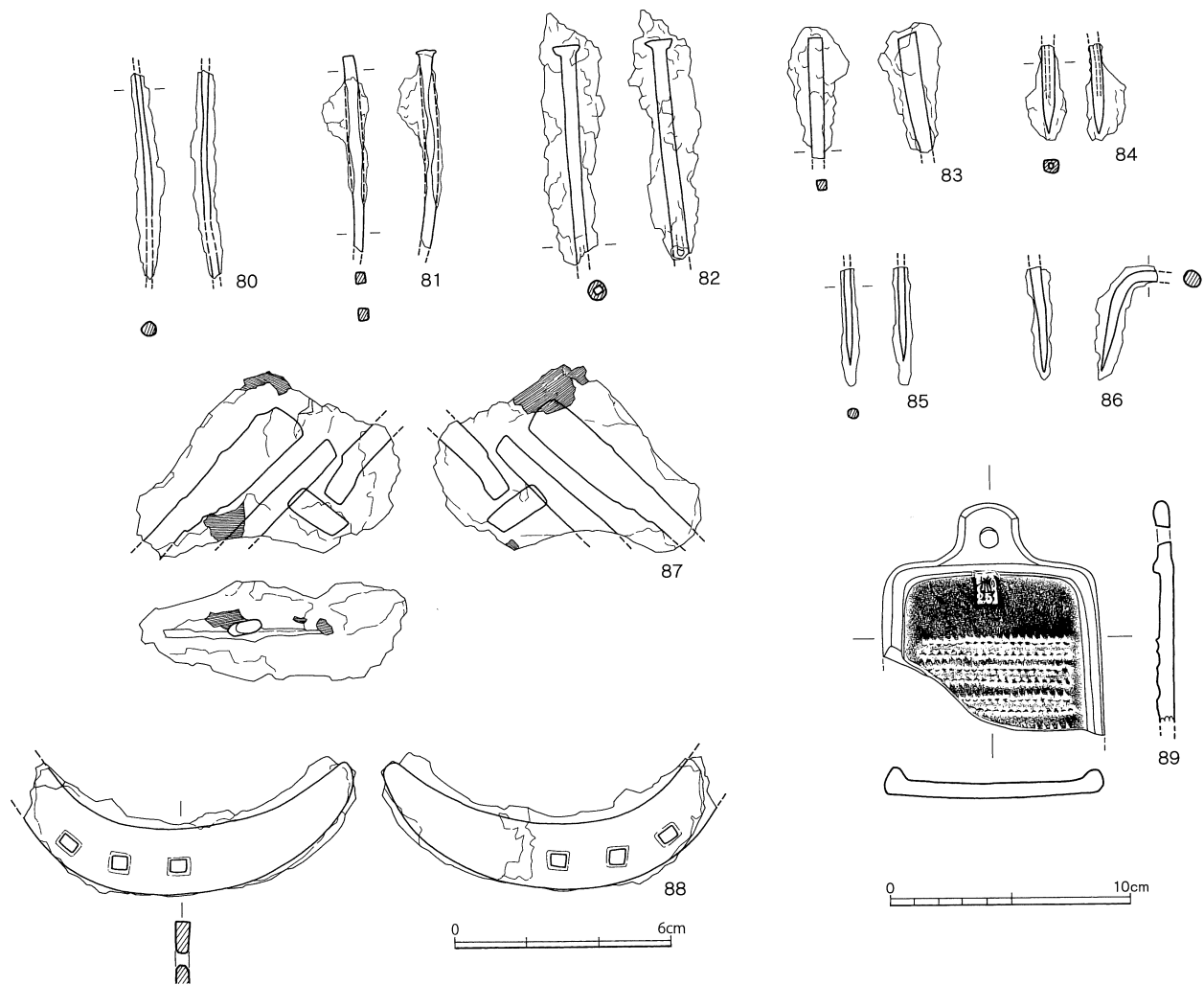


78



79

第67図 包含層出土遺物(3)



第68図 包含層出土遺物(4)

## 第4節 小結

調査前には大きく分けて三段の削平段があり、畑地や植林地として利用されていた。明治22年に作成された旧字図では、削平段はすべて地目が畑地であったので、その後には杉が植林されたものである。

今回の調査によって、これらの削平段が中世まで遡ることが明らかになった。このことは、梅牟礼城との関係を考える上でも重要なことであるが、まずはこの削平段が何時、いかなる目的で作られたのかを考えるために、今回の調査で明らかになった点を押さえておきたい。

今回の調査で出土した遺物の中で陶磁器を見ると、最も古いものは13世紀のものである。遺構出土のものでは、S025から出土した土師器一括資料がある。この年代的な位置づけは第7章総括で述べるが、15世紀代に置かれる可能性が高い。そうすれば、13世紀代の遺物の位置づけは不明ながら、少なくとも15世紀代には最下段の④面は形作られており、最上段の①面も中世の遺物が出土することから、15から16世紀には、現在の段々が作られていた可能性が高い。その他の遺構は、S050のピットが15世紀代である他は、遺物の出土状況が必ずしも良好でないため、中世と断定は出来ない。

では、これらの削平段はいかなる目的で作られたものであろうか。建物の建つ④面は居住区として利用されたことは明らかであるが、その他明確な遺構がない平坦面は、畑地などとして利用されたものであろう。もちろん、削平段の切岸としての意味も持っていたのであろう。この点については、第7章であらためて考えたい。

## 第5章 曳地館跡

### 第1節 遺跡の概要

#### (1) 地理的歴史的環境

曳地館跡は大分県佐伯市大字稲垣字大田に所在する。調査場所は本書で報告する掃木地区の南側約90mに位置し、同じく梅牟礼山塊の一部に立地している。掃木地区報告と重複する説明を省き、曳地館周辺の微地形、歴史的環境等について説明したい。

調査区西方の梅牟礼山塊から東側の平地部に向いていくつも細い尾根地形が延びている。曳地館跡はその一つに立地し、その尾根の全長は約250mである。尾根東部が小山状にやや高くなっており、その上面東部平坦面に愛宕神社が建っており「日本城郭大系」ではこの場所は佐伯氏の居館があったとし、曳地館という名称で記載されている。



第69図 調査区位置

梅牟礼城の東方に続く台地で、現在愛宕社があるが、この地は人工的に削平したものである。梅牟礼城と一体となった位置にあり、佐伯氏の平時における居館と推定され、三方は崖、西方に空堀がある。

今回の調査区は愛宕神社の背後に位置するがその一画である可能性が考えられたため、調査区名を曳地館跡とした。曳地館跡という名称の根拠について「城郭体系」では触れていないが、1971年発行の「佐伯史談」に小野英治氏が「梅牟礼時代に於ける佐伯氏の居館について」を発表しているのが唯一の活字のようである。小野氏は引地という地名があり地形的に館の所在地として相応しいと考え、佐伯氏居館があったのではないかと述べているが、曳地館という表記は使われていない。

神社拝殿は東向きにあり、背後の岩塊には神殿が設けられている。拝殿周囲の平坦面では1989年に梅牟礼城跡と遺跡の把握を目指し試掘調査され（高橋・綿貫1989）、17世紀末から19世紀の肥前磁器がやや多量に出土した。神社での祭礼に使用したお茶碗類であろう。愛宕神社は大永元年（1521）に佐伯を領した佐伯惟治が勧進した神社であるが、試掘調査では中世に遡るような遺構・遺物は未確認である。

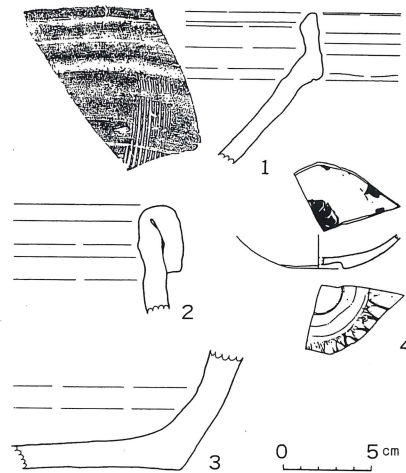
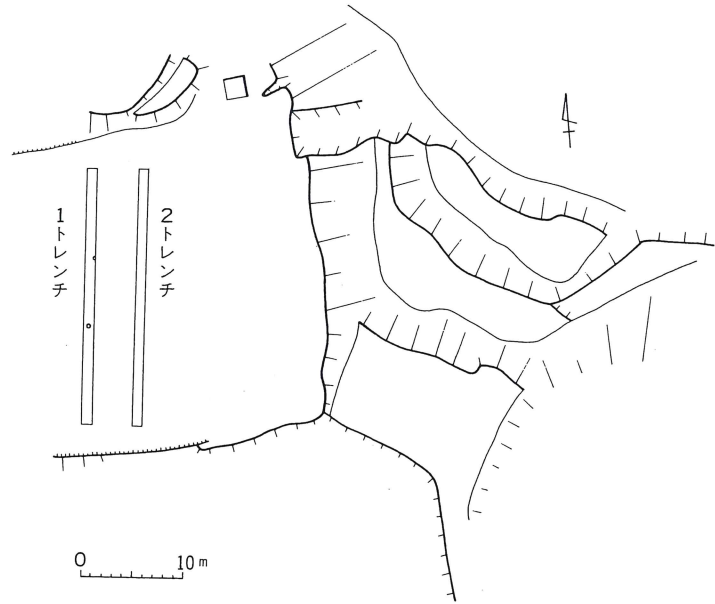
今回の調査区は厳密には空堀とされた場所の西側に位置するが、地形の状況から範囲を広く想定して曳地館跡として捉えた。

曳地館跡調査地では、1988年に当時果樹園として利用されていたこの場所で上記同様の目的による試掘調査が

行われ、柱穴・攪乱の溝跡などの遺構や青花皿や備前焼播り鉢・甕など16世紀の遺物小片が出土している（第70図）。曳地館跡の南側1km強には番匠川が東流し、その手前にある大字上岡字越坂の小さな尾根に木戸城という山城跡がある。東西に長い細尾根の根元を3本の堀切で守っている。木戸城跡の尾根の先端に鎌倉時代の十三重の石塔がある。

梅牟礼山（標高223m）一帯には佐伯地区を領した佐伯氏の居城梅牟礼城跡がある。梅牟礼城跡の東側に南北に長い谷の中には、「古市」・「土居之内」・「木戸ノ瀬」という中世城下町を暗示するような字が分布し、木戸城跡周辺の状況と併せ曳地館跡を含んだこの一帯は、中世佐伯のある時期においては中心的な存在であったとされている。

また、谷の東側山地にも中世関連の場所が存在する。曳地館跡の東北東約1.1kmに位置する山上寺跡からは鎌倉時代の銅鏡7面や漢から南宋の銅銭が発見されている（綿貫・後藤1994）。1988年の試掘調査位置を伝える古文書類はないが、遺物からみて中世の寺院であろう。



第70図 1988年の試掘調査位置・遺物

【引用・参考文献】

- 小野英治1971「梅牟礼時代に於ける佐伯氏の居館について」『佐伯史談』第七十三号 佐伯史談会
- 三重野元1979「大分」『日本城郭大系』第十六卷
- 高橋信武・綿貫俊一1988「梅牟礼城址と関連遺跡発掘調査概報Ⅰ」佐伯市教育委員会
- 綿貫俊一1990「梅牟礼城址と関連遺跡発掘 調査概報Ⅱ」佐伯市教育委員会
- 綿貫俊一・後藤幹彦1994「梅牟礼城跡関連遺跡発掘調査報告書」佐伯市教育委員会
- 小柳和宏2004「大分県の中世城館」第四集総集編 大分県文化財調査報告書第170輯



## 第2節 調査の概要

### (1) 調査の経過

曳地館跡の表土剥ぎは前年中の掃木地区発掘調査時に実施済みであったため、平成22年2月16日から調査区の地形測量を開始した。

遺跡最上部の遺物包含層に対する人力掘削は翌17日東部から始めた。北東部中央には地下水流が引き起こした大きな攪乱の穴があった。また、現代の建物基礎を溝状に二条検出した。18日には北東部の東部に大型柱穴を検出し始め、併せて遺構検出面が地山掘削と盛り土により形成されたものであることが分かってきた。すなわち、西部の山寄りには角礫混じりの基盤層が表土下に現れることが分かり、東側に向かい、順次下層から上層の順に次第に上位の自然堆積土層が残されていた。

19日、北東半分の検出をほぼ終え、22日から残りの南西半分の包含層掘削作業に移った。南西部には現代の建物基礎（長さ約45m、幅約10mの長方形）による攪乱が存在した。26日からは遺構検出作業も併行して行い、3月3日に南西側から検出状況の撮影をおこない、柱穴の縦割り調査を開始した。また、中央部に残した土層観察のための帯状部分の層序図を作成。5日、全柱穴を5cm掘り下げ、柱痕確認に努めた結果、半数は柱痕を確認できた。撮影、実測後に掘り下げを開始。3月10日、1号掘立柱建物跡そばの穴から銭貨一群を検出。11日、空撮。16日、掘り下げ作業終了。17日、プレハブ・仮設トイレ撤去。18日、1/20遺構平面図作成。19日、撤収。

### (2) 調査の成果

調査区は標高20m等高線がめぐる尾根上に位置し、その上面は長さ約45m、幅約30mの平坦面である。西側には標高223mの梅傘礼山から南方に伸びた尾根線標高約120mが南北に連なっており、そこから急激に降下した場所に位置する。調査区の縁辺部北東側と南西側は低地とは崖のような斜面で明瞭に区別できた。尾根の東側には愛宕神社のある小山があり、本調査区はその陰に隠れて東側低地からは見えにくい。両者の間には1m程度低くなっているが、堀のようなものではない。

検出した遺構は柱穴約170、土坑約10であり、柱穴を組み合わせで復元できた掘立柱建物跡は4棟であった（第1～4号建物跡）。その他、数十年以前に存在した建物跡に伴う溝状の掘り込みが西部を中心に広く分布し、東端部にはコンクリート敷きの長方形床が三基並んであった。

遺構検出面の状況は場所によって地面の堆積状態が異なっていた。これは自然地形を削平し、一部を埋め立てて平坦面を造成した結果だとみられた。第71図によりその状態を説明する。第1号建物跡の北側には岩盤が露出して平坦面を形作っていた。山側に幅10m広がり、建物跡に向かって弧状に張り出す状態である。岩盤は軟質で比較的容易に削れたらしい。岩盤よりも外側には岩盤が遊離したり、土砂が混入したりした混礫土層が取り巻いていた。これは自然地形が侵食され、斜面に堆積した部分を水平に削った結果である。仮にこれを岩盤風化層と呼んでおく。岩盤風化層は第1号建物跡の西北西に向かって調査区外に近寄り、そこから再び南東に向かって突出するように分布する。突出部先端から調査区山側縁辺までの距離は約17mである。この突出部の直下には岩盤が存在する筈であり、元々はここに尾根が張り出していたのである。第1号建物跡との間は岩盤風化層が南東に凹字形に広がり、その外側を黄褐色の火山灰層が埋めている。

火山灰層の分布は両側の尾根の間を全部埋め－上方から流下し二次堆積したため－、南東側に向かい緩やかに突出するが、西側の尾根の外側には分布しない。さらに上位の黒色土層は代わりに分布するので、旧石器時代に相当する堆積層は山の斜面がきつい部分では流失したのであろう。火山灰層の外側には黒色土が分布する。これも遺物はみられないが縄文時代草創期・早期に相当する堆積物である。幅2mほどで弓状に分布する。この頃にはふたつの尾根は地表に現れず、上面の広いひとつの尾根地形となっていた。

黒色土層の外側には7,300年前頃噴出した黄色のアカホヤ火山灰が幅50cm弱で分布する。

アカホヤ火山灰の外側は茶褐色の火山灰層が最大幅約7mで取り巻く。



第71図 遺構配置図(方眼は10m)

以上は自然堆積層であるが、この外側を人工的な盛り土が同じ高さで埋めている（緑）。調査区南西部はほとんど盛り土造成面といえる状態である。この堆積物の由来は調査区中央部から東部で自然地形を削ってきた岩石や土層とみられる。

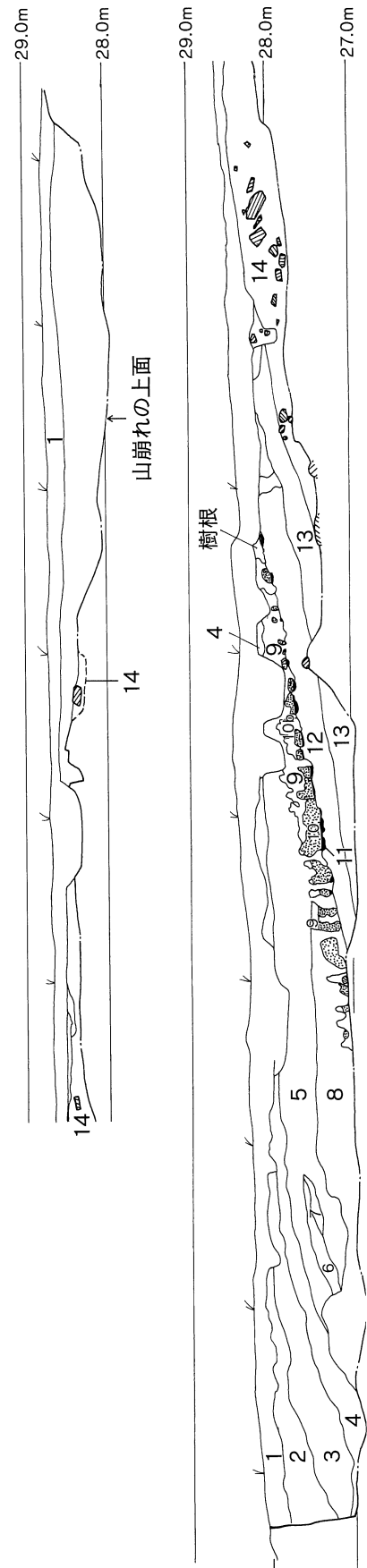
### (3) 層序

調査区中央を南北方向に断ち割った断面図で説明する（第72図）。ここは中世段階に山の斜面を削って平坦面を作り出し、削り取った層を平坦面の周囲に投げ込んでさらに平坦面を拡張したことが、調査区を横断するトレンチを入れた結果判明した。

- 1層：全体に分布する表土層で、高所にあたる北部では層厚10cm程度と薄い。中央部では平均20cm程度だが以前あった建築物の基礎部分では全体で約60cm、南東部では30cmほどである。
- 2層：黄褐色土層。地盤の角礫小片を少量含む。最大50cmほどの層厚をもち3層の上に斜めに堆積する。旧石器時代に堆積したものだが、旧石器は出土していない。層の分布は層序図部分で南から2.5mまでしかなく、アカホヤ火山灰層よりも上位にあるため、二次的な移動、すなわち客土である。全体を平坦化するため山側を削り取り、周辺に盛土した部分にあたる。移動時期は中世であり、遺跡内での分布状態は北東部縁辺から東部は幅1m～2m、南東部は4m～6m程度と広がりが増し、4D区北東部で北西に屈折しそこから最大幅23mまでに広がる。
- 3層：これも客土である。アカホヤ火山灰と混じる黒色硬質土斑を含む軟らかい黄褐色土層。層厚50cmほどで、4層の上に斜めに堆積する。
- 4層：暗褐色軟質土層。層厚20cm程度で斜めに堆積する。客土と推定する。
- 5層：南部では上面が斜めに傾斜するが、他では層厚40cmほどで水平堆積し9層との境界面に微妙な凹凸をもつので、自然堆積とみられる。アカホヤ火山灰層と絡む部分では樹根状にそれを分断する状態もみられる。層序図作成部分の南東部では5層中位に6層・7層を含み、その部分の5層下面が落ち込む状況を示すので、土坑があったのかもしれない。4層と5層は合わせて幅5m～6mで2層の内側に分布する。

本来は旧石器時代に堆積した層の上位にあった層である。

- 6層：焼土・炭化物各10%程度を含んだ赤味があった暗茶褐色土層である。層序図の部分でしか確認していないが、土坑内埋土の可能性はある。
- 7層：斜めにレンズ状に堆積する暗褐色土。6層同様に土坑内の堆積か。
- 8層：茶褐色軟質土層。自然堆積。アカホヤ火山灰及びその上位の黒褐色土の上に乗る層である。層厚は山側では消滅するが、斜面下側では50cm以上はある。



第72図 調査区中央層序断面図

9層：硬化した黒褐色土層。アカホヤ火山灰層の直後にできた層である。

10層：アカホヤ火山灰層。薩摩半島南側の海底カルデラである喜界カルデラが7,500年前頃噴火した際の火山灰層である。層厚は最大25cmで、樹根による分断がみられる。全体的に斜めに堆積していた。10層の下部には厚さ2cm～3cm、アカホヤが硬く橙色になった部分が並んで存在し、特に10層が幅広く存在する中央部の一箇所では橙色ではなく白味がかかった状態に変化した部分がある（11層）。

11層：アカホヤ下部にあり、硬化した橙色あるいは白味がかかった部分。

12層：砂礫層。山斜面の上方から流れてきたとみられる層。30cm～40cmの層厚で、斜めに堆積している。

13層：ややざらついた茶褐色粘質土層。

14層：長さ35cm未満程度の角礫を多量に含んだ土混じり角礫層。図では大きい礫だけを図示しており、また、途中で掘り下げを止めている。山崩れ由来の堆積層である。層序図作製部分の山側底面は山崩れ層の上面である。

#### （4）試掘調査

今回の本調査に先立ち行った試掘調査は、調査区を東西に横断する長いトレンチを設定して行った（第71図：第1号掘立柱建物跡の北東側の溝のこと）。重機による掘削時に試掘溝内の中央部からまとまって銭貨が掘り上げられ出土したのが下記の遺物である。

一部のものに紐が残るので分かるように、中国製の銅貨48枚がさし銭状態で出した。試掘時には包含層出土として採り上げている

#### （5）試掘時の出土遺物（第73～75図 1～48）

14・16・26・31・47は唐の開元通宝（初鑄年621年）である。

37は南唐の唐国通宝（初鑄年959年）。

以下、北宋銭が多い。20は北宋の宋通元宝（初鑄年960年）、8・12は北宋の景德元宝（初鑄年1004年）、28は北宋の祥符通宝（初鑄年1009年）、25は北宋の天聖元宝（初鑄年1023年）。

33は北宋の景祐元宝（初鑄年1034年）、4・18・40は北宋の皇宋通宝（初鑄年1038年）、1・6・21・24・29・32・36・38・45は北宋の熈寧元宝（初鑄年1068年）。

9・17・19・23は北宋の元祐通宝（初鑄年1086年）。

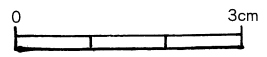
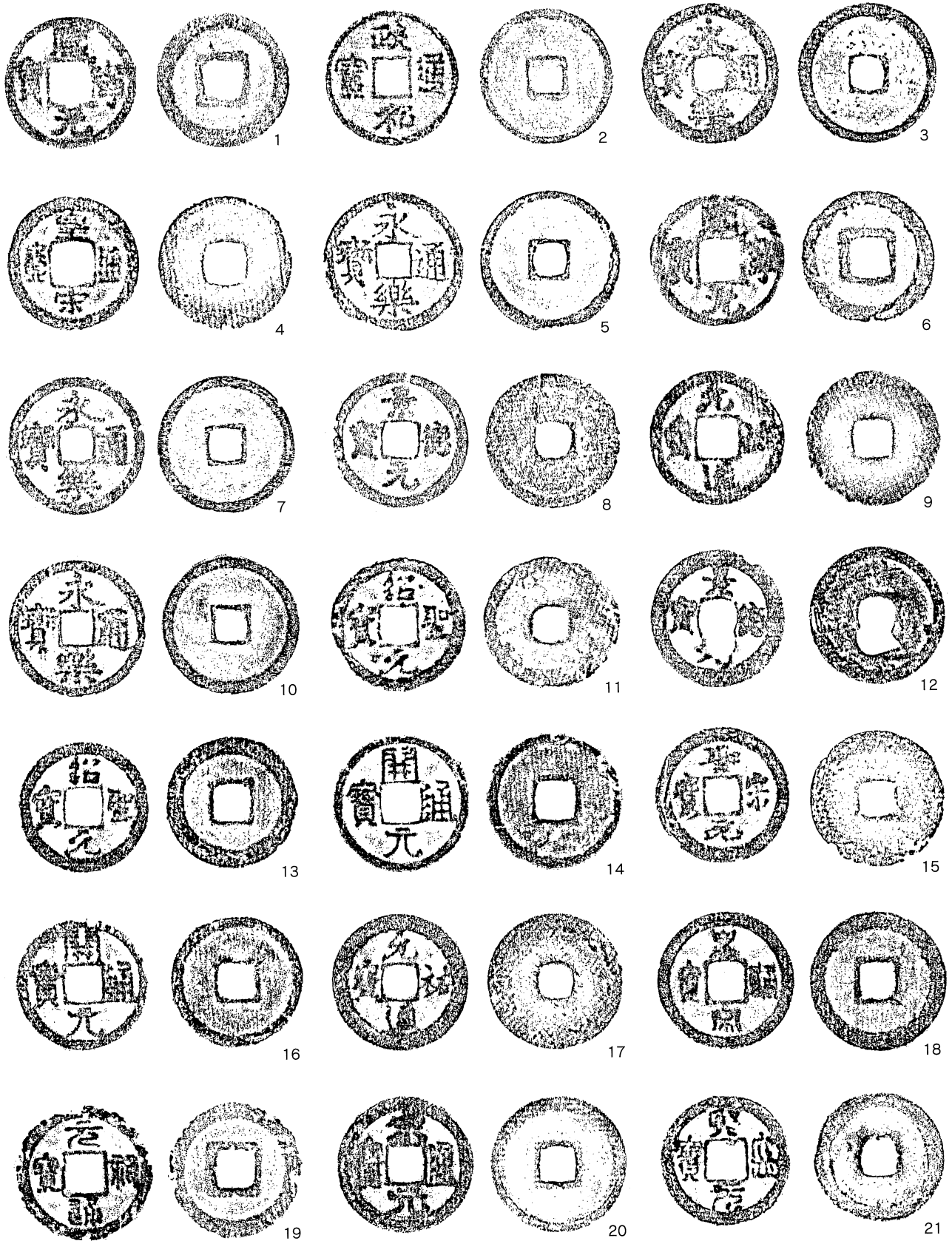
11・13・30は北宋の紹聖元宝（初鑄年1094年）、15・43は北宋の聖宋元宝（初鑄年1101年）、41・42は北宋の大観通宝（初鑄年1107年）、27・48は北宋の政和通宝（初鑄年1111年）。

2・35・39は北宋の宣和通宝（初鑄年1119年）である。

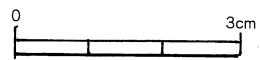
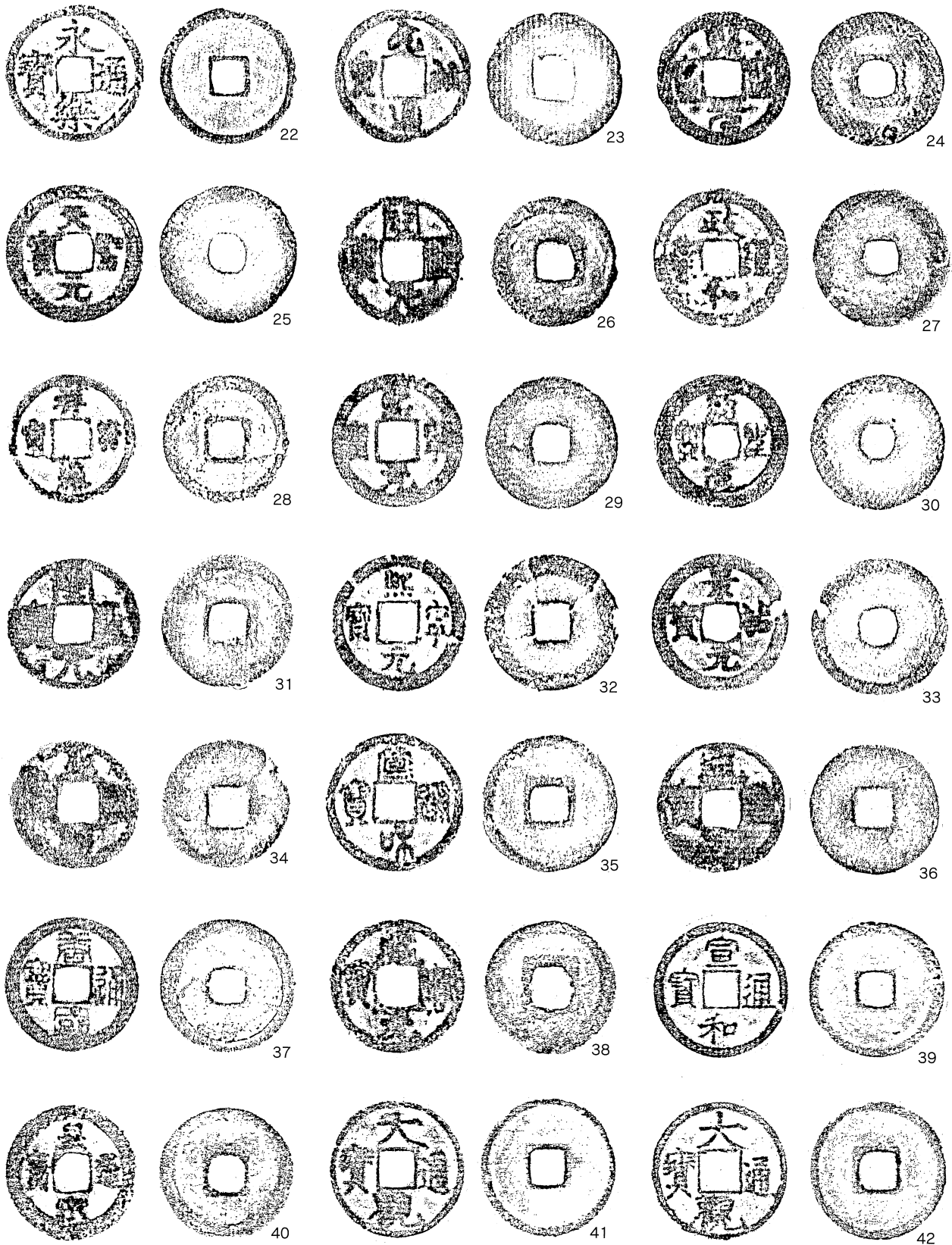
次は明銭。3・5・7・10・22・44・46は明の永楽通宝（初鑄年1408年）、34は不明。

全体を通して銭貨初鑄年は621年から1408年までであり、唐・南唐・北宋・明の銭貨に限られ、遼・南宋などはみられない。

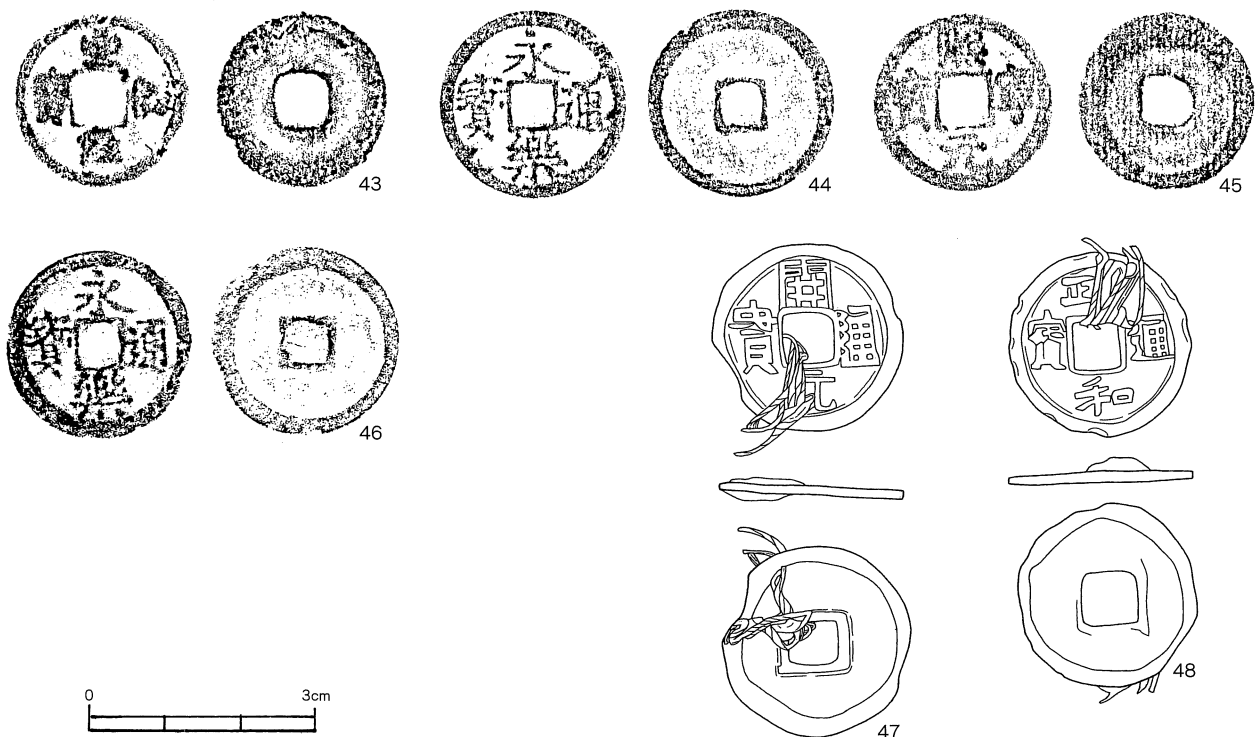




第73圖 試掘時出土錢貨實測圖(1)1~21



第74図 試掘時出土銭貨実測図(2) 22 ~ 42



第75図 試掘時出土銭貨実測図(3) 43~48

(6) 本調査の包含層出土遺物 (第76図49~83)

調査開始時にはすでに遺跡の表土剥ぎがなされていたことは先述の通りである。遺構検出のため人力で地表面を下げた際に出土したのが第76図の遺物である。

49は中国龍泉窯系青磁碗で、見込みに花の刻印、外面体部にヘラ削りによる蓮弁を描くが、弁中心の鑄は認められない。15世紀前葉前後。

50は明灰色の中国製青磁碗。龍泉窯系で外面に削り出した蓮弁紋がある。13・14世紀頃の遺物である。

51は同じく龍泉窯系青磁碗で、外面上部に1条の横方向沈線、その下位に直線を並べて描き、上部に弧線を加えて蓮弁紋を簡略化している。15世紀中頃。

52は胎土は軟質で、器表面には発色の釉薬が掛かる。口縁端部が規則的に削られた白磁の稜花皿である。

15世紀前半。53は薄緑色の中国製青磁香炉である。外面には3条沈線があり釉薬が埋まっている。

54・56・57・62・63は景德鎮系の青花皿。小野編年の染付皿B群。16世紀。

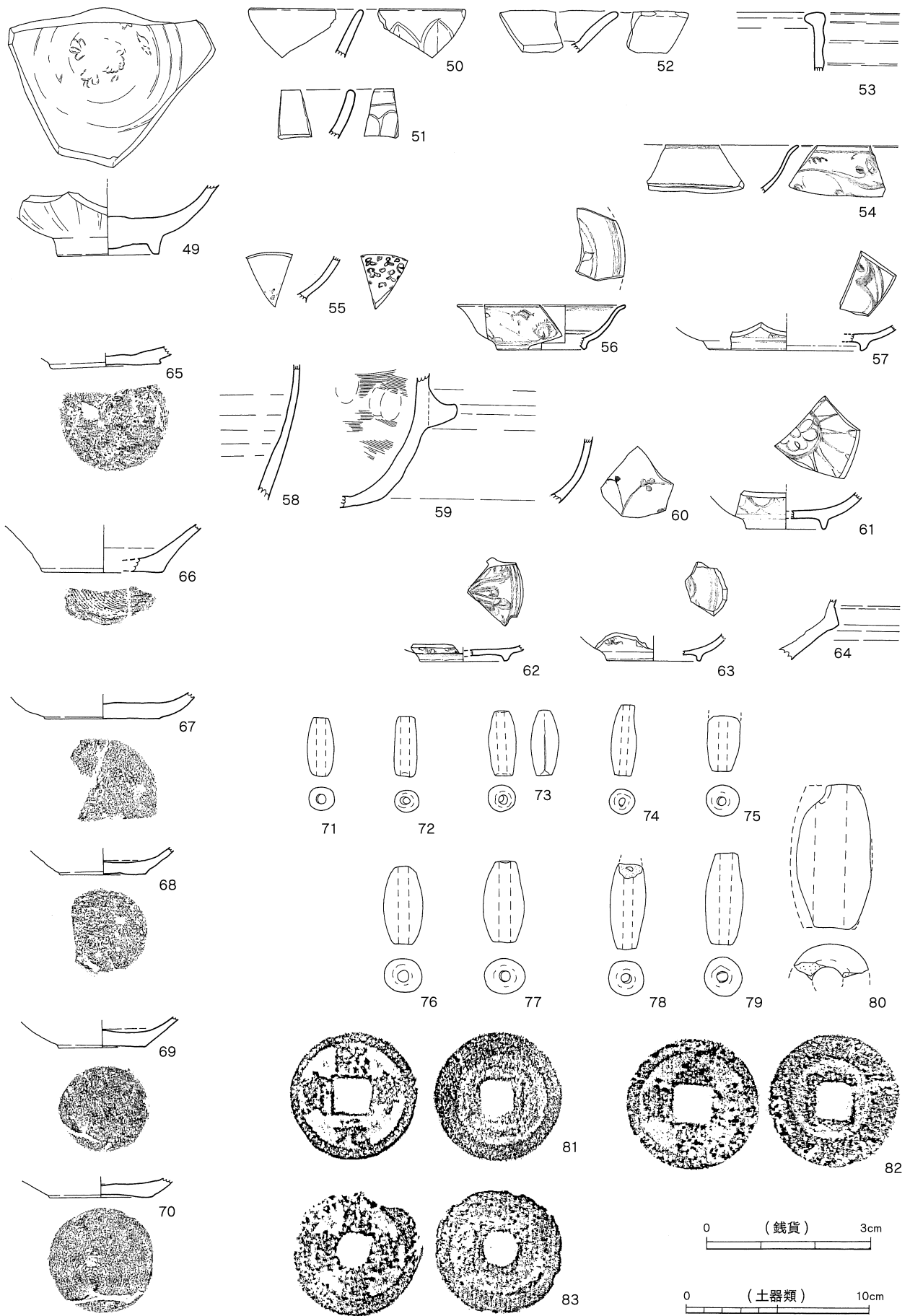
55は中国景德鎮窯系の青花碗。16世紀。58は備前焼徳利の胴部。

59は瓦質土器の羽釜で体部に先端がやや上向きの帯が回る。帯突端から下に煤が付着している。60は肥前系染付け碗で、梅樹紋をもつ。18世紀。

61は肥前系染付け碗である。外面には先が二つに分かれた工具で網目紋を描いている。内面も網目紋がある。高台内部も釉薬が全体に掛かっている。18世紀前半。

64は備前焼播り鉢。内面は破損により表面を失っている。

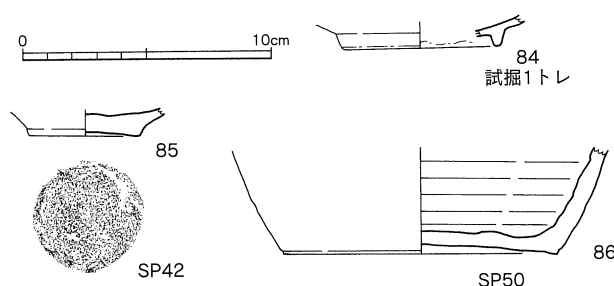




第76図 包含層出土遺物実測図

### 第3節 遺構と遺物

第71図では、柱穴の検出面で炭化物を含むもの（青）、焼土を含むもの（赤）を色分けした。調査区南西部に集中する。



第77図 試掘調査・SP42・SP50出土遺物実測図

(第77図84～86) 84は試掘1トレ出土の中国製白磁皿である。高台の畳付部以外は釉薬が掛かる。85はSP42出土の土師器の坏底部から体部の下部である。底部には厚みがあり、体部への移行部は内側に屈曲しており、体部は緩やかに傾く。本遺跡の他の土師器坏と比べるとSP60例のような急な傾きではない。86はSP50出土の茶褐色の備前焼徳利である。底部の復元直径は4.5cm。

以上、底部の破片ばかりであるが、15世紀後半から16世紀前半頃の遺物であろう。

#### SK6 (第78図)

調査区の中央やや北西寄りに検出した大型の土坑である。一部は調査区外の山手に出ている。東西二つの楕円形土坑が重複したもので、遺物は区別せず採り上げた。東側土坑は最大の深さが15cmほどと浅い。平面の規模は最大3.8m、幅1.4m。

西側土坑は深さ60cmあり、掘り下げ作業中は水が湧き出す状態だった。埋土は山側から流入した土砂のようであった。平面規模は長さ4.3m、幅2.53mである。床面は山側が高く、東側は低くなる。

#### SK6出土遺物 (第92図147～152)

147～150は土師器の皿・坏類である。

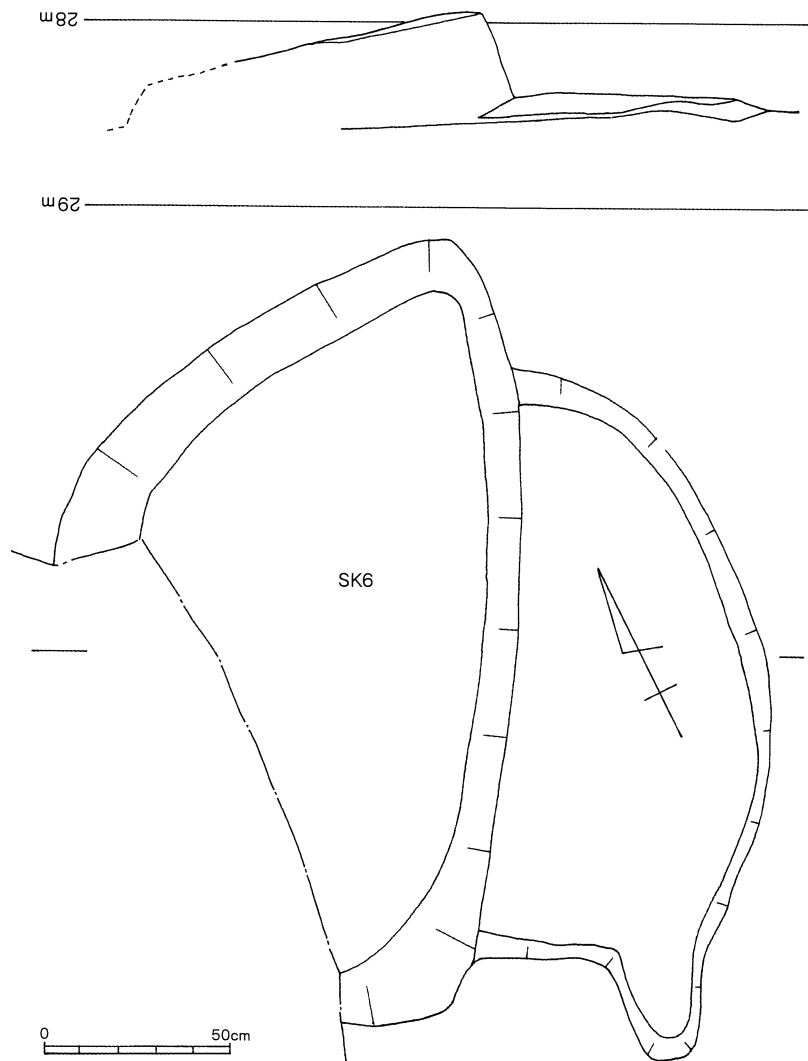
147は小皿で底径4.0cm。

148は底径5.8cmで体部は強く開いた器形である。底部と体部の移行部はやや段差が認められる。

149・150は底部から体部に掛けて強く開く器形で、底面と体部との移行部に段差が認められない。底径は149が6.0cm、150が6.2cmである。

151は中国景德鎮窯系青花で、碁笥底の底部となる小野分類のC群皿。15世紀後半から16世紀前半。

152は中国景德鎮窯系の五彩の碗である。高台内部にも釉薬が掛かっている。赤色と黄色味を帯びた緑色の彩色が残る。底径5.2cm。



第78図 SK6実測図

第1号掘立柱建物跡 (第79図)

調査区内の北東部、地山を削り出して出来た平坦面の東部に位置する遺構である。

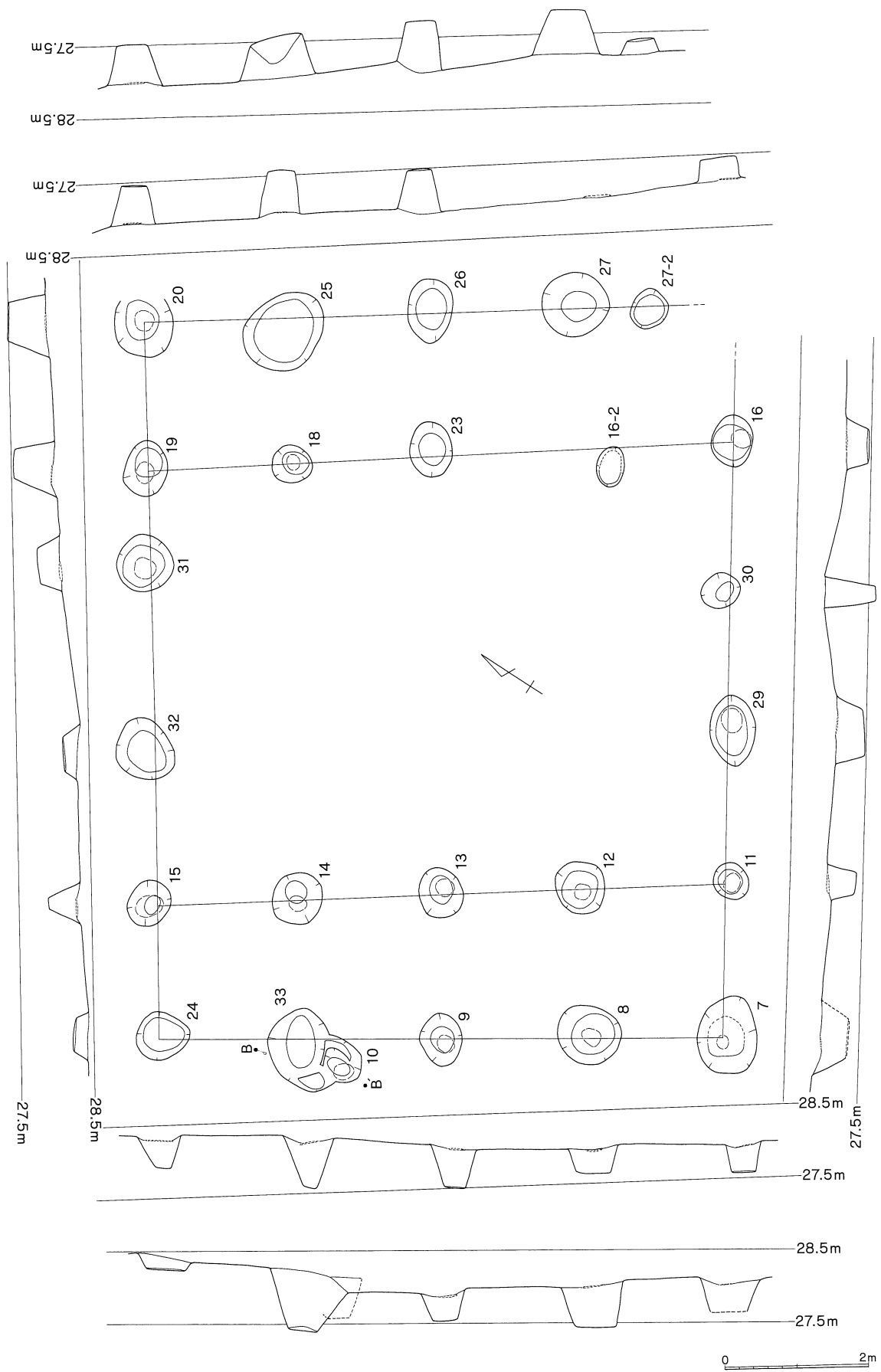
建物の一部、柱1基だけは調査区外の盛土に掘り込まれている。削出し平坦面には主要な遺構としては他に第2号掘立柱建物跡の東部半分が掘り込まれているだけであり、この平坦面はおそらく第1号掘立柱建物跡建設に際して造成したのであろう。建物の方位は北辺で見ると、東西軸に対して建物の東側が36度北に傾いている。

第1号掘立柱建物跡は東西両側に庇を有し、本体部分は東西3間・南北4間の柱配置をなす。柱間の距離は東西方向は600cm (SP11～SP16: 柱相互の距離は平均200cm)、南北方向は795cm (SP7～SP24: 平均199cm) と812cm (SP16～SP19: 平均203cm) である。

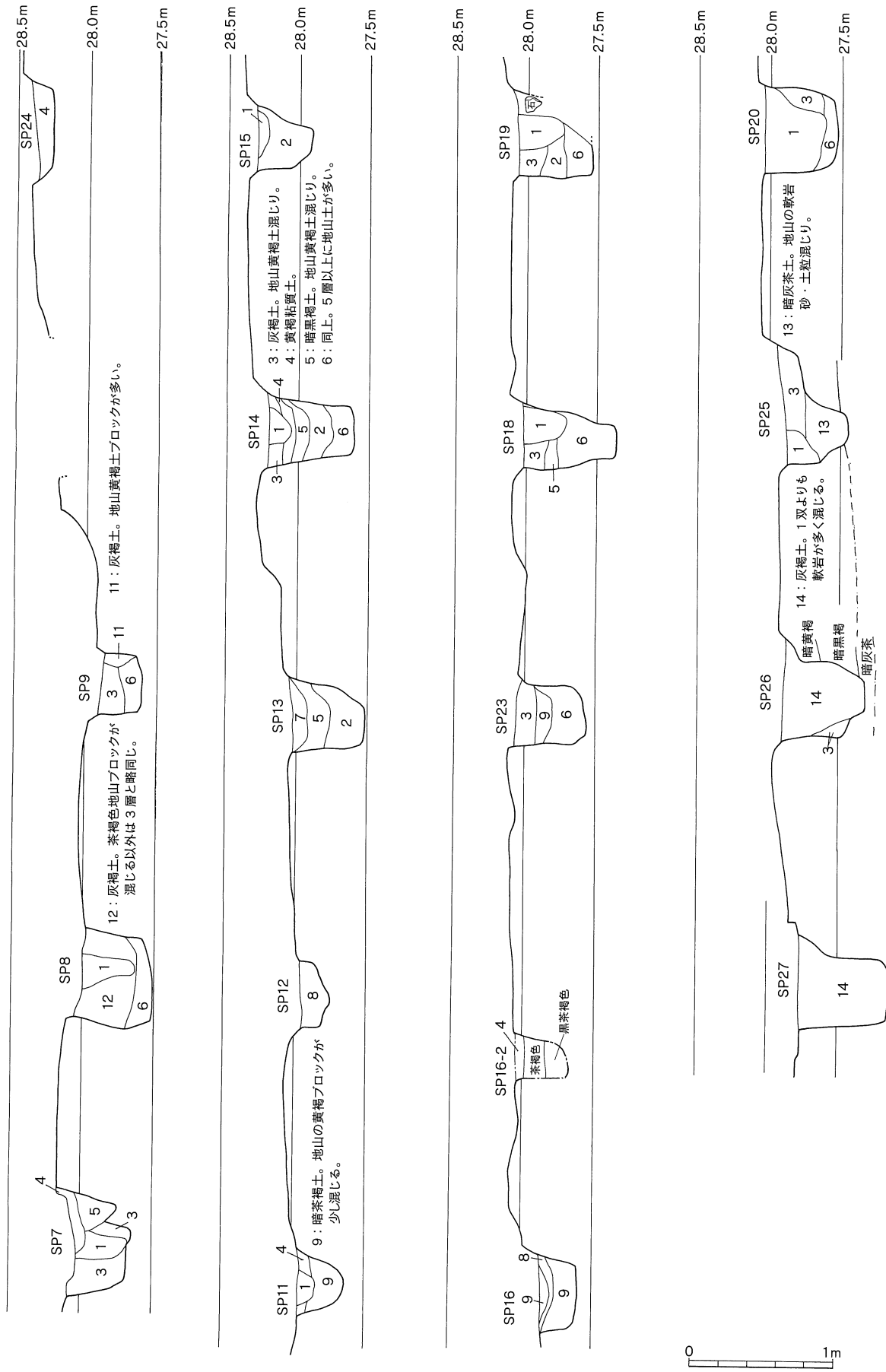
庇部分を入れた全体の平面規模は柱の中心で東西980cm (SP20～SP24) で、面積は77.9㎡、約24坪である。個別の柱穴は検出時に平面的に柱の位置・規模が土色の相違により判別できるものが少なからずみられた (SP11・29・31)。SP2の東側に接するSP17も同様であった。

柱痕は円形・楕円形で、直径は18cm～30cmであった。図で青色で示す位置が遺構検出面における柱の痕跡である。SP7～16・18・19・20各柱穴の検出面から底面までの深さは次の通りである。

西側底列 (SP7 - 48cm・SP8 - 62cm・SP9 - 44cm・SP10 - 57cm・SP33 - 84cm・SP15 - 44cm・SP14 -



第79图 第1号掘立柱建物跡実測図



第80図 第1号掘立柱建物跡の柱穴断面図(1)

72cm・SP13-60cm・SP12-40cm・SP11-40cm・SP32-42cm・SP29-42cm・SP31-20cm・SP30-70cm・SP19-54cm・SP18-64cm・SP23-62cm・SP16-2-4cm・SP16-32cm・SP20-54cm・SP25-60cm・SP26-72cm・SP27-62cm・SP27-2-22cm)

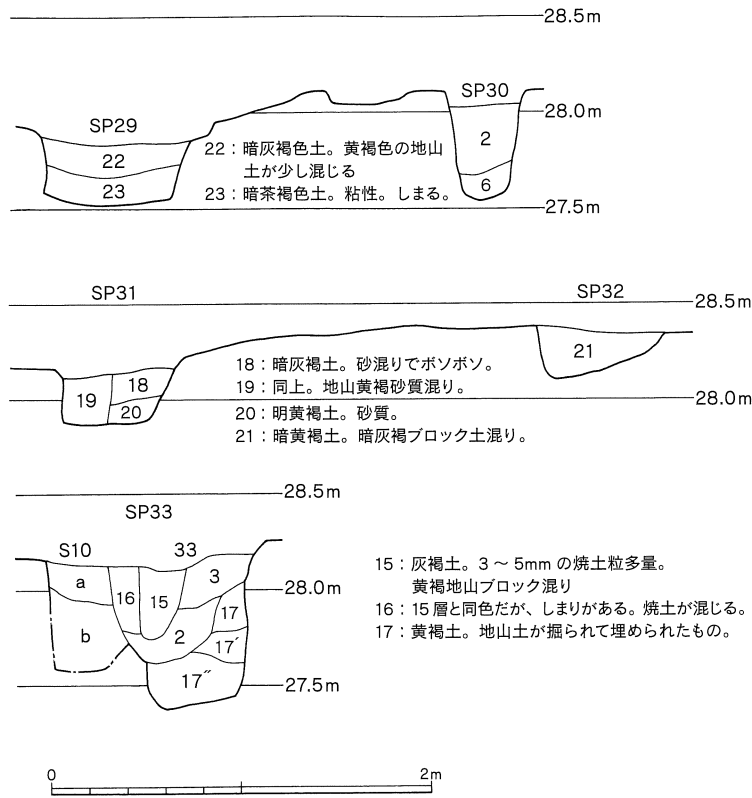
第1号掘立柱建物跡出土遺物(第16図 87・88)

第1号掘立柱建物跡を構成するSP19(第82図)から土師器坏2点が出土している。

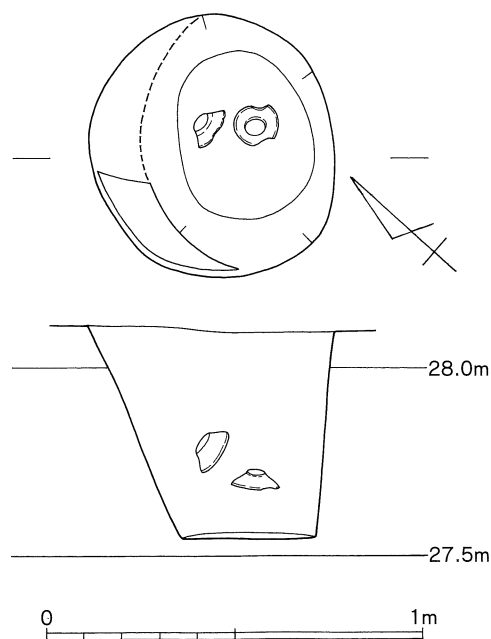
土師器2点はSP19の中心部分に投げ込まれた状態で検出した。この柱穴は検出面で円形の柱痕が確認でき、掘り下げの結果、遺物の出土位置は柱痕位置に外れた場所であり、ほぼ完形の状態で土師器坏が出土した(巻末写真参照)。したがって、柱を立てる際に故意に入れたとみられる。

西側に40cm隔てた位置にあるSP60からは、土師器17点ほどと玉砂利・さし銭が出土しており、これと関係があるかも知れない。

土師器坏(87・88)は87が口縁部の縁が長さ4.5cm欠損するだけで、88は長さ4cm前後の欠損が3ヶ所ある。出土した位置から見て柱のあった位置からずれた所から出土している。



第81図 第1号掘立柱建物跡の柱穴断面図(2)



第82図 SP19実測図

87は口径11.4cm・底径5.6cm・高さ3.9cmで、底部は糸切り放し。口縁部は直線的に外反し、底部近くで屈折する。見込み部中心は管状に指ナデされ中央が直径2.5cmほど高くなる。胎土には茶色の酸化土粒を若干含み、色調は褐色である。

88は高さ3.8cmで、底部は糸切り放し。口縁部は細まりながら外反し、体部の中くらいで丸く外側に膨らむ。見込み上部は幅1.5cmほど回転ナデが加えられその下位よりも窪む。胎土には87より多く茶色の酸化土粒が含まれ、色調はより明るい。

SP60 (第84図)

第1号掘立柱建物跡の北辺の柱穴SP31に隣接し、建物の外側に位置するのがSP60である。SP60は別の柱穴と重複し、それを切って掘り込まれた長さ83cm・幅68cm・深さ51cmの楕円形の遺構である。

SP60は検出時には柱痕の確認が出来なかったが、掘下げを進めるとすぐに土師器がまとまって出土した。土師器群の下位からは緑色の長径4cm前後の玉砂利17個ほどがまとまって出土し、これら土師器・玉砂利の平面的分布が空白な部分では底面が一段低く掘下げられていたので、柱をここに立てていたのではないと思われる。

SP60出土遺物 (第85図89~103・第86図104~123)

土師器

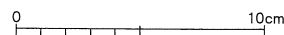
土師器を初めに示す。口径・器高等は巻末の一覧表を参照。

小型の皿(89・103)と坏(その他)があり、坏が多い。89・103は口径の小さい土師器小皿で、見込み中央部は盛り上がる。

90は見込み中央部が窪み、口縁部内面に特に横ナデするというのもなく、他と異なる点である。体部下半部は外面が膨らむ。

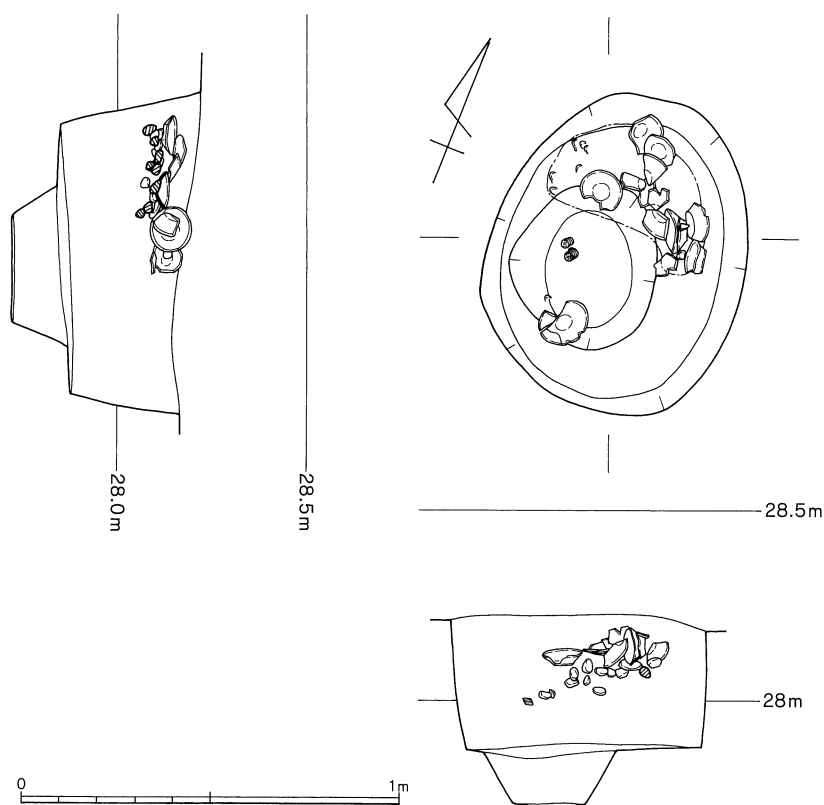
91・93・98・99・101には内面見込み部に墨書があるが、解読できない。91・92・95・96・98・100は内面上部を強く横ナデしたもの。

95・99は口縁部内面上部の横ナデにより外側に開くため比較的に外反度が高い。



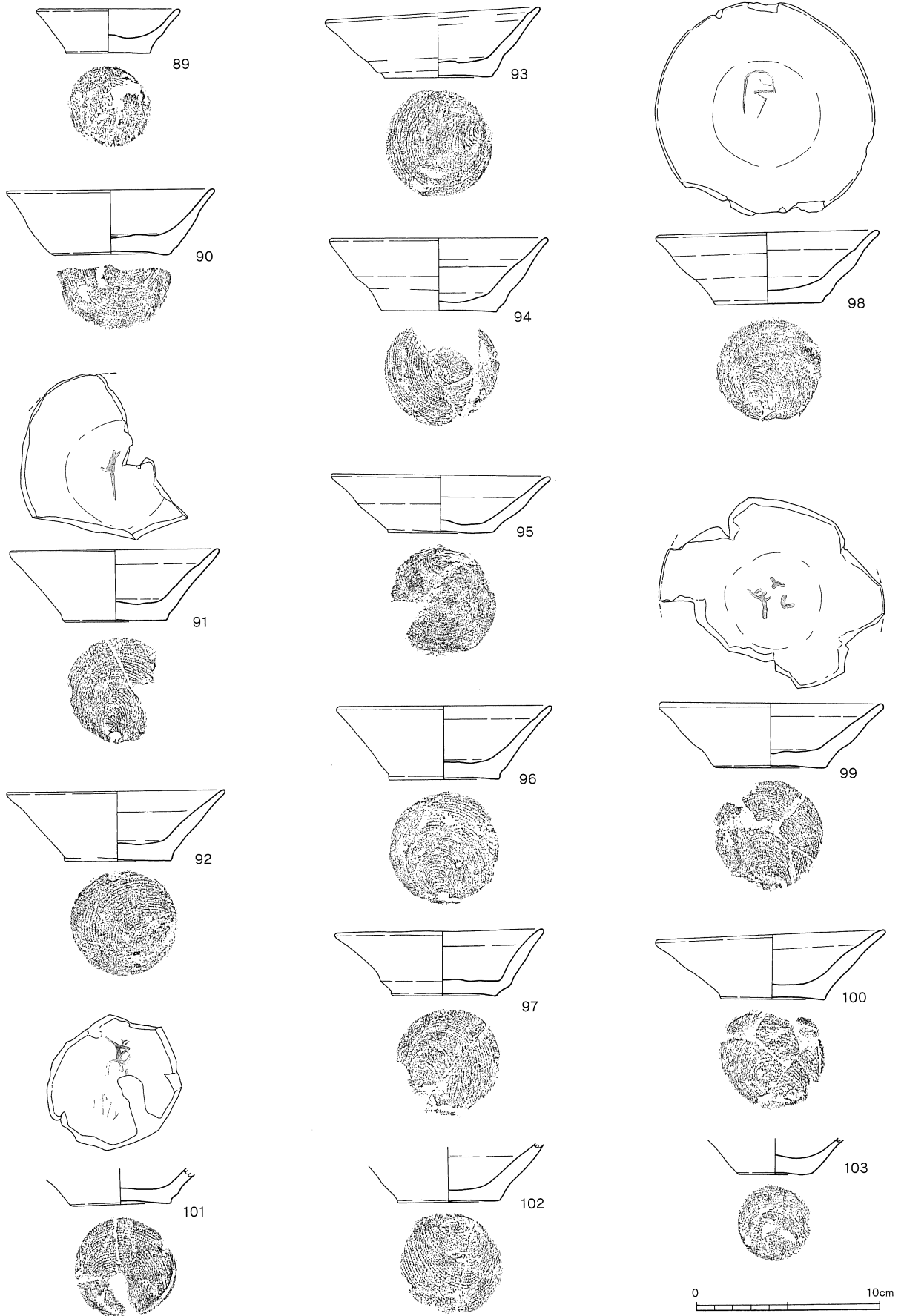
第83図 SP19出土遺物実測図

外面も中位が膨らむ。97は同じ調整が弱いもの。102は見込み中央は緩やかな凹形であり、盛り上がりはない。上部の横ナデは滑らかである。

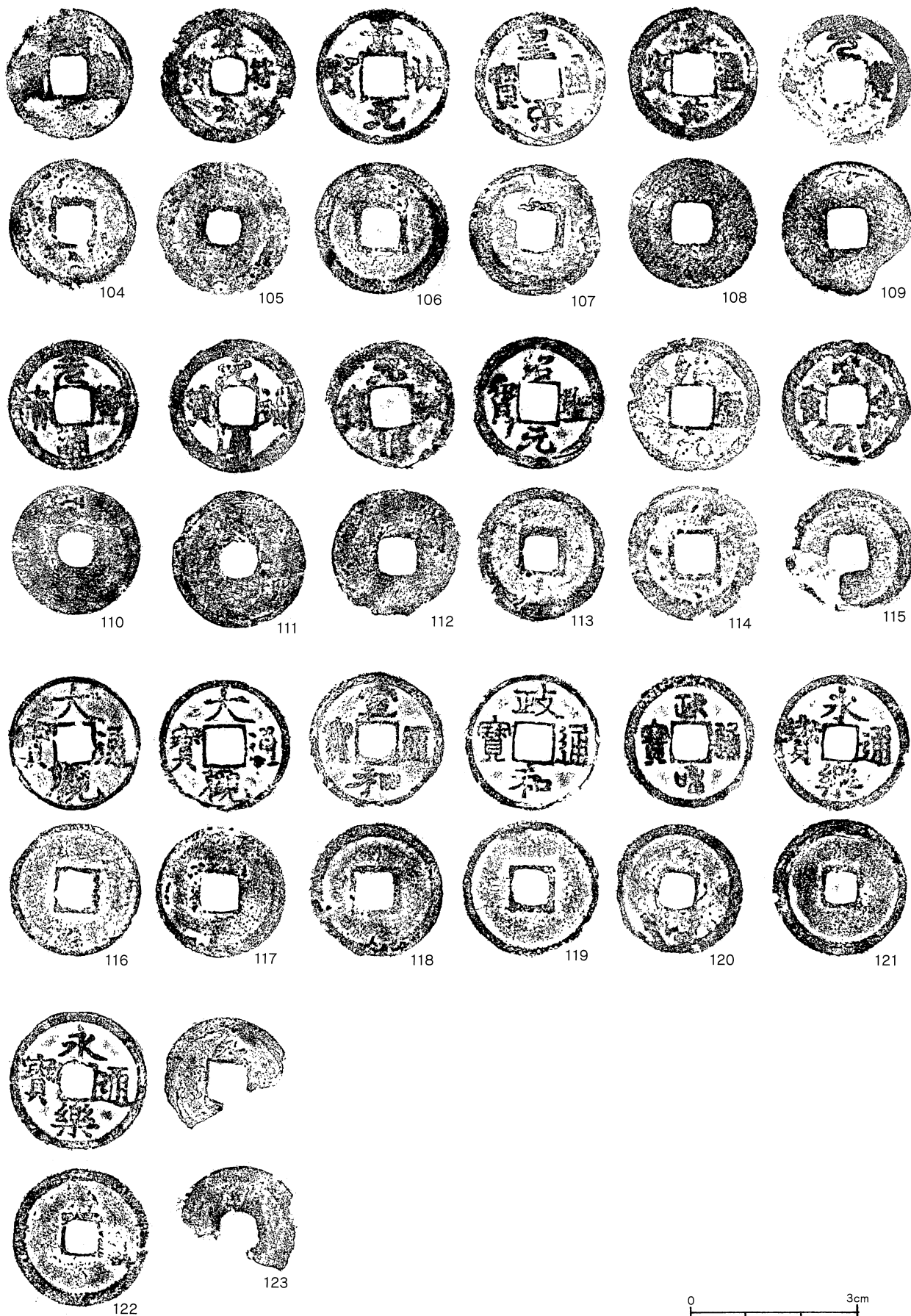


第84図 SP60実測図





第85图 SP60出土土師器実測図



第86圖 SP60出土錢貨實測圖104~123

SP60出土土師器の特徴のひとつは口縁部内面上部を意識的に横方向にナデ調整することである。それに伴い口縁上部器壁が薄くなり、中位が厚いままとなる。

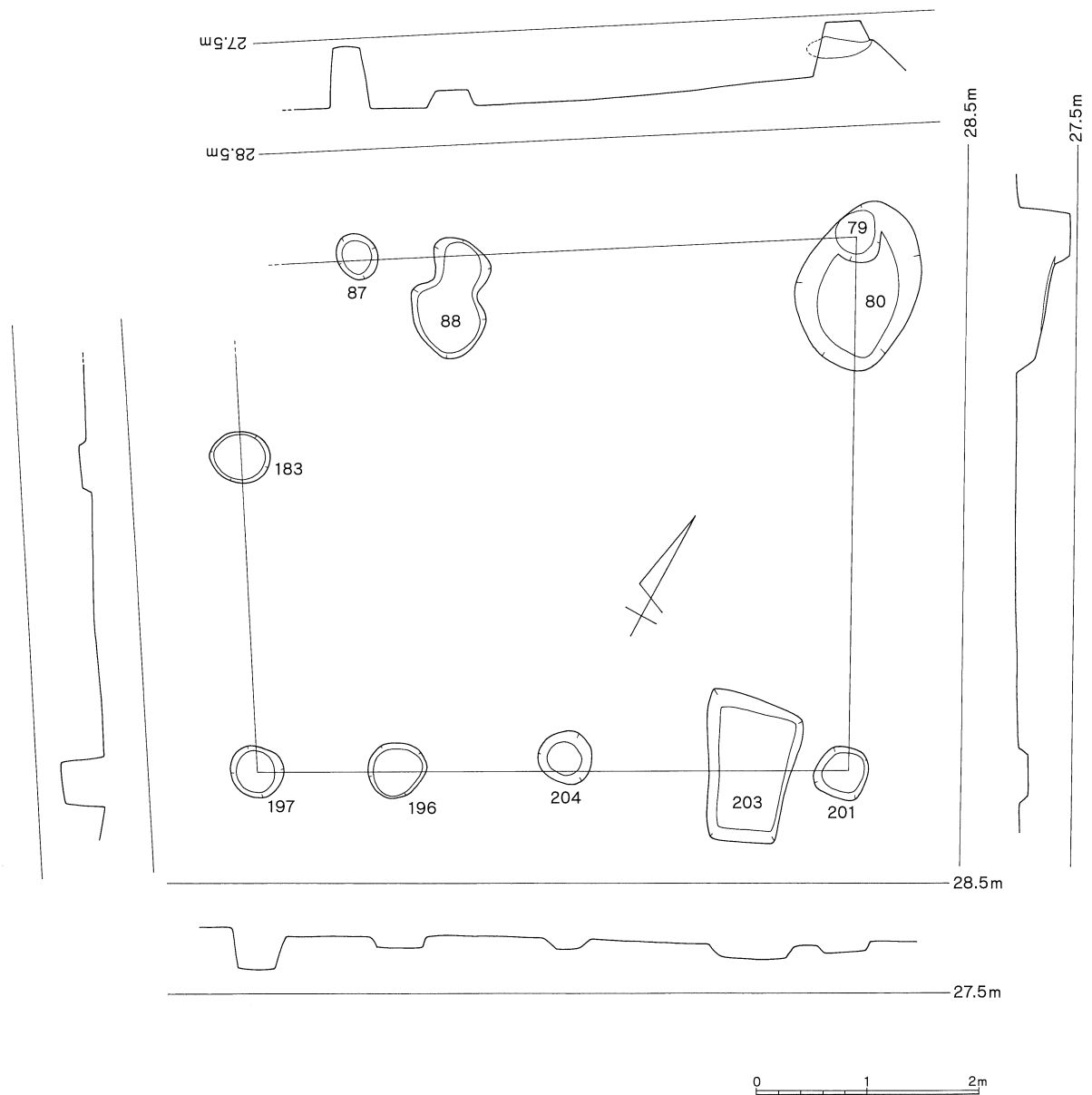
第110図にSP60出土土師器の法量を表化した。全体は明らかに二分化しており、ひとつは口径7cm強・器高2cm強にある小皿で、もうひとつは口径11～13cm前後・器高4cm弱付近に集中する一群である。

### 銭貨

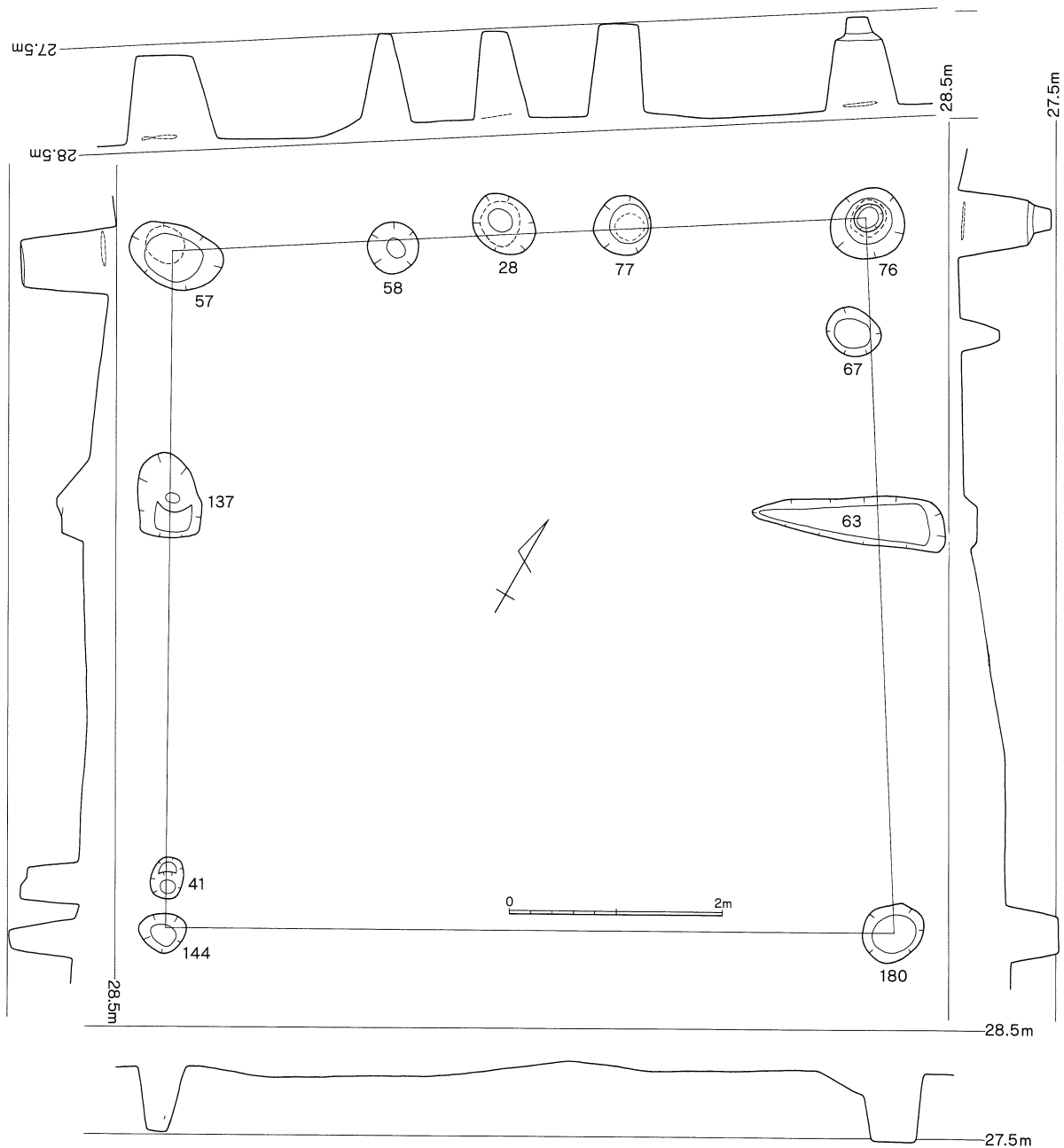
土師器・玉砂利とは離れ、柱があったとみられる付近で二つに割れたさし銭状態で出土した。出土した位置は高さも他の遺物とは異なり、一番低い位置であった。但し、穴の底から25cmほど上位であり、柱を立て、ある程度裏込めの土を埋めた段階に銭貨を入れたものらしい。

SP60の出土銭貨を第86図に示した。

104は唐の「開元通宝」（初鑄年621年）である。105は「祥符元宝」（初鑄年1009年）、106は「景祐元宝」（初鑄年1034年）、107は「皇宋通宝」（初鑄年1038年）、108は「嘉祐通宝」（初鑄年1056年）、109・110は「元



第87図 第2号掘立柱建物跡実測図



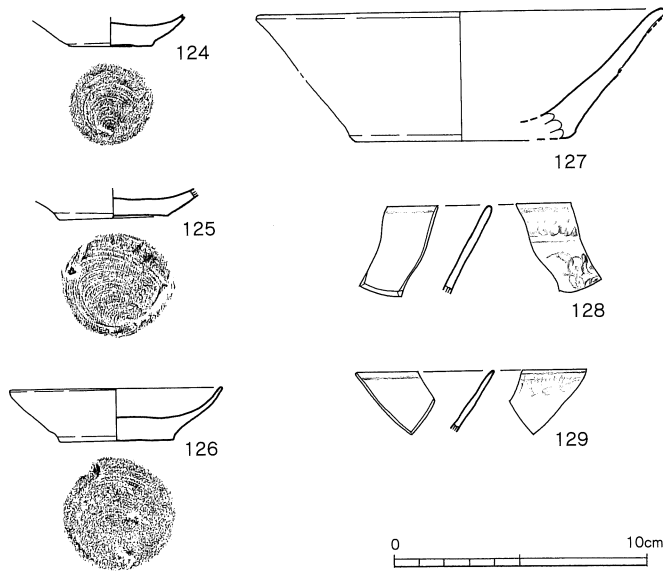
第88図 第3号掘立柱建物跡実測図

豊通宝」(初鑄年1078年)、111・112は「元祐通宝」(初鑄年1093年)、113・114は「紹聖元宝」(初鑄年1094年)、115は「聖宋元宝」(初鑄年1101年)、116・117は「大觀通宝」(初鑄年1107年)、118は「宣和通宝」(初鑄年1119年)、119・120は「政和通宝」(初鑄年1111年)、121・122は「永樂通宝」(初鑄年1408年)、123は不明である。

#### 第2号掘立柱建物跡(第87図)

調査区の中ほど、南寄りに位置する。自然地形を削って出来た平坦面と盛土面にまたがり築かれている。第1号掘立柱建物跡とほぼ同じ方位をもち、南辺に柱穴4個が直線的に並ぶので想定復元したが、全体の柱穴が少なく浅い穴が多いなど不確定要素があり、これが掘立柱建物であったのか確実ではない。出土した遺物はない。この西側と北側にある溝状のものは現代の攪乱である。

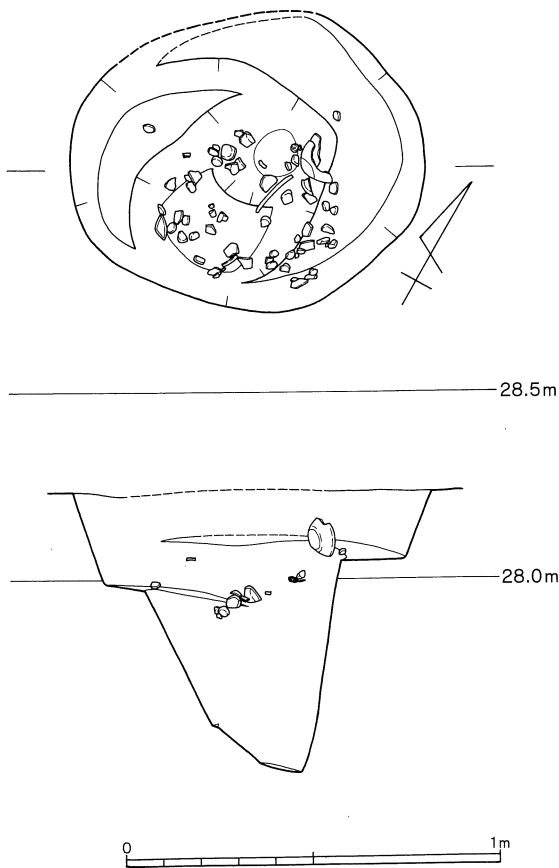
掘立柱建物跡として計測すると、南辺の長さは想定柱中心で5m34cm、東辺で4m78cmである。



第89図 SP57出土遺物実測図

第3号掘立柱建物跡の規模は北側の辺で6m47cmあり、各柱穴の深さは80cm前後にまとまる。東辺は6m58cm、南辺は6m76cmで両端の柱穴の深さは60cmと64cmである。西辺は6m24cmである。

第3号掘立柱建物跡を構成する北西隅の柱穴SP57から第89図の遺物が出土した。また、関連があるのかどうか不明だが、同じ時期の遺物がSP57のすぐ西側で検出したSP54・SP55・SP56からも少量出土している。



第90図 SP43実測図

### 第3号掘立柱建物跡 (第88図)

第1号掘立柱建物跡の西側約18mにあり、それとほぼ同じ方位を示す掘立柱建物跡である。北辺の柱列は東西方向軸に対して東側が34度北に傾いている。第1号掘立柱建物跡の方位が36度であったのとほぼ同じである。

検出場所は全部盛土部分に該当する。北側の辺は柱穴が5個並び、その両端のものが特に深いという特徴と、南側の辺にもそれらしい位置にこの建物の柱穴であろうと想定できるものがあるので想定した。

第3号掘立柱建物跡の東側、特に第1号掘立柱建物跡とを結ぶ空間は比較的遺構の分布が少ない場所であるが、第1号掘立柱建物跡は遺物から見て若干先行する時期の建物である。従って、両者が併存する時期の庭などの空間であったとは思われない。

### SP57出土遺物 (第89図124~129)

124~126は土師器の小皿である。これらは胎土に茶色の酸化土粒を含み、本遺跡出土の他のSP34・SD62などと類似する。

124・125は口縁端部を欠き、底径は124は3.4cmで、125は4.3cmである。

126は口径8.2cm、底径4.5cm、高さ2.1cmである。

127は一部分だけだが口縁部上端から底部までの破片である。口縁部上端は短く外湾する。内面上部を強く横方向になる特徴は認められない。復元値は不確実だが口径15.8cm、底径8.4cm、高さ5.1cmである。

128・129は中国景德鎮窯系青花で小野分類のC群碗(蓮子碗)で、16世紀前半のものであろう。129の方が器壁が薄く、両者は別固体である。

### SP54 (第71図参照)

第1号掘立柱建物跡の西側にある遺物を出土した柱穴のうち、一番西側のものである。深さは60cmあ

り、第92図の遺物が出土した。

SP54出土遺物 (第92図)

141は中国景德鎮窯系青花皿で小野分類の染付皿B群である。15世紀後半～16世紀前半頃。

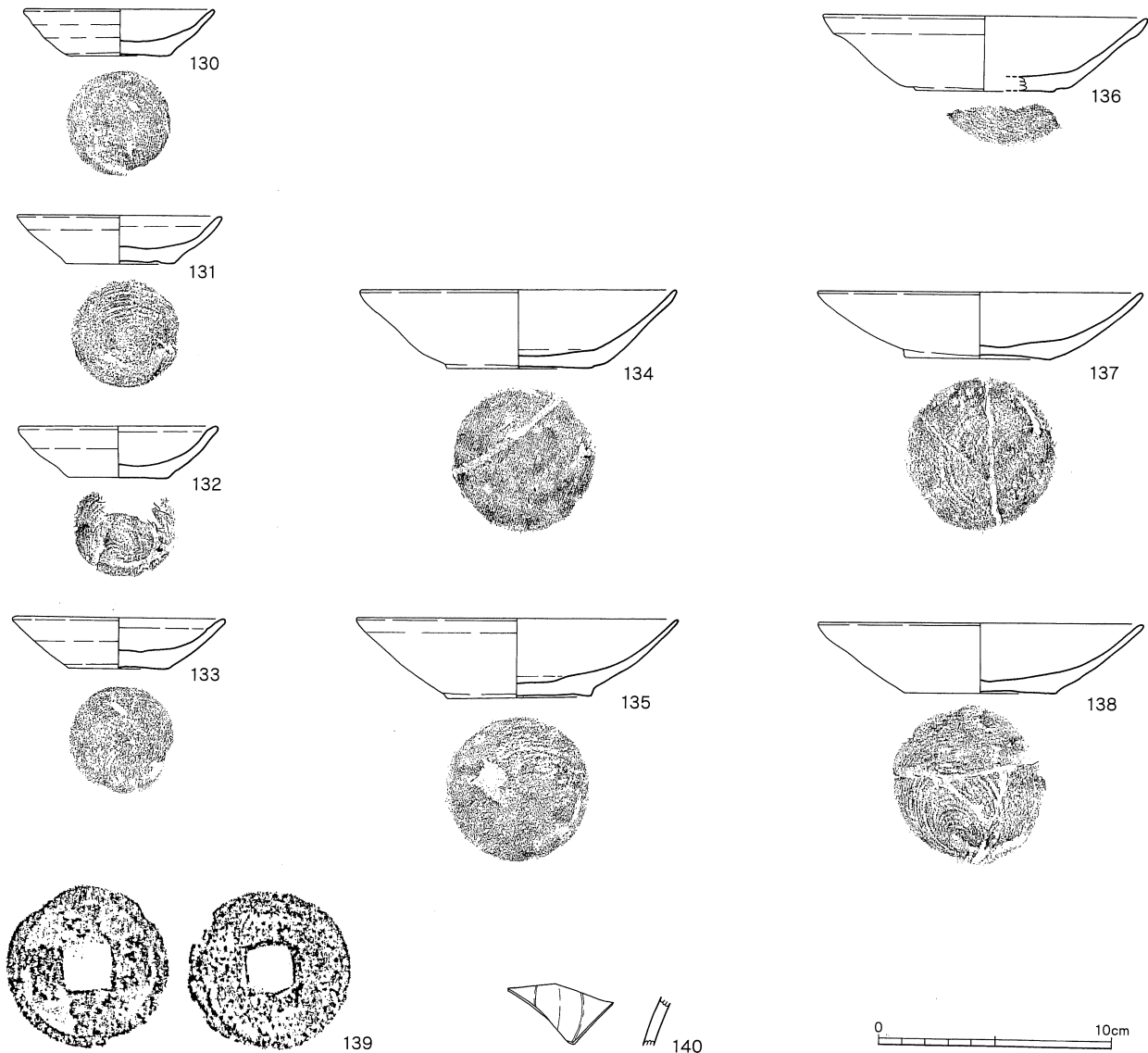
SP55 (第71図参照・第92図)

SP54のすぐ北側にあり、SP56と重複する柱穴である。先後関係は不明。SP55の深さは64cm。

142は胎土に茶色の土粒を含み、SP34等と同様の土師器皿である。底径5.0cm。

143は胎土・釉薬とも黄色味を帯びる。外面の釉薬は破片の左下部には掛けられていない。文様は一筆書きの中国漳州窯系の青花皿で16世紀後半。

144は中国景德鎮窯系青花で小野分類のC群碗（蓮子碗）で、16世紀前半のものであろう。



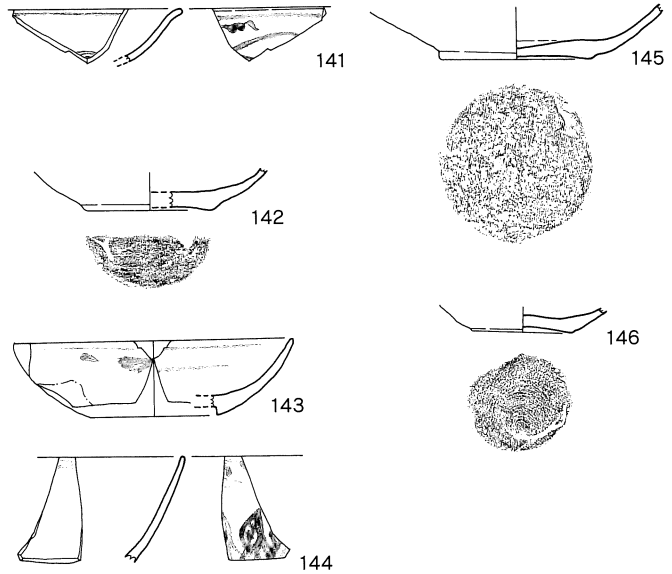
第91図 SP43出土遺物実測図

SP43 (第90図)

第3号掘立柱建物跡と第4号掘立柱建物跡の間に位置する土坑である。平面形は楕円形で規模は東西95cm・南北80cmで、深さは75cmである。

穴は三段に分かれていて、三日月状の平坦面が向かい合うように存在する。

遺物は上段の平坦面から中心に向かい斜めに分布し、上位に土師器があり、その下に玉砂利が一面に出土した。図・写真では玉砂利の多くを掘り上げた後の状態である。SP60と同じように下に玉砂利、上に土師器という順番で堆積している訳である。



SP43出土遺物 (第91図130~140)

130~138は土師器で、130~133は小皿、134~138は坏である。

すべて茶色の酸化土粒を含む。130は口径8.0cm・底径4.5cm・高さ2.0cmで他の3点に見られる口縁上部の稜をなす横方向ナデ調整は顕著ではない。

131は口径8.7cm・底径4.7cm・高さ2.1cmで、口縁上部ないし外面に稜をなす横方向ナデの痕跡を残す。

132は口径3cm・底径4.4cm・高さ2.2cmで131同様の特徴をもつ。

133は口径8.9cm・底径4.5cm・高さ2.2cmである。坏は浅く体部が広がる。また体部器壁が薄い共通点がある。

134は口径13.4cm・底径6.2cm・高さ3.4cm。

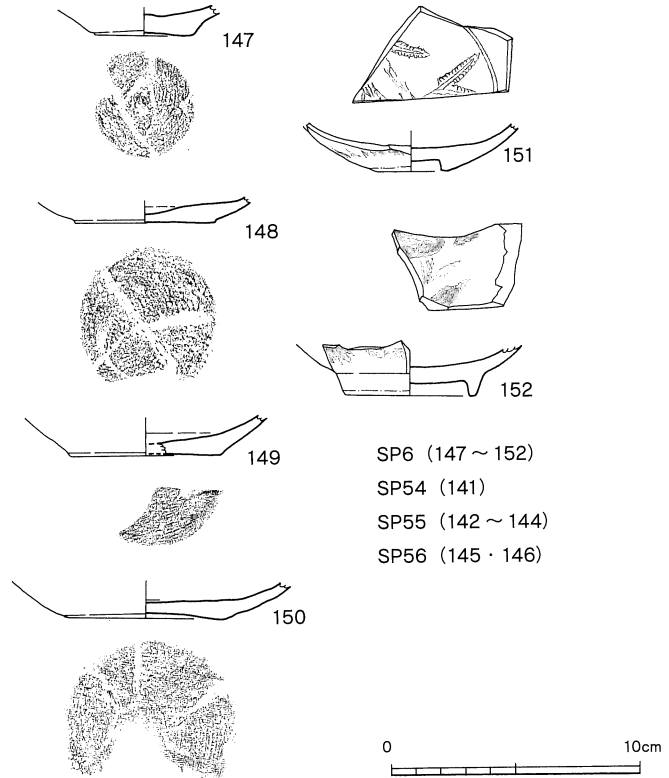
135は口径13.7cm・底径6.2cm・高さ3.4cm。

136は口径13.8cm・底径6.0cm・高さ3.2cmである。

137は口径13.8cm・底径6.2cm・高さ2.9cm。

138は口径13.9cm・底径6.5cm・高さ3.0cmである。

139は銭貨だが銘は不明。140は中国龍泉窯系の青磁碗。ヘラ切りによる鎬蓮弁紋をもつ。

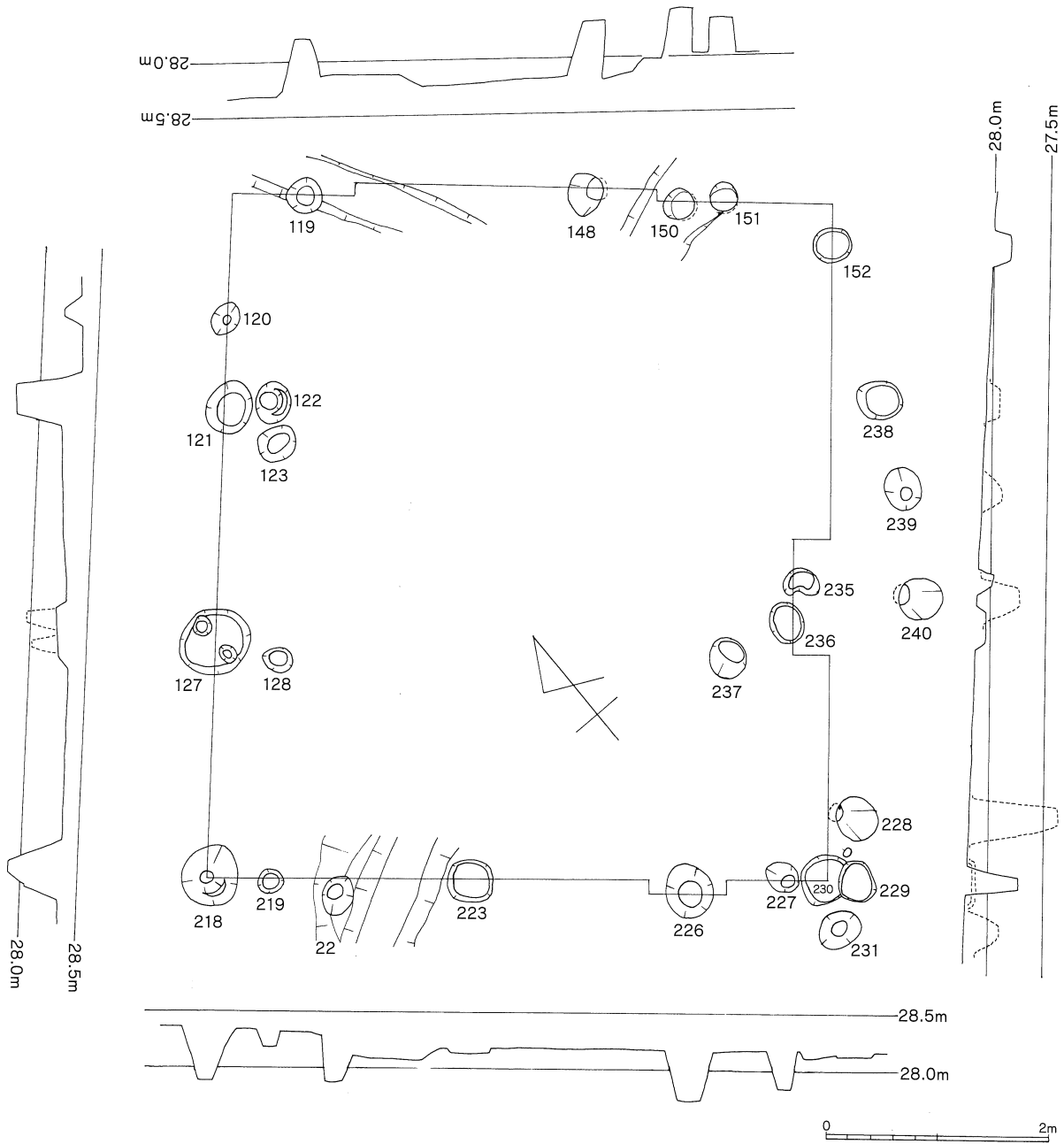


SP6 (147~152)  
SP54 (141)  
SP55 (142~144)  
SP56 (145・146)

第92図 SK6・SP54~56出土遺物実測図

第4号掘立柱建物跡 (第93図)

調査区西部中央に位置する。柱穴を選んで建物跡を推定したのであり、確実にこの形であったのか断定は出来ない。柱穴の深さも一定しない。建物の方角は南辺で計測すると東西軸に対して西側が40度北に振れる。建物の主軸方位は他の三棟とはまったく異なる点も再検討の余地を残す。

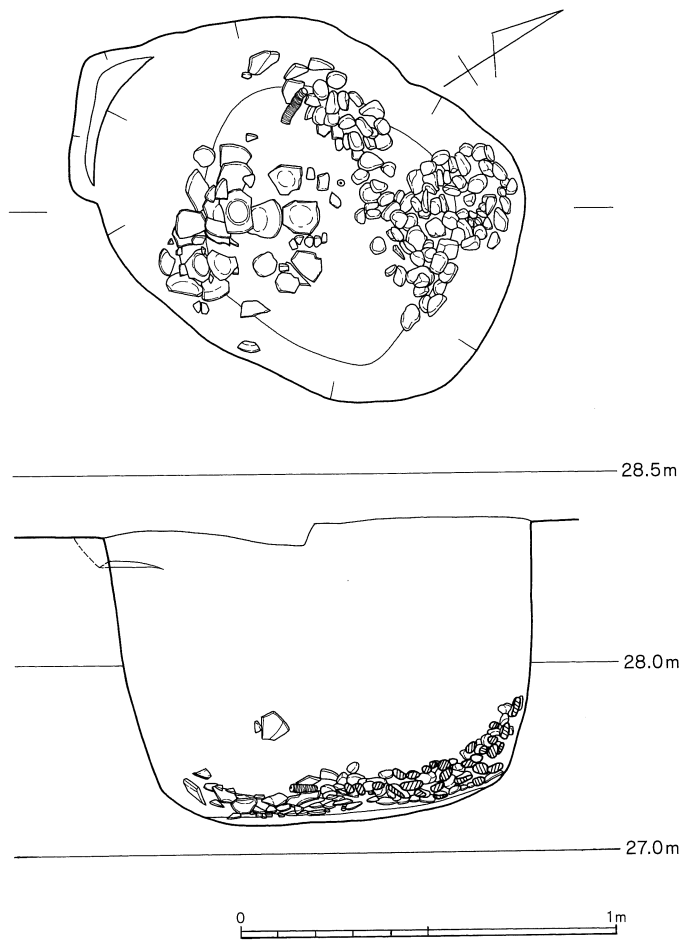


第93図 第4号掘立柱建物跡実測図

時期の分かる遺物は出土していないが、第4号掘立柱建物跡の西隅から約2m離れた位置に玉砂利や土師器を多数出土したSK34があり、SP60と第1号掘立柱建物跡との関係のようにSK34は第4号掘立柱建物跡に関連すると思われる。

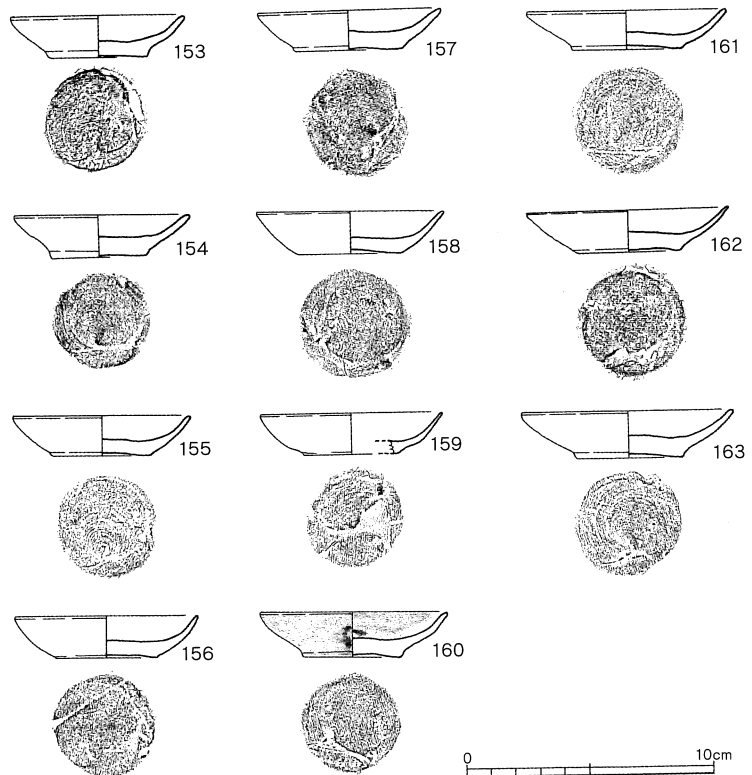
第4号掘立柱建物跡の四辺は西が6.2m、東が6.1m、北が5.4m、南が5.6mである。





第94図 SK34遺構実測図

243～301は底部の破片である。坏は口径11.2cm～13.9cm（平均12.4cm）・底径5.4cm～6.5cm（平均5.9cm）・高さ2.0cm～3.3cm（平均2.6cm）。坏の体部は底部に比べ明らかに薄く、緩やかに内湾する特徴がある。図化できた合計301点の内、小皿が12点、坏が289点の内訳となる。



第95図 SK34出土遺物実測図(1) 153～163

### SK34 (第94図)

SK34は第4号掘立柱建物跡の西南側で検出した平面楕円形の土坑である。

南西－北東に長軸をもち、規模は縦128cm、横88cm、深さ130cmである。床面は平坦ではなく丸みを帯びている。床面に接して南西部を中心に土師器皿群があり、北東部を中心に緑色の円礫96個が出土した。

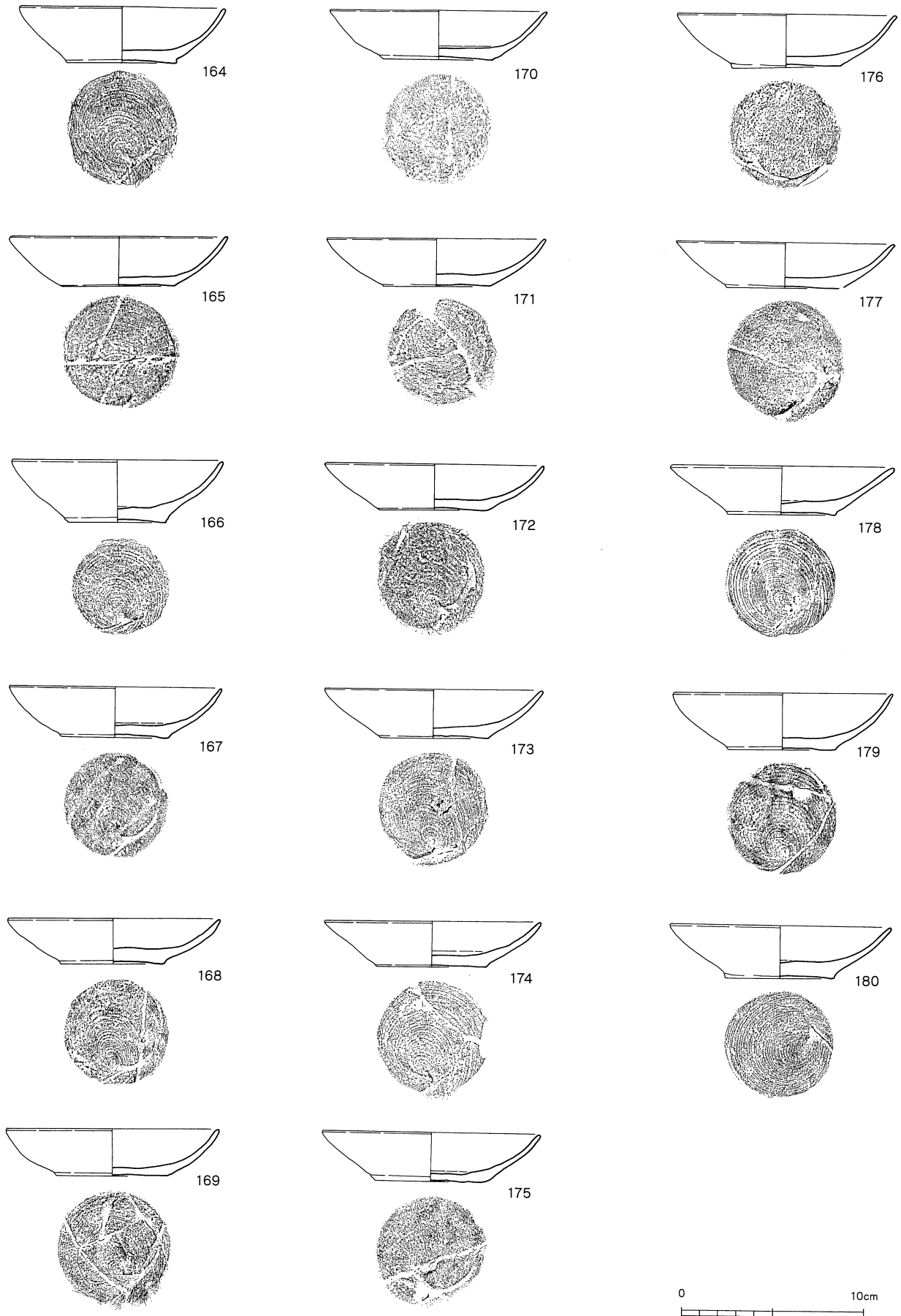
礫は長さ5.6cm前後のものが多い。土師器、礫が堆積した上位に接する形でさし銭87枚及びこれと少し離れた位置で単独の銭貨1枚が出土した。

### SK34出土土師器 (第95～102図153～301)

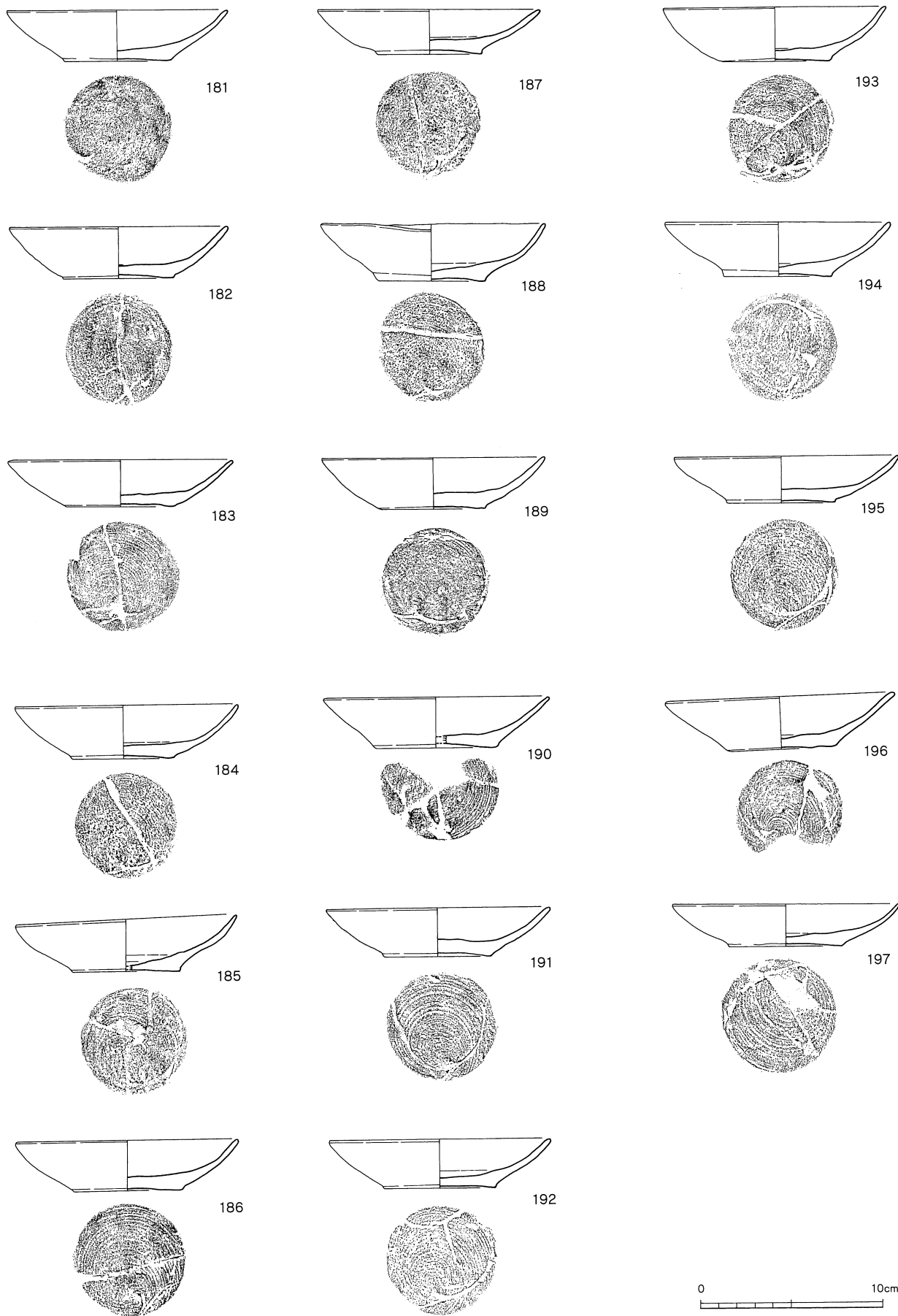
153～301は土師器で、153～163・242は小皿、そのほかは坏である。

153～163の小皿は口径7.0cm～8.6cm、底径3.8cm～4.4cm、器高1.6cm～1.9cmである。160は両面に煤が付着しており、二次的な熱を受けている。

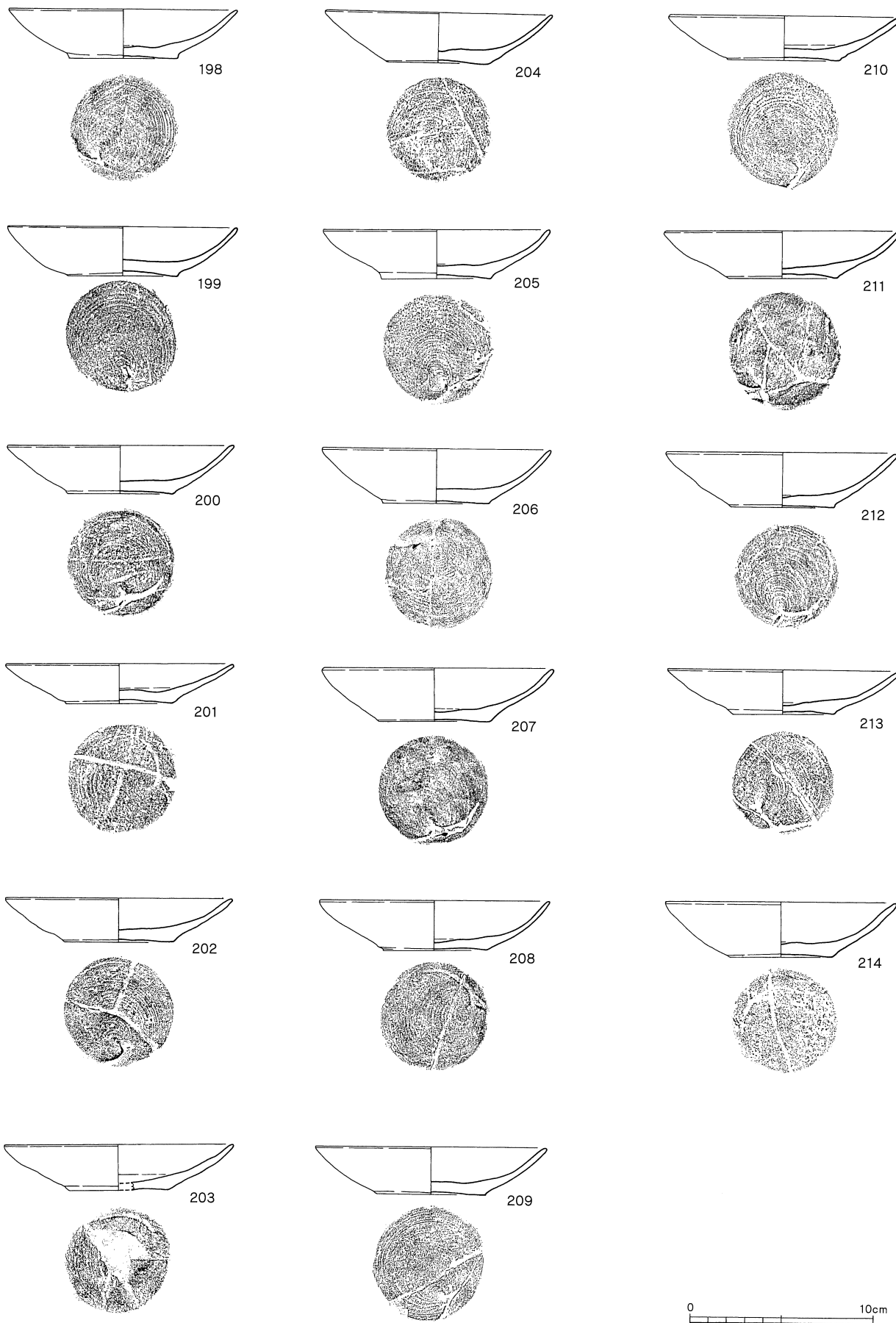
164～241は坏の全体が分かるもので、



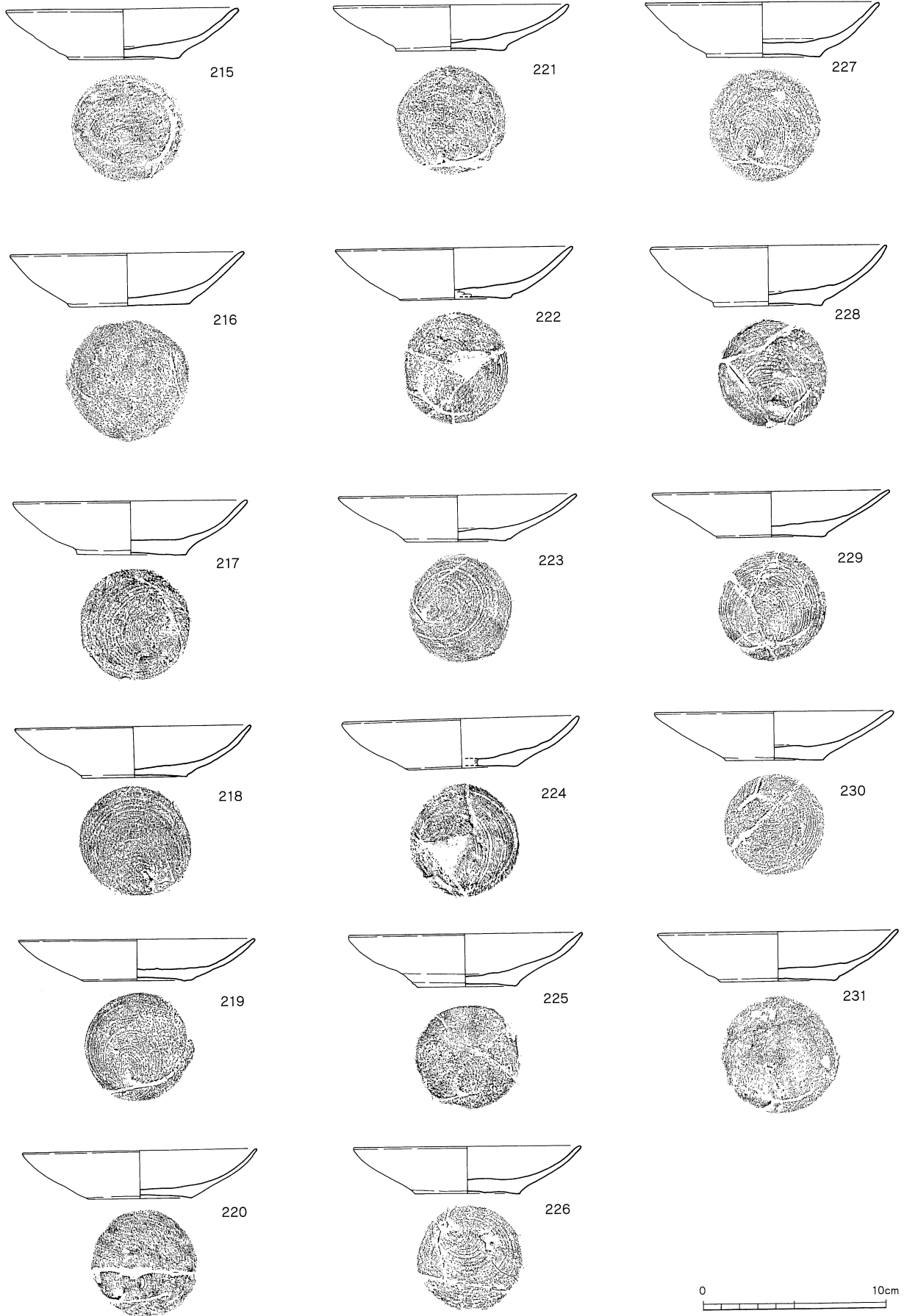
第96図 SK34出土遺物実測図(2) 164~180



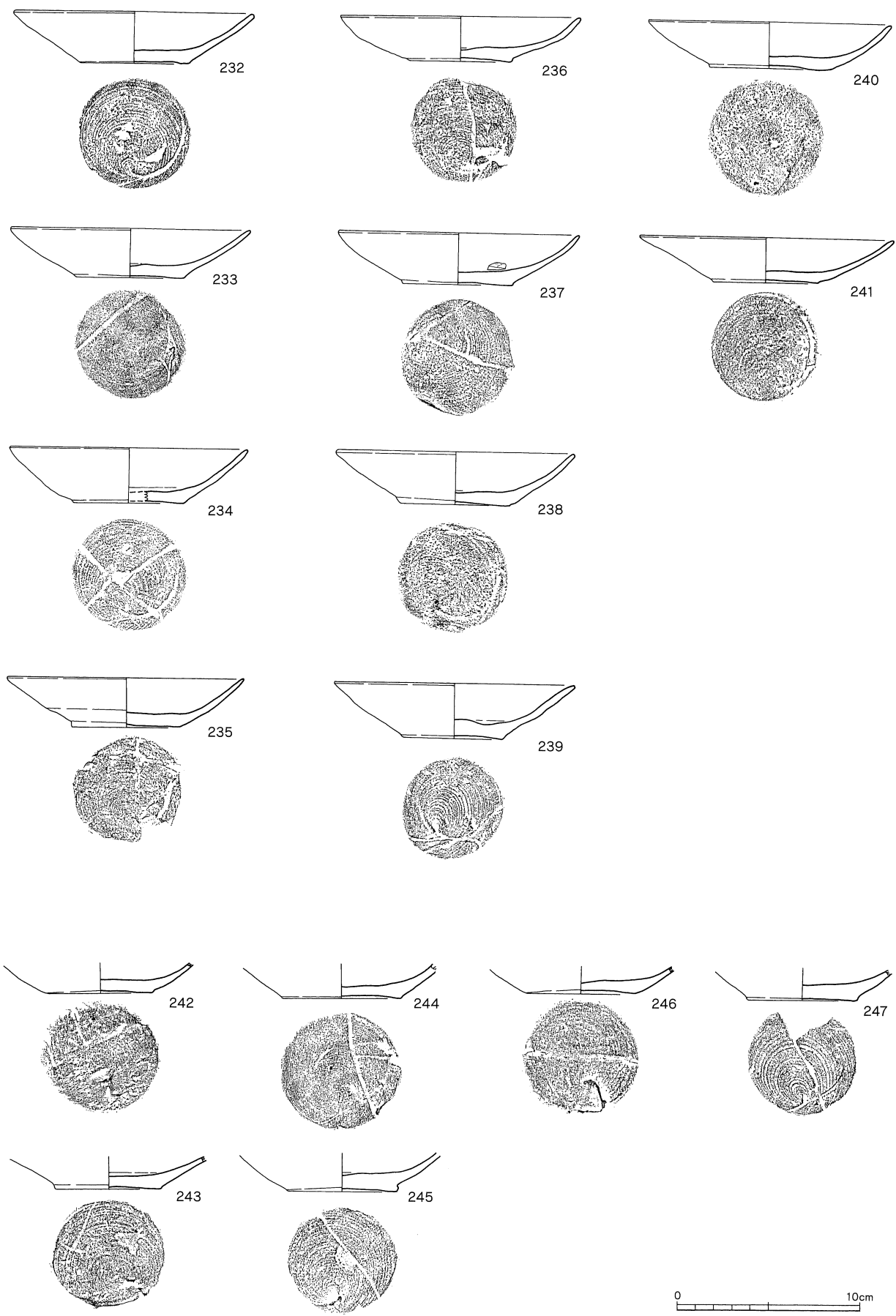
第97図SK34出土遺物実測図(3) 181~197



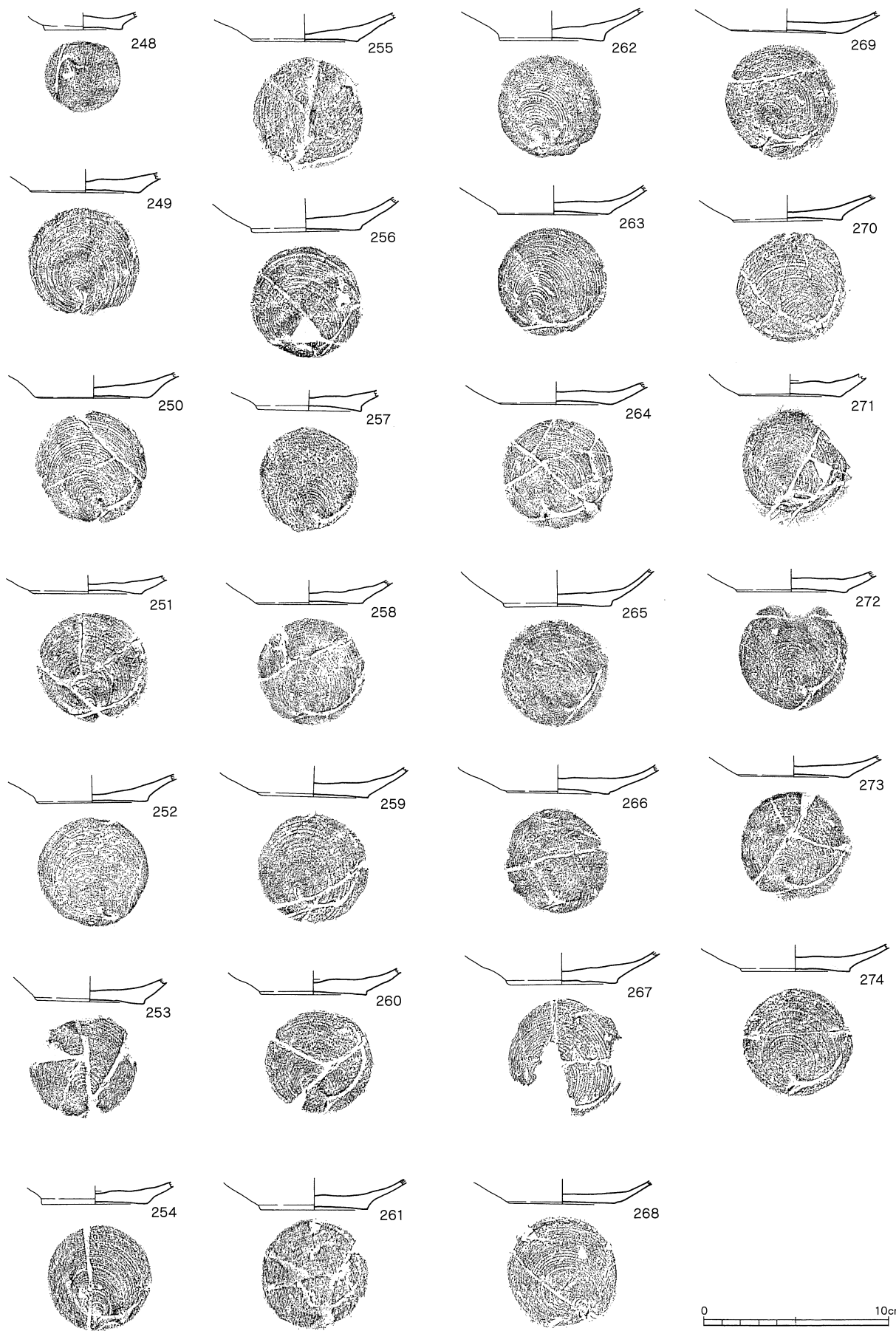
第98図 SK34出土遺物実測図(4) 198~214



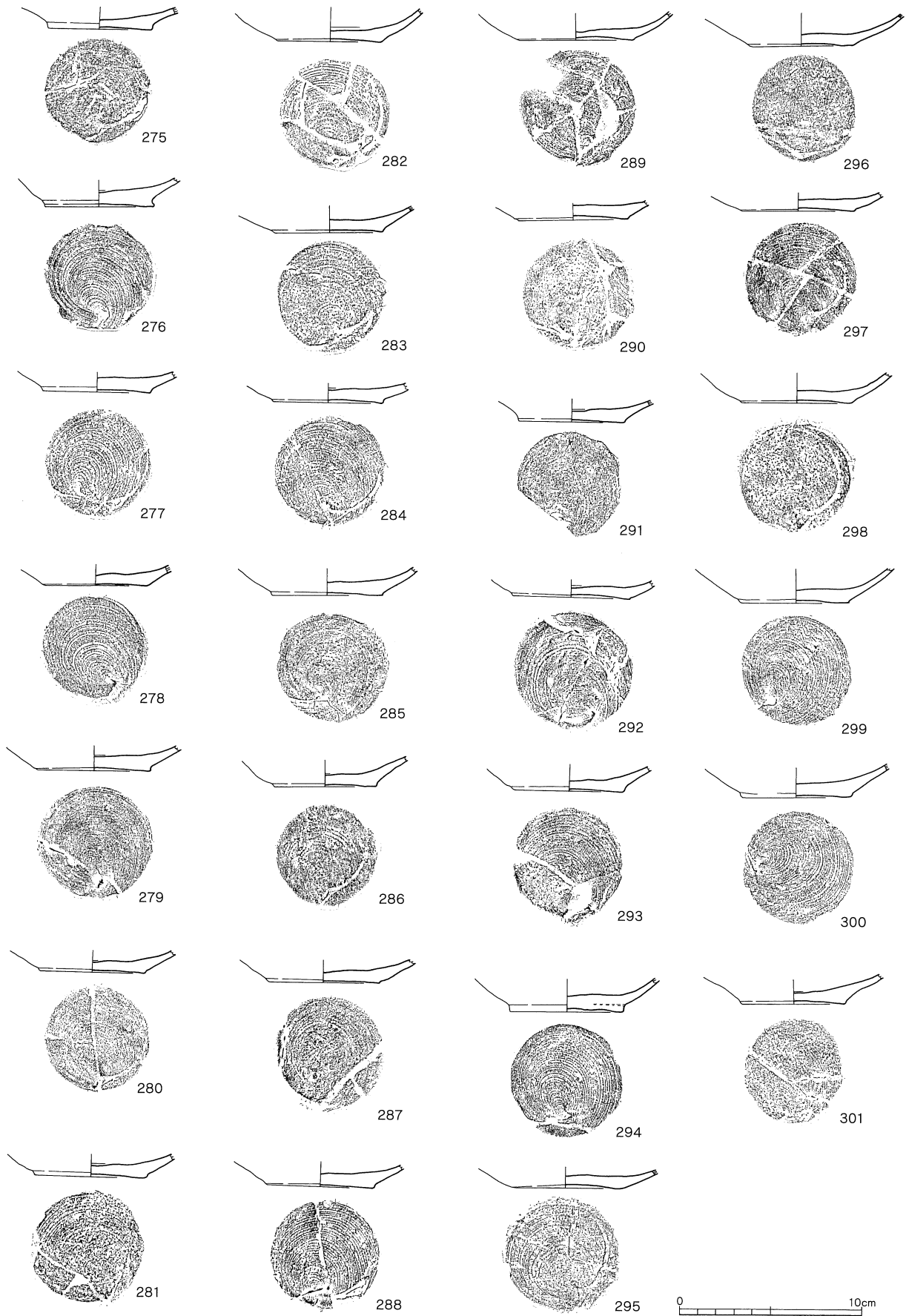
第99図 SK34出土遺物実測図(5) 215~231



第100図 SK34出土遺物実測図(6) 232~247

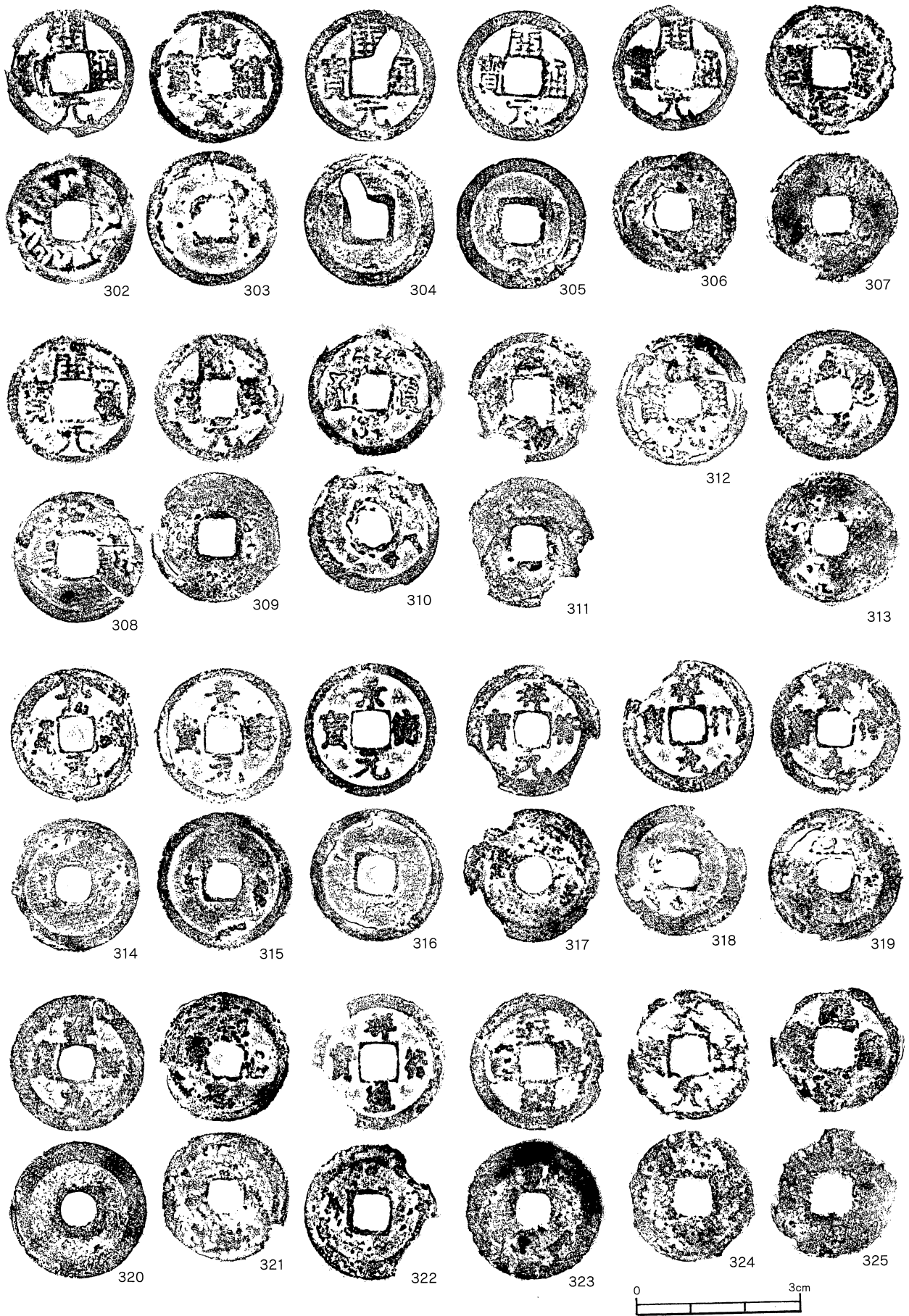


第101图 SK34出土遺物実測図(7) 248~274

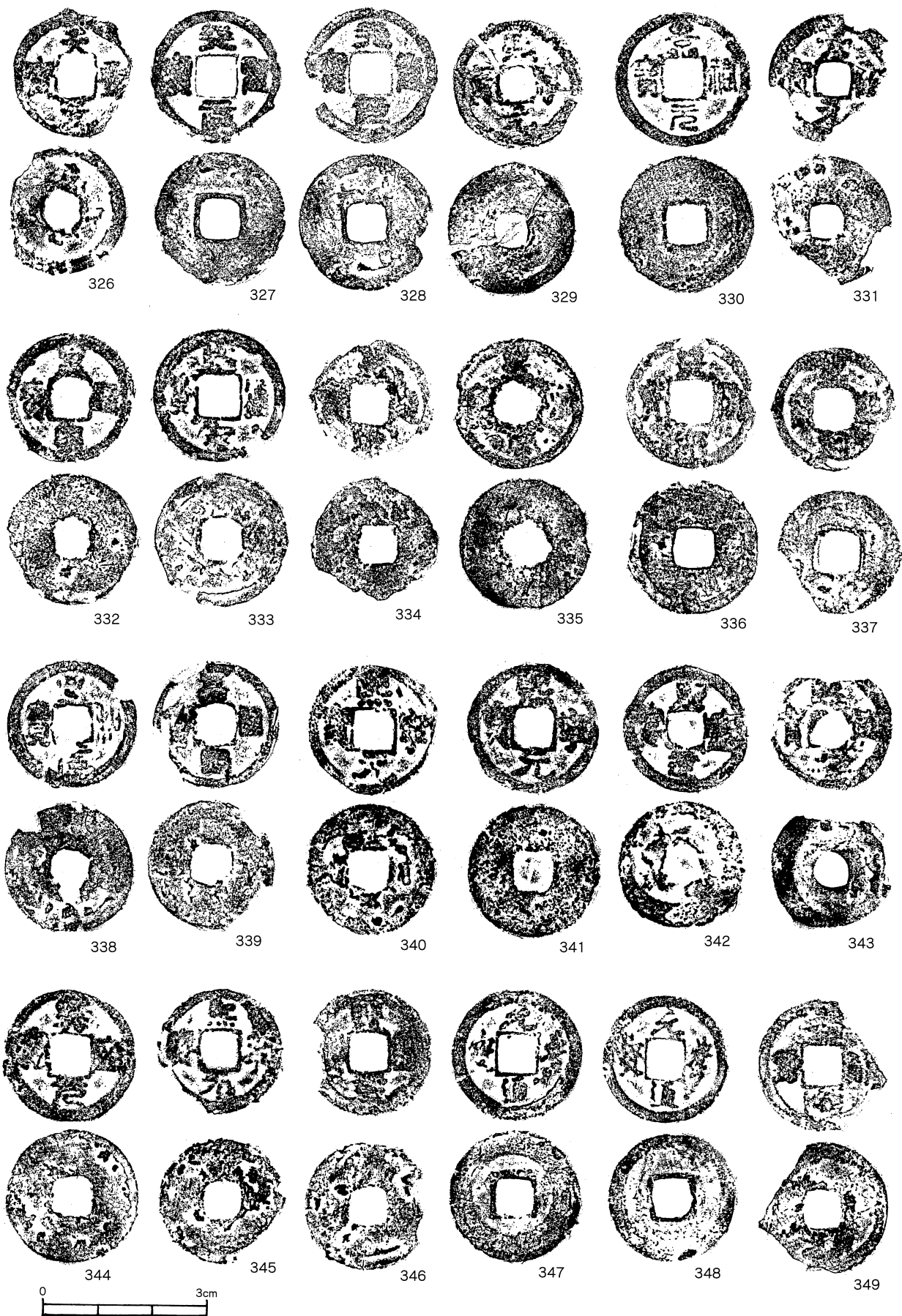


第102図 SK34出土遺物実測図(8) 275~301

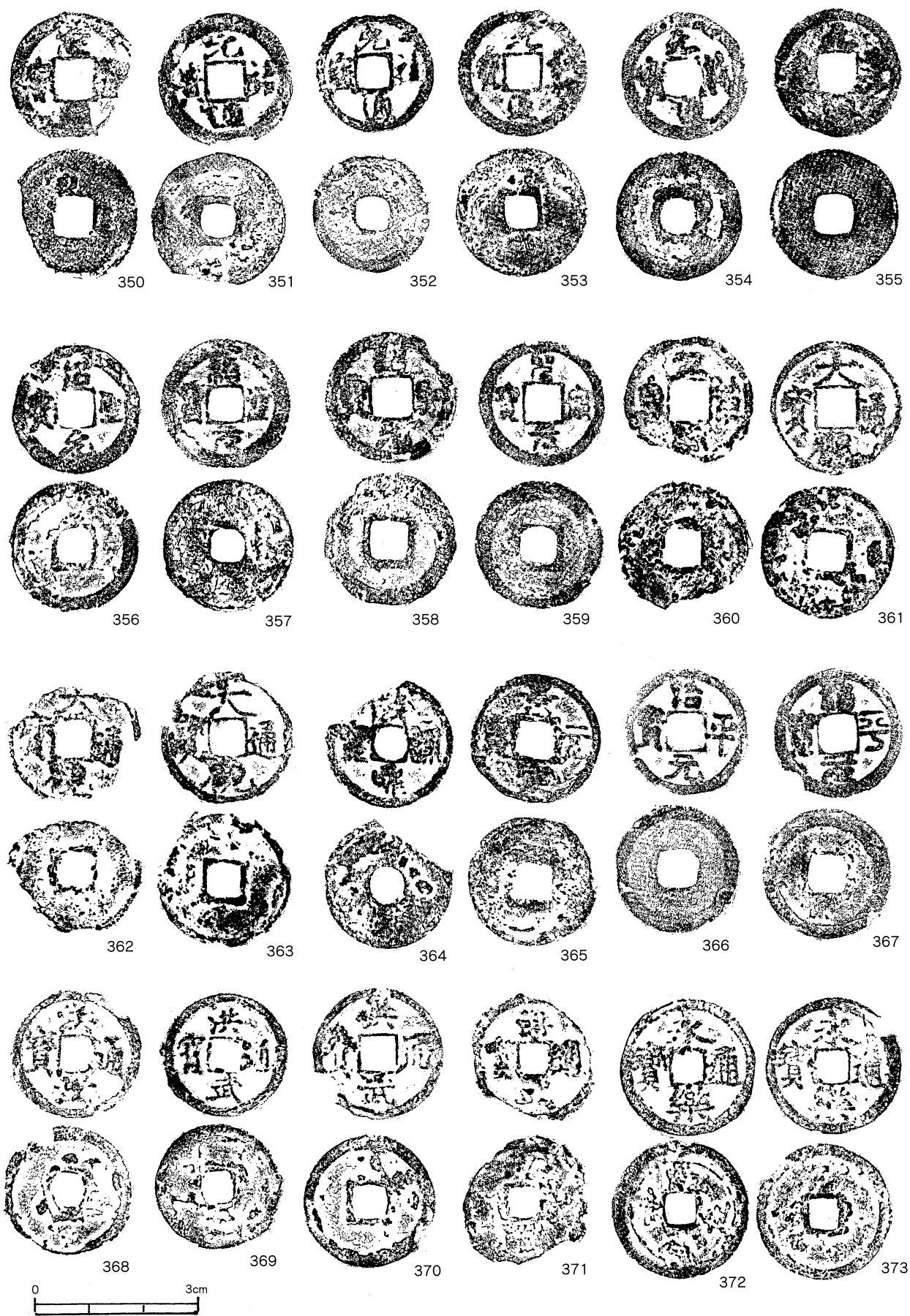




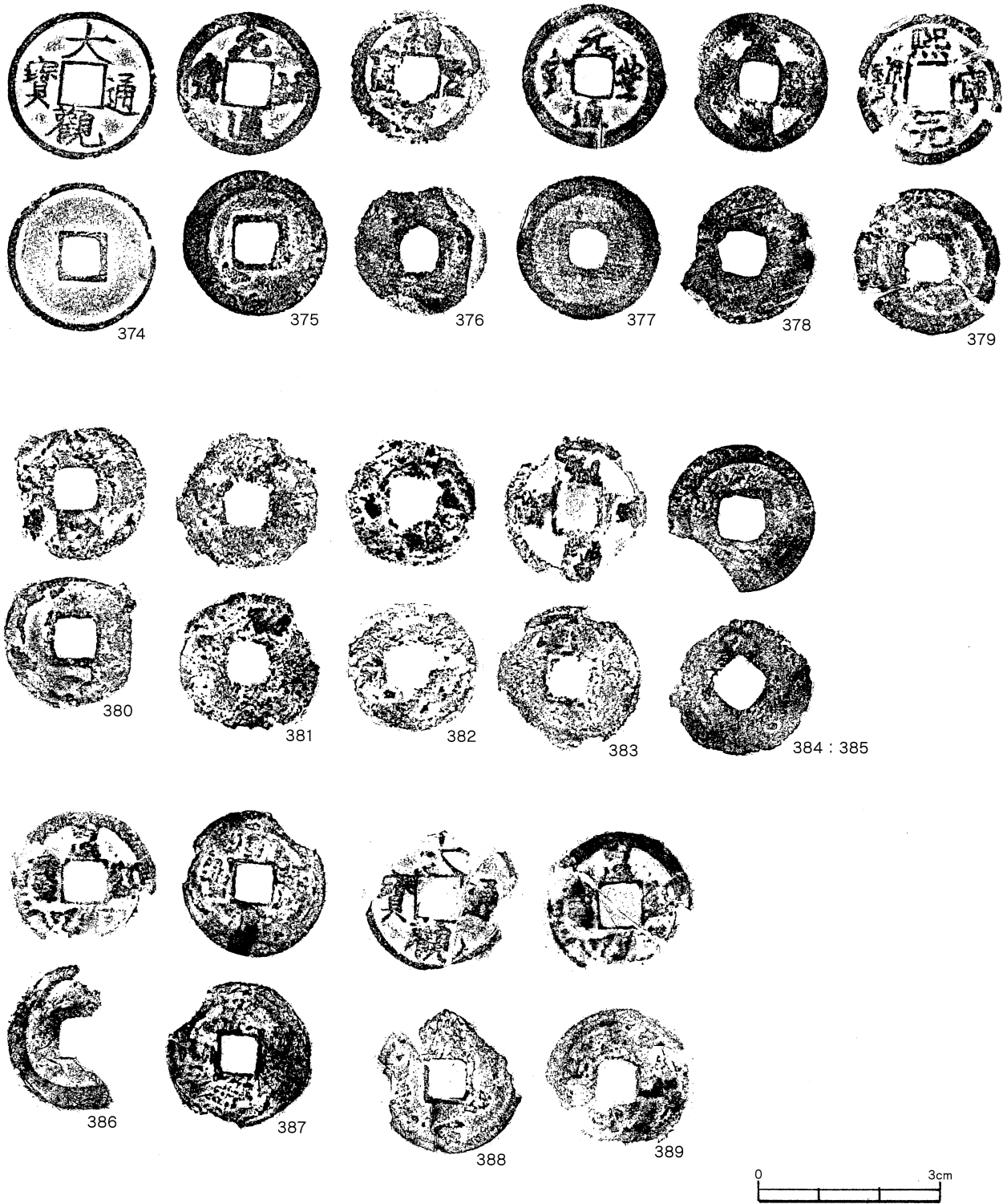
第103図 SK34出土銭貨実測図(1) 302~325



第104図 SK34出土銭貨実測図(2) 326~349



第105図 SK34出土銭貨実測図(3) 350~373



第106図 SK34出土銭貨実測図(4) 374~385

SK34出土銭貨(第103図302~第106図389)

第103~106図302~389はSK34の出土銭貨である。

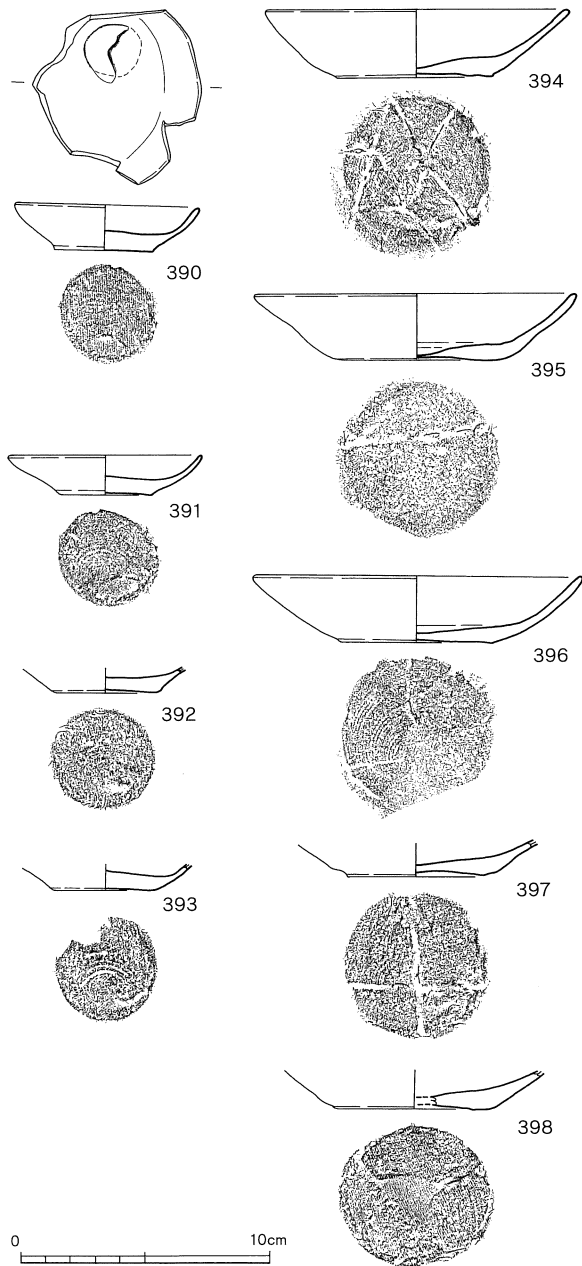
302~309は唐の「開元通宝」(初鑄年621年)である。

310~313は北宋の「至道元宝」(初鑄年995年)、314~316は北宋の「景德元宝」(初鑄年1004年)、317~323は北宋の「祥符元宝」(初鑄年1009年)、324~328は北宋の「天聖元宝」(初鑄年1023年)、329~337・360は北宋の「皇宋通宝」(初鑄年1038年)、338は北宋の「至和元宝」(初鑄年1054年)、339は北宋の「嘉祐通

宝」(初鑄年1056年)。340～346・379は北宋の「熙寧元宝」(初鑄年1068年)、347・348・377・378は北宋の「元豊通宝」(初鑄年1078年)、349～355・375は北宋の「元祐通宝」(初鑄年1093年)、356～358・376は北宋の「紹聖元宝」(初鑄年1094年)、559・360は北宋の「元符通宝」(初鑄年1098年)、361～363・374・389は北宋の「大觀通宝」(初鑄年1107年)、364北宋の「政和通宝」(初鑄年1111年)である。

365は南宋の「景定元宝」(初鑄年1260年)、366・367は北宋の「治平元宝」(初鑄年1064年)である。

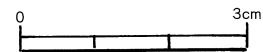
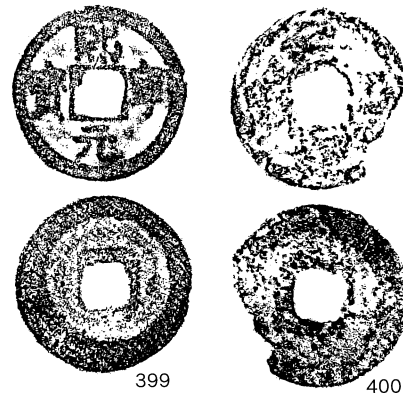
368～371は明の「洪武通宝」(初鑄年1368年)、372・373は明の「永樂通宝」(初鑄年1408年)である。384と385は銘文面が向き合い、二枚が分離せず錢貨名不明。380～383は錢貨名不明。以上のように北宋錢がもつとも多く、次に明錢、南宋錢が続く。



第107図 SD62出土遺物実測図

SD62 (第71図参照)

SK34の北側約4mにある長さ6.2m、深さ最大16cmの溝状遺構である。小皿390の内部から錢貨2枚が出土した。



第108図 SD62出土錢貨

SD62出土遺物(第107図390～第108図400)

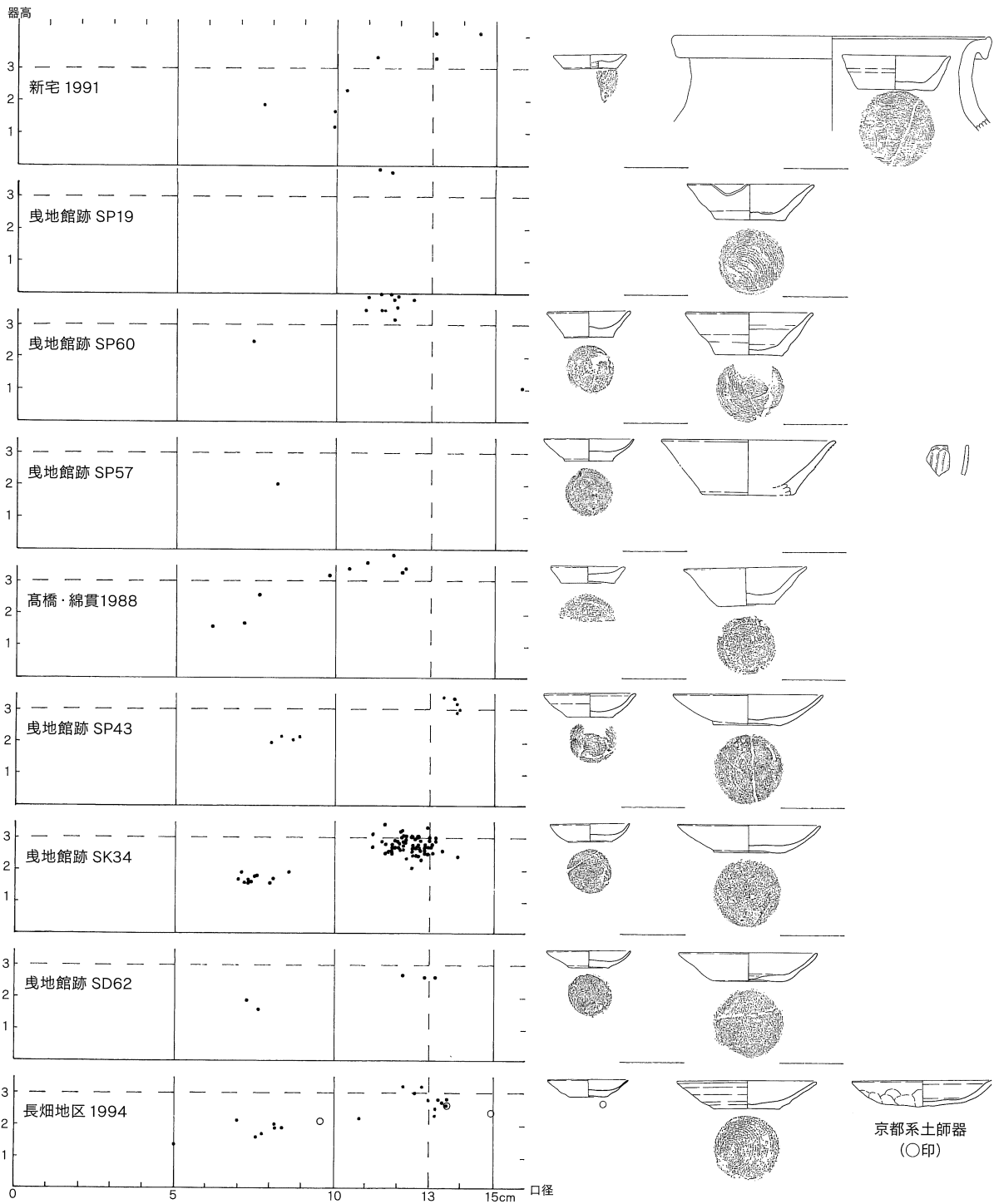
390～398は土師器で390～393は小皿、394～398は坏である。小皿体部は滑らかなナデ調整され、底部に比べ薄い。390の見込みには錢貨の鏽が付着する。399は北宋の熙寧元宝(初鑄年1068年)で400は不明。

## 第4節 小結

出土遺物から本遺跡の年代をもとめ、遺跡の性格について触れたい。

### 遺物の年代

本遺跡から出土した土師器の皿・坏はすべて在地系技術で作られており、16世紀前半から豊後国の広い地域で流行する京都系土師器は1点もみられない。ところが佐伯市内の長畑地区の調査では、曳地館跡 SP60・SK34・SP43等に似た土師器と共に京都系土師器が少なからず出土しており、本格的に流入したか、或いは付近でも製作を始めた段階が存在したと考えられる。その京都系土師器はすべて厚手の作りで、16世紀中頃から後半の特徴



第109図 佐伯市内の中世土師器(小皿坏)の法量比較(縮尺不動)

をもっている。長畑地区遺物に先行するSK34・SP43等はそれ以前、おそらく16世紀中頃であろう。

曳地館跡SK34とSP43の土師器は一見共通点が多いように見えるが、細かく見ると相違点がある。SP43の小皿口縁部両面に強く残される横方向ナデはわずかに稜線を作るが、SK34では器壁が薄く器面は滑らかな屈曲面となっている。また、それぞれの寸法平均値はSK34小皿が口径7.6cm・底径4.1cm・高さ1.7cmで、SP43小皿は口径8.5cm・底径4.5cm・高さ2.1cmとSK34のほうがすべての点で小さい。坏はSK34が口径12.4cm・底径5.9cm・高さ2.6cmで、SP43が口径13.7cm・底径6.2cm・高さ3.2cmでSK34がすべて小さい。

このように両者には相違があり、SK34とSP43とは新古の関係にあると思われるがどちらが新しいのか判断できない。どちらも京都系土師器のように低平化しており、その影響を受けたとみられる。SP43の小皿口縁部にみられる強い横方向ナデを京都系土師器の影響とみて、小皿・坏とも京都系土師器のように口径が大きくなっている点を重視すればSP43が新しいのかも知れない。

豊後府内を中心に16世紀前半には京都系土師器が在地系土師器を凌駕し、後半には大多数を占めるようになるが、以上見てきたように本調査区出土の在地系土師器が低平化するのはその影響とみられる。

なお、本遺跡出土の土師質土錘は胎土に茶色の酸化土粒を含んでおらず、土師器皿・坏とは別の粘土が使われており、土師器とは別の生産地からもたらされている。

### 遺跡の性格

曳地館跡という名称は「城郭大系」で初めて三重野元氏が使用したものである（三重野1979）。これは、地理的位置・地形・引地という地名から愛宕神社の地を小野英治氏が「佐伯史談」で梅牟礼城に対応する佐伯氏の館があったのではないかと推定したのを受け継いだものであろう（小野1971）。以前行われた試掘調査によれば愛宕神社境内出土遺物は近世までしか遡れず（綿貫1990）、佐伯氏の館があった可能性は低い。今回の調査地は愛宕神社ではないが、その背後に連なる尾根にあるという意味で曳地館跡としたのである（試掘担当者による）。

なお、愛宕神社は字「引地ノ下」にあり、本調査区の字は「大田」である。調査区背後の尾根を登ると梅牟礼城から南東に延びる尾根に到達し、後は尾根筋を進んで城跡に至ることが出来る。

検出した遺跡は大規模に山を切り崩し、谷を埋め造成してできた約1,300㎡の平坦面に掘立柱建物が建てられていたことが分かった。造成時期は15世紀末か16世紀前半頃と遺物面から考えられる。尾根を削った面に最初に第1号掘立柱建物跡が建てられたことは確実で、遺物が少ないがおそらく第3号掘立柱建物跡も同時に建てられたのであろう。また、中間に位置する第2号掘立柱建物跡も遺物はなかったが方位を共有するので、同時に建てられたのであろう。

埋立てでできた西部の平坦面には掘立柱建物跡を復元できなかったが3棟から4棟の建物があってもよいくらいの柱穴が検出されている。そこに重なる第4号掘立柱建物跡は、付近のSK34が建設に伴う祭祀遺構であれば造成期のものではなく、より新しい年代のものである。建物跡の方位が異なる点も第4号掘立柱建物跡が造成期ではないことを支持する。

### 遺跡の規模

本遺跡のような造成作業はある程度の動員力をもつ有力者によると考えられるが、佐伯地方を領した佐伯氏の本拠とみていい規模であろうか。字図によると本調査地の北東約180m付近には「土居之内」という字がある。門前川沿いの低地にあり、現在は造成され団地になっている。発掘調査されていないのが残念であるが、地名からここも佐伯氏の館跡候補として無視できない場所で、規模は南北約62m、東西約35mの細長い範囲をもつ。

規模は曳地館跡調査区より若干広い。館跡に推定できるのではないかとした字「土居之内」が本調査区と同程度の広さなので、調査区周辺には今回の調査区を大きく上回る館跡推定地は現在のところ見られないことになる。戦国時代における安全策としては、より高い場所に山を削って造成した本調査地のほうがより安全な占地である。



第110図 曳地館跡遺構配置図(1)





第111図 曳地館跡遺構配置図(2)

なお、本調査地の北東約700mの角木遺跡は15世紀後半から16世紀代を中心とする掘立柱建物跡が検出された遺跡であり約1,200㎡の造成面が造られたことが確かめられ、また今回本書の一部で報告の掃木地区も同様の平坦面が何段か存在した。このようにみると榑牟礼山東麓には、斜面を削り低い場所を埋めて平坦面を造成する手法が普遍的に行われたことが分かる。本調査地の東隣の字が「引地ノ下」であるのは、本調査地が地を引いて造られたことを前提にした命名かもしれない。

大分県内では、16世紀前半頃の地方領主の館は丘陵の先端（中津市三光所在ズリヤネ城）や比較的広い台地の上（大野郡朝地町一万田館）に設けられていて、「土居之内」のような低い場所にはない。また、館としての機能に加え、土塁や堀を廻らせ防備を固めた城館にしている例も少なくない（真玉館跡・上門手遺跡・小路遺跡・一万田館跡・千歳城跡・上原館跡）。これらは曳地館跡を上回る規模である。今回調査地と「土居之内」の規模は同程度だが、安全性の高い尾根に構えられた本調査地の方が館としての条件を備えているといえる。今のところ周辺には曳地館跡を超える規模の遺跡は見当たらない。出土遺物の質という点では珍奇な遺物は認められない。

### 遺跡の継続年代の佐伯氏

15世紀末から16世紀前半に本遺跡地は造成され、16世紀中頃まで建物の建築が繰り返されている。仮に佐伯氏関係の館跡だとしてその年代に相当する人物を探してみたい。16世紀の佐伯氏の家系図は以下のようである。

惟世 — 惟安 — 惟勝  
          惟信    惟重  
                  惟常 — 惟教 — 惟真  
                  惟宗          鎮忠  
                  惟光  
                  惟幸  
          惟治 — 千代鶴

惟治は榑牟礼城を築いたとされる人物で、1527年（大永7年）には大友氏への謀反を咎めるとして城を攻められ、最後は落ち延びた宮崎県北部で殺されている。惟治の後は甥にあたる惟常が継いだ但其事跡は不明である。惟常を継いだのは子の惟教である。惟教は1550年（天文19年）に起きた大友氏の内紛「二階崩れの変」に駆け付けている。1556年（弘治2年）、変により大友氏の家督を得た義鎮（宗麟）により騒擾の原因となった家老らと共に佐伯惟教も豊後から退去させられ、彼は伊予に逃亡した。惟教がいつ豊後に帰ったのか定説はないが、1568年（永禄11年）には大友方として筑前の立花鑑載を攻めた際の文書が残っている。1578年（天正6年）の大友氏による日向攻めには参戦したが、耳川の戦いで惟教と惟真の父子は討死にしている。

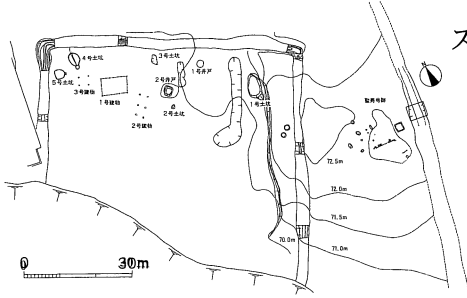
### まとめ

本遺跡が佐伯氏の館跡であったとするならば、曳地館跡の造成年代である15世紀末から16世紀前半に合致するのは惟世・惟治のどちらかである。16世紀中頃から後半まで遺跡は継続したか断続したかは分からないが、この時期の該当者は惟教以外には考えられない。

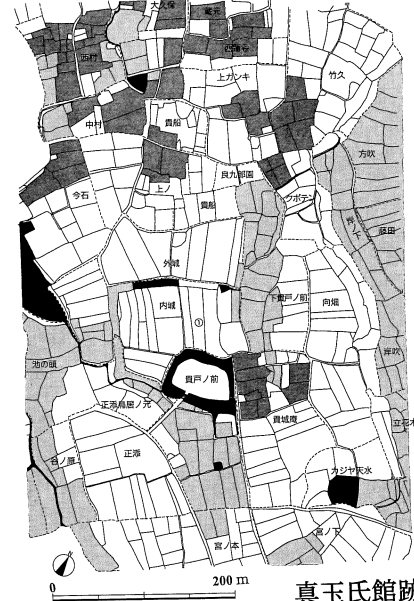
---

#### 【引用・参考文献】

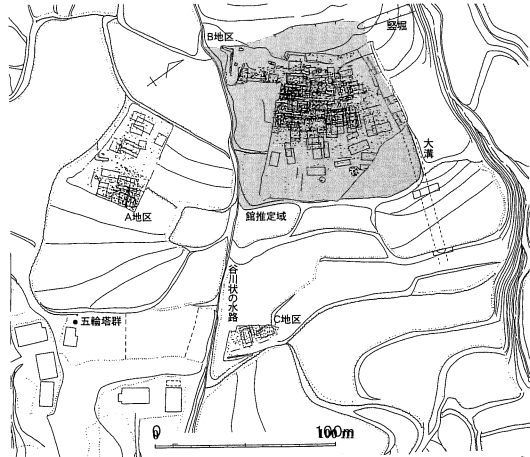
- 小野英治1971「榑牟礼時代に於ける佐伯氏の居館について」『佐伯史談』第七十三号 佐伯史談会
- 三重野元1979「大分」『日本城郭大系』第十六巻
- 綿貫俊一1990「榑牟礼城址と関連遺跡発掘 調査概報Ⅱ」佐伯市教育委員会
- 新宅信久1991「佐伯地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ」佐伯市教育委員会
- 小柳和宏2004「大分県の中世城館」第四集総集編 大分県文化財調査報告書第170輯



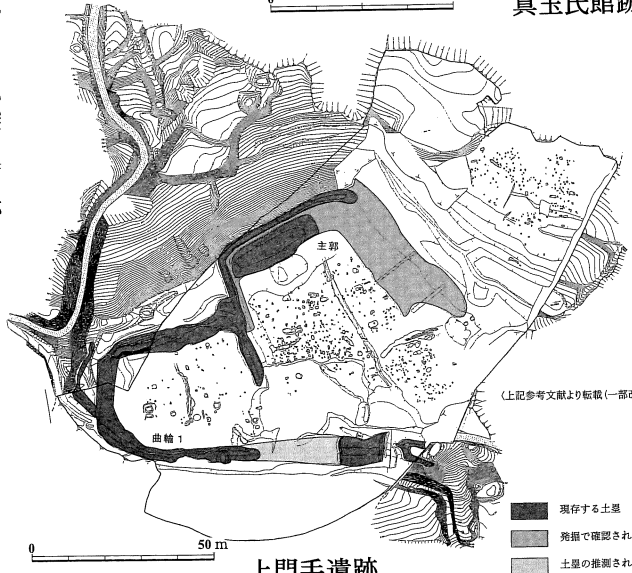
ズリヤネ城跡



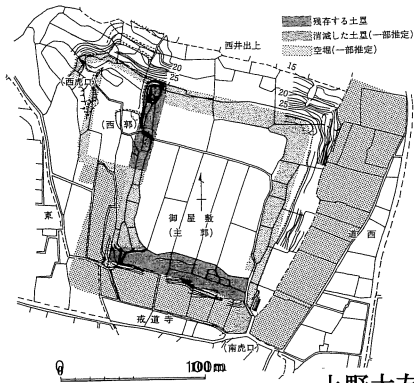
真玉氏館跡



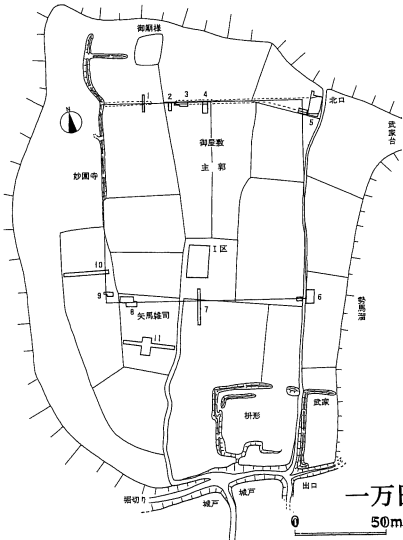
小路遺跡



上門手遺跡



上野大友館跡



一万田館跡



千歳城跡

第112図 大分県内の16世紀館跡・館城跡

## 第6章 元越遺跡

### 第1節 調査の概要

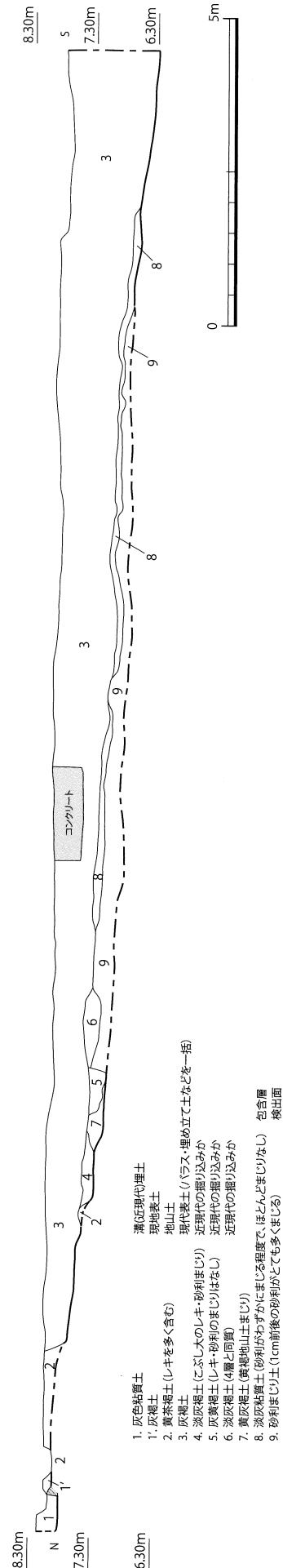
元越遺跡は、堅田川の支流である大越川が北流してきて、高城山系に突き当たって向きを東に変える地点に位置する。「元越」の地名が示すように、この場所は高城山系を越えて番匠川流域の稲垣地区へ抜ける、その入口部にあたる。逆に言えば、中世段階で佐伯地方（佐伯荘）の中心であった番匠川流域の上岡や稲垣あたりから、南に下り日向方面へ行く場合には最短ルートとなる場所であった。

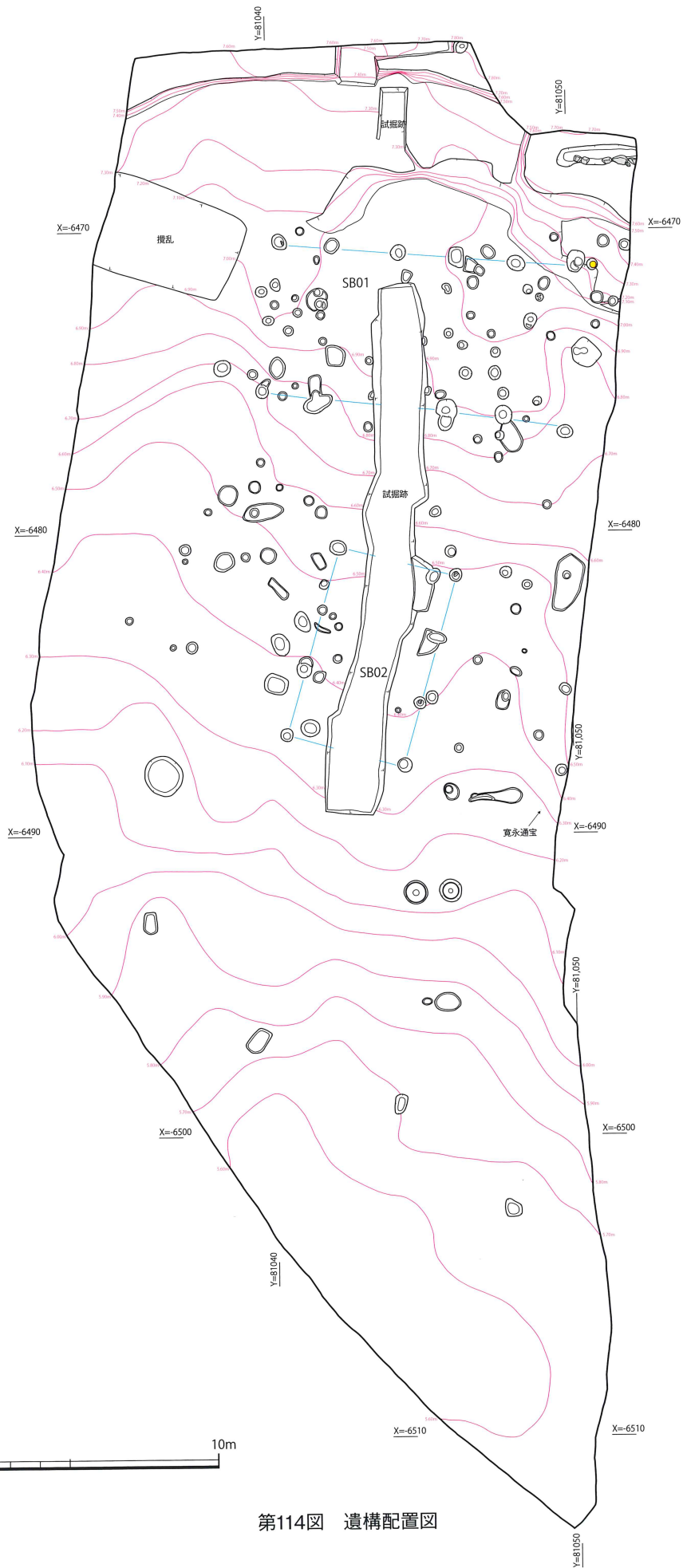
東九州自動車道は高城山系の山をトンネルで抜けた後、上城地区の住宅部分を通り、水田地帯を横切って大越川を越える。試掘調査では、水田部分では遺構が確認されなかったため、本調査は遺構が確認された住宅部分と、住宅地の背後で、石塔が建っていたトンネル入口付近の山の斜面部で行った。

調査区は南北約50m、東西約18mで、南側は三角形に尖って終わる。北端は標高7.6m、南端は標高5.6mなので、南北50mの間で2mの標高差を持つことになる。遺構は調査区の北半で主に確認された。掘立柱建物が2棟、ピット、土坑等が確認されたが、明確に遺構と確認できたのは、掘立柱建物だけであった。

### 第2節 基本層序

調査区の東壁の土層が第113図である。調査区を厚く覆う第3層は近年に持ち込まれたバラスを含む近・現代の造成土で、その下位にはさらに近現代の第4層から第6層が掘り込まれている。遺構検出面として捉えられるのは第9層であり、その上部には中世から近世の遺物を含む第8層が薄く堆積している。





第114図 遺構配置図

### 第3節 遺構と遺物

調査区東壁の土層を見ると、ごく近年の土層である3層が厚く堆積しているのがわかる。これによって、それ以前の遺構面が大きく削平を受けていることが予想される。地山である礫混じりの9層の上面にわずかに薄く淡灰粘質土(8層)が残っている部分があり、ここから遺物が出土しているので、ある時期の旧表土であった可能性がある。ここでは、出土した遺構と遺物について説明する。

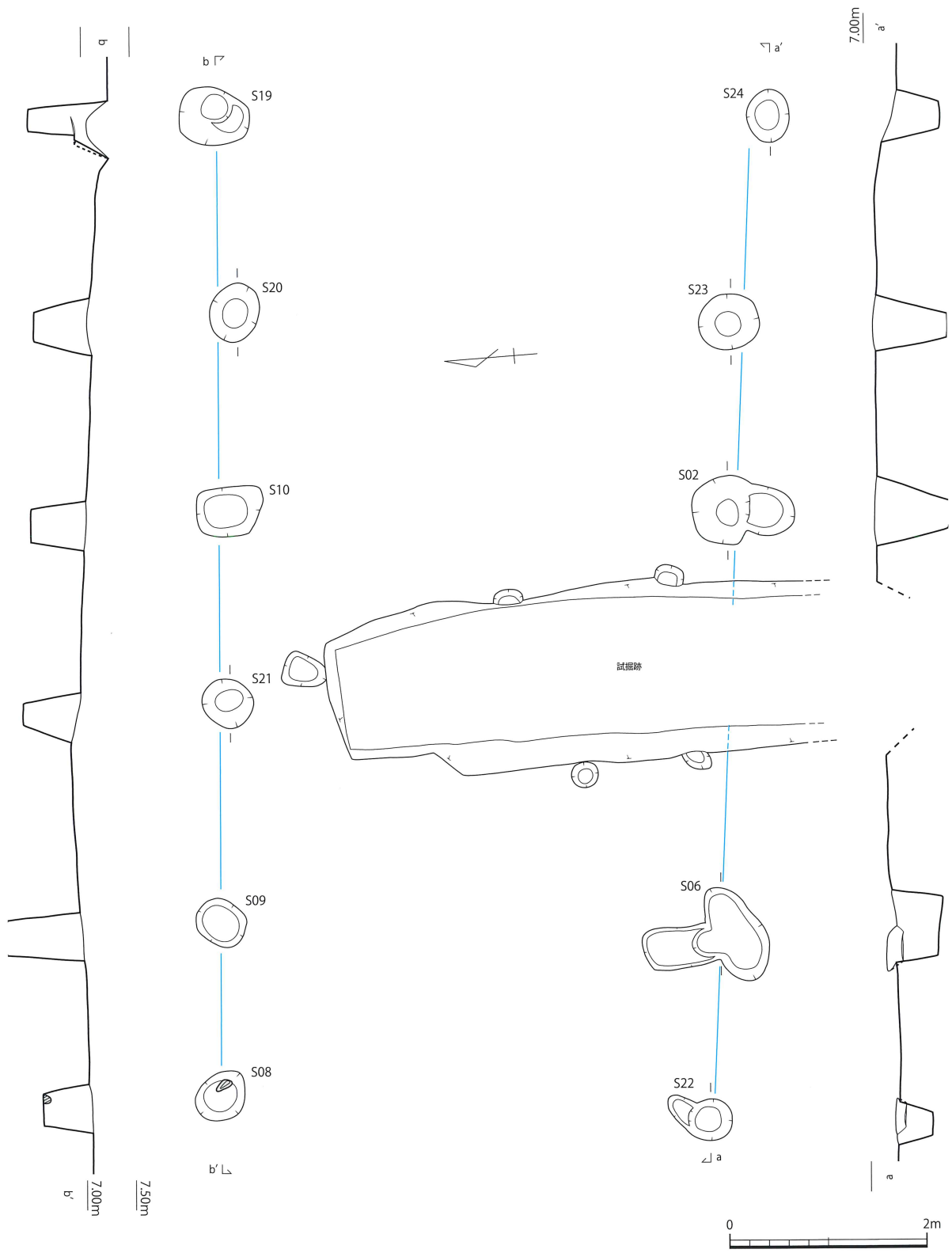
#### SB01 (第115図)

東西方向(桁行)5間、南北方向(梁行)1間の掘立柱建物である。柱穴の直径は、50~60cmほどと比較的大きい。深さは深いもので70cmほどである。柱穴からは第117図2から4が出土している。2は口縁部が内側に四角く突出する周防型の瓦質の播鉢、3は糸切り底の土師器坏で、4は文字が不鮮明であるが「□寧元寶」と読めるものである。

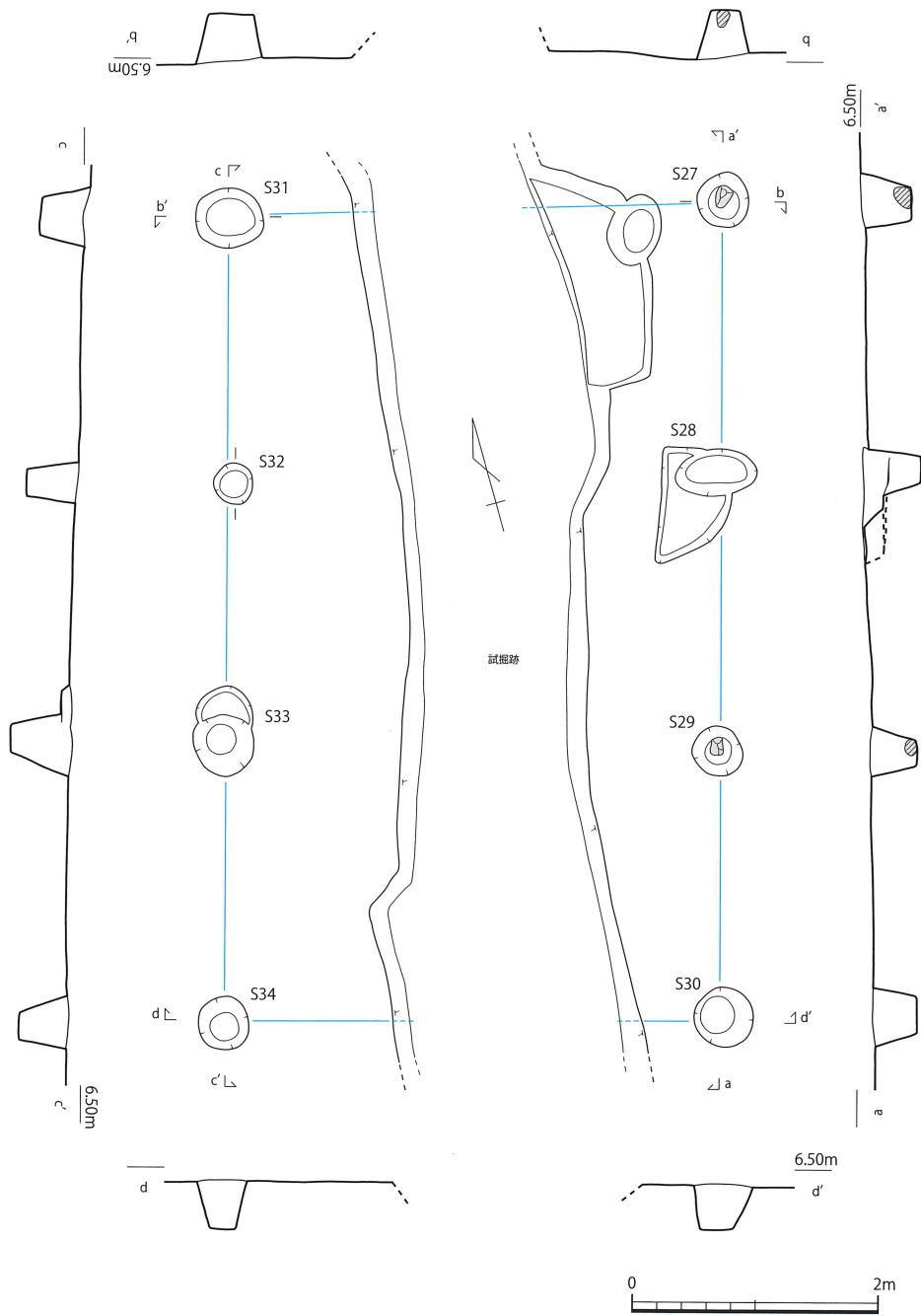
#### SB02 (第116図)

南北方向(桁行)3間、東西方向(梁行)1間の掘立柱建物である。ただし、梁間のほぼ中央は試掘トレンチで深く掘削したために柱穴が確認できなかった可能性が高いので、おそらく3間×2間の建物に復元できるだろう。

柱穴からの出土遺物はない。



第115図 SB01

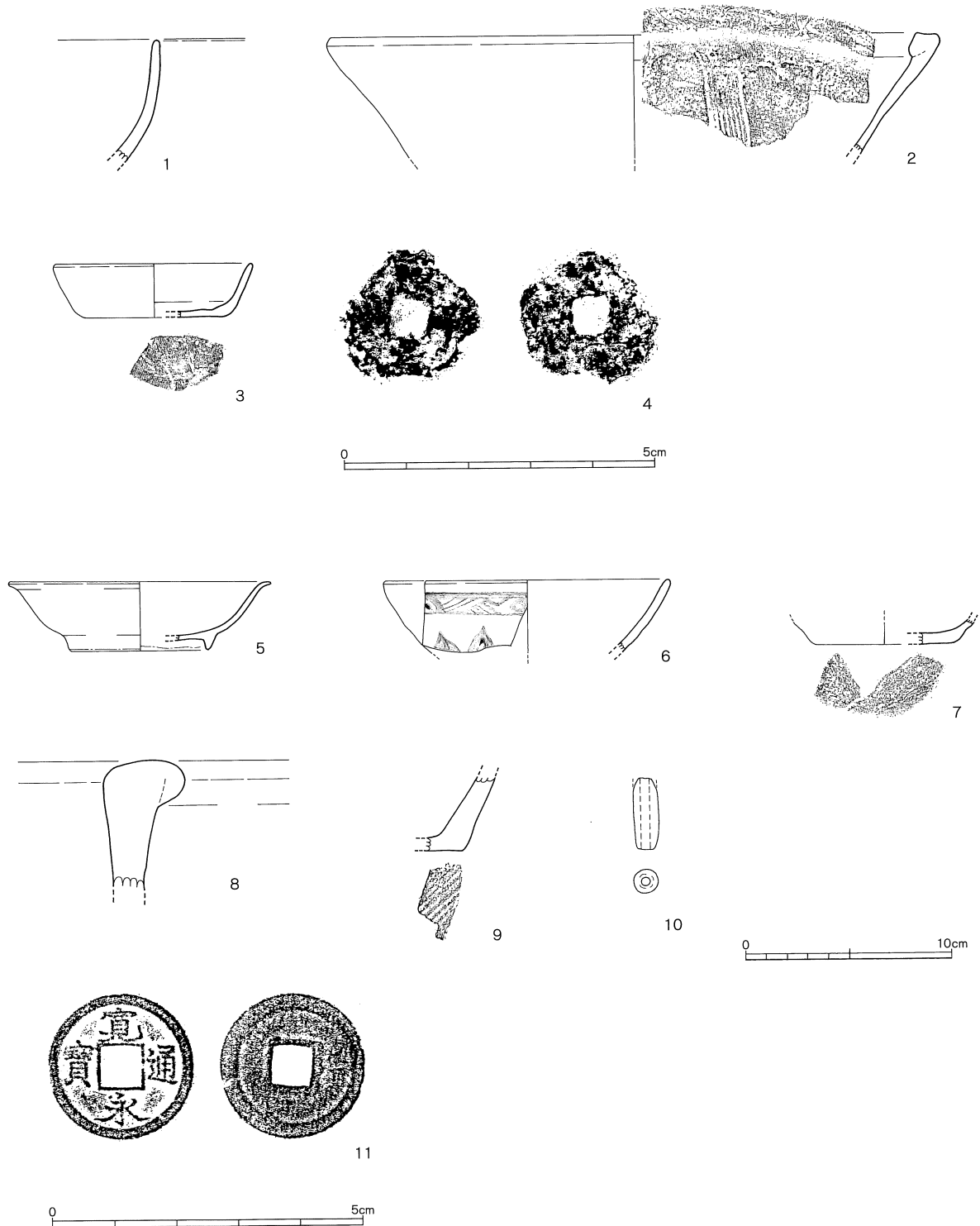


第116図 SB02



包含層出土遺物

第117図1と5から11が包含層出土遺物である。1は褐釉の陶器碗であるが産地不明。5は口縁部が小さく外反する16世紀代の白磁皿。6は漳州窯青花の皿、7は糸切り底の土師器坏、8は瓦質の甕、9は瓦質の鉢底部、10は素焼きの土錘、11は寛永通宝である。



第117図 包含層出土遺物

## 第4節 小結

元越は中世の佐伯荘の中心地であった梅牟礼城周辺から、南へ下る場合の交通の要衝であった。梅牟礼地区から番匠川を越えて堅野または稲垣に渡り、高城山塊を越えて下り付いたところが元越である。集落は真宗寺院「光久寺」のある西側の集落と、新熊野神社に近い東側の集落とに分かれている。両集落間は小さな谷が入っており、試掘調査、現状で集落とほぼ標高が等しい水田部分においては、何ら遺構が検出されなかった。本来二つに分かれていたか、あるいはどちらかが後から作られたものと思われる。今回調査対象となったのは、東側の集落の外れである。

検出された遺構は2棟の掘立柱建物である。主軸を90°違えており、配置から同時期の存在を窺わせる。良好な状態では遺物が出土していないので、時期の決定に困難さがあるが、包含層などの出土遺物を見ても、15世紀以前のものは含まれておらず、16世紀代後半代と考えて良い遺物で占められるところから、掘立柱建物の時期も16世紀後半代と考えられる。

集落の外れであったため、16世紀代になって建物が建てられるようになったのか、あるいは集落全体が16世紀代に起源を有するのかは今回の調査結果だけでは判断できないが、一般的に言っておそらく前者であろう。

## 第7章 総括

### はじめに

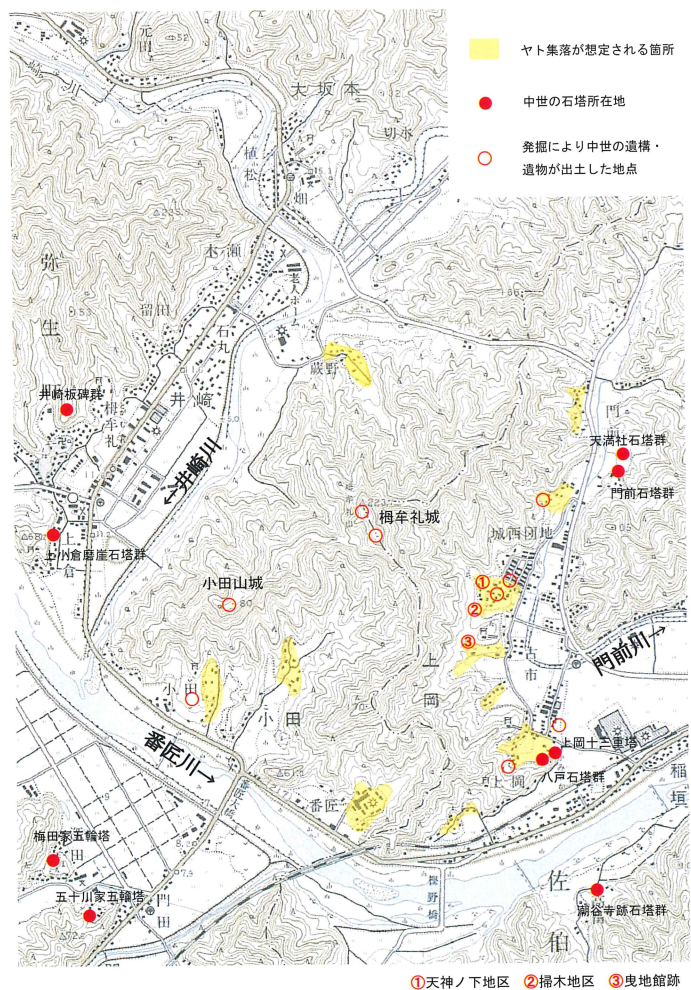
今回調査対象となった梅牟礼遺跡と曳地館跡は、山頂に山城をもつ梅牟礼山の東裾に位置している（第118図）。梅牟礼城は、番匠川の北に聳える標高223.6mの梅牟礼山頂と、そこから延びる尾根に展開する城郭で、佐伯荘地頭に始原を有す佐伯氏の城である。城のある梅牟礼山は、南に番匠川、西にその支流である井崎川、また東にはやはり番匠川の支流である門前川が流れ、三方が天然の川による障壁をなしている。唯一川がない北側も、井崎川から延びる谷が深く入り込むため、梅牟礼山の山塊は、裾で測って東西1.2km、南北2kmのほぼ独立した山塊となっている。近世には、佐伯氏に替わって入部した毛利氏が東に約1.5kmのところにある「城山」に城郭を構え、町を海に接した場所に作った。これは、番匠川の沖積化の進展が大きく作用していた。つまり、中世までは、梅牟礼山周辺に安定した沖積地が広がっていたことを示している。実際、山裾の番匠川に接したところに「土器屋港」という地名が残り、ここに海との接点があったことを裏付けている。さらに周囲には十三重層塔（上岡）や磨崖宝塔群（上小倉）といった中世前期の石塔や、中世まで遡る寺院が点在し、多くの中世遺跡の存在と相まって、ここは中世佐伯氏の活動の中核地であるとされていた。その一部を横切って作られる東九州道の建設工事の事前調査を行った3カ所において、中世の遺跡が確認されたわけである。

### 調査区の立地と歴史的環境

第119図は、今回の調査区と梅牟礼城の位置関係がわかる図である。南東の隅に番匠川が僅かに入るが、その番匠川に流れ込む門前川が遺跡の東側を南流する。しかし、その門前川は古市地区の自然堤防に阻まれ、向きを東に変えている。その自然堤防上に作られたのが「古市」の町であった。門前川によって形成された南北に長い平野は、出口をその古市で遮断されることになる。その門前川流域は、出口の古市で幅約500m、天神ノ下地区あたりで幅200mとなる。この門前川には梅牟礼山からの小さな谷川が幾筋も流れ込んでおり、門前川が作る平野に向けて扇型に広がる「谷戸」を形作っている（第118図の黄色部分）。

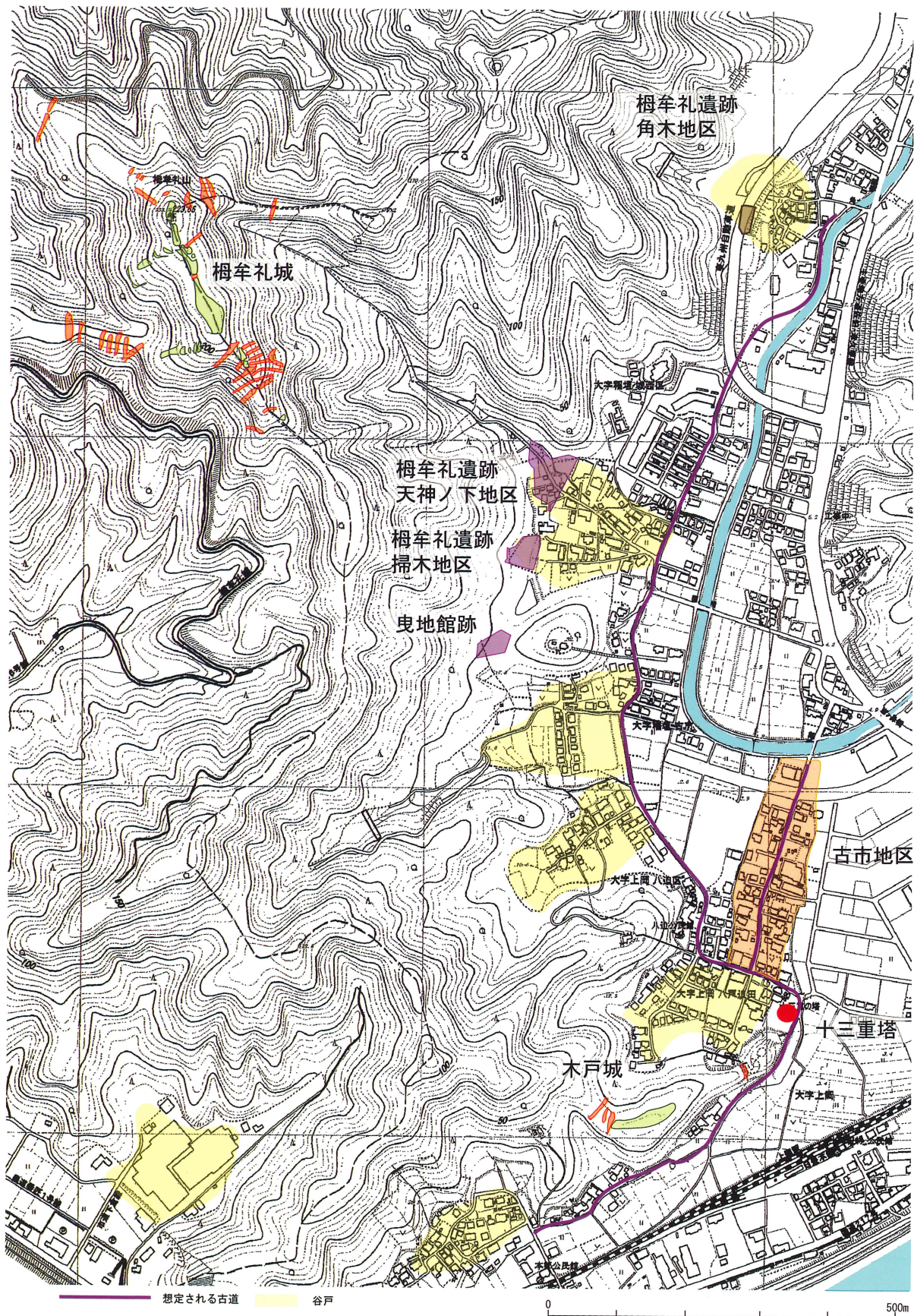
明治22年の旧字図による地目を見ると（第120図）、平野部は水田化されており、谷戸部は「迫田」や「大田」といった田の地名が付く谷戸と「八戸」以外は畑地である。注目されるのは、畑地が広がる谷戸には「宅地」が無いことである。現在は宅地となっているところが多いが、これらはその後宅地化されたということになる。

今回の3カ所の調査区は、いずれもその谷戸の最深部に位置する。さらに以前調査された「角木」も同様の立



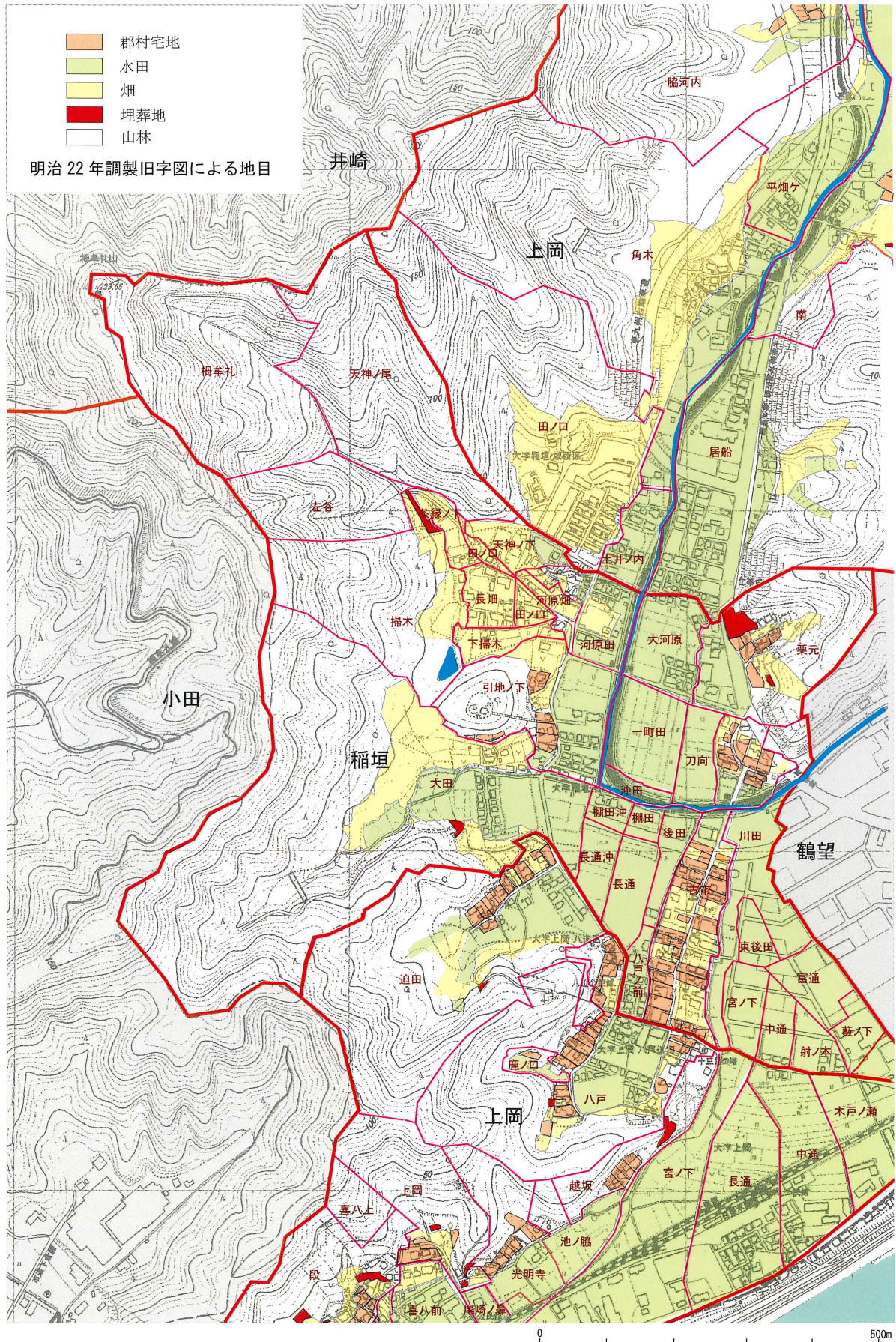
第118図 歴史的な環境





第119図 調査区周辺の状況



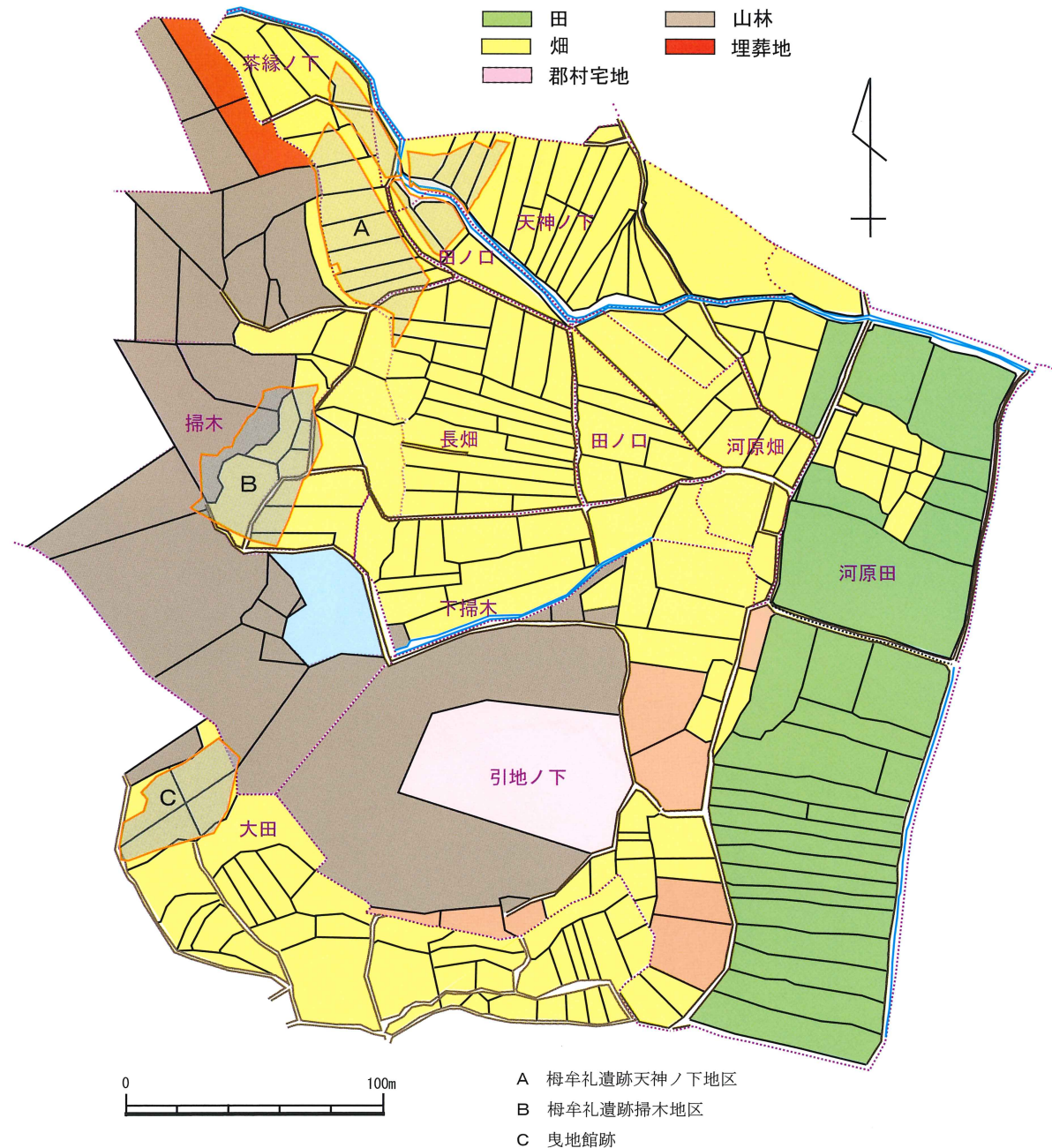


第120図 調査区周辺の小字図



地であった。そして、その何れもから中世段階の遺構・遺物が主体で出土しており、近世の遺物はごく僅かしか出土しないのである。つまり、①梅牟礼山の山裾部、特に谷戸の奥部の開発は中世段階に遡ること、②江戸時代から少なくとも明治時代の中頃までは居住地ではなかったこと、の2点が押さえられたことは重要なことである。

一般的に言って、中世の集落は14世紀代を境にして集村化されるとされ、大分県内でも現在の集落に繋がる遺跡は中世後半期からであることが発掘調査で確かめられている<sup>1</sup>。その一般的なあり方から外れる今回の事例は、何を意味するのであろうか。



第121図 調査区周辺の小字と筆境

\* 1 小柳和宏「豊後における中世集落の展開（予察）」『八坂の遺跡Ⅲ』大分県教育委員会 2003

一般的な集落ではない「館」などは、その居住者の浮沈と軌を一にするか、あるいは社会的な状況に応じて立地を変える、という消長をたどる。今回の調査区が梅牟礼城の裾部であることから、いわゆる「根小屋集落」的なものであるとすれば、佐伯氏の動向と密接に関わりがあったことは容易に推察される。遺跡の消長と佐伯氏に関わりについては、遺跡出土の土器を検討した後で再び触れることにする。

次に今回の調査区は梅牟礼城との関係が注目される。そこで、梅牟礼城とさらにその西側にある小田山城の機能していた時期を考えた上で、改めて3カ所の遺跡の評価を行いたい。

### 梅牟礼城の構造（第123図）

梅牟礼城は山頂部を平坦に加工した、幅10m、長さ19mの南北に長い主郭（Ⅰ郭）と、そこから南に向け雛壇状に低くなる4段の曲輪（Ⅱ郭からⅣ郭）で構成される。全長では205mとなる。これら山頂部に連なる曲輪群は、周囲に土塁などの囲画施設はなく、切岸のみで形成されている。しかし、内部に目をやると、Ⅰ郭とⅡ郭の間は1m程度の段差であるのに対し、Ⅱ郭とⅢ郭の間には二段の小さな曲輪が取り付け、1本の縦堀を有する。この縦堀は主郭の東側斜面への回り込みを防ぐためのものであり、豊後地域の城郭の虎口にしばしば見られる工夫である。つまり、ここが主郭部への虎口であったことを示しているのである。さらに一番下の広い曲輪（Ⅳ郭）には葦のような高まりがあり、単純な平坦面ではない。今は原形を留めないが、何らかの造作がなされていたことが想定できる。なお、Ⅲ郭とⅣ郭の間は浅い幅数m程の堀で画している。

一方、これら曲輪群のある山頂部から周辺に延びる尾根には連続する堀切が入れられ、曲輪群への接近を防いでいる。中でも、曲輪群の南から西（尾根a）と南南東（尾根b）に向けて延びる二つの尾根は、幾本もの堀切で頑丈に遮断している。この尾根伝いで敵の来襲に備えたものと言えよう。しかし、堀切が尾根の片側（平坦面まで掘っている）だけであったり、土橋があったりと、完全に遮断はしていないところを見ると、このルートが日常的な登城ルートでもあったことを示している。一方、曲輪群の北側の尾根にも堀切が入れられてはいるが、南側ほど嚴重に築いたとは思えないので、このルートでの登城はほとんど想定していなかったと考えられる。一つには曲輪直下がかなりの傾斜を有していることにもよるのであろう。あくまで、城の正面は南側という認識があったのであろう。そのことが曲輪群のあり方にも現れているのである。

また、城郭そのものから少し目を広げて、梅牟礼山塊全体での位置付けを考えて見たい。梅牟礼城主郭は、周辺の沖積地との比高差は約220mある。山城の立地としては、谷が発達し、しかも深く、山頂部が幅広くなく、かつ曲輪として一定の面積が確保でき、さらに山頂から伸びる尾根も細長いという、守るには恰好の条件を備えていた。しかし、一方で裾野が広いという欠点を有していた。裾野が広いと、守備範囲が広大になるためどうしても八つ手状に伸びる尾根の堀切を嚴重にする必要が生じる。また、さらに山裾の山への取り掛かり口を守ることも考慮されたであろう。

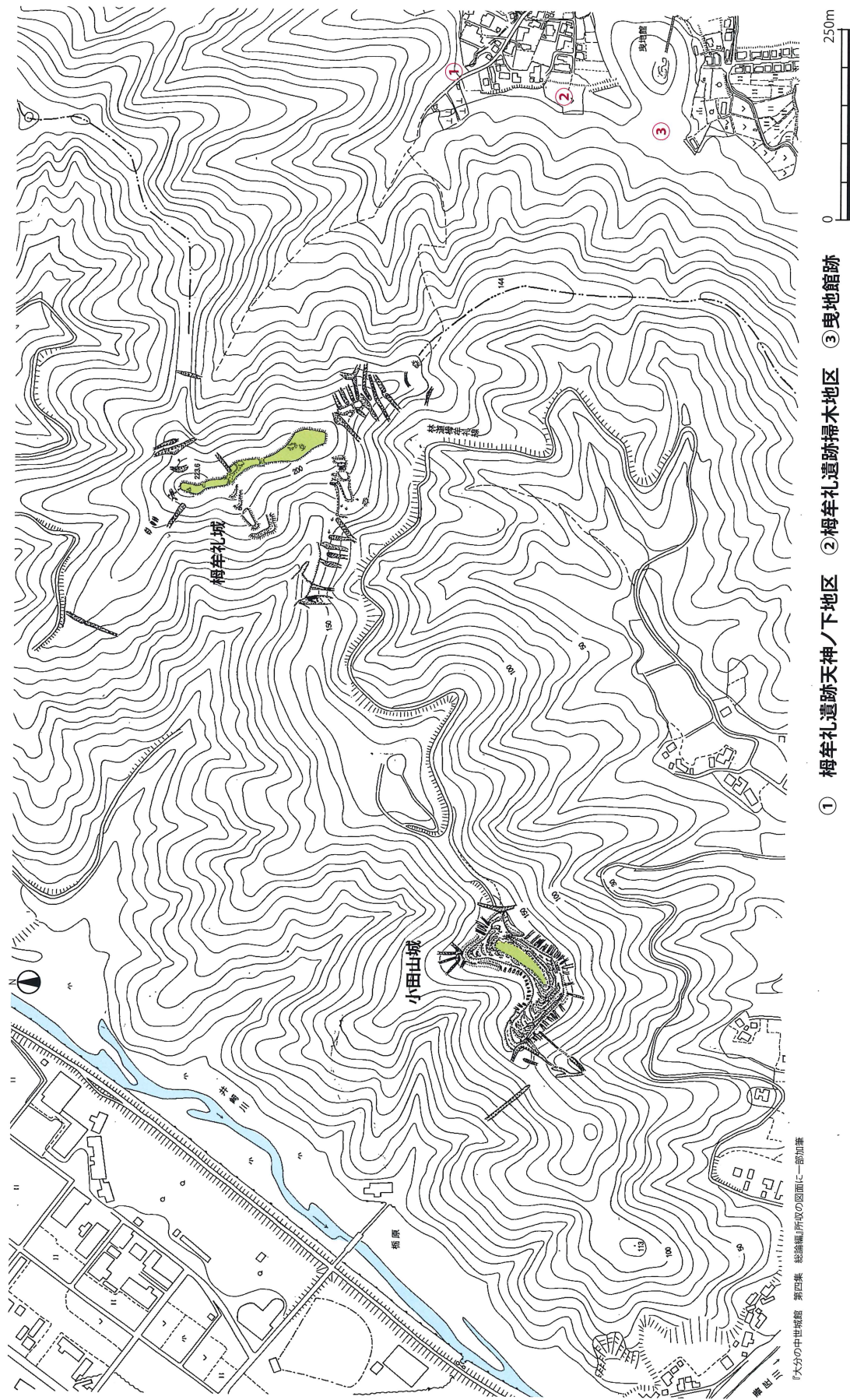
山の斜面を最大の防御施設とし、登ってきた敵に対しては遠くの尾根を幾重にも堀切る、というやや古い技法を有した城郭ということができる。

### 小田山城の構造（第124図）

小田山城は梅牟礼城から西に約500mの尾根続きにあり、井崎川流域から番匠川流域を広く見渡すことが出来る。縄張りを見ると、自然の傾斜を残す山頂部の曲輪の周囲を44本の畝状縦堀で取り囲むという、堀のみに依存した単純な構造の城郭である。さらに細かく見ると、主郭のある山頂部は「L」字形に折れており、三方に尾根が伸びる。その尾根の先端は三箇所とも堀切で遮断し、両側は縦堀へと繋がる。曲輪に接した尾根をこのU字形に掘切るといふ堀の用い方は、佐伯市内の八幡山城と同じである。

踏査した時は風倒木が主郭周囲に積まれていたため、主郭周囲の状況は確認できなかったが、縄張図から判断すると最下段には犬走り状の狭い平場があり、その下位から畝状縦堀が始まっている。あまり技巧的な畝状縦堀ではない。





第122図 梅牟礼城と小田山城の位置関係



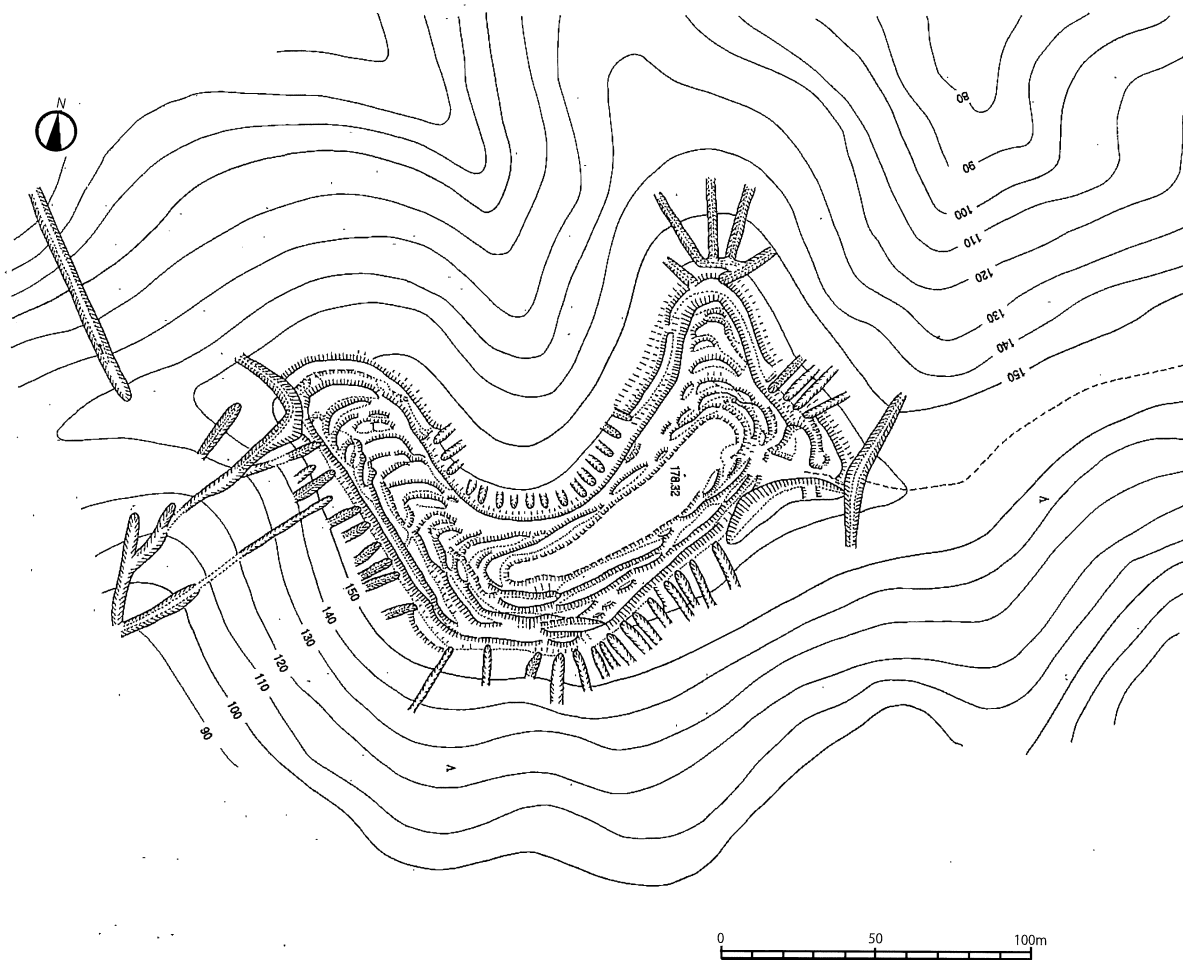


第123図 梶牟礼城縄張図(『大分の中世城館』第4集より転載)

### 梶牟礼城と小田山城の年代的位置づけ

梶牟礼城の特徴は、主郭から離れた尾根を何重にも掘り切るところにある。一言でいうと「堀切の城」である。さらに、その堀切も単純に掘り切るものだけではなく、土橋をもつものや、完全に掘り切らずに片側だけに豎堀状に下らせるものなどを複雑に組み合わせて用いている。また、主郭の虎口横に入れられた豎堀も、段差のある曲輪を巧みに利用しながらコースを絞るものであり、一見大胆な「堀切の城」に見えるものの、詳細にみると技巧を凝らしたパーツを組み合わせたものであることがわかる。

しかし、全体的な構造は散漫である。そのことは同じ市内にある八幡山城と比べるとよくわかる。八幡山城も堀切を用いているが、主郭に近い尾根の根元で掘り切っている。その結果、主郭と併せてコンパクトに守ることが可能となっている。この両者の堀切の用い方の違いは、その構築時期の違いを表しているものと考えられる。八幡山城は中世の文書には記載されないが、伝承では天正14年の島津氏豊後侵攻時に機能していたと言われる。



第124図 小田山城縄張図(『大分の中世城館』第4集より転載)

それが正しいのなら、改修の要素が無い八幡山城は、まさに戦国末期に作られたものと言えよう。それに対して、梅牟礼城は文書から大永7(1527)年には使われていたことがわかる。虎口部の改修などは戦国末期に下る可能性が高いが、堀切で守るという発想自体は16世紀前半代のものである<sup>1</sup>。尾根以外は、比高差や急峻な深い谷などの自然条件によって守ることができると考えた築造当時の発想が、戦国末期まで引き続き支配的であったということであろう。

以前の発掘調査で出土した遺物を見ると、曲輪群からは15世紀後半～16世紀代の時期幅に納まる資料が出土している(第125図1から14)<sup>2</sup>。報告者も指摘しているように<sup>3</sup>、古い一群が大永7年の佐伯惟治籠城戦に関わるものであれば、この時期城郭を築いたか、または大幅な改修を行ったことになろうが、前者の可能性が高い。前記した遺構の様相から推測される16世紀前半代と矛盾しない。

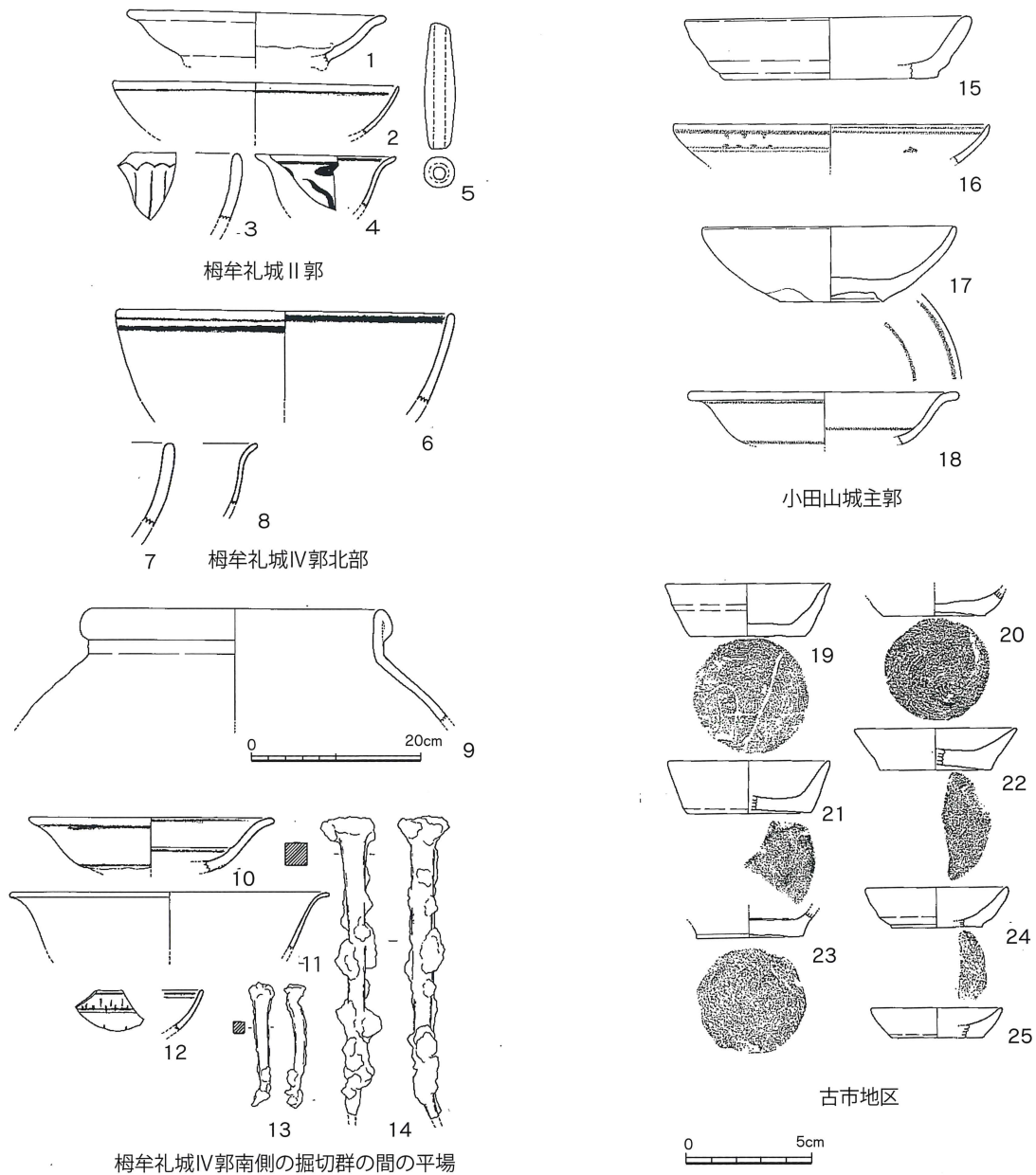
ところで、堀切で守るという発想を支えたのは、山裾の備えであった。梅牟礼山の四方に複雑に入り込む谷や尾根は、言うまでもなく梅牟礼城へのアクセスポイントであった。残念ながら梅牟礼城の城道ははっきりしないが、前記したように尾根の堀切が集中する二つの尾根、すなわち曲輪群の南側に延びる尾根と、曲輪群の西側に延びる尾根から登ってくることを想定していたのは間違いなからう。

一方、小田山城は、構造上改修の手が入ったようには見えない。この地域における畝状堅堀の普及がいつまで

\*1 小柳和宏「城郭構成要素の変遷－城郭編年のための基礎作業－」『大分の中世城館 第四集』大分県教育委員会 2004

\*2 『梅牟礼城跡関連遺跡発掘調査報告書』佐伯市教育委員会 1994

\*3 註2文献の「まとめ」



第125図 梅牟礼城・小田山城・古市出土遺物(各報告書より転載)

遡るのが問題となるが、曲輪を平坦に加工することなく、全周に竖堀を配するなど具体的な切迫感のもとで作られた感が強い。以前の試掘調査で出土した遺物には碁笥底の漳州窯青花皿があり(第125図17)<sup>1</sup>、16世紀後半に機能していたのは間違いのない。この時期の切迫した状況は天正14(1586)年の薩摩島津氏の豊後侵攻以外にはないので、小田山城は、緊迫感が増した天正8年以降に作られた城とすることができよう。元禄10年に作られた「上野村絵図」に「新城」と記されており、梅牟礼城(絵図では「つがむれ」と記される)に対して「新しい城」という意識が江戸期にあった事を示している。

では、どうして梅牟礼城があるのに新たに新城を築く必要があったのか、という疑問が生じるが、それは、城郭の構造上の問題として、梅牟礼城の防備ラインが広すぎるということがあり、コンパクトに守るべく小田山城

\*1 『小田山城跡と関連遺跡 - 第3次調査報告書 -』 弥生町教育委員会 1996

を築いたと考えることができる。また、佐伯氏の動向、ということとも連動する要素があるが、これについては最後に考えたい。

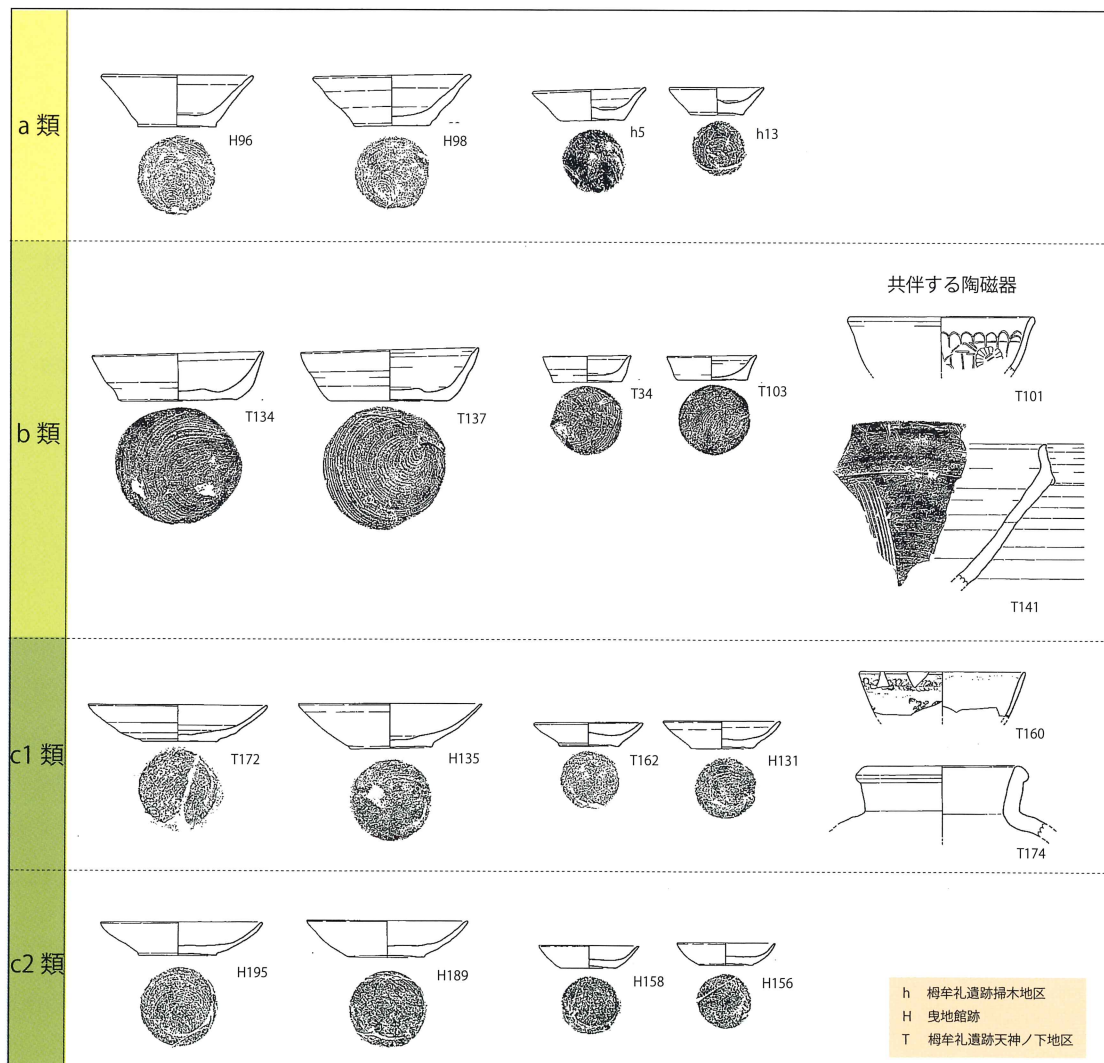
### 中世土器の編年

次に、ここでは榑牟礼遺跡天神ノ下地区、同掃木地区、曳地館跡から出土した土器の年代的位置付けを考えてみたい。高橋氏が第5章でも触れているが、あらためて3遺跡（地区）の出土土器を見ると、大きくは3つの様式に分けることが可能である（第126図）。

まず、坯の口径が11cm前後で、底径も5cmから6cmと小さく、直線的に開く体部を持つもので、器高は4cm前後と高い。小皿も同形状を呈し、口径は6.5cm前後である。この組み合わせの土器をa類とする。

次に、坯の口径が13cm前後で、底径も9cm前後と比較的大きく、あまり開かず立ち上がる体部を持ち、口縁端部で小さく上方に摘まれるものである。器高は3.5cmから4cmである。これに伴う小皿は口径7cm前後で、坯とほぼ同形態の体部を持つものである。この組み合わせの土器をb類とする。

次に、坯の口径は前記の坯bと同じ13cm前後であるが、底径は6.5cmと小さく、直線的に大きく開く体部を持つ。器高は2.5cmから3cmと低い。これに伴う小皿は、口径が8cmから9cmで、形態は坯にはほぼ等しく、直線的に開く。この組み合わせの土器をc1類とする。さらに、口径が12cm前後とやや小さくなり、体部がやや内湾気味にひらくものをc2類とする。



第126図 土器の分類

b類は豊後で広く見られる形態であるが、中世大友府内町跡（大分市）では14世紀代に通有な形態で、15世紀後葉からは体部が開き気味になり、15世紀末から16世紀代初めになるといわゆる「段々土師器」と呼ばれる轆轤痕を強く残す、小ぶりな土器に置き換わっていく、とされる。また、佐伯に近い津久見門前遺跡では、14世紀末から15世紀初頭にかけての遺物群に、同形態の土器を見ることができる<sup>1</sup>。つまり、b類は15世紀代にその中心を置くことが想定できるのである。今回の調査では、天神ノ下地区S151からまとまって出土しているが、共に備前焼播鉢があり、口縁部形状から乗岡編年中世5期bから6期aに該当し、西暦1500年を前後する時期が与えられている。中世大友府内町跡では、該期には先述したように轆轤痕を強く残す土器に置き換わっているが、佐伯地方では、15世紀代の伝統を色濃く残す土器構成であったと解釈される。

では、c類はどうであろうか。中世大友府内町跡では16世紀前葉になると轆轤痕が消え、浅く大きく開く体部を持つものになっていく。これとb類は共通する。天神ノ下地区S294では、c1類に蓮子碗タイプの青花が共存するので16世紀前半代で矛盾はない。c類は、b類に置き換わるように出現するものであろう。曳地館跡SK34で見られるc2類は、c1類に後出すると考えられるが、共存資料が無く下限は決められない。

a類は掃木地区で主体を占める土器である。一方、天神ノ下地区では1点も出土していない。同形態の土器は、中世大友府内町跡や他の県内の中世遺跡でもほとんど類例が無く、さらに共存の陶磁器も無く時期比定に困難さを覚えるが、15世紀末から16世紀前葉のb類、c類の前後に置かれることは一括性から間違いないだろう。16世紀中葉以降出土例が増えると想定される京都系土器が曳地館や掃木地区では1片も出土しておらず、逆に天神ノ下地区では古式から新式の京都系土器まで若干ではあるが出土している。このことを考慮すると、a類はb類やc類の前時期に位置づけるのが妥当と思われる。15世紀代が想定されるが、14世紀に遡ることも考慮すべきかと思われる。曳地館跡では永楽銭と共に出土している（SP60）ので少なくとも15世紀代に置くことはできよう。このa類に近い土器は古市地区でも出土しており（第125図）、町場形成の一端がうかがえる資料であるが、やはり陶磁器を共存しておらず、年代的位置づけは不明である。

以上の年代観から、今回の梅牟礼城の東裾部の遺構群形成の主体となる時期を記せば次のようになる。

15世紀代（a類）・・・・・・・・・・掃木地区、曳地館

15世紀末～16世紀初め（b類）・・・天神ノ下地区

16世紀前半代（c類）・・・・・・・・・・曳地館、天神ノ下地区

なお、天神ノ下地区は、16世紀後葉までの遺物が出土しているので、遺構は不明ながらも何らかの活動があったと考えられる。

## 遺跡の評価

上記の想定によって遺跡ごとの消長を見ると、梅牟礼遺跡掃木地区は15世紀代にほぼ限られる一方、曳地館跡は15世紀に始まった後、一端途切れて再び16世紀前半から中頃にかけて活発化するように見える。また、梅牟礼遺跡天神ノ下地区は15世紀末頃から始まり、16世紀後葉まで活動の痕跡を窺うことが出来る。

ところで、15世紀後半には大友領国において、国人クラスからある程度の地域領主クラスまで、山城に居住せずに、いわゆる「館城」に居所を移すことが一般化した<sup>2</sup>。「館城」は、比高差30mから60m程度の丘陵部先端に、堀と土塁で一辺50mから100mの方形に囲んだ屋敷を設けたもので、北側や西側にしばしば小さな副郭を敷設する。平地の「館」をそのまま丘陵上に移したような形態である。それらの例と曳地館跡を比較すると、堀や土塁がまったく見られない点や直線的な区画が認められない点は「館城」とは一線を画している。しかし、立地は「館城」そのものであり、15世紀後半代の居住を巡る動きの中で出現したものであったのは間違いなからう。

\*1 『津久見門前遺跡 佐伯門前遺跡 瀬戸遺跡』大分県教育委員会 2005

\*2 小柳和宏「城館に見る領国防衛戦略」『戦国大名大友氏と豊後府内』高志書院 2008

一方、天神ノ下地区や掃木地区は、立地条件は「館城」のものではなく、むしろ山城のある山塊を背にしていることに特徴がある。両地区とも丘陵の裾を削り、平坦面を造成していた。特に、掃木地区は「切岸」とでも呼べる段差を構築していたことは、16世紀前半代と考えられる梅牟礼城の構築よりやや古い時期に、すでに「山」を意識していたことを窺わせる。また、天神ノ下地区は梅牟礼城の構築とほぼ時を同じくして形成されている。それは、梅牟礼城への登城のルートとして、天神ノ下地区の谷戸から小字「左谷」を登り、曲輪群の南側に繋がる尾根上に登るのが最も合理的であることと関係があると考えられる。すなわち、調査を行った天神ノ下地区の谷筋は、まさに梅牟礼城への入口部であったことが想定されるのである。それ故、遺跡の消長が梅牟礼城の消長と軌を一にしていたと考えられる。

一方、これらの遺跡が16世紀の中頃を境に姿を消すことによどのどのような意味があるのだろうか。梅牟礼城の東側の谷戸に展開する集落が、前記したように佐伯氏とつながりの深い「根小屋集落」的なものであったとすると、特に屋敷的な要素を持つ曳地館跡が16世紀後半まで存続しないのは、何らかの状況を反映しているとみられる<sup>\*1</sup>。

これは弘治2（1556）年から元亀元（1570）年までの間、当主であった佐伯惟教が大友義鎮の勤気を蒙り四国へ追放されており、この当主不在の空白期間に在地で混乱が生じたことと関連がある可能性があるのではなからうか。遺跡として確認されたわけではないのであくまで推測の域を出ないが、佐伯氏の拠点や家臣団の集落が門前川流域から、より西側の小田地区や井崎川流域に移った可能性がある。そう考えれば、梅牟礼城の尾根続きに新たに小田山城を築いたことも説明できるのではなからうか。

## おわりに

今回の調査では、佐伯氏に関わる梅牟礼城との関係で理解できる遺跡群が明らかとなった。もちろん、山裾のごく一部を調査したに過ぎず、全貌が明らかになったとは到底言えないが、文書ではまったくわからなかった当時の居住を廻る動きの一端が明らかになったことには大きな意味があると言える。

しかし、佐伯氏の動向を考える上では更に広い範囲を視野に入れなければならないことは言うまでもない。特に、梅牟礼山とは門前川を挟んで東側の山塊にある「二上寺」「三（山）上寺」などの山林寺院<sup>\*2</sup>、古市の南側の番匠川右岸にある佐伯氏の菩提寺と言われる潮谷寺跡などの中世寺院、上小倉磨崖宝塔のある井崎川流域、さらに佐伯一族の堅田氏がいた堅田地区など、地域や対象とする資料にも広域的な視点が必要となる。また、佐伯氏惣領家の館がどこにあったのかについても、今回の調査結果では確実なことは言えない。果たして曳地館跡がそうであったのかどうか、今後さらに周辺部の調査が進むことによって、明らかになってくることが期待される。

---

\*1 調査区がその一部であったことにもその要因があるとも考えられる。実際、小字長畑では、16世紀後半代の京都系土師器が出土しているので、16世紀後半になって谷の奥部の利用が放棄されたと考えることも可能であるが、小田山城の立地を考えたときに、ある程度の拠点と家臣団の移転も考慮すべきと考える。

\*2 綿貫俊一「山上寺跡出土の中世遺物について」『梅牟礼城跡関連遺跡発掘調査報告書』佐伯市教育委員会1994

第2表 榑牟礼遺跡天神ノ下地区出土遺物一覧表(1)

遺物 番号	図版番号	遺構名	種類	器形	法量(cm) ( )は復元径			土器・陶器 以外の重量	備考	
					口径(縦)	底径(横)	器高(高さ・厚さ)			
1	第7図	S002	青磁	碗			4.4+ $\alpha$			
2			在地系土師器	小皿	6.9	5.2	2.0			
3			在地系土師器	小皿	7.0	5.0	1.7+ $\alpha$			
4			在地系土師器	小皿	7.0	5.0	2.0			
5			在地系土師器	坏	12.5	7.8	3.7			
6			在地系土師器	坏	(12.8)	(8.5)	4.2			
7			在地系土師器	坏	13.0	3.6	7.0			
8			在地系土師器	坏	(13.2)	(9.2)	3.65			
9			在地系土師器	坏	(13.6)	3.5	(7.4)			
10		S149	在地系土師器	小皿	7.3	5.1	1.9			
11			在地系土師器	坏	12.8	8.7	4.0			
12			在地系土師器	坏	13.1	8.5	3.6			
13			在地系土師器	坏	(13.1)	(9.1)	3.9			
14			在地系土師器	坏	(13.7)	(9.0)	3.3			
15	第9図	S030	在地系土師器	小皿	(5.4)	(4.5)	1.5		1層	
16			在地系土師器	小皿	7.4	5.0	2.0			
17		在地系土師器	小皿			1.6		5層		
18	S150	在地系土師器	小皿	(6.5)	(4.0)	2.2				
19	第12図	S151	青磁	皿	(11.6)	6.0	3.2			
20			青磁	香炉						
21			白磁	皿		3.45	1.7+ $\alpha$			
22			在地系土師器	小皿	2.85	2.95	1.8		ミニチュア土器	
23			在地系土師器	小皿	(6.1)	(5.0)	1.75			
24			在地系土師器	小皿	(6.4)	(5.3)	2.0			
25			在地系土師器	小皿	(6.7)	(5.7)	1.8			
26			在地系土師器	小皿	6.8	4.9	1.8			
27			在地系土師器	小皿	6.4	4.9	1.8			
28			在地系土師器	小皿	6.6	4.8	1.8			
29			在地系土師器	小皿	6.6	4.2	2.15			
30			在地系土師器	小皿	(6.7)	(4.3)	1.9			
31			在地系土師器	小皿	(6.9)	(5.05)	2.0			
32			在地系土師器	小皿	6.7	4.55	2.1			
33			在地系土師器	小皿	7.0	5.0	2.45			
34			在地系土師器	小皿	7.0	5.4	2.2			
35			在地系土師器	小皿	7.0	5.55	2.1			
36			在地系土師器	小皿	6.9	5.3	2.3			
37			在地系土師器	小皿	7.0	5.4	1.75			
38			在地系土師器	小皿	7.0	5.15	1.9			
39			在地系土師器	小皿	7.0	5.7	1.85			
40			在地系土師器	小皿	6.9	5.45	2.05			
41			在地系土師器	小皿	(6.9)	(4.35)	1.9			
42			在地系土師器	小皿	7.1	4.7	2.0			
43			在地系土師器	小皿	7.1	5.4	1.85			
44			在地系土師器	小皿	(7.1)	(5.35)	2.05			
45			在地系土師器	小皿	7.0	5.1	1.8			
46			在地系土師器	小皿	7.0	5.3	1.8			
47			在地系土師器	小皿	(7.05)	(4.8)	1.7			
48			在地系土師器	小皿	7.1	5.5	2.05			
49			在地系土師器	小皿	7.2	4.6	2.1			
50			在地系土師器	小皿	7.2	5.2	1.95			
51			在地系土師器	小皿	7.5	5.7	1.85			
52			在地系土師器	小皿	(7.3)	(5.8)	2.05			
53			在地系土師器	小皿	7.4	4.8	2.0			
54			在地系土師器	小皿	7.45	5.15	2.0			
55			在地系土師器	小皿	(7.4)	(5.7)	2.05			
56			在地系土師器	小皿	(7.45)	(5.4)	1.8			
57			第13図	在地系土師器	小皿	7.6	6.0	2.05		
58				在地系土師器	小皿	(7.65)	(5.7)	2.1		
59				在地系土師器	小皿	7.6	6.0	2.05		
60				在地系土師器	小皿	7.9	5.9	1.9		
61				在地系土師器	坏	12.2	8.55	3.8		
62				在地系土師器	坏	(12.4)	9.3	3.85		
63				在地系土師器	坏	(12.6)	8.7	4.05		
64				在地系土師器	坏	(12.6)	(8.1)	3.9		
65	在地系土師器	坏		(12.8)	(7.65)	4.1				
66	在地系土師器	坏		13.0	8.8	3.95				



第3表 梅牟礼遺跡天神ノ下地区出土遺物一覧表(2)

遺物番号	図版番号	遺構名	種類	器形	法量(cm) ( )は復元径			土器・陶器 以外の重量	備考	
					口径(縦)	底径(横)	器高(高さ・厚さ)			
67	第13図	S151	在地系土師器	坏	(12.8)	9.3	3.65			
68			在地系土師器	坏	12.9	9.3	3.95			
69			在地系土師器	坏	13.0	9.3	3.9			
70			在地系土師器	坏	13.0	9.3	4.05			
71			在地系土師器	坏	13.0	7.9	4.45			
72			在地系土師器	坏	13.0	9.2	3.8			
73			在地系土師器	坏	12.9	9.25	3.5			
74			在地系土師器	坏	13.3	9.4	3.9			
75			在地系土師器	坏	13.0	8.9	3.4			
76			在地系土師器	坏	13.1	9.65	3.65			
77			在地系土師器	坏	13.2	9.1	3.1			
78			在地系土師器	坏	13.2	9.5	3.7			
79			在地系土師器	坏	13.15	9.1	4.05			
80			第14図	在地系土師器	坏	(13.2)	9.3	3.25		
81	在地系土師器	坏		(13.2)	9.1	3.65				
82	在地系土師器	坏		13.35	9.35	3.7				
83	在地系土師器	坏		13.5	9.0	3.75				
84	在地系土師器	坏		13.25	9.25	3.7				
85	在地系土師器	坏		13.4	9.0	3.7				
86	在地系土師器	坏		13.5	10.1	4.05				
87	在地系土師器	坏		(13.5)	9.2	3.4				
88	在地系土師器	坏		(13.3)	9.0	3.65				
89	在地系土師器	坏		13.4	9.15	4.05				
90	在地系土師器	坏		13.5	9.5	3.7				
91	在地系土師器	坏		13.4	9.7	3.8				
92	在地系土師器	坏		(13.5)	(9.5)	3.8				
93	在地系土師器	坏		(13.5)	(9.9)	3.4				
94	第15図	在地系土師器	坏	13.6	8.2	3.8				
95		在地系土師器	坏	(13.8)	(10.0)	4.45				
96		在地系土師器	坏	14.1	9.8	3.05				
97		焼締陶器(備前焼)	播鉢							
98		陶器(瀬戸焼)	卸皿		(9.4)	1.4				
99		瓦質土器	壺	(16.2)		4.6				
100		土器								
101		第16図	S450	青磁(龍泉窯)	碗	(13.9)				内面型押し
102				在地系土師器	小皿	6.8	5.35	2.1		
103				在地系土師器	小皿	6.7	5.3	1.9		
104				在地系土師器	小皿	(6.8)	(5.0)	1.7+ $\alpha$		
105				在地系土師器	小皿	6.8	5.2	2.0		
106				在地系土師器	小皿	(6.9)	(4.9)	1.9		
107				在地系土師器	小皿	(6.8)	5.05	1.9		
108	在地系土師器			小皿	7.0	5.0	1.9			
109	在地系土師器			小皿	6.8	5.7	1.9			
110	在地系土師器			小皿	6.95	4.7	2.1			
111	在地系土師器			小皿	6.85	5.25	1.95			
112	在地系土師器			小皿	6.9	4.8	2.2			
113	在地系土師器			小皿	7.0	5.15	1.75			
114	在地系土師器			小皿	6.9	5.0	2.1			
115	在地系土師器			小皿	6.9	5.8	2.1			
116	在地系土師器			小皿	7.0	5.0	1.85			
117	在地系土師器			小皿	7.0	5.0	1.9			
118	在地系土師器			小皿	6.95	5.4	1.6			
119	在地系土師器			小皿	7.0	5.4	1.8			
120	在地系土師器			小皿	(7.05)	(4.8)	1.85			
121	在地系土師器			小皿	7.2	4.8	2.0			
122	在地系土師器			小皿	7.0	5.3	1.7			
123	在地系土師器			小皿	7.1	5.8	1.8			
124	在地系土師器			小皿	7.2	5.0	1.7			
125	在地系土師器			小皿	7.3	5.3	2.1			
126	在地系土師器			小皿	(7.2)	4.45	1.9			
127	在地系土師器			小皿	7.4	5.4	1.8			
128	在地系土師器			小皿	(7.35)	5.2	1.85			
129	在地系土師器			小皿	(7.55)	4.95	1.8			
130	在地系土師器			小皿	7.5	5.6	2.2			
131	在地系土師器			小皿	(8.3)	5.4	1.7			
132	在地系土師器			小皿	(9.25)	4.5	2.0			

第4表 姆牟礼遺跡天神ノ下地区出土遺物一覧表(3)

遺物番号	図版番号	遺構名	種類	器形	法量(cm) ( )は復元径			土器・陶器 以外の重量	備考	
					口径(縦)	底径(横)	器高(高さ・厚さ)			
133	第17図	S450	在地系土師器	坏	(12.5)	(8.0)	3.8			
134			在地系土師器	坏	12.8	9.0	3.6			
135			在地系土師器	坏	12.9	8.4	4.1			
136			在地系土師器	坏	13.1	8.7	3.9			
137			在地系土師器	坏	13.2	9.0	4.0			
138			在地系土師器	坏	(13.2)	9.0	3.7			
139			在地系土師器	坏	13.4	9.9	4.0			
140			在地系土師器	坏	13.3	9.4	3.7			
141			焼締陶器(備前焼)	播鉢						
142			石製品	叩き石	7.1	6.25	3.7	222.8g		
143	第18図	S151	鉄製品	刀子	34.2	2.6	(0.3)			
144			鉄製品	刀子	29.7+ $\alpha$	2.9	3.5			
145		S450	鉄製品	刀子	19.1+ $\alpha$	1.2	(0.2)			
146			鉄製品	刀子	4.0+ $\alpha$	1.1	(0.1)			
147			鉄製品	釘	6.1	1.0	(0.4)			
148	第20図	S152	瓦質土器	深鉢	(44.5)		6.4+ $\alpha$		3層	
149			在地系土師器	小皿	8.5	6.6	1.7		3層	
150			京都系土師器	皿	(12.6)		2.8+ $\alpha$		4層	
151			京都系土師器	皿			2.4+ $\alpha$		4層	
152			石製品	石臼	14.3	12.5	10.6	1,350g		
153			石製品		17.7+ $\alpha$	21.0+ $\alpha$	13.3	3,620g		
154			第23図	S249	瓦質土器	鍋	(23.7)		8.4+ $\alpha$	
155	土師質土器	土錘								
156	第25図	S289	在地系土師器	小皿	7.9	5.2	1.8			
157			在地系土師器	小皿	(8.4)	(6.5)	1.9			
158			京都系土師器	皿			2.3+ $\alpha$		1層	
159	第27図	S292	青磁	皿			3.2+ $\alpha$	1層		
160	第29図	S294	青花(漳州窯)	碗	(13.3)		3.7+ $\alpha$			
161			在地系土師器	小皿	8.0	4.4	1.7			
162			在地系土師器	小皿	8.2	4.5	1.8			
163			在地系土師器	小皿	8.7	5.0	1.9			
164			在地系土師器	坏	12.4	6.5	2.8			
165			在地系土師器	坏	(12.6)	6.5	2.7			
166			在地系土師器	坏	(13.4)	(6.4)	3.2			
167			在地系土師器	坏	13.3	6.4	3.2			
168			在地系土師器	坏	12.9	6.0	2.7			
169			在地系土師器	坏	13.3	6.5	2.8			
170			在地系土師器	坏	(13.2)	(6.5)	2.7			
171			在地系土師器	坏	13.0	6.5	2.5			
172			在地系土師器	坏	(13.7)	5.8	2.8			
173			土師質土器	燭台		5.8	2.1+ $\alpha$			
174			焼締陶器	壺	(12.4)		5.7+ $\alpha$			
175			土師質土器	土錘						
176			土師質土器	土錘						
177			土師質土器	土錘						
178			土師質土器	土錘						
179	第31図	S295	石製品	不明	15.7	29.0	11.2	4,450g		
180			焼締陶器(備前焼)	播鉢	(29.9)		9.1+ $\alpha$		1層	
181		S400	石製品	不明	16.5	25.2	11.1	3,200g		
182	第36図	S042	陶器(瀬戸美濃系)	水注	(5.7)		8.2+ $\alpha$			
183		S049	土師質土器	燭台		6.4	3.1+ $\alpha$			
184		S087	在地系土師器	小皿	7.4	4.0	9.0			
185		S111	在地系土師器	坏	12.4	6.7	2.7		1層	
186		S111	在地系土師器	坏	(12.3)	6.6	2.8		1層	
187		S125	在地系土師器	小皿	7.3	5.5	2.0		1層	
188		S270	在地系土師器	小皿	7.3	4.9	2.0			
189		S332	在地系土師器	小皿	(7.3)	(4.8)	2.1		1層	
190		S332	在地系土師器	小皿	(7.4)	(5.5)	2.0		1層	
191		S332	在地系土師器	坏	(10.1)	(5.4)	3.0		1層	
192		S332	在地系土師器	坏	11.0	6.0	3.0		1層	
193		S342	在地系土師器	坏	13.0	6.3	2.8		1層	
194		S348	在地系土師器	小皿	(6.9)	6.1	1.7		1層	
195		S367	在地系土師器	小皿	7.6	5.1	2.0		1層	
196		S389	京都系土師器	坏	(12.8)	(6.4)	3.1		1層	
197		第37図	S372	瓦質土器	香炉		8.0	3.3+ $\alpha$		1層
198				瓦質土器	深鉢		(23.2)	9.0+ $\alpha$		

第5表 柁牟礼遺跡天神ノ下地区出土遺物一覽表(4)

遺物番号	図版番号	遺構名	種類	器形	法量(cm) ( )は復元径			土器・陶器 以外の重量	備考	
					口径(縦)	底径(横)	器高(高さ・厚さ)			
199	第37図	S411	在地系土師器	小皿	(6.4)	4.85	2.0		1層	
200		S415	在地系土師器	坏	(13.5)	6.7	2.4		1層	
201		S444	在地系土師器	坏	(13.9)	8.3	4.0			
202			土師質土器	土錘						
203		S424	在地系土師器	坏	(8.0)	4.1	1.8		1層	
204	第38図		青磁(龍泉窯)	碗	(13.7)		4.3			
205			青磁			5.6	1.7+α			
206			瓦質土器	小皿	(5.6)	(5.0)	1.5			
207			在地系土師器	小皿	(6.7)	4.1	2.1			
208			在地系土師器	小皿	(6.9)	5.2	1.6			
209			在地系土師器	小皿	6.9	4.8	1.95			
210			在地系土師器	小皿	(7.6)	(3.8)	1.7		1層	
211			在地系土師器	小皿	(7.8)	4.7	1.6			
212			在地系土師器	坏	(11.0)	(5.8)	2.5			
213			在地系土師器	坏	(11.9)	6.0	2.6			
214			在地系土師器	坏	(13.4)	(6.3)	2.65			
215		第39図		京都系土師器	坏	(7.85)		2.2		
216				京都系土師器	坏	(9.2)		2.8		
217				京都系土師器	坏	(9.9)		2.4+α		
218			京都系土師器	坏	(11.8)		3.0+α			
219			土師質土器	耳皿						
220			瓦質土器	香炉		(5.9)	1.9+α			
221			土師質土器	埴塙						
222			縄文土器							
223			土師質土器	燭台						
224			土師質土器	メンコ					土製品	
225			土師質土器	土錘						
226			土師質土器	土錘						
227			土師質土器	土錘						
228			土師質土器	土錘						
229			土師質土器	土錘						
230			土師質土器	土錘						
231			土師質土器	土錘						
232			土師質土器	土錘						
233			土師質土器	土錘						
234			焼締陶器(備前焼)	搦鉢						
235		焼締陶器(備前焼)	搦鉢							
236		焼締陶器(備前焼)				6.2+α				
237		焼締陶器(備前焼)				6.6+α				
238		焼締陶器(備前焼)	甕			5.9+α		1層		
239		焼締陶器(備前焼)	甕			6.0+α				
240	第40図		石製品	不明	(17.1)	(13.2)	(8.0)	586.5g	凝灰岩	
241			石製品	砥石	4.5	2.6	0.75	11.8g	頁岩	
242			石製品	砥石	6.2	4.35	1.85	61.3g		
243			石製品	剥片	4.2	2.2	0.7	7.7g	チャート	
244			石製品	剥片	5.7	3.1	1.6	22.9g	流紋岩	
245			銭							
246			石製品	不明		45.1	62.9			
247		石製品	手水鉢	40.1	43.6	27.1	3.9kg	凝灰岩		
248	第41図	表採	染付(肥前系)	碗	(12.7)	7.4	4.85			
249			在地系土師器	小皿	(7.2)	(5.2)	1.85			

第6表 柵牟礼遺跡掃木地区出土遺物一覧表(1) 土器・陶磁器

遺物 番号	図版 番号	遺構名	種類・器形	法量(cm)※( )は復元径			外面色調	内面色調	胎土 (◎:多い、○:含む、△:わずか)						備考		
				口径	底部	器高			角閃石	長石	石英	赤色 粒子	白色 粒子	その他			
1	第47図	S003/ S070	糸切り土師器坏		4.4		灰白褐色	灰白褐色				○			内外ともに摩滅する		
2	第50図	S015	青磁皿(同安窯系)	(10.8)	(6.0)	2.4	灰オリーブ色	灰オリーブ色									
4	第54図	S028	糸切り土師器小皿	(6.1)	5.0	1.7	灰白褐色	灰白褐色	○	○		◎			内外ともに摩滅する		
5			糸切り土師器坏				灰白褐色	灰白褐色	○	○		○					
6			糸切り土師器坏		5.2			灰白褐色	灰白褐色	○	○		○			内外ともに摩滅する	
7			糸切り土師器坏		5.6			灰白褐色	灰白褐色				◎			内外ともに摩滅する	
8			糸切り土師器皿	(10.5)	6.1	2.4	灰白褐色	灰白褐色					◎			内外ともに摩滅する	
9			糸切り土師器坏	(10.6)	5.2	3.2	灰白褐色	灰白褐色	○	○			◎			内外ともに摩滅する	
10			糸切り土師器坏	(11.3)	4.8	4.1	淡明褐色	淡明褐色	○	○			◎			内外ともに摩滅する	
11			糸切り土師器坏	(11.7)	5.7	3.1	灰白褐色	灰白褐色	○	○			◎			内外ともに摩滅する	
12			糸切り土師器坏	(12.2)	(6.2)	4.0	灰白褐色	灰白褐色	△	△			◎			内外ともに摩滅する	
13		S032	糸切り土師器小皿	(7.4)	4.1	2.1	淡明褐色	灰褐色 淡明褐色	○	○		○				内外ともに摩滅する	
14			糸切り土師器坏	(9.1)	5.4	2.8	淡褐色	淡褐色	△	△		△				内外ともに摩滅する	
15			土師器坏	(10.7)			灰白褐色	灰白褐色	○	○		○				内外ともに摩滅する	
16			糸切り土師器皿	(10.8)	(6.4)	2.2	灰白褐色	灰白褐色	○	○		○				内外ともに摩滅する	
17			糸切り土師器坏	(11.2)			灰白褐色	灰白褐色	○	○		○				内外ともに摩滅する	
18			糸切り土師器坏	(12.3)	(6.9)	3.5	灰白褐色	灰白褐色	○	○		○				内外ともに摩滅する	
19			糸切り土師器皿	(12.7)	(8.6)	2.5	灰白褐色	灰白褐色	○	○		○				内外ともに摩滅する	
20			第56図	S050	糸切り土師器小皿	6.7	4.7	1.9	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色				◎			
21					糸切り土師器小皿	7.4	4.6	1.8	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色				◎			
22		糸切り土師器坏			(10.3)	(4.8)	2.8	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色				◎				
23	糸切り土師器坏	11.2			7.2	3.1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色				◎					
24	糸切り土師器坏	(11.4)			5.8	2.9	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色				◎					
25	糸切り土師器坏	(11.2)			(5.4)	3.9	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色				◎					
26	第59図	S056	糸切り土師器坏		(6.7)		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色				◎					
27			糸切り土師器坏		5.1		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色				○		黒色粒子			
28			糸切り土師器坏	(11.7)	5.2	3.5	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色				◎			底部外面に黒斑あり		
29			糸切り土師器坏			3.1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色				◎					
30	第61図	S071	糸切り土師器坏		(5.6)		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色				◎					
31	第64図	S005	瓦質土器鉢				淡灰褐色	灰褐色	○	○							
33		S058	糸切り土師器坏		(4.6)		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色				◎					
34		S063	瓦質土器火鉢				にぶい黄橙色	にぶい黄橙色				○		黒色粒子	内外ともに摩滅する		
35		S070	糸切り土師器坏		5.0		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色				○		黒色粒子			
36		S070	糸切り土師器坏	(10.0)	(6.2)	2.7	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色				○		黒色粒子			
37		S073	糸切り土師器坏				にぶい黄橙色	にぶい黄橙色				◎					
38		S073	糸切り土師器坏				にぶい黄橙色	にぶい黄橙色				◎					
39		第65図	包含層	青磁皿(龍泉窯系)				オリーブ灰色	オリーブ灰色								
40	青磁碗(龍泉窯系)						明緑灰色	明緑灰色									
41	青磁碗(龍泉窯系)						オリーブ灰色	オリーブ灰色									
42	青磁碗(龍泉窯系)						暗オリーブ色	暗オリーブ色									
43	青磁碗(龍泉窯系)				(4.2)	3.0	暗オリーブ色	暗オリーブ色									
44	青磁碗(龍泉窯系)						オリーブ色	オリーブ色									
45	青磁碗(龍泉窯系)						オリーブ黄色	オリーブ黄色									
46	青磁碗(龍泉窯系)						灰オリーブ色	灰オリーブ色									
47	青花皿						青灰色	青灰色									
48	青花碗						青灰色	青灰色									
49	白磁火容れ(肥前系)						灰白色	にぶい橙色						○			
50					焼締陶器甕(備前焼)				褐灰色	褐灰色						○	

第7表 柁牟礼遺跡掃木地区出土遺物一覽表(2) 土器・陶磁器

遺物番号	図版番号	遺構名	種類・器形	法量(cm)※( )は復元径			外面色調	内面色調	胎土 (◎:多い、○:含む、△:わずか)						備考		
				口径	底部	器高			角閃石	長石	石英	赤色粒子	白色粒子	その他			
51	第65図		焼締陶器甕(備前焼)				灰褐色	灰褐色							黒色粒子		
52			焼締陶器甕(備前焼)				にぶい橙色	にぶい橙色				○					
53	第66図	包含層	糸きり土師器坏		3.4	1.5	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色					◎				
54			土師器坏		(4.2)	1.2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色					○				
55			土師器坏		(4.6)	2.0	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色						◎			
56			土師器坏	(7.7)	(4.0)	2.3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色						○			
57			糸切り土師器坏		5.1			明灰褐色	明灰褐色	○	○			○		灰色粒子	内外ともに摩滅する
58			土師器坏		5.4	1.1		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色					◎			
59			土師器坏		(6.0)	1.4		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色						◎		
60			土師器坏		(5.4)	1.4		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色						○		
61			土師器坏	(9.8)	(4.9)	3.1		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色						◎		
62			糸切り土師器坏	(10.6)	6.2	3.3		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色						◎		
63			土師器坏		(5.8)	2.1		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色						◎		
64			糸切り土師器坏		6.0	1.6		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色						△		
65			糸切り土師器坏		6.4	1.7		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色						△	△	底部外面にスス付着
66			糸切り土師器坏	11.0	6.5	3.5		浅黄褐色	浅黄褐色						◎		
67			糸切り土師器坏	(11.0)	(6.0)	3.1		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色						◎		
68			糸切り土師器坏	10.9	6.2	3.2		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色						△	△	
69			糸切り土師器坏		(7.0)	2.3		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色								
70			土師器坏		7.6	2.9		黄褐色	黄褐色						○		
71			土師器燗台					にぶい黄褐色	にぶい黄褐色						◎		
72			土師質土器鍋か					にぶい黄褐色	にぶい黄褐色						○	○	
73			陶器甕		(18.6)			にぶい黄褐色	にぶい黄褐色							○	

第8表 柁牟礼遺跡掃木地区出土遺物一覽表(3) その他

遺物番号	図版番号	遺構名	種類・器形	法量(cm・g)				材質・石材	備考	
				縦	横	厚さ	重さ			
3	第52図	S018	釘							
32	第64図	S008	砥石	5.5	2.4	1.3	26.2	不明		
74	第67図		平瓦	(12.5)	(11.5)	1.7				
75			平瓦	(12.0)	(13.0)	1.8				
76			砥石	4.7	2.7	0.6		粘板岩		
77			剥片	3.3	3.0	0.8	8.0	不明		
78			火打ち石か	2.5	2.2	1.3	8.7	チャート		
79			火打ち石か	1.6	1.8	0.9	11.7	不明		
80	第68図	包含層	釘	5.7	0.2		3.1	鉄		
81			釘	5.5	0.3		5.1	鉄		
82			釘	6.8	0.6		17.5	鉄		
83			釘	3.3	0.3		8.1	鉄		
84			釘	2.6	0.4		3.2	鉄		
85			釘	2.6	0.3		8.1	鉄		
86			鋸か	3.1	1.7		4.0	鉄		
87			釘か	5.0	7.3		63.1	鉄	鉄製品4個体の塊	
88			表採	蹄鉄	9.2	1.8	0.7	68.8	鉄	
89			包含層	陶製卸器	9.6	9.1	0.6			

第9表 曳地館跡出土遺物一覽表(1) (土器・陶磁器)

挿図 番号	遺物 番号	器 種		法量:cm・(復元値)			遺構名	掲載頁	備 考
				口 径	底 径	器 高			
76	49	龍泉窯系青磁	碗		5.4		包含層	76	見込み刻印
76	50	青磁	碗				包含層	76	
76	51	青磁	碗				包含層	76	
76	52	白磁	輪花皿				包含層	76	
76	53	龍泉窯系青磁	香炉				包含層	76	
76	54	景德鎮窯系青花	皿				包含層	76	
76	55	景德鎮窯系青花	碗				包含層	76	
76	56	青花	皿	19.1	4.6	2.5	包含層	76	
76	57	青花	皿		8.5		包含層	76	
76	58	陶器	壺				包含層	76	
76	59	瓦質土器	土釜				包含層	76	突帯貼付・煤
76	60	染付け	碗				包含層	76	
76	61	肥前系染付け	碗		4.4		包含層	76	
76	62	青花	皿		4.8		包含層	76	表土
76	63	青磁	碗		5.0		包含層	76	
76	64	陶器	備前焼搦鉢				包含層	76	内面剥落・表土
76	65	土師器	小皿		5.9		包含層	76	
76	66	土師器	坏		7.6		包含層	76	
76	67	土師器	坏		6.4		包含層	76	
76	68	土師器	小皿		4.8		包含層	76	
76	69	土師器	小皿		4.6		包含層	76	
76	70	土師器	坏		5.8		包含層	76	
挿図 番号	遺物 番号	器 種		長	幅	重量 g	遺構名	掲載頁	備 考
76	71	土師質土製品	土錘	3.0	1.4	4.8	包含層	76	
76	72	土師質土製品	土錘	3.3	1.3	4.5	包含層	76	
76	73	土師質土製品	土錘	3.5	1.1	6.8	包含層	76	縦に亀裂
76	74	土師質土製品	土錘	3.9	1.4	6.6	包含層	76	
76	75	土師質土製品	土錘	3.0+	1.8	9.0+	包含層	76	
76	76	土師質土製品	土錘	4.3	2.1	15.3	包含層	76	
76	77	土師質土製品	土錘	4.5	2.2	17.6	包含層	76	
76	78	土師質土製品	土錘	4.6+	2.0	16.1	包含層	76	
76	79	土師質土製品	土錘	5.0	2.0	19.9	包含層	76	
76	80	土師質土製品	土錘	7.9	4.4	43.9+	包含層	76	
挿図 番号	遺物 番号	器 種		法量:cm・(復元値)			遺構名	掲載頁	備 考
				口 径	底 径	器 高			
77	84	白磁皿			6.2			77	試掘1t3層
77	85	土師器	坏		4.4			77	
77	86	備前焼	德利		11.0			77	
83	87	土師器	坏	11.4	5.6	3.9		82	
83	88	土師器	坏	11.8	6.4	3.8		82	
85	89	土師器	小皿	7.4	4.5	2.5	SK60	83	
85	90	土師器	坏	10.9	6.4	3.5	SK60	83	
85	91	土師器	坏	11.0	5.6	3.9	SK60	83	内面に墨書
85	92	土師器	坏	11.4	6.0	4.0	SK60	83	
85	93	土師器	坏	11.5	5.9	3.5	SK60	83	
85	94	土師器	坏	11.7	6.2	4.0	SK60	83	
85	95	土師器	坏	11.8	5.8	3.2~3.8	SK60	83	
85	96	土師器	坏	11.8	5.8	3.8	SK60	83	
85	97	土師器	坏	11.4	5.5	3.5	SK60	83	
85	98	土師器	坏	11.9	5.8	3.9	SK60	83	内面に墨書
85	99	土師器	坏	11.9	6.0	3.6	SK60	83	内面に墨書
85	100	土師器	坏	12.4	5.7	3.2~3.8	SK60	83	
85	101	土師器	小皿		6.0		SK60	83	
85	102	土師器	坏		5.5		SK60	83	内面に墨書
85	103	土師器	坏		5.6		SK60	83	
89	124	土師器	小皿		3.4		SP57	87	
89	125	土師器	小皿		4.3		SP57	87	
89	126	土師器	小皿	8.2	4.5	2.1	SP57	87	
89	127	土師器	坏	15.8	8.4	5.1	SP57	87	
89	128	青花	碗				SP57	87	

第10表 曳地館跡出土遺物一覽表(2) (土器・陶磁器)

挿図 番号	遺物 番号	器 種		法量:cm・(復元値)			遺構名	掲載頁	備 考
				口 径	底 径	器 高			
89	129	青花	碗				SP57	87	
91	130	土師器	小皿	8.0	4.5	2.0	SK43	88	
91	131	土師器	小皿	8.7	4.7	2.1	SK43	88	
91	132	土師器	小皿	8.3	4.4	2.2	SK43	88	
91	133	土師器	小皿	8.9	4.5	2.2	SK43	88	
91	134	土師器	坏	13.4	6.2	3.4	SK43	88	
91	135	土師器	坏	13.7	6.2	3.4	SK43	88	
91	136	土師器	坏	13.8	6.0	3.2	SK43	88	
91	137	土師器	坏	13.8	6.2	2.9	SK43	88	
91	138	土師器	坏	13.9	6.5	3.0	SK43	88	
91	140	龍泉窯系青磁	碗				SK43	88	
92	141	青花	皿				SP54	89	
92	142	土師器	坏		5.0		SP55	89	
92	143	漳州窯系青花	皿	11.2	5.0	3.0	SP55	89	
92	144	青花	碗				SP55	89	
92	145	土師器	坏		6.0		SP56	89	
92	146	土師器	小皿		4.0		SP56	89	
92	147	土師器	小皿		4.0		SK6	89	
92	148	土師器	坏		5.8		SK6	89	
92	149	土師器	坏		6.0		SK6	89	
92	150	土師器	坏		6.2		SK6	89	
92	151	青花	皿		2.8		SK6	89	
92	152		碗		5.2		SK6	89	
95	153	土師器	小皿	7.0	4.0	1.7	SK34	91	
95	154	土師器	小皿	7.1	3.8	1.8	SK34	91	
95	155	土師器	小皿	7.2	4.0	1.6	SK34	91	
95	156	土師器	小皿	7.3	4.1	1.7	SK34	91	
95	157	土師器	小皿	7.4	4.2	1.6	SK34	91	
95	158	土師器	小皿	7.5	4.3	1.8	SK34	91	
95	159	土師器	小皿	7.3	3.8	1.6	SK34	91	
95	160	土師器	小皿	7.6	4.0	1.8	SK34	91	煤付着
95	161	土師器	小皿	8.0	4.4	1.6	SK34	91	煤付着
95	162	土師器	小皿	8.1	4.2	1.7	SK34	91	
95	163	土師器	小皿	8.6	4.4	1.9	SK34	91	
96	164	土師器	坏	11.2	6.1	3.1	SK34	92	
96	165	土師器	坏	11.2	6.2	2.7	SK34	92	
96	166	土師器	坏	11.6	5.4	3.4	SK34	92	
96	167	土師器	坏	11.6	5.8	2.8	SK34	92	
96	168	土師器	坏	11.6	5.8	2.5	SK34	92	
96	169	土師器	坏	11.7	6.0	2.6	SK34	92	
96	170	土師器	坏	11.8	6.0	3.7	SK34	92	
96	171	土師器	坏	11.8	5.9	2.6	SK34	92	
96	172	土師器	坏	11.8	6.0	2.5	SK34	92	
96	173	土師器	坏	11.8	5.9	2.7	SK34	92	
96	174	土師器	坏	11.8	6.0	2.5	SK34	92	
96	175	土師器	坏	11.9	6.0	2.7	SK34	92	
96	176	土師器	坏	11.9	6.0	2.9	SK34	92	
96	177	土師器	坏	11.9	6.4	2.5	SK34	92	
96	178	土師器	坏	12.0	6.0	2.7	SK34	92	
96	179	土師器	坏	12.0	6.0	3.1	SK34	92	
96	180	土師器	坏	12.0	5.7	2.9	SK34	92	
97	181	土師器	坏	12.0	5.9	2.8	SK34	93	
97	182	土師器	坏	12.0	6.0	2.8	SK34	93	
97	183	土師器	坏	12.1	6.0	2.6	SK34	93	
97	184	土師器	坏	12.1	5.6	2.9	SK34	93	
97	185	土師器	坏	12.1	6.0	3.1	SK34	93	
97	186	土師器	坏	12.1	6.0	2.8	SK34	93	
97	187	土師器	坏	12.2	5.8	2.5	SK34	93	
97	188	土師器	坏	12.2	6.0	3.2	SK34	93	
97	189	土師器	坏	12.2	5.9	2.8	SK34	93	



第 11 表 曳地館跡出土遺物一覽表 (3) (土器・陶磁器)

挿図 番号	遺物 番号	器 種		法量:cm・(復元値)			遺構名	掲載頁	備 考
				口 径	底 径	器 高			
97	190	土師器	坏	12.2	6.5	2.8	SK34	93	
97	191	土師器	坏	12.2	6.0	2.7	SK34	93	
97	192	土師器	坏	12.2	6.0	2.6	SK34	93	
97	193	土師器	坏	12.2	6.0	3.0	SK34	93	
97	194	土師器	坏	12.2	6.0	3.0	SK34	93	
97	195	土師器	坏	12.3	6.0	3.0	SK34	93	
97	196	土師器	坏	12.3	6.0	2.9	SK34	93	
97	197	土師器	坏	12.3	6.3	2.3	SK34	93	
98	198	土師器	坏	12.4	5.9	2.7	SK34	94	
98	199	土師器	坏	12.4	6.0	2.6	SK34	94	
98	200	土師器	坏	12.4	5.8	2.6	SK34	94	
98	201	土師器	坏	12.4	5.8	2.0	SK34	94	
98	202	土師器	坏	12.4	6.0	2.4	SK34	94	
98	203	土師器	坏	12.4	5.4	2.5	SK34	94	
98	204	土師器	坏	12.4	5.7	2.8	SK34	94	
98	205	土師器	坏	12.4	6.0	2.7	SK34	94	
98	206	土師器	坏	12.4	5.8	3.0	SK34	94	
98	207	土師器	坏	12.5	6.0	2.9	SK34	94	
98	208	土師器	坏	12.5	5.7	2.7	SK34	94	
98	209	土師器	坏	12.5	6.0	2.6	SK34	94	
98	210	土師器	坏	12.5	6.0	2.4	SK34	94	
98	211	土師器	坏	12.6	6.0	2.6	SK34	94	
98	212	土師器	坏	12.6	5.6	3.0	SK34	94	
98	213	土師器	坏	12.6	5.6	2.4	SK34	94	
98	214	土師器	坏	12.6	5.6	3.0	SK34	94	
99	215	土師器	坏	12.6	6.0	2.8	SK34	95	
99	216	土師器	坏	12.7	6.5	2.9	SK34	95	
99	217	土師器	坏	12.7	6.0	2.9	SK34	95	
99	218	土師器	坏	12.7	5.7	2.6	SK34	95	
99	219	土師器	坏	12.7	6.0	2.3	SK34	95	
99	220	土師器	坏	12.8	5.8	2.7	SK34	95	
99	221	土師器	坏	12.8	6.0	2.5	SK34	95	
99	222	土師器	坏	12.8	6.0	2.8	SK34	95	
99	223	土師器	坏	12.8	5.4	2.5	SK34	95	
99	224	土師器	坏	12.8	6.0	2.7	SK34	95	
99	225	土師器	坏	12.8	5.6	2.8	SK34	95	
99	226	土師器	坏	12.8	5.7	2.6	SK34	95	
99	227	土師器	坏	12.8	6.2	3.0	SK34	95	
99	228	土師器	坏	12.9	5.9	3.3	SK34	95	
99	229	土師器	坏	12.9	6.0	2.5	SK34	95	
99	230	土師器	坏	12.9	5.4	2.7	SK34	95	
99	231	土師器	坏	13.0	6.5	2.7	SK34	95	
100	232	土師器	坏	13.0	6.0	2.9	SK34	96	
100	233	土師器	坏	13.0	5.9	2.7	SK34	96	
100	234	土師器	坏	13.0	6.0	3.0	SK34	96	
100	235	土師器	坏	13.0	6.0	2.7	SK34	96	
100	236	土師器	坏				SK34	96	
100	237	土師器	坏	13.1	6.0	2.8	SK34	96	
100	238	土師器	坏	13.2	6.0	2.9	SK34	96	
100	239	土師器	坏	13.2	5.5	3.0	SK34	96	
100	240	土師器	坏	13.4	6.4	2.6	SK34	96	
100	241	土師器	坏	13.9	5.8	2.4	SK34	96	
100	242	土師器	坏		5.8		SK34	96	
100	243	土師器	坏		5.8		SK34	96	
100	244	土師器	坏		6.5		SK34	96	
100	245	土師器	坏		6.0		SK34	96	
100	246	土師器	坏		6.0		SK34	96	
100	247	土師器	坏		6.0		SK34	96	
101	248	土師器	小皿		4.2		SK34	97	
101	249	土師器	坏		6.0		SK34	97	

第12表 曳地館跡出土遺物一覽表(4) (土器・陶磁器)

挿図 番号	遺物 番号	器 種		法量:cm(復元値)			遺構名	掲載頁	備 考
				口 径	底 径	器 高			
101	250	土師器	坏		6.0		SK34	97	
101	251	土師器	坏		5.8		SK34	97	
101	252	土師器	坏		6.0		SK34	97	
101	253	土師器	坏		5.8		SK34	97	
101	254	土師器	坏		5.7		SK34	97	
101	255	土師器	坏		5.8		SK34	97	
101	256	土師器	坏		6.0		SK34	97	
101	257	土師器	坏		5.6		SK34	97	
101	258	土師器	坏		5.8		SK34	97	
101	259	土師器	坏		5.8		SK34	97	
101	260	土師器	坏		5.8		SK34	97	
101	261	土師器	坏		5.8		SK34	97	
101	262	土師器	坏		5.7		SK34	97	
101	263	土師器	坏		6.0		SK34	97	
101	264	土師器	坏		6.0		SK34	97	
101	265	土師器	坏		5.8		SK34	97	
101	266	土師器	坏		5.6		SK34	97	
101	267	土師器	坏		6.0		SK34	97	
101	268	土師器	坏		5.8		SK34	97	
101	269	土師器	坏		6.0		SK34	97	
101	270	土師器	坏		6.0		SK34	97	
101	271	土師器	坏		5.6		SK34	97	
101	272	土師器	坏		6.0		SK34	97	
101	273	土師器	坏		6.0		SK34	97	
101	274	土師器	坏		5.8		SK34	97	
102	275	土師器	坏		5.8		SK34	98	
102	276	土師器	坏		5.8		SK34	98	
102	277	土師器	坏		5.8		SK34	98	
102	278	土師器	坏		5.8		SK34	98	
102	279	土師器	坏		6.2		SK34	98	
102	280	土師器	坏		5.8		SK34	98	
102	281	土師器	坏		6.2		SK34	98	
102	282	土師器	坏		5.8		SK34	98	
102	283	土師器	坏		6.0		SK34	98	
102	284	土師器	坏		6.0		SK34	98	
102	285	土師器	坏		6.0		SK34	98	
102	286	土師器	坏		5.8		SK34	98	
102	287	土師器	坏		6.0		SK34	98	
102	288	土師器	坏		6.0		SK34	98	
102	289	土師器	坏		6.2		SK34	98	
102	290	土師器	坏		6.0		SK34	98	
102	291	土師器	坏		5.8		SK34	98	
102	292	土師器	坏		6.4		SK34	98	
102	293	土師器	坏		6.0		SK34	98	
102	294	土師器	坏		6.2		SK34	98	
102	295	土師器	坏		6.0		SK34	98	
102	296	土師器	坏		5.7		SK34	98	
102	297	土師器	坏		6.1		SK34	98	
102	298	土師器	坏		6.0		SK34	98	
102	299	土師器	坏		6.0		SK34	98	
102	300	土師器	坏		6.0		SK34	98	
102	301	土師器	坏		5.6		SK34	98	
107	390	土師器	小皿	7.3	3.9	2.0	SD62	103	見込み銭貨付着痕
107	391	土師器	小皿	7.7	3.6	1.6	SD62	103	
107	392	土師器	小皿		4.2		SD62	103	
107	393	土師器	小皿		4.2		SD62	103	
107	394	土師器	坏	12.2	6.2	2.7	SD62	103	底部板状圧痕・SP62
107	395	土師器	坏	12.9	6.2	2.6	SD62	103	
107	396	土師器	坏	13.2	6.2	2.6	SD62	103	
107	397	土師器	坏		5.5		SD62	103	
107	398	土師器	坏		6.1		SD62	103	

第13表 曳地館跡出土遺物一覽表(5) (錢貨)

挿図 番号	遺物 番号	錢貨名	国・王朝名	初鑄年	法 量		遺 構 名	掲載頁	備 考
					重さ:g	直径:cm			
73	1	熙寧元宝	北 宋	1068年	3.5	2.3	試掘時一括出土	73	
73	2	宣和通宝	北 宋	1119年	3.6	2.4	試掘時一括出土	73	
73	3	永樂通宝	明	1408年	3.2	2.5	試掘時一括出土	73	
73	4	皇宋通宝	北 宋	1038年	2.3	2.4	試掘時一括出土	73	
73	5	永樂通宝	北 宋	1408年	2.6	2.4	試掘時一括出土	73	
73	6	熙寧元宝	北 宋	1068年	3.5	2.3	試掘時一括出土	73	
73	7	永樂通宝	明	1408年	3.7	2.4	試掘時一括出土	73	
73	8	景德元宝	北 宋	1004年	2.6	2.4	試掘時一括出土	73	
73	9	元祐通宝	北 宋	1086年	3.3	2.4	試掘時一括出土	73	
73	10	永樂通宝	明	1408年	3.1	2.4	試掘時一括出土	73	
73	11	紹聖元宝	北 宋	1094年	3.1	2.4	試掘時一括出土	73	
73	12	景德元宝	北 宋	1004年	3.0	2.4	試掘時一括出土	73	
73	13	紹聖元宝	北 宋	1094年	3.3	2.3	試掘時一括出土	73	
73	14	開元通宝	唐	621年	2.5	2.4	試掘時一括出土	73	
73	15	聖宋元宝	北 宋	1101年	2.6	2.4	試掘時一括出土	73	
73	16	開元通宝	唐	621年	2.8	2.3	試掘時一括出土	73	
73	17	元祐通宝	北 宋	1086年	3.5	2.4	試掘時一括出土	73	
73	18	皇宋通宝	北 宋	1038年	3.9	2.4	試掘時一括出土	73	
73	19	元祐通宝	北 宋	1086年	2.5	2.4	試掘時一括出土	73	
73	20	宋通元宝	北 宋	960年	3.4	2.4	試掘時一括出土	73	
73	21	熙寧元宝	北 宋	1068年	4.1	2.3	試掘時一括出土	73	
74	22	永樂通宝	明	1408年	2.4	2.4	試掘時一括出土	74	
74	23	元祐通宝	北 宋	1086年	2.7	2.3	試掘時一括出土	74	
74	24	熙寧元宝	北 宋	1068年	3.1	2.3	試掘時一括出土	74	
74	25	天聖元宝	北 宋	1023年	3.4	2.4	試掘時一括出土	74	
74	26	開元通宝	唐	621年	2.5	2.2	試掘時一括出土	74	
74	27	政和通宝	北 宋	1111年	2.7	2.4	試掘時一括出土	74	
74	28	祥符通宝	北 宋	1009年	1.9	2.2	試掘時一括出土	74	
74	29	熙寧元宝	北 宋	1068年	3.5	2.3	試掘時一括出土	74	
74	30	紹聖元宝	北 宋	1094年	3.8	2.3	試掘時一括出土	74	
74	31	開元通宝	唐	621年	2.6	2.3	試掘時一括出土	74	
74	32	熙寧元宝	北 宋	1068年	2.9	2.4	試掘時一括出土	74	
74	33	景祐元宝	北 宋	1034年	2.8	2.4	試掘時一括出土	74	
74	34	不 明			2.4	2.3	試掘時一括出土	74	
74	35	宣和通宝	北 宋	1119年	3.6	2.4	試掘時一括出土	74	
74	36	熙寧元宝	北 宋	1068年	3.0	2.2	試掘時一括出土	74	
74	37	唐国通宝	南 唐	959年	3.4	2.3	試掘時一括出土	74	
74	38	熙寧元宝	北 宋	1068年	3.4	2.4	試掘時一括出土	74	
74	39	宣和通宝	北 宋	1119年	3.6	2.4	試掘時一括出土	74	
74	40	皇宋通宝	北 宋	1038年	3.1	2.4	試掘時一括出土	74	
74	41	大觀通宝	北 宋	1107年	3.2	2.5	試掘時一括出土	74	
74	42	大觀通宝	北 宋	1107年	3.0	2.5	試掘時一括出土	74	
75	43	聖宋元宝	北 宋	1101年	3.0	2.4	試掘時一括出土	75	
75	44	永樂通宝	明	1408年	3.1	2.4	試掘時一括出土	75	
75	45	熙寧元宝	北 宋	1068年	3.7	2.4	試掘時一括出土	75	
75	46	永樂通宝	明	1408年	3.9	2.5	試掘時一括出土	75	
75	47	開元通宝	唐	621年	3.0	2.4	試掘時一括出土	75	紐付き
75	48	政和通宝	北 宋	1111年	3.3	2.4	試掘時一括出土	75	紐付き
76	81	熙寧元宝	北 宋	1068年	3.0	2.5	包含層	76	
76	82						包含層	76	
76	83						包含層	76	
86	104	開元通宝	唐	621年	2.9	2.4	SP60	84	
86	105	祥符元宝	北 宋	1009年	3.2	2.4	SP60	84	

第14表 曳地館跡出土遺物一覧表(6) (錢貨)

挿図 番号	遺物 番号	錢貨名	国・王朝名	初鑄年	法 量		遺 構 名	掲載頁	備 考
					重さ:g	直径:cm			
86	106	景祐元宝	北 宋	1034年	3.6	2.4	SP60	84	
86	107	皇宋通宝	北 宋	1038年	2.4	2.4	SP60	84	
86	108	嘉祐通宝	北 宋	1056年	2.9	2.4	SP60	84	
86	109	元豊通宝	北 宋	1078年	2.1	2.4	SP60	84	
86	110	元豊通宝	北 宋	1078年	3.9	2.4	SP60	84	
86	111	元祐通宝	北 宋	1086年	3.4	2.5	SP60	84	
86	112	元祐通宝	北 宋	1086年	2.1	2.4	SP60	84	
86	113	紹聖元宝	北 宋	1094年	3.9	2.4	SP60	84	
86	114	紹聖元宝	北 宋	1094年	2.4	2.5	SP60	84	
86	115	聖宋元宝		1101年	2.2	2.4	SP60	84	
86	116	大觀通宝	北 宋	1107年	2.4	2.4	SP60	84	
86	117	大觀通宝	北 宋	1107年	2.8	2.4	SP60	84	
86	118	宣和通宝	北 宋	1119年	2.9	2.5	SP60	84	
86	119	政和通宝	北 宋	1111年	3.1	2.5	SP60	84	
86	120	政和通宝	北 宋	1111年	3.7	2.4	SP60	84	
86	121	永樂通宝	明	1408年	3.4	2.5	SP60	84	
86	122	永樂通宝	明	1408年	4.2	2.5	SP60	84	
86	123	不 明			1.4		SP60	84	
91	139	不 明					SP60	88	
103	302	開元通宝	唐	621年	3.2	2.4	SK34	99	
103	303	開元通宝	唐	621年	3.3	2.5	SK34	99	
103	304	開元通宝	唐	621年	2.9	2.5	SK34	99	
103	305	開元通宝	唐	621年	2.6	2.4	SK34	99	
103	306	開元通宝	唐	621年	2.6	2.3	SK34	99	
103	307	開元通宝	唐	621年	3.0	2.4	SK34	99	
103	308	開元通宝	唐	621年	3.5	2.4	SK34	99	
103	309	開元通宝	唐	621年	3.1	2.4	SK34	99	
103	310	至道元宝	北 宋	995年	3.1	2.4	SK34	99	
103	311	至道元宝	北 宋	995年	2.5	2.4	SK34	99	
103	312	至道元宝	北 宋	995年	2.6	2.4	SK34	99	
103	313	至道元宝	北 宋	995年	2.0	2.4	SK34	99	
103	314	景德元宝	北 宋	1004年	2.4	2.5	SK34	99	
103	315	景德元宝	北 宋	1004年	3.4	2.5	SK34	99	
103	316	景德元宝	北 宋	1004年	2.1	2.4	SK34	99	
103	317	祥符元宝	北 宋	1009年	2.3	2.5	SK34	99	
103	318	祥符元宝	北 宋	1009年	3.1	2.4	SK34	99	
103	319	祥符元宝	北 宋	1009年	2.9	2.4	SK34	99	
103	320	祥符元宝	北 宋	1009年	3.0	2.5	SK34	99	
103	321	祥符元宝	北 宋	1009年	2.9	2.4	SK34	99	
103	322	祥符元宝	北 宋	1009年	2.3	2.5	SK34	99	
103	323	祥符元宝	北 宋	1009年	3.2	2.5	SK34	99	
103	324	天聖元宝	北 宋	1023年	2.1	2.4	SK34	99	
103	325	天聖元宝	北 宋	1023年	2.6	2.4	SK34	99	
104	326	天聖元宝	北 宋	1023年	2.3	2.4	SK34	100	
104	327	天聖元宝	北 宋	1023年	2.7	2.4	SK34	100	
104	328	天聖元宝	北 宋	1023年	3.0	2.5	SK34	100	
104	329	皇宋通宝	北 宋	1038年	2.0	2.3	SK34	100	
104	330	皇宋通宝	北 宋	1038年	2.8	2.5	SK34	100	
104	331	皇宋通宝	北 宋	1038年	1.8	2.4	SK34	100	
104	332	皇宋通宝	北 宋	1038年	2.9	2.4	SK34	100	
104	333	皇宋通宝	北 宋	1038年	2.2	2.5	SK34	100	
104	334	皇宋通宝	北 宋	1038年	2.1	2.3	SK34	100	
104	335	皇宋通宝	北 宋	1038年	2.5	2.4	SK34	100	
104	336	皇宋通宝	北 宋	1038年	3.3	2.4	SK34	100	
104	337	皇宋通宝	北 宋	1038年	1.8	2.3	SK34	100	

第 15 表 曳地館跡出土遺物一覽表 (7) (錢貨)

挿図 番号	遺物 番号	錢貨名	国・王朝名	初鑄年	法 量		遺 構 名	掲載頁	備 考
					重さ:g	直径:cm			
104	338	至和元宝	北 宋	1054年	2.3	2.3	SK34	100	
104	339	嘉祐通宝	北 宋	1056年	2.5	2.4	SK34	100	
104	340	熙寧元宝	北 宋	1068年	3.0	2.4	SK34	100	
104	341	熙寧元宝	北 宋	1068年	2.4	2.4	SK34	100	
104	342	熙寧元宝	北 宋	1068年	2.1	2.3	SK34	100	
104	343	熙寧元宝	北 宋	1068年	2.5	2.3	SK34	100	
104	344	熙寧元宝	北 宋	1068年	3.4	2.4	SK34	100	
104	345	熙寧元宝	北 宋	1068年	2.4	2.3	SK34	100	
104	346	熙寧元宝	北 宋	1068年	2.4	2.4	SK34	100	
104	347	元豊通宝	北 宋	1078年	3.1	2.4	SK34	100	
104	348	元豊通宝	北 宋	1078年	3.0	2.4	SK34	100	
104	349	元祐通宝	北 宋	1086年	2.5	2.4	SK34	100	
105	350	元祐通宝	北 宋	1086年	2.3	2.4	SK34	101	
105	351	元祐通宝	北 宋	1086年	3.0	2.5	SK34	101	
105	352	元祐通宝	北 宋	1086年	2.1	2.2	SK34	101	
105	353	元祐通宝	北 宋	1086年	3.1	2.3	SK34	101	
105	354	元祐通宝	北 宋	1086年	3.5	2.3	SK34	101	
105	355	元祐通宝	北 宋	1086年	3.1	2.3	SK34	101	
105	356	紹聖元宝	北 宋	1094年	2.9	2.4	SK34	101	
105	357	紹聖元宝	北 宋	1094年	2.9	2.4	SK34	101	
105	358	紹聖元宝	北 宋	1094年	3.3	2.4	SK34	101	
105	359	元符通宝	北 宋	1098年	2.8	2.4	SK34	101	
105	360	元符通宝	北 宋	1098年	2.8	2.4	SK34	101	
105	361	大觀通宝	北 宋	1107年	2.7	2.4	SK34	101	
105	362	大觀通宝	北 宋	1107年	2.2	2.5	SK34	101	
105	363	大觀通宝	北 宋	1107年	3.1	2.4	SK34	101	
105	364	政和通宝	北 宋	1111年	2.1	2.4	SK34	101	
105	365	景定元宝	南 宋	1260年	2.9	2.4	SK34	101	
105	366	治平元宝	北 宋	1064年	2.0	2.3	SK34	101	
105	367	治平元宝	北 宋	1064年	3.1	2.4	SK34	101	
105	368	洪武通宝	明	1368年	3.0	2.3	SK34	101	
105	369	洪武通宝	明	1368年	3.5	2.3	SK34	101	
105	370	洪武通宝	明	1368年	3.2	2.4	SK34	101	
105	371	洪武通宝	明	1368年	2.5	2.4	SK34	101	
105	372	永樂通宝	明	1408年	3.1	2.5	SK34	101	
105	373	永樂通宝	明	1408年	3.1	2.5	SK34	101	
106	374	大觀通宝	北 宋	1107年	2.1	2.5	SK34	102	
106	375	元祐通宝	北 宋	1086年	2.2	2.4	SK34	102	
106	376	紹聖元宝	北 宋	1094年	1.4	2.2	SK34	102	
106	377	元豊通宝	北 宋	1078年	1.9	2.4	SK34	102	
106	378	元豊通宝	北 宋	1078年			SK34	102	
106	379	熙寧元宝	北 宋	1068年	2.1	2.4	SK34	102	
106	380	不 明			2.3	2.4	SK34	102	
106	381	不 明			2.3	2.4	SK34	102	
106	382	不 明			1.6	2.1	SK34	102	
106	383	不 明			2.4	2.4	SK34	102	
106	384	不 明			3.5	2.5	SK34	102	
106	385	不 明				2.4	SK34	102	
106	386	不 明			0.9		SK34	102	
106	387	皇宋通宝		1038年	3.3	2.4	SK34	102	
106	388	大觀通宝	北 宋	1107年	1.6		SK34	102	
106	389	皇宋通宝		1038年	2.3	2.4	SK34	102	
106	399	熙寧元宝	北 宋	1068年	2.8	2.4	SD62	102	
106	400	不 明			2.3	2.5	SD62	102	

第 16 表 元越遺跡出土遺物一覽表

遺物 番号	図版番号	遺構名	種類	器形	生産地	法量(cm) ( )は復元径			備考
						口径	底径	器高	
1	第117図	包含層	褐釉陶器	碗					
2		S-9	瓦質	播鉢	防長系	(29.2)			
3		S-10	糸切土師器	坏		(9.4)	(6.8)	(2.55)	
4			錢貨						
5		包含層	白磁	皿		(12.4)	(6.5)	(3.3)	
6			青花	皿	漳州窯	(13.6)			
7			糸切土師器	坏			(6.5)		
8			瓦質	甕					
9			瓦質	鉢					
10			土錘						
11			錢貨						寛永通宝